

第9号の刊行にあたって

アジア現代女性史研究会による2013年度の研究成果として、『アジア現代女性史』第9号をお届けします。本号の特集テーマは二つです。

第一の特集は、前号からの継続テーマの、「冷戦時代の国際女性運動」です。

前号では、藤目ゆき「モニカ・フェルトンの軌跡 1952-1956」によって、WIDFで活躍した時期のモニカ・フェルトンをとりあげました。本号では「モニカ・フェルトンの初期原水爆禁止運動への貢献」と題して、モニカ・フェルトンがインドに移住した初期の時代を扱っています。

また、前号の木戸衛一「ウルズラ・シュレーターの『社会主義家父長制論』について」にはリリー・ヴェヒターに関する論考が含まれていましたが、本号ではリリー・ヴェヒターに関する一級の史料と考えられる、フリードリヒ・カール・カウルの著書（Friedrich Kark Kaul, *Ich sagte die Wahrheit ; Lilly Wächter, Ein Vorbild der Deutschen Frauen im Kampf um den Frieden*, Deutscher Frauenverlage, Berlin, 1952）の全訳「私は真実を述べた：リリー・ヴェヒター 平和のための闘いにおけるドイツ女性の模範」を掲載しました。

今岡良子「モンゴルの女性史家E. チメッドツェレンの履歴と著作リスト」も、この特集の中に入れました。チメッドツェレンは『モンゴル人民共和国における女性解放の歴史』をはじめとして多数の女性史に関する著作のあるモンゴルの歴史家で、この本は私たちアジア現代女性史研究会に冷戦時代のモンゴル女性運動を知る最良の手がかりになりました。この本は遠からず、今岡良子の解説をつけて、明石書店のアジア現代女性史シリーズの第9冊として出版される予定なので、楽しみに待っていて下さい。

第二の特集は「抗美援朝時代の中国女性史」と題して、アジア現代女性史研究会で取り組んだ中国女性史調査の成果を編集しています。これらもまた「冷戦時代の国際女性運動」の研究活動の一部なのですが、アジア現代女性史研究会は2013年11月4日から7日にかけて中国東北地区の瀋陽と丹東を研究会で訪れ、朝鮮戦争時代の中国女性運動に関して翻訳・フィールドワーク・文献収集に取り組んだので、独立した一つの特集とし、旅行をした4人の旅行記と研究ノート、中国の作家・白朗のルポルタージュ「平壤七日」の邦訳を掲載しました。

「平壤七日」は、白朗が1952年9月にモニカ・フェルトンとともに平壤を再訪した記録であり、アジア現代女性史研究会にとっては「WIDFの朝鮮戦争真相調査団」や「冷戦時代の国際女性運動」といったテーマの研究のためにぜひ読んでおきたいルポルタージュでした。が、白朗は中国で評価の高い著名な作家だとはいえ、これまでに日本語に訳された作品は、どうやら1950年代初期に刊行された『幸福な明日のために』（鮑秀蘭訳）だけだったようです。その意味でも西田千津訳「平壤七日」を本号に収録できたのは大きな喜びです。日本ではほとんど紹介されることのない朝鮮戦争時代の平壤や当時の国際平和運動の一面を、この「平壤七日」から読み取っていただければ幸いです。

2014年3月

藤目ゆき



目次

第9号の刊行にあたって ……1

●特集1 冷戦時代の国際女性運動

モニカ・フェルトンの初期原水爆禁止運動への貢献

—インドからの発信 ラジャゴパラチャリ『人類は抗議する』の編集と出版について—

藤目ゆき ……6

フリードリヒ・カール・カウル 著

私は真実を述べた リリー・ヴェヒター —平和のための闘いにおけるドイツ女性の模範

翻訳 木戸衛一 ……36

モンゴルの女性史家 E.チメッドツェレンの履歴と著作リスト

今岡良子 ……74

●特集2 抗美援朝時代の中国女性史

抗美援朝の中国を訪れて—瀋陽・丹東への旅—

藤目ゆき ……82

丹東で白朗を想う

西田千津 ……88

中国の旅

神田修 ……92

2013年中国フィールドワークの成果と課題：

WIDFの朝鮮戦争真相調査と中国の「抗美援朝戦争」

梁東淑 ……98

白朗 著

平壤七日

翻訳 西田千津 ……114

WIDF国際女性調査団に参加した3人の中国人女性

— 劉清揚・白朗・李鏗

藤目ゆき ……134



執筆者・翻訳者 紹介 (50音順) ……154

カバー写真 解説 ……155

アジア現代女性史
Contemporary Women's History in Asia

アジア現代女性史研究会
CAWA (Association for the Study of Contemporary Asian Women's history and Gender)

特集 1

冷戦時代の国際女性運動

モニカ・フェルトンの初期原水爆禁止運動への貢献

ーインドからの発信

ラジャゴパラチャリ『人類は抗議する』の編集と出版についてー

藤目ゆき

(はじめに)

モニカ・フェルトンが訪日して、第二回原水爆禁止世界大会と日本母親大会に出席したのは1956年8月のことであった。前年55年7月にはスイスのローザンヌで第一回世界母親大会が開催されており、モニカがそこに参集した世界各地の女性の生き方や思いを描写した『あたりまえの女たち』の日本語訳が、57年に岩波書店から出版される。このように日本で原水爆禁止運動や女性運動の波が高まっていった時代にモニカは平和運動家として、あるいはまた「母親運動の創始者」として、同時代の人々に記憶された。しかし、「母親大会」や『あたりまえの女たち』の名と同時にモニカ・フェルトンを思い出すことのできる大勢の人々もまた、モニカが来日した1956年以降の足跡についてはほとんど知らない。いつのまにか彼女の姿は国際平和運動の舞台から消えてしまっていた。

実は、モニカ・フェルトンは1956年にインドへ渡航して11月にカルカッタで開催された全インド平和会議や12月にニューデリーで開かれた第一回アジア作家会議に出席し、それ以降、13年余りをインドで暮らし、70年にマドラスで永眠している。当初は世界平和評議会(以下、WPCと略称)^①の一員としてインドから反核平和思想を発信することに使命感を燃やしていたが、58年にナジ・イムレの処刑が公表された後にWPCを離れ、作家活動に専念するようになった。インド時代のモニカは、『ラジャジに会う』("I meet Rajaji", Macmillan, 1962年)、『子ども未亡人』("A Child Widow Story", V. Gollancz, 1966年)などの作品で知られる。前者はインドの政治家ラジャゴパラチャリの伝記であり、後者は女子教育事業家スバラクシュミの伝記である。この二冊は2003年に、前者は『ラジャジ(Rajaji)』と改題、後者は原題のまま、2000年にニューデリーにあるカサ出版から復刻版が出ている。二冊とも、今日もおしばしば引用される、インド現代史・インド女性史の名著である。

本稿は、このようなインド時代のモニカ・フェルトンについて、特に1956年から59年にかけての、ラジャゴパラチャリとの邂逅と核兵器廃絶への願いをこめた『人類は抗議する』とその増補版の編集・出版に焦点をしばって紹介する。筆者はこれまでに「モニカ・フェルトンとWIDFの朝鮮戦争真相調査団」(『アジア現代女性史』第7号、2012年)、「モニカ・フェルトンの軌跡 1952-1956」(同前第8号、2013年)を発表しており、本稿はそれらの続編でもある。

^① 世界平和評議会(英語表記はWorld Peace Council, World Council of Peace)は、二度の世界平和擁護大会(1949年にパリ、50年にワルシャワ)で開催された世界平和擁護大会やストックホルム・アピールの運動をふまえて、1951年に発足した国際平和組織である。

第1章 ラジャゴパラチャリとの邂逅

第1節 全インド平和評議会 (AIPC)のカルカッタ平和会議

モニカ・フェルトンはWPCの一員として、1956年11月にカルカッタで開かれた全インド平和評議会 (All-India Peace Council、以下、AIPCと略称)の平和会議に出席する^②。

モニカは1950年代前半にWIDFやWPCとつながる多数の国際会議に出席しており、AIPC会長サイファディン・キッチリをはじめ、AIPC副会長である数学者D.D.コサンビや文学者マルク・ラジ・アナンド、AIPC事務局長のロメシュ・チャンドラらとは互いに旧知であった^③。特にコサンビとは気が合ったらしい。コサンビは『インド史研究序説』の執筆中、一年ほどの間に88通の手紙をモニカに出している。それらの手紙には、インド史に関する学術的見解からWPCの国際活動、家族の近況から共通の知人のゴシップまで書き綴られており、当時コサンビにとってモニカが頼りがいのある、しかも気の置けない友人だったことを思わせる。56年に出版され大きな反響を呼んだ『インド史研究序説』の初版には、尊敬と感謝をこめたモニカへの献辞が書かれている^④。

1956年当時、AIPCはすでにWPCの有力団体であった。AIPCは51年の創立まもなくWPCに参加しており、インド共産党の党员がその活動を主導した。全インド平和会議はカルカッタの会議までに4回開催されている。その間にAIPCは、インド共産党が52年に武装闘争から平和的闘争へと路線を転換したことを背景に、共産党系・国民会議系・クリスチャンなどをふくめて多くの人々が幅広く結集する平和団体へと転換をはかって支持者を増やし、54年の周恩来・ネルーによる平和五原則(「領土・主権の相互尊重」「相互不可侵」「相互内政不干涉」「平等互惠」「平和共存」)の発表、55年のバンドン会議における平

^② Monica Felton, *Rajaji, Katha*, 2003, pp.7-11 およびインド共産党機関誌である *New Age (Weekly)*, Nov 25, 1956, p.3, p.15.

^③ AIPCは1951年5月、ボンベイで開催された第二回全インド平和会議において創立された。会長のキッチリ博士 (Saifuddin Kitchlew, 1888年~1963年)は対英独立運動時代に国民会議の指導者であったが、インド・パキスタンの分離独立後、国民会議を離れ、インド共産党に接近した。WPC副会長をつとめ、1952年にスターリン平和賞を受賞。アナンド (Mulk Raj Anand, 1905年~2004年)は英語で書いたインドの貧しいカーストの人々の生活を描いた『Untouchable』(1935)、『Coolie』(1936)などで国際的に著名な作家。日本では『觸るべからず』(前田河廣一郎譯、六人社、1942年)、『苦力』(中村保男訳、新潮社1957年)が出版されている。チャンドラ (Ramesh Chandra)は1939年にインド共産党に入党、52年に党中央委員、58年に党中央執行委員。52年以後、AIPC事務局長をつとめる。66年にWPC事務局長、77年にWPC会長に就任。

^④ モニカ・フェルトンの英国在住の遺族は、88通にのぼるコサンビからの手紙を保存している。筆者は2013年5月に英国を訪問してそれらを拝見し、複写を許可していただいた。それらの手紙の中でコサンビは『インド史研究序説』執筆に関してモニカ・フェルトンが与えた助言に感謝してこの本をモニカに捧げると述べており、実際、Damodar Dharmanand Kosambi, *An Introduction to the study of Indian History* (Popular Book Depot, Bombay, first published December, 1956)の献辞に、'to Dr. Mrs. MONICA FELTON whose critical advice has imposed heavy obligations upon both reader and author.'とある。同書は、桑原武夫が「インド史学界の新巨星—コサンビ氏の『インド史研究序説』について—」(『思想』455号、1962年5月)で紹介し、その後、『インド古代史』と題して邦訳が出版されている(山崎利男訳、岩波書店)が、モニカ・フェルトンに対する献辞に関しては言及されていない。

和十原則の発表を受けて、さらに活気づいていった。インドは非同盟諸国のリーダーとして国際社会における地位を高め、AIPC は植民地主義や冷戦下の軍事同盟、原水爆実験といった国際的平和課題に関してインド政府と協力関係を築いた⁽⁶⁾。

全インド平和会議(1949~1957年)

1949年11月	第1回全インド平和会議、カルカッタで開催
1951年 5月	第2回全インド平和会議、ボンベイで開催。AIPC創立。会長はサイファディン・キッチリ
1952年 9月	第3回全インド平和会議、ジュルンドウルで開催。事務局長にロメシュ・チャンドラ
1954年12月	第4回全インド平和会議、マドラスで開催
1956年11月	第5回全インド平和会議、カルカッタで開催
1957年 5月	第6回全インド平和会議、バンガロールで開催

モニカ・フェルトンが参加したカルカッタ会議は、11月15日から18日にかけて開催された。火急の重要議題はスエズ危機である。AIPC は、スエズ運河国有化はエジプト政府の主権に属する決定であり、イスラエル・英・仏産国のエジプト侵攻は国連憲章に反する露骨な侵略行為であり世界平和に対する脅威であるとして、英仏・イスラエル三国にスエズ地帯からの無条件即時撤収を求め、エジプトとアラブ諸国の闘いに対する支持、平和的解決のために努力するインド政府に対する支持を表明した。核問題、軍事同盟、アジア・アフリカ諸国の連帯、インド・パキスタンの友好なども議題となり、多数の決議が採択された⁽⁶⁾。特に核問題に関しては、AIPC は署名運動の取り組みや米英ソに対する核実験停止の働きかけなど、原水爆禁止運動に積極的に取り組んでおり、カルカッタの会議においても原水爆を平和と人類の未来に対する永続的脅威と指摘し、核実験・核兵器による不断の脅威に人々の意識を喚起し、核実験・核兵器の即時禁止を世界に訴えることを宣言している⁽⁷⁾。

⁽⁶⁾ インドの平和運動史については、Marshall Windmiller, *Communism in India*, University of California Press, 1959, pp.411-432 参照。ただし、この本では1956年のカルカッタ会議について、第5回会議として呼びかけられたものの、ハンガリー事件をめぐる意見の相違のため成立せず、第5回会議は57年のバンガロールまで延期されたとしている(428頁)。が、共産党機関誌『New Age』やWPC機関誌『Bulletin of the World Council of Peace』などで見る限り、ハンガリー事件問題はインドでは西欧とは違って平和運動の深刻な争点になっておらず、カルカッタ会議は盛大に行われて無事に幕を閉じており、あえてこれを第5回としない理由は見当たらない。よって本稿では、カルカッタ会議を第5回、バンガロール会議を第6回として扱っている。

⁽⁶⁾ 'ALL INDIA PEACE CONGRESS', in *Bulletin of the world Council of Peace*, no.22(3rd.Year), November 15, 1956, pp.11-12, 'ALL INDIA PEACE CONGRESS', in *New Age (Weekly)*, November 25, 1956, p.3, p.15.

⁽⁷⁾ インドの当時の原水爆禁止運動については、'Indian Disquiet over Atomic Tests, Workers, Peasants and Women in Disarmament Campaign', in *Bulletin of the world Council of Peace*, February 15, 1956, p.10, 'Each Day Brings Thousands of Signatures; Two Indian States Set High Pace', *ibid.*, July 15, 1956, p.11, 'For the banning of test explosions All India Peace Council delegation to Representatives of the 3 Powers', *ibid.*, AUGUST 1, 1956,

他方、スエズ危機の直前にソ連の軍事介入によって多数の市民が死傷したハンガリー事件に関しては、「憂慮」は表明されたものの、認識も見解も共有されなかった。一致が確認されたのは唯一、「ハンガリー問題が国際緊張を高めて第三次世界大戦を準備する好機として利用されないようにすべきだ」という点だけだった⁽⁹⁾。それはWPCが11月18日のヘルシンキにおける執行局会議を経て発表した、「ハンガリー事件の原因や責任の所在に関しては内部に相異なる意見があるが、ハンガリーの悲劇が国際緊張を高めるために利用されてはならないという一点では共通している」⁽⁹⁾という声明と共通しており、ソ連の軍事干渉に対する非難は回避されている。

ハンガリー事件はWPCの内部、特にヨーロッパの平和運動に深刻な衝撃を与え、WPCに参加する西欧・北欧の平和団体は相次いで内政干渉に反対する声明を出し、モニカ・フェルトンが所属する英国平和委員会では11月4日、理事会が満場一致でソ連政府に対してハンガリーにおける武力行動の中止を求める声明を採択している⁽¹⁰⁾。が、AIPCは態度を明確にせず、AIPCを主導するインド共産党の機関紙『新時代 (New Age)』には「ハンガリー：反革命は打破されねばならなかった」(11月9日)、「ハンガリー：反動の陰謀は未然に防がれる」(11月18日)といったソ連擁護の記事が続いていた⁽¹¹⁾。モニカには内心に違和感を抱いたであろう。

とはいえ、その違和感が覆いがたいものになるのはもっと先のことである。平和運動家としてのモニカの足跡をたどるとき、カルカッタ平和会議は、他の何にもまして、ラジャゴパラチャリとの出会いの契機として意味があった。

ラジャゴパラチャリは9月下旬にマドラスで開かれた平和会議に出席し、スエズ危機と核兵器禁止のために平和運動を強めるよう訴えており⁽¹²⁾、56年7月に彼自身が創刊した『スワラジャ』誌においても反核・平和の論陣を張っていた。エジプトが侵攻された事実こそ核抑止論の無意味さが露呈している。核兵器は戦争抑止どころか弱小国を孤立させ、

p.3などを参照。

⁽⁹⁾ *Bulletin of the world Council of Peace*, November 15, 1956, pp.11-12.

⁽⁹⁾ *Ibid.*, p.2 および 'RED PEACE UNIT SPLIT BY HUNGARIAN ISSUE', Special to The New York Times. *New York Times (1923-Current file)*; Nov 26, 1956; ProQuest Historical Newspapers: The New York Times (1851-2010) with Index (1851-1993)

⁽¹⁰⁾ 1956年2月のソ連共産党第20回大会におけるフルシチョフの特別報告以後、脱スターリニズムの波が高まり、ハンガリーでは同年10月23日に民衆が蜂起した。これに対してソ連軍が武力介入して多くの市民が犠牲になった。24日に首相に任命されたナジ・イムレはソ連軍の介入のもとで解任され、ユーゴスラビア大使館に逃れたが、まもなく逮捕される。このハンガリー事件はヨーロッパの左翼的知識人にも大きな衝撃と失望を与えることになった。イギリス共産党においてはE.P.トムスンらが離党し、「社会主義的ヒューマニズム」を標榜する『ニュー・リーズナー』を創刊し、ソ連共産党流の公式マルクス主義と決別した。モニカもまた、こうした「失望した知識人たち」の一人であった。なお、ベルギー、イタリア、オーストリア、英国、西ドイツ、フランス、スウェーデン、デンマーク、ノルウェーの平和団体がハンガリー事件直後から相次いで声明を発表している(日本平和委員会編『平和運動20年資料集』大月書店、1969年、163~170)。

⁽¹¹⁾ *New Age*, September 9, 1956, p.7, *New Age*, November 18, 1956, p.13.

⁽¹²⁾ マドラス平和会議については、'Madras Peace Conference Shows Again Possibilities of All-In Unity for Peace: Rajaji calls for strengthening of Peace Movement', *New Age*, October 14, 1956, p.14 および *Bulletin of the world Council of Peace*, November 1, 1956, p.12.

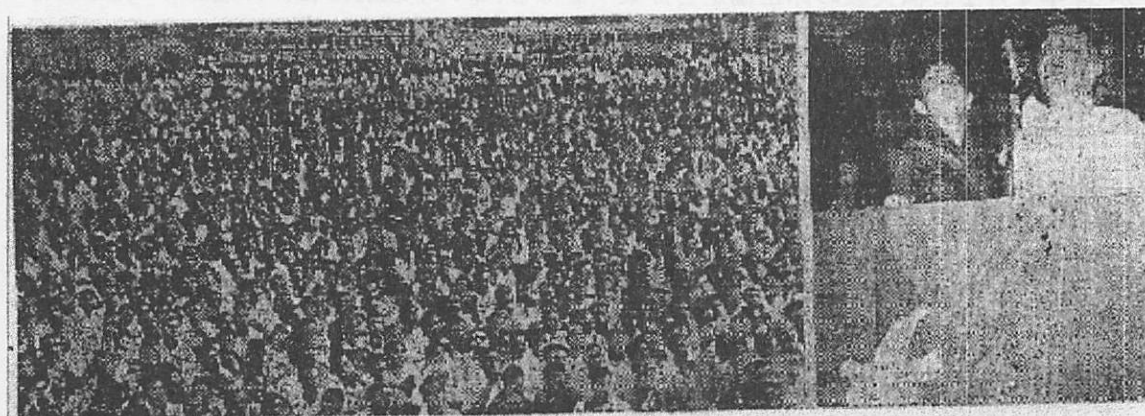
大国による侵略は野放しになる（「奇妙な結果」『スワラジャ』10月20日）。米国の核政策は、威嚇と恐怖で敵を無力化させようとする全体主義であり（「国際的全体主義」同前 11月10日）、英仏のスエズ政策は昔日の帝国主義的な武力による威嚇である。そう彼は弾劾し、インドはもはやコモンウェルスを離脱すべきだとさえ主張していた（「すぐに分離しなければならぬ」同 11月6日）。ラジャゴパラチャリはカルカッタ会議に直接出席しなかったが、会場ではスエズ危機に関する彼の声明を録音したテープが再生された。

モニカ・フェルトンは、ラジャゴパラチャリの、伶俐でゆっくりとした声で語られる鋭く率直な批判に感銘を受けた。カルカッタの会議が終わると、彼女はラジャゴパラチャリに会うためにマドラスへ向かう⁽¹⁸⁾。そして、ラジャゴパラチャリとの邂逅が、モニカのその後の人生に大きな影響を与えてゆくのである。

⁽¹⁸⁾ *Rajaji*, op.cit. pp.7-11.



会議に参加したインド国内代表、外国代表、エジプト領事。モニカ・フェルトンは前列左。
New Age (Weekly), Nov 25, 1956, p.15



11月18日の全インド平和会議開会セッションの光景。マイクの前に、「英国平和運動指導者
モニカ・フェルトン」。New Age (Weekly), Nov 25, 1956, p.3

第2節 健在の、最も偉大なインド人

チャクラバルティ・ラジャゴパラチャリ(1878年～1972年)はガンジーの親しい友人で、ガンジーは彼を「自分の良心の守護者」と呼んだという。彼はインド国民会議の一員として非暴力不服従の独立運動を闘った民族主義の指導者であり、インドの独立と共和国創設期に国家の要職を歴任した。マドラス州首相(1937年～39年)、インド暫定政府教育相(1946年～47年)を経て、独立後の47年にインド人で初めて西ベンガル州知事になり、48年に最後の英国人総督であったマウントバッテン卿の後を引き継ぎ、インド人として最初で最後のインド総督(1948年6月21日～50年1月26日)になる。インドの共和国宣言とともに総督を辞し、ネルー内閣の内務大臣(50～51年)、続いてマドラス州首相(1952年～54年)に就任した⁽¹⁴⁾。

1956年のAIPCカルカッタ平和会議当時、ラジャゴパラチャリが健康問題を理由として54年4月にマドラス州首相を辞任してから2年8か月が過ぎていた。政府や州の公職を離れ、国民会議の政治活動から遠ざかったラジャゴパラチャリは、サンスクリット語の叙事詩「ラーマーヤナ」のタミール語への翻訳にいそしんでいた。その成果は高い評価を受け、58年にサヒチャ・アカデミー賞を受賞することになる。文学、哲学、音楽に造詣の深い人物であった。そしてその間、ラジャゴパラチャリは核兵器に対する強い反対を世界に訴えていた。彼の反核論を54年に遡って以下に振り返ってみよう。

1954年12月、ラジャゴパラチャリは『ニューヨークタイムズ』紙に原水爆は断じて許されない兵器であり、米ソは国際交渉で相手の出方を待つのでなく、自ら一方的(Unilateral)に核兵器を廃棄すべきであると米国市民に訴える手紙を送る。国際政治のバランス・オブ・パワーや政治的交渉手段として核を扱う態度を峻拒し、政治利害の如何や交渉の成否の問題としてではなく、正邪の問題として核廃絶を訴えたのである⁽¹⁵⁾。この54年は、米国がビキニ環礁で行った水爆実験のために第五福竜丸が死の灰を浴び、日本の原水爆禁止運動が始まった年である。WPCはビキニ実験直後の3月、平野義太郎から報告を受け、原水爆禁止に関する声明を出し、諸国民が自国政府に大量絶滅兵器禁止協定の締結を求めるよう訴えた⁽¹⁶⁾。AIPCが原水爆禁止運動に積極的であったことを前節に述べたが、ネルー首相が54年4月2日核実験の休止協定を提案するなど、インド政府は世界に先駆けて核実験反対の旗幟を鮮明にしていた⁽¹⁷⁾。元インド総督であるラジャゴパラチャリが『ニューヨークタイムズ』紙へ投稿したことは、内外に大きな反響を呼んだ。インド合同通信社のインタビューを受けて、ラジャゴパラチャリは、かくまで原爆を恐れるのは広島記憶ゆえで

⁽¹⁴⁾ ラジャゴパラチャリの伝記には、モニカ・フェルトンの著作の他、K.T. Narasimha Char, *C. Rajagopalachari: his life and mind*, Heritage, 1978, Antony Copley, *C. Rajagopalachari: Gandhi's southern commander*, Indo-British Historical Society, 1986, S.R. Bakshi, *C. Rajagopalachari*, Anmol Publications, 1990, Verinder Grover ed., *C. Rajagopalachari*, Deep & Deep Publications, c1992, C.R. Narasimhan, *Rajagopalachari, a biography*, Radiant Publishers, 1993 などがある。

⁽¹⁵⁾ C.Rajagopalachari, 'Letter to the New York Times to ban Atomic Weapon (原子兵器禁止のための『ニューヨークタイムズ』紙への書簡), Monica Felton, ed., *Mankind Protest: A Collection of Speeches and Statements on Atomic Warfare and Test Explosion by C.Rajagopalachari*, All India Peace Council, New Delhi, 1957, pp.4-7.

⁽¹⁶⁾ 日本平和委員会編『平和運動20年史年表』大月書店、1969年、20頁。

⁽¹⁷⁾ 福井康人「米印合意の功罪」『外務省調査月報』2009年度(4)、2010年3月、38頁

あり、折からの台湾海峡危機によって恐怖がいつそう強まった、と語っている⁽¹⁸⁾。朝鮮戦争・インドシナ戦争に続き、台湾海峡紛争に際しても米国は核兵器使用の可能性をもって威嚇しており、ラジャゴパラチャリはそれに強く抗議したのである。

ソ連が1955年5月の国連軍縮委員会小委員会(ソ連・英米仏・カナダで構成)において核実験停止をふくむ提案⁽¹⁹⁾を行うと、ラジャゴパラチャリはこれを高く評価し、「平和と友好への王道は一方的行動であり、その道を照らすものは勇気である」と述べ、米英がこの提案を受け入れることを求めた⁽²⁰⁾。ソ連の提案は国連で却下され、英米の政府とメディアはこの提案を疑いと冷笑と皮肉で迎えたが、彼は断固としてソ連の提案を支持し、英米の平和を望む市民に「一方的」核軍縮キャンペーンを展開するようアピールした⁽²¹⁾。ラジャゴパラチャリは核兵器が卑劣な大量破壊兵器であり人類の文明を滅ぼすとして、1956年中も核実験に反対する文章を次々に発表した。「抑止力論と平和利用論」は両方とも大国が核開発のためにふりまく二つの幻想である⁽²²⁾とラジャゴパラチャリは喝破した。英米は大量殺戮兵器である核ミサイルを協力して推進しているが、核兵器は人類に敵するものであり、インドは断じて協力してはならない⁽²³⁾。日本への原爆投下は戦争終結には不要であった⁽²⁴⁾。核実験を続ける米国に抗議するため、インドは米国からの経済援助を断念すべきである⁽²⁵⁾。ラジャゴパラチャリはこのように、米英への外交的遠慮にとらわれるインド政府に対しても、毅然と反核政策をとるよう迫った。彼は言う。かつてインドが英国と闘ったように、悪に対しては倫理を武器として戦い、核という人類の敵との戦いのために米英からの援助を断念する犠牲をも払う覚悟が必要だ⁽²⁶⁾。人類の文明を滅ぼし、放射能で人類の未来を汚染する大量殺戮兵器を、共産主義との戦いを口実として正当化することはできない⁽²⁷⁾と。

1956年3月、ラジャゴパラチャリはマドラスの平和会議あてに、ソ連が一方的核廃絶の行動をとるようにWPC-AIPCからの働きかけを願うメッセージを送っている⁽²⁸⁾。彼とAIPCの関係は過去数年の間に大きく変化していた。51年の第2回全インド平和会議当時、ラジャゴパラチャリは内務大臣であった。インド政府とインド共産党の厳しい対立関係を

⁽¹⁸⁾ 'Criticism and Friendship (批判と友情)', *Mankind Protest*, op.cit., pp.8-9.

⁽¹⁹⁾ 'Treaty Banning Nuclear Weapon Tests in the Atmosphere, in Outer Space and Under Water' 米務省サイト, <http://www.state.gov/t/isn/4797.htm>

⁽²⁰⁾ 'Unilateral action for Peace (平和のための一方的アクション)', *Mankind Protest*, op.cit., pp.50.

⁽²¹⁾ 'Address to the thirty-third Convocation of Delhi University (デリー大学第33会議のための演説)', *ibid.*, pp.51-59, 'Russia, the West and Disarmament (ロシア、西欧、軍縮)', *ibid.*, pp.60-63.

⁽²²⁾ 'The Bomb and the Commonwealth (爆弾とコモンウェルス)', *ibid.*, pp.15-17.

⁽²³⁾ 'India has a Mission (インドには使命がある)', *ibid.*, pp.18-19.

⁽²⁴⁾ 'The Nightmare of Nuclear Arms (核兵器の悪夢)', *ibid.*, pp.22-44, 'Why were Hiroshima and Nagasaki Atom bombed? (なぜ広島と長崎に原爆が投下されたのか?)', *ibid.*, pp.45-46.

⁽²⁵⁾ 'India should sacrifice U.S. Aid (インドは米国からの援助を犠牲にするべきだ)', *ibid.*, pp.47-49.

⁽²⁶⁾ 'Radio-active Pollution (放射能汚染)', *ibid.*, pp.66-67.

⁽²⁷⁾ 'Must Nuclear Preparations go on? (核の準備が続かねばならないか?)', *ibid.*, pp.72-74.

⁽²⁸⁾ 'On the banning of Atomic and other Nuclear Weapons (原爆その他の核兵器の禁止について)', *ibid.*, pp.20-21.

背景として、彼はこの会議のデリー開催を認めないと宣言し、キッチリが率いる代表団の説得にも態度を変えなかった⁽²⁹⁾。しかし、前節で述べたように、インド共産党は平和路線に転じ、AIPCには多数のガンジー主義やクリスチャンが参加するようになる。ラジャゴパラチャリもまた、核兵器廃絶の大義においてWPC-AIPCに歩み寄った。政治思想はリベラルであり、まず『ニューヨークタイムズ』に投稿したことにも示されているとおり、以前はソ連よりも米国に親近感を抱いていたが、55年5月以降のソ連による平和提案を支持し、56年4月にストックホルムで開かれたWPC会議にメッセージを寄せ⁽³⁰⁾、同年8月6日には広島デーに寄せてAIPCにもメッセージを送っている⁽³¹⁾。8月30日にデリーで開かれたAIPC幹部会では、集会冒頭にラジャゴパラチャリの録音された声明が再生されている⁽³²⁾。56年9月のマドラス平和会議にラジゴパラチャリが出席し、平和運動への協力を呼びかけたのは、このような経緯があつてのことである。

元インド総督であり、内務大臣時代には自他共に認める反共主義者であつたラジャゴパラチャリが、ソ連の平和政策を公然と支持してWPC-AIPCに協力し、核兵器廃絶・核実験停止こそが人類的な最重要課題であると国際社会に訴えかけるようになった。それは、当時、核軍拡競争に対してインドの多くの人々が共有していた深い憂慮の表出であり、同時にまた、ラジャゴパラチャリというユニークな個性だからこそできたことでもあつた。「現在生きていて最も偉大なインド人」だと彼を賞賛する人々もいた⁽³³⁾。その含意は、ガンジーを失ったインドにおいて、その継承者として、政権を担うネルー首相よりもさらに偉大な人物だということだろう。コモンウェルスからの脱退や米国援助の拒否は、米英との関係を損ないたくないネルー首相の選択肢にはもとより入っていない。しかし、「平和と友好への王道は一方的行動であり、その道を照らすものは勇気である」。ラジャゴパラチャリは米英との決別さえ辞さない「インドの使命」を訴えることによって、核軍拡競争時代のインドの「良心の守護者」としての役割を果たしつつあつた。

第2章 『人類は抗議する』の編集と出版

第1節 ラジャゴパラチャリとの対話の始まり

モニカ・フェルトンはインドの平和運動関係者からの紹介を得て、ラジャゴパラチャリに会いに行った。ラジャゴパラチャリが68歳の誕生日を迎える1週間前のことである。後にモニカは第一印象をこう書いている。それまで出会った多数の「世界的有名人」は、たいてい「名声があるという以外は、ただの人」であつた。が、ラジャゴパラチャリにはその大きな名声とは別のところで、すこぶる特別な何かがあつた。老齢なのに若者のような好奇心に満ちている。初対面にもかかわらず、モニカは他の誰にも語ったことのなかつた

⁽²⁹⁾ *Communism in India*, op.cit., pp.416-417.

⁽³⁰⁾ 'The Stockholm Session (April 5-9, 1956)', *Bulletin of the world Council of Peace*, May 1, 1956, p.2.

⁽³¹⁾ 'Points of View', *Ibid.*, September 1, 1956, p.10.

⁽³²⁾ *New Age*, September 9, 1956, p.3.

⁽³³⁾ *Rajaji*, op.cit., p.7

自分の人生を語り、そんな自分に仰天した。そして、ラジャゴパラチャリが注目するのは全部未来のことである。モニカは、ラジャゴパラチャリは本人が自覚している以上に未来に寄与すべき人物だと直感した。それは何なのか。まだ分からないが、それをきっと見つけよう。モニカはそう決心した⁽³⁴⁾。

その後の12月23日、ニューデリーでアジア作家会議が開幕する。これは、後の「アジア・アフリカ作家会議」の出発点となった会議である。バンドン会議をはじめとして、植民地支配から脱却しつつあるアジア・アフリカ諸国には連帯の機運が高まっていた。多数の作家が15か国から参集し、日本からも堀田善衛らが参加している。作家たちは、何世紀間もの外国支配によって荒廃したアジアの文学や文化遺産を共同して正当に評価し、植民地主義と封建主義から脱して新しい創作活動を共有する希望を抱いていた。会議では各国からの報告や非アジア圏からのオブザーバーの発言が行われ、24日にラジャゴパラチャリがスピーチを行った。それは、モニカが人々に語りかける彼の姿を見た最初の機会になった。ラジャゴパラチャリは作家の創作と責任について語り、作家の天職は自由に物を書くことであるとして統制からの自由を強調した。アジア作家会議がアジアと非アジアの二分法や「世界が今日患っている病」である冷戦政治を超えて、作家どうしの交流の場となるようにと呼びかけている⁽³⁵⁾。

インド共産党の機関誌『ニューエイジ』にも、モニカがアジア作家会議に出席したという記事はある⁽³⁶⁾。が、彼女は公に発言していない。コーディネイターのマルク・ラジ・アナンが英国代表として発言を求めたのは、モニカではなく、もう一人の英国人女性である詩人のフィリッパ・パレルであった。フィリッパの自伝によれば、会議場にいた英国人は、「有名な共産主義者であるモニカ・フェルトン」とフィリッパだけだった。急に各国代表からの発言が必要になったとき、アナンはフィリッパのところへ駆けつけてきて、脇へひっぱっていき、「モニカの政治性はあまりにも有名」なので、フィリッパに英国代表として話すよう頼んだという。何の準備もしていないと驚くフィリッパに対して、アナンは「分かっている。分かっていると。しかし英国からのスピーチがいるんだ。それができるのは君だけだ」と説得したのだという⁽³⁷⁾。このエピソードを通して、モニカが当時「有名な共産主義者」だと認知されていたことが分かる。

それにしても、アナンのような人物があえてモニカに発言させたがらなかった理由はどう考えるべきか。アナンは共産党とつながりの深い、いわゆる「同伴者」であった。AIPC 副会長であり、53年にはWPCから国際平和賞を受賞しており、モニカと類似する社会的立場といえよう。そのアナンがモニカの発言を望まなかった理由の一つは、インド

⁽³⁴⁾ Ibid., p.11.

⁽³⁵⁾ C.Rajagopalachari, 'Asia Speaks: A Voice for Freedom and Tolerance', *Meanjin*, Volume 16 Issue 1, Autumn 1957, pp.63-64. アジア作家会議については M. V. Desai, 'The Asian Writers' Conference December 1956: New Delhi', *Books Abroad*, Vol. 31, No. 3 (Summer, 1957), pp. 243-245, 'Most Comprehensive Gathering So Far of Asian Writers', *New Age*, December 30, 1956, p.16, 'Asian Writers' Conference', *Bulletin of the world Council of Peace*, January 15, 1957, p.12などを参照。

⁽³⁶⁾ 'Most Comprehensive Gathering So Far of Asian Writers', *ibid.*

⁽³⁷⁾ Philippa Burrell, *Remarkable Lives, Letters and Photographs*, http://philippaburrell.com/remarkable/RemarkableLives_41.htm

共産党とその同伴者たちが、この会議を「これまでで最も包括的なアジア作家の会議」とすることを重視していたということだろう。彼がネルー首相の米国からの帰国の遅延を心配してフィリッパにネルー首相を迎えに行くように依頼した理由と同様、国をあげての超党派的事業としてアジア作家会議を演出するためには、「有名な共産主義者」より、政治的に無色なフィリッパのほうが望ましいという意味である。が、理由はそれだけだったのだろうか。運動の思想や路線をめぐる懸隔の兆が、そこに早くも表れていたかもしれない。

アジア作家会議が閉幕し、クリスマスも過ぎた 1956 年の暮れ、モニカはラジャゴパラチャリが娘夫妻と共に滞在していたヒンズスタントゥームズのオフィスに会いに行った。そのときラジャゴパラチャリはインドとパキスタンの緊張にふれ、「アジア諸国が他国からの侵略を恐れて軍事力の増強を図ることは、大国が原水爆の保有が抑止力になると主張するのと同じだ」とし、「すでに核武装を果たしたソ連ではなく、核兵器をもたないアジアこそ真に平和運動を必要としている。平和運動はソ連中心ではなく、アジアの人々の手で行われねばならない」と語っている。このときの会見で、モニカはマドラスに滞在してラジャゴパラチャリと対話を重ねたいという希望を伝え、快諾を得た。ラジャゴパラチャリとモニカの対話がこうして始まった⁽³⁸⁾。

モニカ・フェルトンは 1957 年 1 月、マドラスを再訪する。インド共産党員である P.K. クリシュナン夫妻ら、WPC-AIPC 活動家が彼女の滞在を支援した。P.K はマドラスの医師で、1951 年に創立されたインド・ソビエト文化協会の副会長であり、妻のジャナキも活動家であった。ジャナキは今日も健在で、クリシュナン夫妻はニューデリーの本部から、モニカが行くので快適に滞在できるように世話をしてほしいというメッセージを受け取り、エグモア駅で彼女を迎えた、と語っている。モニカはしばらくクリシュナン家に滞在し、その後、ホテルに長期逗留することになった。P.K はラジャゴパラチャリをはじめ、ジャーナリストのカサ・スバラオや法律家の A.V.ラーマンら、共産党系でないマドラスの名士たちにも友人が多く、モニカに多くの人を紹介した。モニカがマドラスへやってきた頃は夫妻の長男が 8 才、次男が 6 才、三男がまだ 4 才くらいだった。モニカはこの子どもたちが大好きで、とても可愛がったという⁽³⁹⁾。モニカはこうしてマドラスに腰を据え、足繁くラジャゴパラチャリの自宅を訪れるようになった。

⁽³⁸⁾ *Rajaji*, op.cit., pp.12-19.

⁽³⁹⁾ ジャナキ・クリシュナンのインタビュー、於チェンナイ（旧マドラス）、2012 年 6 月、2013 年 9 月。



インド時代のモニカ・フェルトン



クリシュナン夫妻と子どもたち



クリシュナン一家・友人たちとの記念写真

第2節 反核論のコレクション

モニカ・フェルトンは1957年の1月から3月にかけてラジャゴパラチャリの数々の著作に目を通し、対話を重ねる中で、彼の核廃絶思想が世界平和運動に大きな役割を果たすことを確信する。そしてラジャゴパラチャリの40篇の論説やインタビュー記事、スピーチ原稿や手紙などを編集し、57年5月に『人類は抗議する』と題して出版するのである。同書はニューデリーに本拠を置く全インド平和評議会(AIPC)の出版物として刊行されたが、印刷はマドラスのジュピター出版で行われ、⁽⁴⁰⁾ インド国内と世界平和運動の関係者に送られた。『人類は抗議する』の目次は一覧表のとおりである。

『人類は抗議する』の中で最も早く書かれた文章は1922年の、英国による軍用機開発に警告を発した「航空機」であり、ラジャゴパラチャリの平和思想の根底にあった、戦争と破壊へと進む西欧文明に対する批判が窺える。45年8月17日に書かれた「原子爆弾」はラジャゴパラチャリの反核論の原点といえる。日本に投下された原爆は国際的に使用が禁じられてきた細菌兵器以上に恐るべき、想像を絶する未曾有の破壊兵器であり、戦争終結手段として用いられるべきでなかった、と断言している。

『ニューヨークタイムズ』への手紙に始まる54～56年の文章は前章で紹介した通り「一方的」核兵器廃棄のアピールであり、56年の文章の内3篇は英国の平和団体が発行する『ピース・ニュース』に寄稿された。ラジャゴパラチャリには豊かな西欧的学識があったが、その哲学にはインドの古典的教養とガンジー主義的な倫理性の基礎があった。モニカは西欧近代思想に依拠してきたが、その末路ともいえる核軍拡競争の加熱やハンガリー事件で露呈したスターリニズムの根深さに対して苦悩があった。核兵器が象徴する力の政治ではなく生命の倫理に基礎をおくラジャゴパラチャリの平和思想は、未来への希望をつなぐ新たな拠り所と感じられたであろう。

⁽⁴⁰⁾ Monica Felton ed., C.Rajagopalachari, *Mankind protests : a collection of speeches and statements on atomic warfare and test explosions*, All India Peace Council, New Delhi, 1957.

『人類は抗議する』に収録された文章

年	月	標題	原題	初出
1919	6・8	航空機	The Aeroplane	Young India
1945	8・17	原子爆弾(マドラス基督教大学カレッジユニオン協会における講演)	The Atomic Bomb — speech at Madras Christian College Union Society	The Hindu
1954	12・26	原子兵器禁止のための『ニューヨークタイムズ』紙への手紙	Letter to the New York Times to ban Atomic Weapons	The New York Times
1955	1・6	批判と友情	Criticism and Friendship	The Hindu
	1・17	核兵器は壊滅的大惨事をもたらす	Nuclear Weapons will lead to total disaster	The Hindustan Times
	2・11	爆弾とコモンウェルス	The Bomb and the Commonwealth	インタビュー
	2・28	インドには使命がある	India has a Mission	The Indian Express
	3・5	原爆その他の核兵器の禁止について	On the banning of Atomic and other Nuclear Weapons	メッセージ
	3月	核兵器の悪夢	The Nightmare of Nuclear Arms	スピーチ
		なぜ広島と長崎に原爆が投下されたのか」(『ヒンズー』紙への書簡)	Why were Hiroshima and Nagasaki Atom bombed ? (Letter to the Hindu)	手紙
	5・12	インドは米国の援助を犠牲にするべきだ	India should sacrifice U.S.Aid	インタビュー
	9・21	平和のための一方的アクション	Unilateral action for Peace	手紙
11・26	デリー大学第33回会議のための演説	Address to the thirty-third Convocation of Delhi University	演説原稿	
1956	7・27	ロシア、西欧、軍縮	Russia, the West and Disarmament	Peace News (London)
	7・24	質問と回答—モスクワ放送	Questions and Answers —Radio Moscow	アンケート回答
	7・28	放射能汚染	Radio-active Pollution	Swarajya
	8・6	1956年の広島デーへのメッセージ	Hiroshima Day Message - 1956	

	9・12	爆弾の制御	Taming the Bomb	Peace News (London)
	9・29	核の準備は続かねばならないか?	Must Nuclear Preparations go on?	Sarajya
	10・20	奇妙な結果	A Strange Consequence	Swarajya
	11・10	国際的全体主義	International Totalitarianism	Swarajya
	12・22	大陸間弾道ミサイル	Inter-Continental Ballistic Missiles	Swarajya
	12・14	アメリカの人々へ	To the People of America	Peace News (London)
1957	1・19	放射能汚染	Radio-active Contamination	Swarajya
	1・26	テンポの高まる脅威	The Rising Tempo of danger	Swarajya
	2・9	拡散する脅威	The Spreading danger	Swarajya
	2・16	欧米人の心理	The Western Mind	Swarajya
	2・23	核爆発実験	Test Explosion	Swarajya
	3・2	戦術核	Tactical Atomics	Swarajya
	3・9	この核の暴挙を止めろ	Stop this Nuclear lunacy	Swarajya
	3・27	原爆放射能に関する世界専門家報告	World Experts' Report on Atomic Radiation	Swarajya
	3・25	WPCへのメッセージ	Message to the World Peace Council	手紙
	3・30	ソ連の軍縮提案	Soviet Disarmament Proposal	Swarajya
	4・6	私たちの明白な責務	Our Clear Duty	Swarajya
	4・17	『CURRENT』へのメッセージ	A message to Current	Current
	4・20	核全体主義	Nuclear Totalitarianism	Swarajya
	4・20	悪法と悪薬	Bad Law and Bad Medicine	Swarajya
	4・20	増大する脅威	The Greater Danger	The Indiana Press
	4・14	『ニュー・ステーツマン』誌への手紙	Letter to the New Statesman	手紙
	イースタ ー	『マンチェスター・ガーディアン』紙への手 紙	Letter to the Manchester Guardian	手紙

第3節 あくまで「一方的」核廃棄・核実験中止を求めたラジャゴパラチャリ

1957年1月～4月の17篇を、ラジャゴパラチャリはモニカとの対話と同時進行で発表した。57年の年頭、英国政府は水爆実験のために太平洋クリスマス島周辺を3月1日から8月1日までを危険水域に指定すると宣言する。日本の原水爆禁止団体が実験中止を訴え、日本政府も中止を要請したが、英国は実験を強行する姿勢であった。かかる情勢を背景にラジャゴパラチャリとモニカは対話を重ね、ラジャゴパラチャリの反核論は鋭さを増した。

ラジャゴパラチャリは日本の原水爆禁止アピールを擁護し、米英政府を厳しく批判した。米国は侵略戦争準備に巨費を投じて核戦争の脅威を高め、核兵器を世界に拡散しようとしている（「テンポの高まる脅威」1月26日、「拡散する脅威」2月16日）⁽⁴¹⁾。戦術核兵器のアジア配備は災禍の源であり、パキスタンとインドの関係をも悪化させる（「戦術核」3月2日）⁽⁴²⁾。核攻撃をドイツでなく日本に行ったのは、アジア人を軽んじる意識の表れである（「欧米人の心理」2月9日、「核爆発実験」2月23日）⁽⁴³⁾。水爆実験中止を求める日本からの抗議を聞き入れない英国政府、核を拡散する米国は世界を脅威にさらしている。核実験は全世界を放射能で汚染し、次世代をも苦しめることになる。日本からの原水爆禁止の訴えを孤立させてはならない（「この核の暴挙を止めろ」3月9日）⁽⁴⁴⁾、と。

ラジャゴパラチャリは常にインド政府の責務を強調した。56年中にもスエズ危機や放射能汚染をめぐってインド政府が米英に毅然たる態度をとるよう求め、コモンウェルス離脱や米国からの援助の断念という犠牲を払ってもインドは平和の使命を全うすべきだと提唱していたが、57年に英国がクリスマス島核実験を通告すると、インドにはこれに抗議して中止させる責務があり、英国がそれを却下するならインドはコモンウェルスを離れるべきだと主張した（「私たちの明白な責務」4月6日）⁽⁴⁵⁾。米英は共産主義への恐怖を煽って、人類の生命と未来の基礎を壊す国際犯罪を続けている。共産主義の脅威より核汚染のほうが危険である。日本からの感動的なアピールさえ効果がなく実験が行われようとしている今、インドがコモンウェルスに留まるのはとてつもない犯罪の共犯になることであり、もはや離脱すべきである。彼はそう訴えたのである。

ラジャゴパラチャリは英国の新聞や雑誌にも手紙を送り、核実験の一方的中止が採るべき唯一の道だと英国市民に訴えた。『ニュー・ステーツマン』誌が労働党の核実験停止決議にふれて核問題を論じた巻頭には、核問題を「有利な交渉材料」という賭事の言葉で扱っている。だが核問題は、「政治」や「科学」よりも、「倫理」の問題である。核実験は邪悪であり、悪しき行いはやめなくてはならない。ラジャゴパラチャリは同紙にそう書き送って、強く「一方的」核実験中止を訴えた（「増大する脅威」『ニュー・ステーツマン』紙への手紙）4月14日）⁽⁴⁶⁾。同紙はこの手紙を歓迎し、4月27日の投稿欄に掲載してい

⁽⁴¹⁾ 'The Rising Tempo of danger', *Mankind Protests*, *ibid.*, pp.85-86, 'The Spreading danger', *ibid.*, pp.87-88.

⁽⁴²⁾ 'Tactical Atomics', *ibid.*, pp.92-93.

⁽⁴³⁾ 'The Western Mind', *ibid.*, pp.89-90, 'Test Explosion', *ibid.*, p.91.

⁽⁴⁴⁾ 'Stop this Nuclear Lunacy', *ibid.*, pp.94-95.

⁽⁴⁵⁾ 'Our Clear Duty', *ibid.*, pp.101-103.

⁽⁴⁶⁾ 'Letter to the New Statesman', *ibid.*, pp.112-113. 'Letter to the Manchester Guardian', *ibid.*, pp.114-116.

る⁽⁴⁷⁾。その読者には、ラジャゴパラチャリの声明に共感する人が少なくなかった。後に同紙は、英国の新しい反核運動団体・CNDの創出に大きな役割を果たすようになる。

モニカはラジャゴパラチャリの文章を次々に読み、また対話を続ける中で、英国のクリスマス島実験や米国戦術核配備に反対して「一方的」核兵器廃絶を訴えるその主張に共感し、論集として出版することを思い立った。その思いは、WPCへの帰属意識と結びついた平和運動家としての強い使命感に発していた。ラジャゴパラチャリとモニカは文化背景も政治背景も年齢も全く異なっていたが、反核思想を通じて同志的な共感と友情が生まれていた。57年春にモニカが本の編集・出版を申し出た時、ラジャゴパラチャリはその意義に懐疑的だった。モニカは、彼女自身がラジャゴパラチャリとの対話によって「核兵器廃絶のために最も早い、そしておそらく唯一の途は一方的廃棄」だと考えるようになったと主張すると、「たいていの人は簡単に考えを変えまい」。が、本当にモニカがそうしたいなら異存は無い、と出版を認める⁽⁴⁸⁾。このように、『人類は抗議する』の編集は完全にモニカの発案から始まったことであり、同書はラジャゴパラチャリの反核思想を世界に発信しようという彼女の強い意志がなければ出版されなかった本である。

ラジャゴパラチャリは3月末、WPCに反核運動に集中するよう励ますメッセージを送っている。大意をまとめると、次のようになる。

「WPCはオーストリア政府にウィーンからの退去を求められている。WPCは、WPCが平和団体であり、米ソいずれの系統であれ政治団体ではないと確認すべきである。AIPCも時として共産主義支持組織と疑われる。自らの起源は消し難い。だからこそ私はAIPCが国際平和を守り友好を促すという一点で活動し、それ以外の政治を避けるようにと一貫して助言してきた。

今日、WPCが核兵器全面禁止、核爆発実験即時中止という大事業に集中することが絶対に必要である。世界の平和団体が、戦争と平和一般ではなく核問題に積極的に集中するならば、未だ核兵を持たない国々の政府を反核の闘いの共同戦線組織化にも希望がある。核大国は世界に敵対して冷戦下の熱戦を遂行しているが、私たちは実際に無防備状態だ。平和団体こそ、非核保有国に行動を起こさせるべきだ。WPCは今こそこれを熟考すべきだ。行動の機は熟した。核兵器保有国にも抑止力を疑う人々、政府の核政策を変える活動へと向かいうる人々がいる。WPC執行局は行動を集中させるべき好機を迎えている」⁽⁴⁹⁾。

ラジャゴパラチャリは書き上げたばかりのメッセージをモニカに見せて、WPC関係者は考えが凝り固まっているため自分の助言を容れまい、と言った。モニカは「可能性はある」と言い返し、彼もまた以前はAIPCの平和集会開催を許さなかった事実を思い出させた⁽⁵⁰⁾。人の考え方も運動の方針も変わる。WPCは変わるべきだ。モニカはそう考えていた。

⁽⁴⁷⁾ *The New Statesman and Nation*, April 27, 1957, p.543.

⁽⁴⁸⁾ *Rajaji*, op.cit., Ibid., p.59.

⁽⁴⁹⁾ 'Message to the World Peace Council', *Mankind Protest.*, op.cit., pp.97-98.'

筆者により大意を要約。なおこの時期のWPCのブレチンには、オーストリア政府の非道を弾劾する仲間内の激励メッセージが飛び交っている('In Defense of Peace', *Bulletin of the World Peace of Council*, April 15, 1957, p12) 最中である。WPCがラジャゴパラチャリからの提言をどう受けとめたかに関する文書資料は未だ見つからない。

⁽⁵⁰⁾ *Rajaji* op.cit., pp.40-41.

第3章 『人類は抗議する』の反響

第1節 AIPCのバンガロール会議とWPCのコロンボ会議

『人類は抗議する』出版からまもない1957年5月24日から26日にかけて、AIPCは核実験反対のために全インド平和会議をバンガロールで開く。バンガロール近在の政界・宗教界・法曹界・学術界の名士で構成するレセプション委員会が、インド各地から集まった500人以上の代表を歓迎した。モニカ・フェルトンも、WPC事務局のアイヴァー・モンターギュとともに出席する⁽⁵¹⁾。二人とも英国平和委員会の会員であり、モニカの当時の肩書きは「英国平和委員会副会長」である。折しも会議直前の5月22日、インドの下院議会はインド政府の支持を得て、米英ソ三国に対して核実験即時停止を求める決議を全会一致で採択した⁽⁵²⁾。バンガロール会議は盛り上がり、核実験即時停止を求める決議をあげ、全国規模の核実験反対運動のための行動委員会も発足させた。ラジャゴパラチャリはこの会議に主導的な役割を果たし、開会スピーチで「私たちのありとあらゆる努力を集中し、冷戦と核実験を妨げるために力を出し合おう」と呼びかけ、核兵器開発・核拡散の危険性や核実験停止に向けたソ連の提案、インドの議会と政府の積極的姿勢にふれ、AIPCの大きな責任を指摘して平和運動の強化を訴えている⁽⁵³⁾。

それから2週間余り後、6月10日から16日にかけて、WPCはアジアで最初の会議をセイロン（現スリランカ）の首都コロンボで開催する。「核実験は現在進行中の軍拡競争の最高表現であり、恐るべき原子戦争を引き起こさずにはやまない」として核実験即時中止を訴えるコロンボ・アピールを発表した国際会議である⁽⁵⁴⁾。モニカはもとより、ラジャゴパラチャリからの3月のWPCに送ったメッセージを読んだ活動家たちは彼のコロンボ会議出席を強く求めた。が、健康状態が思わしくなかったラジャゴパラチャリはモニカが自分の代理としてコロンボへ行くように言い⁽⁵⁵⁾、平和団体に核実験中止キャンペーンに集中するよう求め、英国が水爆を断念し冷戦からの中立を宣言するよう求めるメッセージをコロンボ会議に送っている⁽⁵⁶⁾。かくしてモニカは『人類は抗議する』とラジャゴパラチャリのメッセージを携えて、コロンボへ行った。

⁽⁵¹⁾ 'Bangalore Peace Convention: Central Theme was Demand for Suspension of Nuclear Test', *New Age*, June 2, 1957, p.6.

⁽⁵²⁾ 'Stop nuclear tests', *The Hindu*, May 24, 1957.

⁽⁵³⁾ 註(51)に同じ。

⁽⁵⁴⁾ コロンボ会議については、日本平和委員会編『平和運動20年運動史』大月書店、1969年、126～128頁、『初期原水爆禁止運動聞き取りプロジェクト記録集成』（ピープルズ・プラン研究所発行、2012年、CD版）の172～174頁、216～218頁、278～279頁、481～486頁（「1957年7月3日 第三回全国総会報告並びに決定 原水爆禁止日本協議会」）、487～499頁（「第四回全国理事会報告並資料 1957・10・10 原水爆禁止日本協議会」）、508～518頁（「国民使節派遣に関する経過報告（6・30）」）などを参照。

⁽⁵⁵⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、1958年6月3日。米国のプリンストン大学図書館が所蔵するMaria Rosa Oliver Papersの中に、モニカ・フェルトンが1958年から66年にマリア・ロサ・オリヴェルへ宛てた手紙が保存されている。

⁽⁵⁶⁾ 'Message to the World Peace Council: June 1957', C. Rajagopalachari, *The Voice of the Uninvolved: speeches and statements on atomic warfare and test explosions*, p.87.

コロombo会議には70か国から402人が参加し、日本からは小畑忠良(団長)、羽仁五郎、平野義太郎(日本平和委員会)、安井郁(原水爆禁止日本協議会)ら30名前後の代表団が参加した。日本代表団にとってコロombo会議での大きな目標は、日本で8月に開く第三回原水爆禁止世界大会の準備を進めることであった。そのための集会在コロombo会議の正式な催しとして14日夜に開かれ、20か国の100名が参加している。安井郁からの経過報告に続いて、各国から世界大会準備状況の報告があり、第1回世界大会に中国代表団の団長をつとめた劉寧一、第2回世界大会に出席したモニカ・フェルトンが世界大会の報告を行った。モニカはその発言の中で、「今度の世界大会を真の国際会議にしてほしい」と強く要請した。後に原水協事務局で報告にあたった武藤一羊は、クリスマス島核実験問題を背景に各国で原水爆禁止に対する熱意が高まっており、日本代表団が接した各国代表は異口同音にモニカと同様の要望を異口同音に強調していた、と報告を結んでいる⁽⁵⁷⁾。

モニカは、コロomboに集まった平和活動家たちの多くがラジャゴパラチャリの主張に共感していると感じた。なかでも日本代表団の反応は特別だったという。平野義太郎と岡倉古志郎らは8月に東京で開催予定の原水爆禁止世界大会にラジャゴパラチャリを招待するため、コロombo会議終了後、マドラスを訪れた。モニカは彼らをラジャゴパラチャリの家へ案内し、引き合わせている。マドラスはアジア風邪が猛威をふるっており、ラジャゴパラチャリもまだ完全に回復していなかったが、面会を快諾した。話題は過去の日本の戦争犯罪から未来の核廃絶に向けて日本が果たすべき役割、古代のアジア諸民族の交流史やアジアの宗教にまで及び、沖縄の核基地化、日本再軍備問題に関する意見交換も行われた⁽⁵⁸⁾。ラジャゴパラチャリの訪日は結局実現せず、8月の原水爆世界大会にはカカ・カレルカーらが参加している⁽⁵⁹⁾。

コロombo会議と前後して、モニカはアーンドラ州ビジャヤワダへ出かけ、インド全国女性連合会(National Federation of Indian Women; NFIW)の第二回大会に出席し、核兵器・核実験の危険を訴えている。この大会にはソ連、ルーマニア、チェコからの代表もまじえ、インド各地から353人の代表が集まった。インド女性の間からも、核実験の継続は流産や死産、生まれてくる子どもたちへの悪影響を引き起こし、女性たちが最もひどい犠牲者に

⁽⁵⁷⁾ 武藤一羊「コロombo会議活動報告」(前掲「国民使節派遣に関する経過報告(6・30)の一部として『初期原水爆禁止運動聞き取りプロジェクト記録集成』所収、512~514頁)。なお、この報告文には、インド国内では5月中旬に第三回世界大会準備会議が発足し、「政界の長老のラジャゴパラチャリ氏はじめ多数の国民会議派議員、ネール首相の姪ラメッシュワリ・ネール女史などが積極的に参加」しており、「コロombo会議ではチャンドラ夫人とゴーシュ夫人が特に世界大会問題に責任を持って活動した」(513頁)とある。さらに世界大会が終わった後の報告では、「インドではアジア連帯委員会が中心となり、五月二五日ニューデリーで開かれた大衆集会を機会にインド国内準備会が発足した。この準備会はきわめて広汎な性格をもち、百名にのぼる国民会議は国派議員が参加した。とくにインド政界の長老であるラジャゴパラチャリ氏の積極的参加の意義は大きく、ネール首相の従妹にあたるラメントリ・ネール夫人が準備会の会長になったことも、特筆すべき出来事であった。またガンジー主義者の大同団結した巨大な組織であるサルヴォダーヤが、東京大会支持をきめ、大統領候補であるカカ・カレルカー氏を代表にえらんだことも、世界大会を支持するインドの広汎な動きを示す事実であった」(前掲「第四回全国理事会報告並資料 1957・10・10 原水爆禁止日本協議会」『初期原水爆禁止運動聞き取りプロジェクト記録集成』493頁)と報告されている。

⁽⁵⁸⁾ *Rajaji*, op.cit., pp.60-65.

⁽⁵⁹⁾ 前掲『初期原水爆禁止運動聞き取りプロジェクト記録集成』220頁

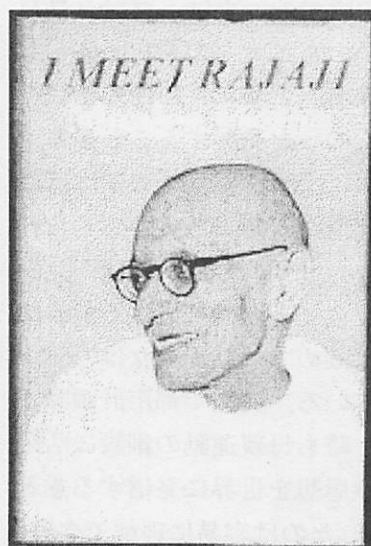
されるとして、核実験に反対する声があがっている⁽⁶⁰⁾。この頃のモニカは、ラジャゴパラチャリの反核・平和思想に強く共感し、AIPC や NFIW といったインドの平和団体・女性団体がラジャゴパラチャの提案する方向へと進み、それが WPC や WIDF の国際運動を力づけ、国際的な運動がソ連や英米政府の政策に変更を迫るものへと発展することを希望していた。そして AIPC の全インド平和会議や WPC のコロombo会議の熱気、『人類は抗議する』に対する好意的反響などによって、その希望は十分に実現が可能であると感じられていたであろう。

が、その実現は容易でなかった。コロombo会議の頃、モニカは『人類は抗議する』の反響に励まされ、ラジャゴパラチャリの伝記を書く決心をすでに固めていた。彼女は、第二次大戦下に軍需工場で働く女性の群像を描いた小説を出版している。英国で都市計画家として働いていた時も、また朝鮮戦争時代の平和運動に関与した時も母親運動の創設に活躍した時も、彼女は常に書いてきた。ラジャゴパラチャリの反核思想を世界に発信する意義を確信したモニカが、その伝記の執筆に使命を感じ意欲を燃やしたのは容易に理解できる。書き上がるまではマドラスに留まらねばならない。他方、モニカの執筆は作家としての自律的活動であり、WPC の任務だったわけではない。モニカは英国平和委員会の一員として WPC 執行局に送り出されているという形であり、AIPC にとってのモニカは、WPC 執行局や英国平和委員会からやってきた「外国人ゲスト」以外の何者でもない。『人類は抗議する』は AIPC から刊行されたが、それは AIPC ではなくモニカの企画と労力の成果であり、AIPC が依頼したわけではない。このようなモニカの立場と活動については、WPC 執行局・AIPC・英国平和委員会とモニカの四者間の調整と承認が必要であった。コロombo会議の間にそれはいちおうゴードン・シャッフアーをふくむ関係者の間で話し合われ、モニカが WPC 執行局に引き続き留まることになった⁽⁶¹⁾。とはいえ、英国平和委員会と AIPC がモニカのマドラス滞在やラジャゴパラチャリとの関係を積極的に望んだわけではない。インドからの反核思想の発信によって国際平和運動に貢献するというモニカの願いは、WPC に関する限り、WPC 執行局 AIPC・英国平和委員会の中でその組織を掌握する共産党員たちとの緊張関係を内包しており、危ういバランスの上にあったと言わざるをえない。

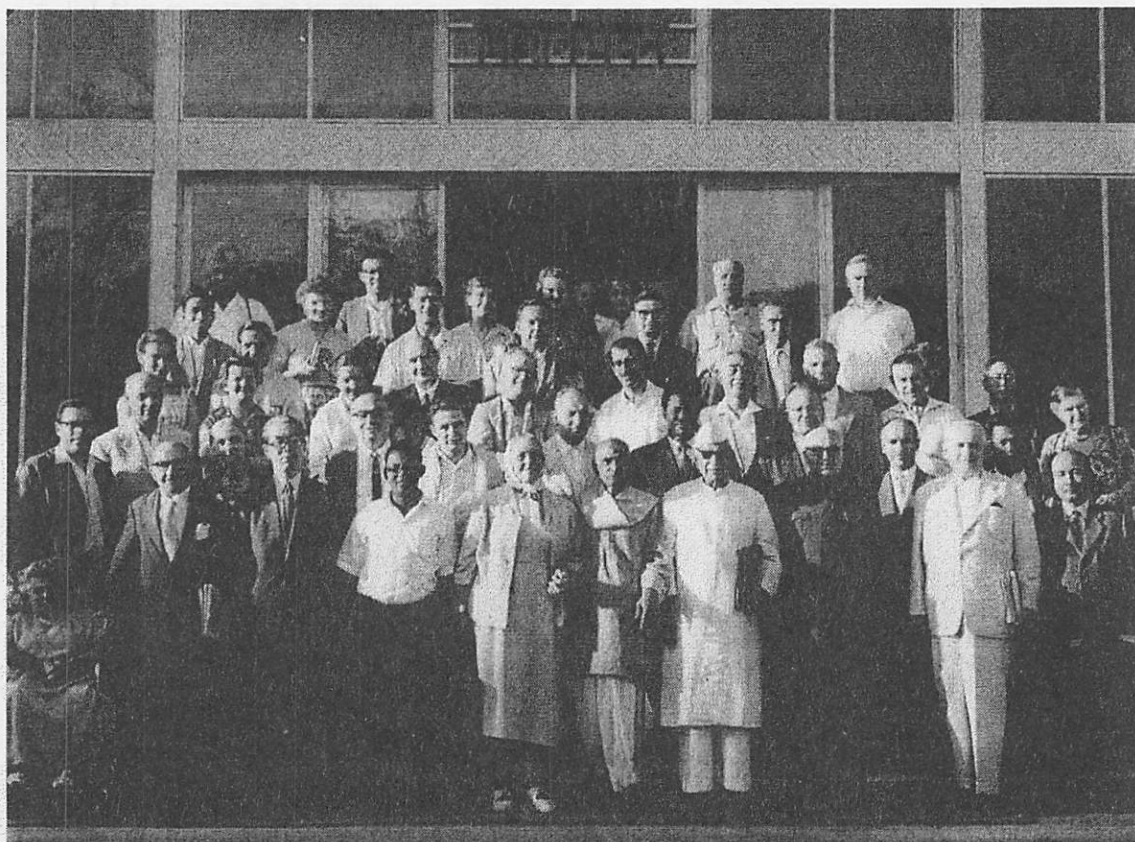
⁽⁶⁰⁾ 'CONFERENCE OF NATIONAL FEDERATION', *New Age*, June 23, 1957, p.16.

インド全国女性連合会は、1954年6月にカルカッタに18州から830人の代表が出席した全国女性会議で創立された。共産党系の女性大衆団体であり、WIDFに参加していた。

⁽⁶¹⁾ モニカ・フェルトンのマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、1958年7月2日



I MEET RAJAJI(ラジャジと会う) マクミラン、1962年



1958年3月のWPCニューデリー会議
国際会議場ヴィガン・バーワンの前にてWPC支部執行局とスタッフの集合写真
モニカ・フェルトンは後列左から二番目(?)

第2節 WPCからの離脱

1957年の世界には、従来の国際平和運動で唯一といってよい大きな役割を果たしてきたWPCとは別に、新しい平和運動が登場しつつあった。ソ連政府が57年6月に核軍縮をめぐる英米との交渉のネックになっていた核監視システム導入に関する同意を表明する⁽⁶²⁾一方、英国によるクリスマス島実験の強行、米国による戦術核配備計画が進むといった状況を背景に、核廃絶への「一方的行動」を求める新しい運動が世界各地で始まりつつあった。英国のCND(Campaign for Nuclear Disarmament、核軍縮キャンペーン)などの運動がそれである⁽⁶³⁾。ラジャゴパラチャリはこのような、WPCの枠組みを超える新しい平和運動の中で注目され、支持を得た。遅くとも57年秋までにE.P.トムソンとのつながりが生まれ、E.P.トムソンらが刊行する『ニュー・リーズナー』は、58年春にラジャゴパラチャリの「積極的平和共存」という論説を載せている⁽⁶⁴⁾。

モニカ・フェルトンは57年秋にはホテル住まいをやめ、貸家を借りている。ラジャゴパラチャリとの対話は続き、話題は新しい平和運動の状況、英国共産党のハンガリー事件に対する評価、E.P.トムソンの離党、百花運動を終焉させた中国の不寛容といったスターリニズムの諸動向にも及んでいた⁽⁶⁵⁾。ソ連がスプートニクを打ち上げた後、ラジャゴパラチャリはマドラス州知事時代にフルシチョフと会ったという話をする。「大国が一方的核兵器廃止を行えば他に続く」と説得しようとしたが、フルシチョフはそれが弱さの表明と受け取られると危惧していた。しかし今やソ連が核実験を中止しても誰も弱さの表出とは思わないだろう、とラジャゴパラチャリは語った。モニカが彼に、フルシチョフへ手紙を書いてそう言うように勧めると、彼はそんなことは何の役にたつまい、ソ連は聞き入れまいと否定的で、モニカが重ねて勧めてもまるで論外という調子であった。が、まもなく彼は実際にフルシチョフに手紙を出し、モニカを驚かせた⁽⁶⁶⁾。

ラジャゴパラチャリは、57年11月9日付けでフルシチョフに最初の手紙を送っている。マドラスでの会談の回想から始まり、今こそソ連政府が一方的核兵器使用中止を宣言する好機だと呼びかける手紙であった。フルシチョフは12月3日付けで手紙を返し、12月10

⁽⁶²⁾ 小山謙二「包括的核実験禁止条約（CTBT）と検証制度について（1）－核爆発実験禁止条約の生い立ち、部分的核実験禁止条約（PTBT）の発効－」4頁

http://www.cpdnp.jp/pdf/CTBT_Koyama.pdf

⁽⁶³⁾ 英国労働党は57年4月の会議で政府に核実験停止を求める決議を出したが、「一方的軍縮か、双務的軍縮か」は党内で大きな争点となった。同年10月の党会議に一方的核軍縮政策を推進する動議が提出されると、左派であるはずのアナイリン・ベヴァンが強く反対して「そんな決議をあげれば外務大臣を裸で会議室へ送ることになる」と発言し、党内の左派たちにショックを与えた。J.B.プリーストリは一方的核軍縮の立場から11月2日の『ニュー・ステーツマン』紙上でベヴァンを批判する論陣を張り、同月末にはキャノン・ジョン・コリンズ（司祭）、キングスレー・マーチン（『ニュー・ステーツマン』編集者）ら一方的核軍縮に賛同する仲間が集い、そこからCNDが形成されてゆく。58年2月に開かれたCND創立集会には5000人が集まった。パートランド・ラッセルやマイケル・フートもCNDに参加した。CND創立過程については、Gerard J. De Groot, *The Bomb: A Life*, Harvard University Press, p.229.などを参照。

⁽⁶⁴⁾ C.Rajagopalachari, 'Positive Co-existence', *New Reasoner*, Spring 1958 number 4.

⁽⁶⁵⁾ *Rajaji*, op.cit., p.112.

⁽⁶⁶⁾ *Rajaji*, ibid., pp.106-107, pp.138-141.

日にそれを受け取ったラジャゴパラチャリがその日のうちに第二信を送り、フルシチョフの第二信は12月31日付けで送られた。フルシチョフの手紙はラジャゴパラチャリの提言への感謝、ソ連の核廃絶に向けた努力とともに、「一方的」核廃棄によって相手が後に続くという見解は楽観的すぎるとして米国による欧州核配備や核軍拡の実情を指摘し、ソ連が「一方的」核廃棄を宣言できない理由を縷々説明するもので、ラジャゴパラチャリは「一方的」行動こそが唯一の道であると重ねて説くという書簡の往復であった。それでもラジャゴパラチャリは、そのときには3年前とは逆に、平和政策においてもはや米国こそ蹟きの石であり、ソ連には希望があると感じていた⁽⁶⁷⁾。

WPCは57年6月のコロンボに続き、翌58年年3月22～25日にニューデリーで執行局会議を開き、五大陸30か国から70人(執行局員は36人)が集まった。モニカも執行局の一員として出席している。日本の原水爆禁止運動に対する後援、アジア・アフリカの民族解放運動と平和運動のリンク、そして1958年7月16日から22日にストックホルムにおいて平和勢力を広く結集して軍縮国際協力会議を開くという方針が重大議案であった⁽⁶⁸⁾。AIPCは世界各地からのゲストを迎えて数々の歓迎企画を用意し、モニカもまたインド文学アカデミーによる作家のレセプションやインド女性協会が執行局の女性たちを招待した晩餐会などに招かれた⁽⁶⁹⁾。幅広い人々を集める構想のストックホルム会議の準備討議や、セイロンのテージャ・グナワルダナやアルゼンチンのマリア・ロサ・オリヴェルのような親しい友人たちとの再会はモニカにとって元気づけられることだったに違いない。

だが、モニカが後にオリヴェルに書いた手紙によると、デリー会議の初日に、アイヴァー・モンターギュはモニカを部屋の隅に連れて行って、一方的核実験中止などをいうのは米国を有利にすることだと説得しようとした⁽⁷⁰⁾。モンターギュはモニカがラジャゴパラチャリの一方的核廃棄論に肩入れするのを苦々しく思っていたわけである。フルシチョフはラジャゴパラチャリへの書簡において一方的実験中止が米英を有利にすることへの危惧を表明していたが、モンターギュの主張はそれと似通ったものだっただろう。

しかし、WPCの中心メンバーの間で「一方的行動」が不人気だったとしても、デリー会議の頃にはすでに「一方的行動」を支持する世論は高まっていた。特に英国では、58年2月には「一方的核軍縮」を追求するCNDが創立集会を開き、5000人が集まり、3月初旬には労働党と英国労働組合会議が、英国はソ連の提案を容れて核実験中止の国際協定を結ぶべきであり、英国政府は核実験を「一方的に」即時中止すべきだという共同声明を発表

⁽⁶⁷⁾ *The Voice of the Uninvolved*, op.cit., pp.117-128.

⁽⁶⁸⁾ *Bulletin of the world Council of Peace (Special Issue, New Delhi Session of the Bureau of the World Council of Peace 22-25 MARCH 1958 April 15, 1958)*, April 15, 1958.

⁽⁶⁹⁾ インド文学アカデミーのレセプションでは、教育省や外務省職員、30人のインド人作家たちがモニカの他、アレクセイ・スルコフ(ソ連)、アルフレド・ヴァレラ(アルゼンチン)やホルヘ・サラエマ(コロンビア)、マリア・ロサ・オリヴェル(アルゼンチン)、など執行局メンバーの作家たちをもてなした。インド女性協会の晩餐会はWPC執行局女性メンバーを対象にしたもので、モニカ・フェルトンはマリア・ロサ・オリヴェル、テージャ・グナワルダナ、そしてジェシー・ストリート(オーストラリア)、イサベル・ブルーム(ベルギー)、コットン夫人、イーブ・ファルジュ夫人(フランス)らとともに招待された。

⁽⁷⁰⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙 6月2日

している⁽⁷¹⁾。また4月初旬にはロンドンから武器庫のあるアルダーマストーンまで数千人規模の反核行進が行われた。その主催団体である行動委員会は、ラジャゴパラチャリが前年にしばしば寄稿した『ピース・ニュース』の編集者ヒュー・ブロックである。

そして、ソ連政府はニューデリー会議からまもない3月31日、「一方的核実験中止」の決定を公表し、他の国々が後に続くよう呼びかけたのである。5月に米国が核実験を再開すると、直後の5月9日、ソ連は米国からの核実験禁止を管理する技術問題を検討するための専門家会議に関する提案に同意し(57年6月にも国際管理に協力することは表明していた)、英米の実験中止を重ねて呼びかけた。ラジャゴパラチャリがフルシチョフに対して提言した「一方的中止」を、ソ連政府は実行に移したわけである。かくして58年夏に専門家会議が開催され、核実験中止の合意を監視する技術的な実行可能性に関する合意に到達した⁽⁷²⁾。その後には紆余曲折がありながらも、1962年の部分的核実験停止条約にいたる核軍縮への道はこのようにして拓かれた。

ソ連の「一方的核実験中止」宣言の後、英国平和委員会も後追的に「一方的行動」を支持するようになる。WPCのプレチン⁽⁷³⁾でその変化に気づいたモニカは、それを喜劇とも悲劇とも感じたが、希望はすてなかった。6月2日付けのオリヴェルへの手紙には、WPCのストックホルム軍縮会議への出席を説得する手紙をラジャゴパラチャリに送るよう頼んでいる。ラジャゴパラチャリは、コロンボ会議と同様、モニカが出席して発言すれば自分の代理になると考えていた。が、モニカはラジャゴパラチャリが「共産党員たちのための飾り」⁽⁷⁴⁾ではなく、WPCを真に変えうる存在だと考え、親友に応援を頼んだわけである。それだけモニカはWPCとそこに集う平和活動家たちに対する希望を保持していたということもできる。彼女はオリヴェルへの同じ手紙に「面倒なのは、運動内部で向こう側は団結していて、私たちの側は個人の集まりでしかないから重みを持ってないことね」と悩みを語りつつ、ハイデラバードやバンガロールで平和会議を始める計画やラジャゴパラチャリの新しい論集を出す計画について楽しげに書き綴っている。

だが、事態はモニカとオリヴェルの予想よりはるかに早く暗転した。6月中、AIPC事務局はストックホルム会議の準備集会を各地で企画したが、マドラスでの会議にモニカは招かれず、しかも問い合わせると、インド代表団のストックホルム出発直前になってようやく「AIPCは貴方の会議出席についてWPCから指示を受けなかった」と伝えてきた。WPCに問うと、モニカの旅行を管轄するのは英国平和委員会だと、遅い返電が届いた。モニカとラジャゴパラチャリは、WPC・AIPC・英国平和委員会の組織を実質的に動かしている人々にモニカを排除する意向が働いていると結論せざるをえなかった。「明白な結論は、私がこの国で平和運動のために行った、あるいは行おうとしたことはすべて無価値だとみなされていたということです。AIPCだけでなく、もっと高いレベルでも。これが私を遠ざけ

⁽⁷¹⁾ 'Labour Calls a Halt to H Bombs: Joint Action by Labour Party and Trades Union, *Bulletin of the World Peace of Council*, April 1, 1958, p.3, p.7.

⁽⁷²⁾ Walter C. Clemens and Franklyn Griffiths, *THE SOVIET POSITION ON ARMS CONTROL AND DISARMAMENT Negotiations and Propaganda, 1954-196*, Center for International Studies, Massachusetts Institute of Technology, 1965, p54.

⁽⁷³⁾ 'BRITISH PEACE COMMITTEE'S NATIONAL CONFERENCE ON MAY 1', *Bulletin of the World Peace of Council*, Jun 2, 1958, p.2.

⁽⁷⁴⁾ 註(70)に同じ。

ておくためばかりか、私を運動から排除する策略だということも明白になりました」⁽⁷⁵⁾。

この処遇でモニカはひどく心を傷つけられたが、それとは別に WPC での活動の限界を感じていたのも事実であった。というのは、ハンガリー事件から一年半余りの 58 年 6 月 16 日、ナジ・イムレが秘密裁判によって死刑を執行され、世界に報道されたのである。モニカは怒りがこみあげて、数日間はそれ以外のことが何も考えられなくなった⁽⁷⁶⁾。

バートランド・ラッセルはそれからまもない 7 月 9 日、自分が WPC と一切無関係だと声明した。『ニューヨークタイムズ』は「ラッセルが赤を非難—英国人、ナジ処刑のため WPC との絆を切る」と見出しをつけて、ストックホルム会議には「共産主義の色」があるので出席しないというラッセルの言葉を記事にしている⁽⁷⁷⁾。CND の執行委員会はラッセルを支持した⁽⁷⁸⁾。

モニカは WPC を離れる決心をし、ラジャゴパラチャリの助言も得て、会議欠席にいたる経過を礼儀正しく英国平和委員会と AIPC 宛てに手紙に書き、友好的な姿勢を崩さずに WPC との関係を終わらせた。旅行手配ができないためストックホルムへ行けないのが非常に残念であること、が、長くインド住まいのため英国平和委員会を離れるのが適切であること、AIPC が外国人をインド代表団の中に入れるのはおかしいと感じたのは当然だったかもしれないこと。そうしたことを書き送り、モニカは WPC から離れたのである⁽⁷⁹⁾。

第 3 節 『人類は抗議する』増補版の編集

CND の代表は誰一人ストックホルム軍縮会議に参加しなかった。が、CND の創立者の一人で初代議長のジョン・コリンズは、他の問題で意見が対立しようとして、平和を望む人々が平和の達成方法を見つけるために集まって協議する会議が行われるのは良いことだとし、そのような提案を行った WPC に感謝するとして、WPC に友好的なメッセージを送っている。その大意は次のとおりである。

核兵器の製造と貯蔵は、戦争兵器や「有利な交渉材料 (bargaining counter)」のいずれであっても、邪悪であり、正気を失っている。今生きている者たちの生命とこれから生まれてくる世代の命をも脅かす核兵器の利用は、それを考えることだけでもキリストの教えに相容れず、まっとうで人間的な生命観を侵犯する。CND は、他国が核軍縮に賛成しなくとも一方的に行動するよう説得しようとしている。CND の政策は核兵器を一刻も早く除去することである。ストックホルム会議が、全核保有国の一方的行動による核兵器廃棄と、非核保有国が核を保有すべきでないということを合意するように願う。共産主義者もそう

⁽⁷⁵⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、7 月 11 日

⁽⁷⁶⁾ *Rajaji*, op.cit., p.149.

⁽⁷⁷⁾ 'RUSSELL SCORES REDS: Briton Cuts Peace Council Tie Because of Nagy Execution', *New York Times* (1923-Current file); Jul 10, 1958; ProQuest Historical Newspapers: The New York Times (1851-2010) with Index (1851-1993)

⁽⁷⁸⁾ Lawrence S. Wittner, *The Struggle Against the Bomb, Volume two: Resisting the Bomb, A History of the World Disarmament Movement, 1954-1972*, Stanford University Press, p93.

⁽⁷⁹⁾ 註(75)に同じ。

でない人も、クリスチャンもそうでない人も、平和主義者もそうでない人も、平和を願う人が皆、核兵器除去のために為しうるすべてを為すことに合意し、世界の国々からすべての核兵器をなくそう。⁽⁸⁰⁾

コリンズは、メッセージの文中の「有利な交渉材料 (bargaining counter)」という語にかっこをつけて強調している。ラジャゴパラチャリは57年春に『ニュー・ステーツマン』紙に核を「有利な交渉材料」と扱うべきでない、という手紙を送ったが、その後、同紙は「一方的核軍縮」の言論をリードする役割を果たし、CNDの結成に大きな役割を果たしていた。コリンズが「『有利な交渉材料』としての核も邪悪であると言明したのは、そのような英国内の議論をふまえ、「一方的核軍縮」を追求する立場を強調したということであろう。「一方的行動」を呼びかけ続けたラジャゴパラチャリの反核思想は、WPCよりもむしろ、CNDのような英国の新しい平和運動の側から歓迎され、活かされたのである。

WPCはむろん「ソ連政府の一方的核実験停止」を支持したが、それ以上ではなかった。コリンズのメッセージが掲載されたのと同じブレチンに、英国平和委員会の指導的メンバーで、WPC副会長であったJ.D.バーナルの論文「軍縮議論の分析」が発表されているが、それはもっぱら首脳会談を開催する必要性を論じる内容である⁽⁸¹⁾。モニカはこれを読んだのであろう。58年10月20日付けの手紙でオリヴェルにこう書いている。「WPCに関しては、英国平和委員会がその指導的メンバーたちの党路線に追随して水爆反対キャンペーンを何もしようとしない今、私があのように扱われていなかったとしても、これ以上どのように私が中に留まっていることができたか分かりません。先日、英国平和委員会からニュースの印刷物を入手しました。そこには首脳会談の要求以外何もありません」と。「英国の一方的核廃棄が唯一の正気の政策だと教条主義者たちに確信させるために、これ以上は時間を浪費すべきではない」、「私たちは頑迷な相手に自分の頭をぶつけているよりも、書く仕事をしている方がはるかに良いことだけは確か」⁽⁸²⁾だとモニカは感じていた。

かくしてモニカはラジャゴパラチャリの伝記執筆と『人類は抗議する』の増補版の編集に熱中した。翌59年3月15日付けのオリヴェルへの手紙には、モニカの編集者としての前書きの他は、編集はほぼ終わったと書かれている。出版元はインド平和委員会ではなく、57年に設立されたインド政府系の出版社ナショナル・ブック・トラストに決まっていた。当時モニカが考えていた増補版の題名は『The Tree of Knowledge (知恵の樹)』であった⁽⁸³⁾。54年の『ニューヨークタイムズ』に宛てた手紙の文章から採った言葉だろう。ラジャゴパラチャリは、原爆を旧約聖書の創世記に登場する「知恵の樹」の禁断の果実にたとえ、ヒロシマへの原爆投下によって樂園が失われたとし、他者の行動にかわりなく一方的に原爆を廃棄して恐怖のない世界をつくるのが、日本への原爆によって1945年8月に失われ

⁽⁸⁰⁾ 'Message from Canon L. John COLLINS, Chancellor of St. Paul's Cathedral, Chairman of the Campaign for Nuclear Disarmament', *Bulletin of the World Peace of Council*, August 15, 1958, p.9.

⁽⁸¹⁾ 'Professor J. D. BERNAL, F.R.S. (Great Britain), Vice-President of the World Council of Peace, ANALYSIS OF DISARMAMENT DISCUSSIONS', *Ibid.*, p.17.

⁽⁸²⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、1958年10月20日

⁽⁸³⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、1959年3月15日

た楽園を回復する唯一の道だと書いた⁽⁸⁴⁾。確かに、「知恵の樹」という言葉には、ラジャゴパラチャリの一方的核兵器廃絶論が集約的に表現されているように思われる。

モニカは『人類は抗議する』増補版の編集に力を尽くし、その仕事に大きな価値を感じていた。オリヴェルへの手紙に、彼女はこう書いている。「ラジャジは、これは彼の本じゃなくて私の本だと主張しています。もちろんこれはナンセンス。私に言えるのは、この新しい資料は、読めばラジャジの思想ばかりでなく、核実験中止に関する交渉の紆余曲折が見てとれる素晴らしい作品になっているの。全体を読んで見ると、偉大な歴史的な重要性をもつコレクションだと思えるわ」⁽⁸⁵⁾。

増補版には、ジャゴパラチャリのスピーチや『スワラジャ』に発表した論説や手紙など約100篇が集められた。約三分の一は『人類は抗議する』からの再録で、他の三分の二が57年5月から59年3月に書かれている。本章の第一節に言及したWPCコロombo会議に送られたメッセージや第二節に取り上げたフルシチョフとの往復書簡も収録されている。

実際にこの本がナショナル・ブック・トラストから出版されるのは、それから10か月も先の60年1月のことであり、その間にさまざまな調整があったようだ。本の表題は、『The Voice of the Uninvolved (関与しない者の声)』となっている。また、モニカが書く予定だったはずの編集者の前書きがないどころか、モニカは編集者としての名前を全く出していない。

『The Voice of the Uninvolved』という題名は、モニカが3月15日にオリヴェルへ手紙を書いた後にラジャゴパラチャリが発表した新しい文章から採ったものだろう。59年3月16日付けで彼は再び『ニューヨークタイムズ』に投稿し、米国が太平洋の核実験を中止しないことに抗議し、東西冷戦にくみしない人々が放射能汚染を強いられて冷戦の囚人にされている現状を訴えた⁽⁸⁶⁾。続いて3月21日の『スワラジャ』誌に「To the Uninvolved」を寄せ、米国が世界的世論・科学者の意見・冷戦にくみしない諸国、そして人間の良識に反して核実験を続行していることを批判している⁽⁸⁷⁾。これらから考えると「the uninvolved (関与しない者)」の意味は、日本語に直訳すると分かりにくい、「冷戦政治や核実験に加担しない(したくない)にもかかわらず、核の脅威にさらされている人々」を指しているということであろう。

モニカが編集者として名前を出さなかった経緯の詳細はまだ分からない。名声を求めて行った仕事でなかったことは間違いない。『人類は抗議する』の編集・出版がWPC-AIPCの間で期待したような反応を得られなかったことで挫折感があり、自分の名を出さず積極的な意味を感じなくなっていたのかもしれない。また、ダライラマのインド亡命、ラジャゴパラチャリによるスワタントラ党の結成、中印戦争の勃発、インド共産党の分裂という1959年3月以後のインド政治の激しい流動の中で、ラジャゴパラチャリとの距離の取り方に慎重になっていたのかもしれない。この本に収録されたラジャゴパラチャリの論説が日付の無い「チベット以後」であることは、何か暗示的であるようにも思われる⁽⁸⁸⁾。

オリヴェルへ宛てた59年10月1日付けの手紙には、モニカがこうした政治流動の中で傷

⁽⁸⁴⁾ 註(15)に同じ。

⁽⁸⁵⁾ 註(83)に同じ。

⁽⁸⁶⁾ 'Formula to Break the Deadlock', *The Voice of the Uninvolved*, op.cit., pp.195-196.

⁽⁸⁷⁾ Ibid., pp.196-197.

⁽⁸⁸⁾ 'After Tibet', *ibid.*, pp.197-198.

つきもし、困惑もしつつ、執筆を続けることで姿勢を前向きに保っていたことが窺われる。手紙の一説にはこう書かれている。「あなたがラジャゴパラチャリが新しい政党を開始したことについて何か読んだかどうかわかりません。スワタントラ党というのです。それは、一種の保守的な反対であり、過去数か月のあいだ、大きな動揺をひきおこしています。言うまでもなく、私は関与していないわ。それどころか。実際、 коммуニストが私を危険な右翼の友人だとみなしている一方、ラジャジの今の仲間たちは私を邪悪な左派の同行者だとみなしている。それに気がついて、傷ついたわ！ でも、本をおえることは、私が自分のユーモア感覚を快復するのに役立つし、孤立した独立のすばらしい頂点にいるというセンセーションを楽しむ助けになるわね」⁽⁸⁹⁾。

かくして『関与しない者の声』は1960年1月、モニカの関与が何も表明されない形で出版されたのである。

(終わりに)

本稿は、モニカ・フェルトンの1956年末から59年末までの足跡をたどり、初期の国際的な原水爆禁止運動への貢献を明らかにした。55年の世界母親大会で長崎の山口美代子に出会い、翌56年に来日して第二回原水爆禁止世界大会に出席したモニカは、核兵器が人類にもたらす災禍を胸に刻み、ガンジー主義の伝統を継ぐ平和主義者であるラジャゴパラチャリの反核思想に感銘を受け、彼の論説や書簡などを編集し、世界に発信した。

56年3月に書かれた『あたりまえの女たち』の序文に、モニカはジュネーブ四巨頭会談によって平和と軍縮へ向かう新しい時代への希望が生まれており、軍拡を推進する諸国権力者がジュネーブ精神を圧殺し、人類の未来を破壊と恐怖へ導こうとしているが、世界中の人々が「来るべき世代のための幸福の生活」を実現するために働き闘っている、と書いた。しかし、56年秋のスエズ危機とハンガリー事件は、もはや諸国間のジュネーブ精神は完全に消失し、核戦争の危険をはらむ東西冷戦が再び熾烈化しつつあることを表面化させた。この新しい危機の時代にモニカはインドに移り住んだ。東西のいずれか一方に身を寄せるのではなく、平和五原則を掲げて非同盟諸国の連帯運動の旗手となっていたインドは、それだけでもモニカをひきつけるところがあったであろう。

ラジャゴパラチャリとの出会いはモニカの人生に大きな影響を与えることになった。モニカは、マルクス主義者であり社会主義者であることを自認してきたが、英国労働党からはつとに除名されている。また、西側が「ソ連のフロント組織」とレッテルを貼って排撃するWIDFやWIPCの舞台で活動し、各国の共産党員たちと親しく協力しあうことに躊躇はなかったが、だからといってスターリニズムにくみしようとは考えなかった。ラジャゴパラチャリの「一方的」核廃絶論は人類普遍の立場から核兵器の廃絶を提唱する平和思想であり、モニカは、人類の滅亡へといたりかねない核軍拡時代の危機から脱出し「来るべき世代のための幸福の生活」を守りうる生命の思想をここに見つけたとえいえるだろう。

そしてラジャゴパラチャリの「一方的」核廃絶論は、50年代後半に登場する新しい反核運動の波に影響を与えた。本稿に示したとおり、「一方的」核実験中止を求める運動とし

⁽⁸⁹⁾ モニカ・フェルトンからマリア・ロサ・オリヴェルへの手紙、1959年10月1日

て英国にCNDが結成されたのは57年末であったが、同年春に『ニュー・ステーツマン』紙上にラジャゴパラチャリの「一方的」反核を訴える手紙が掲載されている。モニカが当初望んだのはラジャゴパラチャリをWPCの国際舞台に連れ出し、彼女自身が感銘を受けたラジャゴパラチャリの反核思想によって国際平和運動を力づけることであった。その願いはWPCの枠内では実現できなかったが、モニカはラジャゴパラチャリの思想を世界に伝える情熱を失わなかった。彼女は『人類は抗議する』増補版の編集が一段落したとき、親友であるマリア・ロサ・オリヴェルへの私信の中で、「ラジャジの思想ばかりでなく、核実験中止に関する交渉の紆余曲折が見てとれる素晴らしい作品」であり、「全体を読んでも見ると、偉大な歴史的な重要性をもつコレクションになっている」と胸をはっている。静かにWIDFやWPCの国際舞台から退場したモニカは、このようにしてインドのマドラスからラジャゴパラチャリの反核思想を世界に発信した。核廃絶に向けて力を合わせようというローザンヌや長崎の約束を、モニカはモニカ自身の方法で果たしたわけである。

フリードリヒ・カール・カウル¹著

私は真実を述べた リリー・ヴェヒター

—平和のための闘いにおけるドイツ女性の模範

翻訳 木戸衛一

リリー・ヴェヒターとの出会い

「カウル博士、彼女を駅に迎えに行く時間です。列車は 13 時 12 分着だそうです。」イギリスの老練弁護士〔デニス・ノウエル・〕プリットが気にして私を見た。早朝以来私たち二人は、フランクフルトのホテルの小さな部屋で坐っていた。もう一度（最後に）、明日 1 月 10 日に始まる米高等法院での審理のために、初審理の記録と米検事総長の書面を仕上げためだ。

「私たちがすることも、もうないですね」と私はプリット氏に同意し、「行きましょう」。数分で私たちは、駅前広場に流れる静かな横道を歩いていた。駅そのものに着くまでは、ずっと時間がかかった。歩行者のことなどまるで気にせず、トラック（ほとんどどれも米国の識別番号をつけていた）が広場を走り、スピードも緩めずに交差点のカーブを横切った。

統計的に最近はっきりしたのだが、ドイツで米国占領地区が最悪の交通事故件数を記録している。米国人は西独で、故国以上にくつろいでいる。

プリット氏は、横柄に両手をズボンのポケットに突っ込み、ガムをクチャクチャやりながら、駅の入り口でウロウロだらしのない態度をしている制服の米国人を見ていた。「カウル博士、あなたはドイツ人で私は英国人ですが、私たちは同じ境遇にいる感じがします」と彼は私を覗き込んだ。

彼は笑いながら、「つまり、私たちの国はいずれも米国人に占領されているのです！」と言った。そして、英国に駐留している米軍の態度がどうか、それが英国住民にいかにか深い嫌悪、憎悪を引き起こしているか語り始めた。憎悪というのは、平の米兵ではなく、米帝国主義に自分たちの土地に軍事基地を維持するのを許す英国政府に対してだ。そして、世界を新しい戦争の危機にさらす帝国主義そのものに対してだ。

¹ フリードリヒ・カール・カウル (1906～1981)

1932 “Die Entwicklung der Freiheitsstrafe in Brandenburg” で学位取得

1933 共産主義者であることと、母親がユダヤ人であることから、司法職から追放

1935 国家秘密警察により逮捕、Lichtenburg・Dachau 強制収容所へ

釈放後コロンビアへ→1941/42 ニカラグアで抑留、米国へ

1945 ドイツ帰国、東ベルリンへ

共産党、社会主義統一党。ベルリン放送局法律顧問、1948-西ベルリンで弁護士活動

共産党員への迫害、米軍の犯罪、アウシュヴィッツ裁判などナチス犯罪の追及

1972-1981

東独テレビで「カウル教授に聞いてください」 (Fragen Sie Professor Kaul) シリーズ

プリット氏の人生の活動は、まさにこの危機と闘うことに捧げられてきた。1933年、ロンドンで開かれた、国会放火事件解明のための対抗法廷の裁判長を務め、ナチスが自ら、ドイツの進歩勢力を壊滅させる安っぽくも犯罪的な口実をつくるため、ヴァロットの建築物に放火したということ立証した。故国・英国だろうと、インド、オーストラリアだろうと、プリットは、帝国主義の犯罪で脅かされた権利を守るため最前線に立った。そうした理由から、彼がドイツ人女性リリー・ヴェヒターを米高等法院で弁護することになったのだ。

だが今はもう、あれこれ考えを巡らせる時間がない。駅の南側には、封鎖線の前で人垣がせき止められている。ガタガタと急行列車が、どんよりとした気候ならもっと暗い感じがする中央駅の駅舎に入ってきた。人垣がますます増え、それは身内や友人を出迎えようと待っている人の数をずっと越えている。

「何なのかしら、ダーリン？」と金髪の女性が米国人のボーイフレンドに尋ねている。「多分また映画スターが来たんじゃない？」とは、ウォール街の英雄の面倒くさそうな答え。

だが、群衆に多くの勤労者がいたのだから、彼は勘違いをしていると気づくべきだった。西独では日常茶飯事になっているようなコマーシャルに踊らされてやって来た人々ではないのだ。列車がキキッと停まり、最後の疑念が取り除かれた。たくさんの横断幕が、



リリー・ヴェヒター

待ち受ける人々の頭上に掲げられた。「ドイツは第二の朝鮮になってはならない！」「平和のための闘争！」「リリー・ヴェヒターに自由を！」。そして「リリー・ヴェヒターに自由を！」の叫び声だけが、薄暗い駅舎に響いた。勤労者のフランクフルトが、警察のテロにもかかわらず、この時刻フランクフルト入りしたリリー・ヴェヒターに歓迎の挨拶を伝えたのだ。

群衆は、上司の指示に明らかに不承不承従っている警官によって押しのけられなかった。彼らはホテルまでリリー・ヴェヒターに同行した。私たちプリット

氏と私一は、ゆっくり人の流れについて行った。ただ、リリー・ヴェヒターがもう一度窓から姿を見せるだろうと期待してホテルの前にとどまっている人々をかき分けて、ホテルの入り口に行くのは一苦労だった。やっとのことで私たちは、ホテル「ハンザ」の質素な応接間でリリー・ヴェヒターに対面した。

「あなた方が明日米控訴審で私を弁護して下さるのですね？」と、彼女は飾り気なく私たちと握手した。ちょっと考えて彼女は「弁護というのは適切な表現でないかもしれないですね」と続けた。「私は罪を犯したわけではないですもの。あなた方は、米国が朝鮮で犯した犯罪を告発する私を手助けしてくれる、と言った方がいいかもしれないですね。」

「そのとおりです、ヴェヒターさん。この種の裁判では、いわゆる被告が原告になるのです」と私は答えた。それから私は、リリー・ヴェヒターをゆっくりと観察し、彼女の人柄がある程度知ることができた。私に相對して坐っている女性は物静かで、世間の注目的になっている人物を思い上がった態度に迫りやがちなルーティンなどない。この時事情を知らずに部屋に入ったら、物静かさを保った母親のような女性と、才気あふれ

る横顔の初老の男性との話は、母親が呼んだ医者に、子どもの病気に効く手立てを報告しているのだと思ったに違いない。

少女時代、そして結婚

リリー・ヴェヒターは、19世紀から20世紀に移る直前、カールスルーエに生まれた。その頃カールスルーエは、単調な静けさの一退屈というわけではないが一田舎町だった。ベデカー旅行ガイドでは、バーデンの「典型的田舎」の「王宮所在地」は、一つ星しかつけられていなかった。その外には行政の中心地で、ひどい埃まみれにもかかわらず、無秩序ではなかった。この地方は大土地所有も目立った産業もなく、帝国のその他の地ではますます深まっていた社会的対立も比較的少なかったからである。

バーデン邦がいつもそうだったわけではない。1532年にはここで、「農民戦争」と呼ばれた、搾取された農民たちの支配者に対する革命が起こった。これは、ドイツの平和的・民主的発展にとって、数々の逃したチャンスの最初のものであった。

そしてもう一度1848年に、当地の人民は武器を取った。〔フリードリヒ・〕ヘッカーと〔グスタフ・〕シュトルーフエの民衆軍が、〔ゲオルク・〕ヘアヴェークの自由の歌に鼓舞されて決起したのだ。ここで、命の危険に晒されながら、若き詩人ゲオルク・ビューヒナーが「榴弾王子」の手先から逃れ去った。これは後年の皇帝ヴィルヘルム1世で、彼はバーデン政府の支援要請を受けて、「血と鉄」でもって甚大な損失を出しながら、民衆運動を鎮圧したのであった。平和的な道にドイツを導く第二のチャンスは、こうして潰された。これらの歴史的な事件から残ったのは、未知のブルジョワ的自由への無意識な傾倒である。残ったのは、役人的な無気力の中でぼんやり暮らす首都カールスルーエをもつ「模範邦」という呼び名である。

これがリリー・ヴェヒターの生まれた町だ。小商人だった父は早死にした。母は寡婦年金を頼りに、7歳になるかならないかの娘とフランクフルトに移った。ここで彼女は再婚した。リリー・ヴェヒターは第二の父親を、「義父」とは感じなかった。母にも、再婚と弟の誕生があっても、よそよそしくはならなかった。家庭生活は、非常に珍しく調和的だった。ナチのテロの犠牲に倒れるという3人の運命により、リリー・ヴェヒターは後年、平和のための戦いで最前線に立つ道を歩むことになった。

フランクフルト・アム・マインでリリー・ヴェヒターは学校に通った。まだ半分子どもの頃、彼女は第一次大戦の勃発を経験した。独仏英の帝国主義者が結託して引き起こした殺戮の幕開けだ。社会主義政党的指導者たちは、労働者階級を裏切って、帝国主義的利益の擁護を呼びかけた。1914年8月4日、ドイツ社会民主党（SPD）は議会で、帝国主義戦争を支持し戦時公債に賛成した。フランス・イギリス・ベルギーなどの圧倒的多数の社会主義者も同じことをした。祖国防衛の旗の下、いわゆる労働者の指導者たちは、ドイツの労働者をフランスの労働者に、英仏の労働者をドイツの労働者にけしかけた。しかし、皆が皆ナショナリズムの害毒に汚染されたわけではない。帝国主義戦争反対のデモ、民族殺戮に反対する個人々の英雄的な闘争は、それを立証している。

だが、ドイツ労働者層の大半は、破壊者の言い草に屈服した。彼らが「政党など存在しない。あるのはドイツ人だけだ」という言葉で徴集され、マース川・ソナム川での物量戦で死に、無限のロシアの大草原での厳冬に破滅したのはひとえに、ドイツの大資本家がロ

ンウィヤブリエの鉱山を利用し、東独のユンカーが東方への領地欲を満たしたいからだったことを認識しなかった。

ドイツ労働者が覚醒し始めるのを、リリー・ヴェヒターは、ドイツの中心、ベルリンで体験した。商業学校を卒業した後、彼女は事務員の職に就いた。1917年に社会民主党に入党し、大量殺戮を終わらせるという固い意志をついに固めた軍需産業労働者のスト決議や、1年半後共和国万歳に喝采した。他の数十万人と同様彼女にも、当時も今も SPD の指導層が平和と民主主義を求める大衆の頂点についてのはただ、「運動を手中に保ち」、真に平和的・民主的なドイツの誕生を妨害するためだったことはわからなかった。何年も経って、ようやくリリー・ヴェヒターはそのことに目を開いた。1951年6月30日、彼女を党から除名したと素っ気なく伝える SPD 指導部の手紙を受け取ったからである。

この処分の理由は、手紙に挙げられていなかった。ひょっとしたら、残された恥の意識が、SPD 指導部にそれをさせなかったかもしれない。確かなことは言えないが。

1921年、リリー・ヴェヒターはベルリンを去り、その直後にグスタフ・アドルフ・ヴェヒターと結婚した。1934年まで夫妻は、カールスルーエで暮らした。グスタフ・アドルフ・リリーにとってはいつまでも「グステル」だったがーは、南ドイツの大自動車工場の事務職員だった。給料は悪くなかった。だから若夫婦に金銭面の心配はなかった。

最初リリーは、小さな所帯の面倒を見、間もなく家族が大きくなると期待した。だが、その期待は裏切られた。夫婦に子どもはできなかつた。この事実は、彼女の人となりの鍵かもしれない。自分の子どもを世話したいという希望が満たされなかつたことが、彼女を内なる孤独にし、葛藤に導いたわけではない。母性は彼女の本質に深く根付いていたので、狭い家族の範囲を越え、同胞、人類一般を迫りくる死の危険から守ることが重要となった。

だが、今はまだそこまでいかない。リリー・ヴェヒターはまだ、小さな生活圏に留まっていた。順調な家計の世話をするのでは長期的に満足できなくなつたため、彼女は電気製品工場の顧客の世話・助言を引き受けた。

一見職業上の実践でしかないのに、彼女は助言をし手助けしたくて仕方がなかつた。リリー・ヴェヒターは、窮屈な職場に縛られなかつた。家計が豊かとはいえない人々の生活状況への眼差しは鋭くなり始め、これらの人々にとって炊事製品を買うのは、イエスカノ一かをよく考えてしか解決できない問題となった。

また時間が経ち、リリー・ヴェヒターが結婚10年になった時、ナチスが政権に就いた。当初彼女の生活は、世界観や血統ゆえに「国民の敵」というレッテルを貼られ、剥き出しのナチスのテロに晒されたわけではない何十万人もの人々と変わらなかつた。1934年グステルの仕事のために所帯をバーデン地方ラシュタットに移さざるをえなくなり、生活は以前より困難になった。人口が1万7000人に達するか達しないかの小都市で、全住民がナチのボスによる節度のないスパイ活動の下に置かれていた。いかなる不満の表明、発言もごく丁寧に記録された。支配状況へのほんのちょっとした悪評も、確実にホイベルク強制収容所行きとなった。リリー・ヴェヒターが、ナチスの人種妄想ゆえに、母親の血統から「第一等混血」とされた事実は、ラシュタットでのヴェヒター夫妻の生活を難しくした。ラシュタットのナチスの「行政措置」は始終彼らに、早晚ラシュタットを去るように求めた。後年ナチスのテロがひどくなればなるほど、ラシュタットでリリー・ヴェヒターは危険に晒された。しばしば彼女は、エッピンゲンにいる以前の家政婦のところに身を寄せ、昔か

らの敬慕からあらゆる追跡から守ってもらった。

戦争が勃発し、グステルは召集された。直後、義理の兄弟がゲシュタポに捕えられ、ブーヘンヴァルト強制収容所に送られた。リリー・ヴェヒターは彼にも、1940年初頭テレージェンシュタット強制収容所に連行された義父・母にも会えなくなった。この困難な時期、リリー・ヴェヒターは全く寄る辺がなかった。恐ろしい年月の間グステルは二度だけ、数日の休暇で帰ってきた。「気を確かに。この人殺したちはおしまいだ！」この確信が唯一の慰めとなった。

リリー・ヴェヒターは、軍需工場での勤労を強要された。彼女は唇を固く結んで、旋盤のところに立った。「人殺したちはおしまいだ」と、ハンマーを打つ音が響いた。「人殺したちはおしまいだ」。彼女はそれを、輝きを失った同僚の目に見てとれると思った。「だがその後で、ドイツは変わらなければならない！」この考えでリリー・ヴェヒターは、ますます急がせ、ますます大変な仕事を押し付ける、ナチスに従順な職場長に見張られながら、苦役の間歯を食いしばって持ちこたえた。

崩壊後

1945年4月12日、ラシュタット住民にとって戦争は終わった。ラシュタットのドラマの最終幕一本当に最終だろうか？—は、多くのドイツの町や村と同じだった。

新聞やラジオのヒステリックな喚きにもかかわらず、西でも東でもドイツ国防軍は敗北し、「最後の血の一滴までドイツの故郷の地を守れ」というゲッベルスの要求は、避けられない終わりをたった数日でも遅らせようとする試みだということは、もう何週間も前に誰の目にも明らかであった。その生存がナチ党と不可分に結びついた者でさえ、もはや勝利を語ることはなく、米英が「ロシア人」が共産主義を欧州に持ち込むのを許さないだろうということを重ねた態度で暗示するだけだった。いや、諦めるのはまだ早い。最後はすべてうまくいくだろう。フリードリヒ大王だって、七年戦争で苦戦したではないか。

ああ、誰がこの物憂い日々にフリードリヒ大王よろしく暖炉の前の犬をおびき出したいだろうか。人々を支配していた考えはただ一つ。終わり、もう終わりにしよう。この終わりなき恐怖よりも、恐怖の終わりの方がいい。惨めな党の大物たち—フーバー地方行政長官、測量技師バーダーなどなど—は、もう自分自身の言葉さえ信じていなかった。ますます激しくなる地震のような遠方の雷鳴を聞き取ったのは彼らだけではない。前線がよいよ町に近づいてきた。空襲がひどくなる。昼間に4回、5回で、夜は休みなしだ。住民は地下室に逃げ込み、もう離れられなくなった。そして西から東へ、大砲・戦車・歩兵部隊・トラック、またまた戦車と、国防軍の残党が町を抜けて行った。解放戦争期の軍歌ではないが「馬・人・車」というわけだ。

その後断水になり、停電になった。そして、武装親衛隊の敗残部隊によるテロが何時間も襲った。さらに空襲が絶え間なく続いた。だが突然、目に見えない指揮者の合図のように、地獄の騒音が消えた。最後の恐怖の前の静けさに過ぎないのか。あちこちの地下室で、不安な疑問が募った。ところが町には、フランス軍の最初の部隊がもう到着していたのだ。まずは前衛で偵察用装甲車が数台。次に軍の主力部隊が、逃げる敵を追いかけて進撃していった。

解放され人々が地下室から出てきた。人々はこの地獄を生き延びたことを、びっくりし

て悟った。一つの言葉が口々に伝わった。リリー・ヴェヒターが「未来を指し示すものとして忘れることのできない言葉だ。「こんなことをもう一度味わうくらいなら、乾いたパンを一生食べている方がいい。」

当初はラシュタットでも、荒れ狂っていた。本来は、仏軍事当局が住民の間で即座に役に立つ者と立たない者をより分け、反ナチではないにしても政治的に悪い前歴のない人物が、完全に解体した行政を再び動かし、後年の再建の条件をつくるようまず努力すると考えるべきであった。ところが話が違った。フランス人にとって、ナチスとドイツ人の間に相違はなかった。当初軍は略奪を認められた。中世さながらに、ラシュタットは3日間にわたって、強盗・略奪を耐え忍んだ。ようやくその後生活が「こういう事情においてそう言ってよければ」正常化し始めた。へトへトになって、ヴェヒター一家はライン通り11番の家に戻った。しかし全体として、まだ満足できる状況だった。間もなくリリー・ヴェヒターは、昔の気質を回復できた。そしてグステルは郡行政のポストを得た。

ナチズムと戦争を乗り越えた喜びは、この時期の日常生活の心配の陰に隠れてしまった。そしてこの心配は、後年回顧すると些細に見えるとは言え、当時は決して小さくなかった。食料は、最後の1グラムまで残らず配給された。それは、どんなに主婦がやりくりしても、定められた日数には足らなかった。さらに「闇」で何か調達するのも、簡単ではなかった。それはともかく、グステルは官吏の地位にあった。あらゆる制約が洗い流されたようなまさにこの時期、このことを考慮しなければならぬとリリー・ヴェヒターは思った。

皆が皆そう考えたわけではない。間もなく、田舎へ「関係」を利用して、自分と家族に割り当てられた僅かばかりの配給を改善しただけでなく、一般的な困窮から活力あるビジネスを作り出した者たちが、評判になった。月々バター500グラムの価格にほとんど達しない給料で働くのは馬鹿馬鹿しい。とにかく自分が一番だ。

そして、あの「時代の兆候」を一番わかっていると思っている者、要領のよい者の中に、終戦直前でもなおフリードリヒ大王を引き合いに出して、「よい」結末を予言していた連中がいた。フーバー、バーダーといった以前の党のボスたちだ。「政治的前科がある」ため、彼らは一般的規定により「下位の労働」しか許されなかった。だが、それをする用意があるという前に、彼らは全然何もしようとせず、言葉の最もプリミティブな意味で「闇取引」した。肉・バター・ジャガイモ、すべてが彼らの手を通り、見事な値段で売られた。連中と連中の家族は、崩壊に続く困窮など何も感じなかった。

「この連中は本当に罰せられないままなの？グステル、〈向こう〉でも彼らをこんなふうには腫れ物に触れるように扱っていると思う？」

〈向こう〉でリリー・ヴェヒターが意味したのは、ドイツのソ連占領地区だ。グステルは肩をすくめて「何て質問をするんだ」。

だが、それはフーバーやバーダーにはあまり関係なかった。彼らの今の「職業」は、多くの人との繋がりを生んで、そこからすごいことになった。我々の誰が、そもそも強制収容所が存在したことをちょっとでもわかっていただろうか？ ダッハウやブーヘンヴァルトについて言われていたことを、全部信じていたか？ いったい「彼ら」は何をしているのだ？ 「彼ら」とは占領軍のことだ。彼らは我々を飢え死にさせようとしている。まして「東」はさらに恐ろしい。「ヘーバーライン嬢のことだが、彼女には叔母さんがいて、その甥の友人は、30日かけて徒歩でライプツィヒからカールスルーエにやって来た。彼がす

ごい話をした。怖くて鳥肌の立つようなことを。要するに、アドルフ・ヒトラーの下で多くの不正があったことは認めねばならないが、一本音を言えば一正しいこともあったではないか？ 西側連合国が彼の言うことを聞いていれば、随分違っていたはずなのに。」

ゼルビンガー夫人が頷いた。「フーバーさん、まったくそのとおりよ。代用コーヒーをあと250グラムくれませんか、300マルクで...」

「こんなことをもう一度味わうくらいなら、乾いたパンを一生食べている方がいい」という誓いは、もう忘れられていた。

だが、リリー・ヴェヒターは忘れられなかった。

母、継父、異父弟について詳しい情報を得る努力がようやく報われたのは、秋からもう冬の頃だった。両親とテレージエンシュタットにいて、彼らがどうなったのか情報を提供できる人を探すのに、彼女はどんな苦労も厭わなかった。無数の手紙を書き、可能性のある組織にたくさんの照会を送った。今ようやく回答が...。だがそれはどんなものだったのか？ 継父は1942年夏、「衰弱」死した。要するに餓死だ。リリー・ヴェヒターは歯を食いしばった。母はその直後、アウシュヴィッツ絶滅収容所への移送に振り分けられた。さらに間もなく、異父弟が1939年、ブーヘンヴァルト強制収容所で親衛隊から殴り殺されたという確かな情報も届いたのである。

数週間、数か月間と、リリー・ヴェヒターは硬直したように辺りをさ迷い歩いた。夫以外、彼女は家族を完全に失ってしまった。「なぜこんなことが起こったのか？ なぜみな犠牲とならなければならなかったのか？ このおぞましい出来事の意味は何か？」という問いが絶え間なく突き刺さった。知人・友人・同僚の答えはさまざまだった。

「ヒトラーがポーランドを攻撃さえしなければ、あるいはポーランドは攻撃しても、せめてソ連の手前で留まっていれば...。ブリューニングは弱体すぎたので、もっと彼に抵抗すべきだった。「好々爺の」ヒンデンブルクさえ欺いたのだから。わかっていたら、彼は許さなかつたらうに...。」

ある時リリー・ヴェヒターは得心した。「これらの答えはどれも表面的だ。ブリューニングが何だって？ ヒンデンブルクが何だって？ 我々一人一人に責任がある！ 誰もが！ ヤーと言ってしまったり、ナインとはっきり言わなかったから！」友人たちは肩をすくめて「個々人に何ができる？ 今も昔も何もないさ！」

するとある友人が、フーバーとボーダーは、崩壊の数日前でさえ、怯えている住民に勝利を吹聴した古参ナチだとフランス軍司令官に告げて、彼らに注意を向けさせたという報告をした。成功したのだろうか？ フランス軍司令官は、理解できないとブツブツ言った。通訳—これもナチだ—は後で、司令官には、アウシュヴィッツ・マウトハウゼン・ダッハウ・ブーヘンヴァルトで絶滅を免れ、あちこちで再び登場している忌々しい共産主義者よりナチの方がよかったと話したそうだ。そんな態度はぞっとするし、まるで理解できないとリリー・ヴェヒターは言葉を挟んだ。「ヒトラーやその徒党へのいわゆる権力移譲の日から積極的に抵抗したのが共産主義者だったことは忘れてはいけないわ。」

「私たちの同志の多くが、何年もナチ強制収容所に繋がれていたことを忘れないでください、ヴェヒターさん」と、ラシュタットでもオルグを再開したSPDの友人が応じた。

「でも私が思うに、私たちと共産黨員は一緒になって、一緒に闘うべきです。もしそれが1933年以前に実現していたら、ブリューニングはあれほど諾々と無力だったり、ヒン

デンプルクがあれば「善意」でなかったろうし、ドイツはヒトラーを経験しなかったでしょう。決して！」まさに興奮して彼女は話した。余裕たっぷりに SPD の同志が笑った。「状況が変わったんです、ヴェヒター同志。西側の私たちにとって、真の民主主義の基礎を築くことが重要なのです。その際共産主義者との協力は、私たち社会民主主義者にとって論外なのです。でもそれはもう、あなた自身でわかりますよ。あなたの新しい任務においても。」

「新しい任務？」リリー・ヴェヒターは驚いて、この党の友人からさらなる説明を待った。それは割合早く来た。要するに、SPD の現地指導部は、リリー・ヴェヒターを市議員候補に指名するつもりなのであった。リリー・ヴェヒターは考え込んだ。なぜよりによって自分の妻なのか、グステルは知りたがった。その質問からはちょっとした自慢も窺えたが、同時に彼は、妻がラシュタットの社会で役割を果たすよう指名されたことを歓迎してよいのかどうか疑っているようにも見えた。

そこで党の友人は「不適切ですか？」と反問した。目下男不足で、有権者の 6 割以上が女性だという否定しがたい事実には配慮しなければならない。「だから私たちは候補者リストに女性を載せなければならないのです」とニヤリとして「ではなぜリリーではダメなのです？ 彼女がここでどんな声望を得ているか、御存知ないようですね。」

だがリリー・ヴェヒターは断った。「私は向いてないと思います。」彼女の迷いを覚まそうとする党の友人たちの努力にもかかわらず、彼女は意見を曲げなかった。活動はしたいと思ったけれど、市議会で党議に縛られた形は嫌だった。マックス広場に樅の木を植えるべきかといったことに何時間も論争して、ようやく結論に達するのだが、その結論も実際の必要性よりも党派的な同盟の必要に基づいているのだ。

「私の仕事はもっと自由でなくちゃ！」 彼女はこの点に固執した。

間もなくその願いは叶えられた。勤労者の困窮をまあまあ防ぐために、ある程度勤労者自身のイニシアティブで、昔の「労働者福祉会」が再建された。リリー・ヴェヒターは、その所長として呼ばれた。事情通の人たちにとってようやく一最初にドイツ分断を決定づけることになる通貨改革より 1 年以上も前—明らかに開始された政治的な大状況に、リリー・ヴェヒターの眼はまだ厳しくはなかった。そうなるまでにはなお相当な時間が過ぎることになる。リリー・ヴェヒターは、小さなラシュタットから何千マイルも世界半周の旅をするのだ。しかし、既述のように、彼女はまだそこまで行っていない。他方、彼女の指揮下にある「労働者福祉会」が、まさに勤労者自身の直接的イニシアティブでつくられたゆえに、SPD 党员とかドイツ共産党 (KPD) 党员、あるいは無党派ということに関係なく、全勤労住民を把握されるのは、彼女には不自然ではない、それどころかむしろ当然と思われた。この種の統一行動が、言葉の正しい意味で西独の政治発展に鑑みて全く自明ではないことは、リリー・ヴェヒターには—既に述べたように—この時点では明らかではなかった。だが活動を通じて、勤労者層を支配するほとんどすべての窮乏が戦争の直接的帰結であることは、彼女にはすぐに明らかになった。1939 年から 45 年までの期間、一人の家族も欠けなかった家庭はほとんどなかった。一家の大黒柱である夫がスターリングラードで戦死した事例もあれば、母親を養っていた息子がエジプトのエル・アラメインに残っている事例もあった。本当に僅かな貯金があっても、破滅的な価値下落で無に等しくなった。そして仕事も無きに等しかった。

米国が大仰な言葉で告知した再建とは、いったいどこの話か？ 工場主は、操業再開を始められる合言葉を待っているように見えた。だが、明らかにその合言葉はまだなかった。ほとんどどの工場主も、やろうと思えばできたのに、やろうとしなかった。

それに加えて、移住民の果てしない困窮。仮設住宅に詰め込まれ、好きなようにさせておかれた。どの官庁も、ドイツだろうが連合国だろうが、この困窮状況を体系的に排除しようと考えなかった。

まるで何か（いわば秘密の）目的のために取っておくために、彼らは意識的にこのひどい状況に置かれているのかと、リリー・ヴェヒターは思ったが、それが核心をついているとは考えなかった。彼女は、「労働者福祉会」に援助を求める人たちと話をした。

「我々の誰もが責任を負っている、誰もが？」と、彼女は一度抱いた考えを繰り返した。「それは間接的にしか当たっていない」と、年老いた労働者がある時彼女に語った。「戦争の責任があるのは、戦争で儲けたくて戦争を始めた連中さ。軍需企業家、コンツェルン主、帝国主義者だ。だが、戦争を防ぐために何もしなかったのなら、我々にも皆責任がある。」

当時リリー・ヴェヒターには、この注釈が全く理解不能に思われた。彼女は自分の仕事の中身を、戦争とナチズムがもたらした窮乏を取り除くことだけと考えていた。この窮乏の克服ができるのは根本においてだということにはわからなかった。当時はまだわからなかったのだ。

1948年6月21日、西独駐留の西側3連合国の指令により、通貨改革が実行された。10ライヒスマルクに代わって、1「ドイツマルク」が登場した。当初、一般的な経済状況の正常化に必要な条件がつけられたことに、人々は満足した。「やっと闇商売は終わりだ。」「そうね」とリリー・ヴェヒターは、夫の言葉に同意したが、「でも...」

「でも、ということが何かあるかい？」とグステルは知りたがった。リリー・ヴェヒターは、「ええ、この通貨改革はすべて素晴らしいわ。でも、なぜドイツ全体に行われなかったのかしら？ 2つの異なった通貨はきっと最終的には、ドイツの二つの部分から二つの異なった国にしてしまうわ。ポツダム議定書では、ドイツは一つの単位と定められていたじゃない。どうしてアメリカ人は西ドイツだけに分離した通貨を導入できたのかしら？ 私にはわからない。」

グステル・ヴェヒターにも、それはわからなかった。「でも、それじゃあどうすればいいのさ」と彼は肩をすくめた。「我々が考え、アメリカ人が指導するのさ。」

実際彼らは実にひたむきに指導した。間もなくヴェヒター夫妻には、フーパーやバーダーら、かつての党のボスたちがもう、本当に闇市で食料品の闇商売をしていないことが明らかになった。通貨改革で経済状況が好転したからではない、断じて。そうではなくて、彼らには新しい仕事のできたのだ。静かに目立たず、古参ナチは皆、昔の地位に戻ったのだ。最初はまだどこでも控え目に、彼らは誰に対しても、自分たちは1933年既に常に反対だったと強調した。非ナチ化—彼らは仲間内で「洗剤証明」とあざけていたが—の障害にならない証言、確たる証言を通して、それを証明できただろうに。

しかし彼らは次第に謙虚さを失った。信じられない驚きでそれを確認したのは、リリー・ヴェヒターだけではない。

「いつも言いませんでしたっけ？ ソ連と仲良くしたのは、アメリカの最大の失敗だった。ほら見てごらん。まあ、我々の手が必要になるさ。」

殺戮が終わって4年経つか経たないうちに、戦争のことを考える人間がドイツにいるなんて、理解できるだろうか？

「迫りくる戦争を防ぐために、あらゆる平和愛好者の力が必要だ！」 「労働者福祉会」の事務所で老労働者が彼女に語った言葉が、繰り返し彼女の脳裏を駆け巡った。



写真：リリー・ヴェヒターと語る
エリ・シュミット DFD 第一議長

ドイツ民主女性連盟（DFD）での活動

「私たちは皆、迫りくる戦争の勃発を防ぐために全力を尽くさなければなりません。先の戦争で父・夫・息子を失った私たち女性にこそ、平和を守る神聖な義務があります。」リリー・ヴェヒターは、報告者の言葉を一言も聞き逃さなかった。

偶然彼女は、DFDの集会に出た。ほとんど考えなしに、彼女はある知人の要請に従った。「ちょっと聞きに来て、リリー。あなたは、公的な生活に関心があるのだから。」

リリー・ヴェヒターは、講演した女性の述べたことに耳を傾けただけでなく、感激した。「実際にもうそこまで来ているの？ 新たな戦争の危険は、本当に人類の目前にあるの？」

この講演はリリー・ヴェヒターにとって、簡潔に過ぎた。彼女はもっと知りたいと思ったし、そうせねばならなかった。講演後レストランの奥まった部屋で、少ない人数で席に着いた。リリー・ヴェヒターの差し迫った質問への応答が行われた。さらにその後、二人はライン通り11番の家の前をうろついた。そこでリリー・ヴェヒターは、DFDの目標や任務について、さらに説明を受けた。既に1947年3月にベルリンの国立歌劇場で、第1回平和・民主ドイツ女性会議が開かれた際にDFDが設立されたと知り、彼女は非常に驚いた。世界観や所属政党に関係なく、この団体はすべての女性をまとめ、平和とドイツ統一のための闘いに結集するというのである。

これにより、社会主義の女性がブルジョワ政党や無党派の女性と、平和・民主・統一ドイツの闘いで一緒になる可能性が初めて生まれた。

「なぜそうした組織が西側にはないのかしら？」とリリー・ヴェヒターは問うた。

「西側連合国が許可しないからよ」というのが、簡にしてきまり悪い答えだった。「女性たちが集まって、第1回女性会議のように、当時モスクワで開かれていた外相会談に向け

て、ポツダム決議の履行を求める緊急アピールを発表するのは、彼らの政策には合わないの。DFDが550万人の署名を集めて核兵器の禁止を求めたこともね。」

「でも今西側でもそうした女性団体を作れるようになったのではないかしら」とリリー・ヴェヒターはまた尋ねた。

「ええ、でもアメリカ軍政府がドイツ統一や原爆禁止、そもそも平和の維持について意見を変えたからではないわ。正反対よ！ アメリカは今、兵士連盟や軍人団体、扇動的な移住民団体に強い関心を持っているので、新しい団体の設立に彼らの許可が必要だという規定を廃止したのよ。この状況を、平和の維持とドイツ統一の創出以外望まない私たち女性も利用して、この目標のために活動できる組織の枠組みを作ったのよ。」

それ以上の情報は、リリー・ヴェヒターに必要ななかった。彼女はDFDに加入し、そのエネルギーを注いだ。

ますます切迫する西独の状況に対し、DFDの活動は集中していった。西独の至る所で催された集まりで、米国演出によるアデナウアー政府の戦争政策により全ドイツ人民に迫りくる死の危険について、女性たちへの啓蒙が行われた。リリー・ヴェヒターは繰り返し聴衆に、空襲の夜に恐らく誰もが語り合うか、少なくとも思った言葉「もう一度この地獄を味わうより、一生乾いたパンを食べていた方がいい」を思い起こさせた。

聴衆の好意的な反応は、彼女を楽天的にした。何千何万という女性のゆるぎない平和の意志に対して、アデナウアー政府は何ができるだろうと考えた。だがある友人がその誤りを正した。「最後の最後の人を説得するまで、手を緩めたり労を惜しんだりしてはダメ。いつも戦争は少数の人間によって引き起こされるということを忘れないでね。」リリー・ヴェヒターは再び、ラシュタットの「労働者福祉会」で年老いた労働者が言ったことを耳にしたのだ。「戦争が儲かる商売である数少ない人間がもう一度戦争を起こせないように、皆、全国民が反対しなければならない。」

ナチス崩壊から5年経つか経たないうちに、世界で殺戮が再び始まった。朝鮮戦争だ。DFDでの活動を通じて、リリー・ヴェヒターの眼差しは、もはや故郷ラシュタット、あるいはドイツを越えた。彼女は、世界政治の関係を認識し始め、平和が不可分であることがわかった。全世界に平和が確保されなければ、全世界が戦争の危機に晒されるのである。

朝鮮への旅

1951年2月、ベルリンでの国際民主女性連盟の会合で、北朝鮮の文化相が、米軍やいわゆる国連軍による女性・子ども・老人に対する無差別殺戮についてショッキングな報告を行った。国際民主女性連盟は、朝鮮の状況を調査するために朝鮮に代表団を派遣するよう求められた。

国際民主女性連盟の理事会決議により、1951年5月、17か国21名の朝鮮調査団が派遣された。

昔華やかだった町々

一行の車は、中国との国境沿いの最初の北朝鮮の都市、新義州にゆっくりと入った。車は、一面の巨大な廃墟を苦労しながらかきわけて行った。これが、戦争前は人口12万6000人の都市だったのか...！ リリー・ヴェヒターは衝撃を受けながら、かつての市場広場に

立った。ここでは全部、本当に全部破壊されていた。朝鮮人の官庁代表が報告した。

「ここには何の軍需産業もありませんでした。でも、アメリカ人は何のためらいもなく、空爆によってこの町をほとんど完全に灰燼に帰せてしまったのです。何千何万の女性・子どもたちが、この容赦ない空爆で殺されました。」

他の代議員たちがまだこの報告者の周囲を取り囲んでいる間、リリー・ヴェヒターはゆっくりと、廃墟を片付けた狭い道に沿って歩いた。それはかつて、この町の中心街であった。廃墟の山の前で彼女は立ち尽くした。彼女は自分の目が信じられなかった。残骸を集め、持ってきた角材で支えた洞穴の中に、一人の女性と何人もの幼児を見たのだ。戦争ですべて奪われた人々は、こんな暮らしをしている！ リリー・ヴェヒターは洞穴—この寝泊りする場所は、こうとしか呼びようがない—に入った。一人の朝鮮人通訳が、もう彼女の傍らにいた。ここに棲む—住むとはとても言えない—のは権文秀さん一家で、両親と子ども3人だった。洞穴は、部屋といわゆる台所の二つに分かれていた。リリー・ヴェヒターは、この困窮にぞっとした。しかも通訳からは、この家族は少なくとも風雨から守られているので、隣人たちからまだ幸運だとみられていると聞かされた。

だが、旅はまだまだ続いた。この先 300km の目的地は平壤、朝鮮民主主義人民共和国の首都だ。この 300km の全行程で、町や村が空爆で破壊されていた。

戦前の平壤は、人口約 40 万の華やかな町だった。そこには歌劇場、9 つの劇場、20 の映画館、戦後に建設され近代的な設備の大学、75 の小学校、20 の中学校、5 つの研究所、4 つの高校、大規模な総合病院があった。訪問団のメンバーは到着して、この町が今やがれきの山でしかないことを確認し狼狽した。大半の建物は、地面と同じ高さになった。そこここに破壊された建築物の塀の残骸が、灰と瓦礫の中にまだ立っていた。

アメリカは、この町を占領した後、再び明け渡さざるを得なくなると、まだ居住可能だった建物を系統的に破壊した。彼らは市電に火をつけ、水道管を破壊した。おびただしい空爆の間、低空飛行の米軍機が機関銃で民間人を撃ち殺した。

リリー・ヴェヒターは、廃墟の海の間近で、踏みにじられた大地から新しい生活を生み出そうと、幾人もの手がもう再び動いているのを見て非常に驚いた。農民たちは畑を耕すところだった。興味を持った代議員たち—その中にリリー・ヴェヒターもいたが—は近づいて、農民の一人と言葉を交わそうとした。その瞬間、空にエンジンの音が轟いた。農民たちは本能的にすぐさま地面に伏せ、顔を畝間に押し付けた。荒れた手がリリー・ヴェヒターを溝に引き倒した。彼女は一緒に身をかがめて、このゾッとする劇の証人となった。平和的生活の芽生えでさえ、アメリカは妨害なしには済ませなかった。彼らは機関銃の一斉射撃で、耕作を不可能にしようとした。それも、前線から数百キロ遠く、いかなる軍事施設からも離れていた場所の話である。

後に代表団は、非常に正確な調査を行った。何百もの証言を得、報告は直ちに文書にされた。何人もの女性・母親が、深い悲しみをたたえ、苦痛にほとんど硬直して、夫や子供の運命を報告した。彼女たち庶民の口から、彼女たちが耐え忍ばねばならなかった苦悩と悲慘が、繰り返しほとばしり出た。代表団の一行は、どうしてこんなことが可能なのか、どうしたら人間はこれほど残酷になれるのかという絶望的な質問を繰り返し耳にした。

傍らで物静かな、ほとんど公式的と呼べるタイプの官庁代表が、朝鮮でアメリカとその従僕が始めた破廉恥な行為の証拠に次ぐ証拠を代表団に示した。

中でも、新しい、未知の絶滅兵器を使った証拠が代表団に示された。それは、いわゆるナパーム弾で、地面に達したり、家屋に触れると開き、爆発することなく、くっついて離れず、陽光に当たると燃えだし、家を丸ごと焼く能力があるのである。

「アメリカ人は野獣だ」

アメリカがもたらした平壤住民の苦難は、類例のないものだった。姜福善嬢は、代表団による聞き取りの際、アメリカ人が、歌劇場と近隣の家を米軍用の売春宿にしたと証言した。そこに、路上で捕まった女性や娘たちが皆力づくで連れてこられたというのだ。

37歳で4人の子どもの母親の金性玉さんは、家が破壊された後、善山里村に疎開したと述べた。そこで彼女は、米軍に殺された37人の遺体を見た。その中には、地元女性組織の書記もいた。彼女は裸で路上を引きずり回され、真っ赤に焼けた鉄を膣に突っ込まれて殺された。彼女の幼い男の子は、生き埋めにされた。

1万9092人の住民が韓国軍・英軍・米軍に殺された安岳の町で、代表団は、農業銀行と提携した古い店を見学した。これは米軍が牢屋に改造したもので、それぞれ長さ約4m、幅3mの5つの房に分けられていた。崇山里194番地の農婦韓洛善さんは宣誓して、1950年11月10日、夫・義兄とともに逮捕され、この非常監獄に入れられたと証言した。彼女自身は脱出し、身を隠すことに成功した。彼女は、夫や義兄、それに他の囚人も、彼らは労働者や農民で、公職についていたり、労働党员だった者は一人もいなかったと説明した。多くの子ども一なかには2歳になったばかりの子もいた一が母親と牢屋に投げ込まれた。1950年11月25日、女性・子どもを含む囚人が山に連れて行かれ、壕の中に生きてまま投げ込まれ埋められた。

世山里172番地の金相延さんは、妻、子ども、義理の娘、その12歳の子どもを含む家族12人全員が捕まったと述べた。最初彼は、彼らがどうなったのかわからなかったが、後に彼らの死を知った。町が解放された後、彼は死体を捜し、発掘の際息子と嫁の体が縄で結び付けられたのを発見した。どの死体にも傷がないため、彼は、彼らが生き埋めにされたのだろうと思っている。

上内里187番地の崔応福さんは、夫と子供たちが捕まり、後に殺されたと証言した。

9歳の朴燦以は、父親が殺されたとやった。母子は捕まって、牢屋に入れられた。彼らは処刑されると伝えられたが、処刑直前に朝鮮人民軍によって解放された。母親は、何らかの供述をするよう求められたが、何の陳述もできないと拷問された。焼けた針を爪の下に押し付けられた。その痕は今でも確認できる。拷問に引きずり出された際、彼女は、離れの建物の井戸に人々が生きてまま投げ込まれるのを見たと続けた。そして「アメリカ人は野獣だ！」と叫んだ。

安岳から8km離れた禹世里村出身の沈同敏さんは、アメリカ人が夫と、義理の両親、義理の姉を殺害したと述べた。鉄の棒で殴り、まだ生きている兆候があったので、銃剣で切り刻んだという。義理の父は生き埋めにされた。

孔朱村出身の柳東子さんは、彼女の県で3万5000人の民間人が殺されたと報告した。彼女は、米軍が退却する際、住民と一緒に来るようにさせた。北朝鮮に原爆を落とし、何もかも破壊するという脅しによってである。そこで民間人が村を離れ、南に赴こうとすると、米軍機によって機関銃で撃ち殺されたのである。

冊書里 3 番地に住む 30 歳の李知恵さんは、庭師だった夫が米軍に捕まると述べた。拘束する際米軍は通訳を通じて、北朝鮮人は残らず殺すと言った。同じ通りに住む 100 家族のうち、90 家族が殺害された。彼女自身は子ども 2 人とともに捕まったが、逃げることができた。捕まった時彼女は、北朝鮮の戦争捕虜が米軍にガソリンをかけられ、生きたまま焼かれるのを見た。

写三里村出身の金淑先さんは、彼女の子どもたちが捕まり殺されたと証言した。夫も殺害された。幼稚園の先生になりたかった 20 歳の娘、金春子さんは、耳に釘を打たれ、背中に太鼓を括りつけられ、裸で路上を引き回された。それから牢屋に投げ込まれ、暴行されるのに抵抗すると銃剣で殺された。母親は後に、体が二つに切断された娘の死体を発見した。

上倉里村出身で 15 歳の黄益水さんは、彼女の家族の 7 人が米軍に殺されたと伝えた。彼女自身は、父親が活動家だという理由で逮捕された。母親と兄と一緒に牢屋に連れて行かれ、虐待された。足への殴打の痕が、まだはっきり見て取れた。家族はガソリンをかけられた。火をつけられる直前、パルチザンに解放された。ただ一人の兄は、首に縄をかけて連れてゆかれ、5 人の家族とともに生き埋めにされた。

代表団の一部は、1951 年 5 月 22～23 日、平壤内の町である南浦と江西市を訪問した。南浦は 1950 年 10 月 22 日～12 月 5 日、米軍に占領された。それまでに町の大半は破壊されていた。占領期間中、1112 人の民間人—その半数は女性や子どもだった—が米軍に殺害された。

46 歳のプロテスタント牧師である許良郁さんは、南浦には 4500 人のクリスチャンがいたと証言した。その大半は米軍の宣伝に騙されて、船で人民軍の部隊から逃げようと港に集まった。12 月 5 日、1500 人が乗船しようとしたところ、米軍機から機関銃で撃たれた。最初間違っているとされたため、彼らはコラール（讚美歌）を歌い始めた。それでも米軍は射撃を続け、合計 275 人が命を失った。

信川面では、10 月 20 日～11 月〔国際女性調査団報告書によれば 12 月〕7 日の米軍占領中、1561 人の民間人が殺された。1384 人が射殺されたが、このうち 452 人が女性、354 人が 8 歳までの子どもだった。57 人—うち女性は 15 人—が縛り首にされた。50 人—うち女性は 20 人—が生き埋めにされ、35 人—うち女性は 10 人—が殴り殺され、35 人—うち女性は 3 人—は焼き殺された。米軍が拷問し殺害するには、農民連盟か他の民主的組織—単なる消費組合であろうが—のメンバーであるか、この組織に親戚がいるかで十分であった。

58 歳の金基順さんは、息子、嫁、それに孫が米軍に生き埋めにされたと証言した。米軍撤退後掘り出してみると、彼らが両手を縛られていたことを確認した。

玉洞里村（平康地区）では、農夫の呂東朝氏の 23 歳の嫁が、8 か月の身重なのに米軍に連行され、服を脱がされ、この状態で村の市場広場で晒し者にされ、終いに両手を木に吊るされた。美延里村（安道郡、安辺地区〔安辺郡安道面の誤記と思われる〕）では、農夫の呂良先さん一家の 3 人の女性が隠れ家に連れていかれた。暴行しようとしたアメリカ人に抵抗すると、彼女たちは胸を切り落とされ、赤く燃えた鉄を膣に突っ込んで殺された。

49 歳のプロテスタント伝道師である全権花さんは代表団に、彼女の 25 歳の嫁が夜襲われ、2 人の売春婦と一緒に車に投げ込まれたと報告した。彼女は田んぼに逃げることに成

功したが、米兵に追跡され、暴行・射殺された。

元山の景山里に住む46歳の農婦の申英玉さんは、妊娠9か月の25歳の嫁が、1950年11月18日、「アカ」という理由で米兵に殴打されたと伝えた。5日後彼女は、広場で晒し者にされた。誕生直前の子どもは、臍に棒を突込まれたために死亡した。

1950年10月21日に米第26・27師団に占領された朝鮮北部の价川では、地域委員長の金炳午さんが、「李和実さんは米軍に捕まって、パルチザンに加わっていた夫の居場所を尋ねられました。彼女がどんな供述も拒むと、拷問されました。まず左腕を切り落とし、次に右足です。彼女の死後、4人の子供たちは家に閉じ込められ、生きながら焼かれました」と報告した。

价川の馬場里20番地に住む李真賢さんは、政府から優良農民として表彰された末娘が、郡の民主女性連盟の公職に就いていたと証言した。米軍による占領以前、李真賢さんは娘に、一緒に逃げるよう迫った。しかし娘は自分の職を考え、できる限り長くとどまろうとした。李さんは子どもたちと逃げた。米軍が撤退して直後、李さんは、8歳の息子と一緒に、非常に心配しながら娘を探しに出かけた。彼女は、衣服をまもっていない娘の死体が木に括りつけられているのを見つけた。娘は、夫の活動や女性組織での地震の活動のせいで、米軍から電気で拷問されたと隣人が語ってくれた。8歳の男の子が怒りのあまり兵士めがけて飛びかかったが、殴り倒された。娘は何日間も、凌辱に立ち会うよう強要された住民の目前で拷問された。結局彼女は殺された。

代表団が訪れた江界市には、戦争勃発以前4万人が住んでいて、教員養成所が2校、林業大学が1校、女子中学校が1校、高校が2校、小学校が4校、劇場が2つあった。これらの建物のうち、まだ立っているのは、破損した高校1校だけだ。屋上に赤十字が掲げられていたにもかかわらず、中央病院は破壊された。町にはほかにプロテスタント教会が2つ、カトリック教会が1つ、儒教の寺が1つ、それに天道教の教会が1つあった。

朝鮮滞在最後の数日、代表団は再び平壤の近くに集まり、自分たちの体験や検証を報告書にまとめた。その結論は以下のとおりである。

「朝鮮の様々な地域で代表団が監視を行った結果、委員会は以下の結論に達した。

朝鮮人民は米軍により、無慈悲で組織的な絶滅戦の下に置かれた。その過程では、人道の諸原則だけでなく、ハーグ陸戦条約やジュネーブ条約に定式化された戦争法規が、以下の方法で恒常的に侵害された。

a) 食料・食料備蓄・食品工場の体系的破壊によって、森林・田畑は体系的に焼夷弾で焼かれ、果樹は破壊され、田畑で役畜と働いていた農民は、空からの機銃掃射で殺された。

b) 軍事施設でないどころか産業の中心でもない都市・農村の体系的な破壊によって。これらの破壊行為の目的は、明らかに人民の士気阻喪と物理的絶滅である。絶え間ない空爆の間、住宅・病院・学校などが意図的に破壊され、既に灰燼に帰し、住民が洞穴に住まなければならない都市ですら、再度空爆された。

c) 焼夷弾・石油爆弾・ナパーム弾・時限爆弾など、国際的な取り決めで禁止されている民間人への体系的な武力行使や、低空飛行からの機銃掃射による民間人射撃によって。

d) 大量の朝鮮住民の体系的根絶によって。米軍、英軍、李承晩軍に暫時占領された地域では、何十万人もの民間人、老人から子どもに至る幾つもの全家族が、死ぬまで拷問され、

生きながら焼かれ、撲殺され、生き埋めにされた。たくさんの人が牢屋の中で、飢餓と寒さで破滅した。彼らは、起訴も判決もないまま牢屋に投げ込まれた。そうした拷問と大量殺戮は、ナチスが占領した欧州で行われた犯罪に匹敵する、それどころかそれを上回りすらする。

尋問を受けた民間人の証言は、これらの犯罪の圧倒的多数が米軍の将兵によって、あるいは命令に基づいて犯されたことを証明している。したがって、これらの犯罪の責任は完全に、在韓米軍の司令官たち、マッカーサー将軍、リッジウェイ将軍、その他、自称国連軍という侵略軍の司令官にある。これらの行為が、将軍たちの命令で行われたにもかかわらず、その責任は、朝鮮に軍隊を送った諸政府、国連で朝鮮戦争に賛成した諸政府に帰する。

委員会は、朝鮮人民に行われた犯罪の責任者たちが、1943年の連合国の宣言に盛り込まれた「戦争犯罪」の定義に照らして訴追され、この宣言で予定されているように、諸民族によって判決を下されねばならないという確信を表明する。

委員会は、人道の名において、世界の全民族に、あらゆる手段を用いて、戦争の即時停止と朝鮮からの外国軍隊の撤退を求めよう呼びかける。委員会はまた全民族に、米侵略軍が犯罪を行った結果、飢餓と病気が切迫している朝鮮人民のために、救援活動を組織するよう呼びかける。

委員会は国際民主女性連盟に、この文書を世界の全政府、全女性団体—国際民主女性連盟の加盟団体であろうがなかろうが一、世界平和評議会、平和のために闘っているすべての団体、すべての人道団体、世界平和に取り組んでいるすべての公人—その政治的・宗教的立場には関係なく—に送るよう求める。

委員会はまた、国際民主女性連盟が、米軍と李承晩軍が朝鮮で犯した残虐行為に関する国際女性委員会の調査報告書を国連に送ることが不可欠と考える。」

この報告書は国際民主女性連盟書記局に渡り、1951年6月11日、下記の書簡をつけて国連にさらに送られた。

ベルリン、1951年6月11日

国際民主女性連盟評議会は、1951年2月1～5日、ベルリンにおける会議で、米軍の空爆で引き起こされた破壊と、民間人—特に女性と子ども—に行われた残虐行為を確定するために、国際的な女性委員会を朝鮮に派遣することを決議した。

ヨーロッパ・アメリカ・アフリカ・アジア 17 か国の代議員が、委員会に参加した。12 日間の綿密な調査を経て、委員会は、国際民主女性連盟書記局に文書を渡した。それが今般送付したもので、表題は「朝鮮における米軍および李承晩の傭兵の残虐行為に関する国際女性委員会の調査報告書」である。

国際民主女性連盟に加盟する 9100 万女性の名において、国際民主女性連盟は、この報告書が国連の当該諸機関に提出され、国連が一委員会が定式化した決議に即して—決定を下すことを要求する。

国際民主女性連盟はさらに、平和的な朝鮮住民に行われた犯罪の責任者を「戦争犯罪人」として提訴し、1943年の連合国の声明に則って、諸民族が判決を下すことを要求する。

朝鮮における残虐行為を終わらせるために、国際民主女性連盟は国連に対し、

朝鮮の町村および朝鮮住民へのあらゆる空爆の即時停止

朝鮮問題の平和的解決と朝鮮からのあらゆる外国軍隊の撤退

自民族および国の問題に関する朝鮮人の単独自決権
を要求する。

国際民主女性連盟は、朝鮮委員会の報告書が、国連の公式文書の中で公表され、国連組織に加盟する諸国の全代表に手渡されることを要求する。

ユージェニー・コットン (署名)

国際民主女性連盟議長

私でなければ誰が？

1951年6月半ば、リリー・ヴェヒターはドイツに戻った。彼女は、朝鮮で見た計りがたい残酷さに精神的打撃を受けていた。残虐行為について代表団に報告した女性たちの苦悩に満ちたまなざしの記憶は、彼女からひと時も離れることがなかった。

彼女が朝鮮に行ったのは無駄ではなかった。これから歩もうとする道が定まったのだ。決してドイツを第二の朝鮮にしてはならない！ 米国とその傭兵によって分断された国における彼らの侵略戦争のあらゆる悲惨を自分の目で見たからこそ、じっとしてはいられなかった。ドイツ人の目を開き、いかなる危険が迫っているのかを彼らに示すには、自分が見たことを呼び起こさなければならない。リリー・ヴェヒターは、まだ帰国直後デュッセルドルフでの記者会見で、新聞や放送局の代表を前に、調査委員会によるおぞましい調査結果を報告した。

だがそれだけではなかった。リリー・ヴェヒターが朝鮮戦争の恐怖について報告する集会在組織された。西独当局は、米占領軍の指示を受けて、この集會を妨害するためあらゆることを行った。ラシュタット・デュッセルドルフ・ズィンデルフィンゲン・フリードリヒスハーフェン・ニュルンベルクでは、リリー・ヴェヒターは話すことを禁じられた。この期間、彼女は5回逮捕され、ドイツの女性・母親の抗議で5回釈放された。

1951年6月30日、彼女はSPDからの除名を文書で伝えられた。この措置の理由は書かれていなかった…。社会民主党は、30年間黨員だった女性にこのような仕打ちをしたのである。リリー・ヴェヒターは、肩をすくめてこの通知を脇にやった。平和を守る闘いで彼女を感わすものは、もはや何もなくなった！

禁止にもかかわらず、彼女はミュンヘンでもヒュルトでも話すことができた。1951年8月28日、彼女は、ルードヴィヒスブルクでドイツ平和委員会の集會に参加した。会場は平和の鳩で飾られていた。壁に貼った平和維持の警句が、目に飛び込んできた。リリー・ヴェヒターはこの集會で、朝鮮戦争の惨劇について1時間半以上語った。同じことを、8月29日、ハイデルベルクでも行った。

9月6日、彼女は「朝鮮で見たこと」をテーマに、公の集會で話すことになっていた。場所はシュトゥットガルトだった。集會開始1時間前、会場はもう人で溢れ、多くの人が入れなくなった。この集會への途上、リリー・ヴェヒターは、米軍政部の指示でドイツの警察に逮捕され、アメリカ人に引き渡された。

集會の開会に際してリリー・ヴェヒターの逮捕が知らされると、参加者から憤激の嵐が巻き起こった。牢獄のリリー・ヴェヒターに花束を届ける一行が選ばれた。集會は開催され、最後にリリー・ヴェヒターの逮捕に激しく抗議し、即時釈放を求める決議が満場一致で採択された。

後に、リリー・ヴェヒターが収監された牢屋の前で、何千人もの人がデモを行った。シュトゥットガルトですぐに擁護委員会が結成され、翌日ドイツ中から米軍政部に抗議電報が届いた。

9月7日、米国の訴訟手続きにより必要な最初の予備尋問が行われた。既に朝早くから、何百人もの女性たちが裁判所の前に集まっていた。警察は法廷ですら秩序を保つのに一苦労だった。

米国の検事は、ルードヴィヒスブルクとハイデルベルクの集会での演説で、米国の法律第14号を侵害したとして、リリー・ヴェヒターに容疑をかけた。彼は法律の規定を読み上げた。

「反乱または公的騒擾を教唆し、あるいはこれに参加し、あるいは占領当局が禁止した、またはサボタージュ・蜂起・転覆の目的、または連合国の軍隊に不利となる目的で開かれる公的集会を主催、あるいは積極的・消極的に参加した者は、10年以下の自由刑および5万マルク以下の罰金刑に処せられる。」

リリー・ヴェヒターははっきりした声で、いかなる形でも有罪ではないと述べた。米国人裁判官ジョンソンはすぐさま、この問題は最初の予備尋問の際には議論にならないと手短かに述べた。検察による起訴は筋が通っていて、逮捕命令を正当化するという。この告訴の正しさは、規則通りの訴訟手続きにおいてしか検証できないからだそう。

それに対してリリー・ヴェヒターは落ち着いて、この訴訟を恐れる理由がないと述べた。ラシュタットに定住所があるので、彼女は逮捕命令の取り下げを求めた。

ティレラロ検事は激怒して反論した。彼の名前を知らなくとも、彼が南チロルの血統であることは否定できない。彼は、逮捕命令の取り下げに断固反対だと叫んだ。「被告」が米軍に対し敬意のない態度をとったからだけでなく、彼女が占領軍の安全にとって重大な脅威でもあるからだ。彼女の演説の目的は、在独米軍反対の米国世論をつくりたいということにしか見えない。「秩序ある審理が行われるまでは、この女性を通りから連れ去り、牢屋に閉じ込めておかねばならない！」と、彼は小さな尋問室でがなり声を立てた。だがもし保釈金による釈放が問題になるのであれば、保釈金は5万マルクと提案した。少し考えて裁判官は、裁判所の許可なしにラシュタットを離れず、2人以上の集団と話をしないという条件で、逮捕命令の執行は、保釈金1万5000マルクで中止すると告げた。この条件が侵害されれば、1万5000マルクは没収され、逮捕命令は執行されることになる。

それから、次の主審理の日程が9月25日10時と決められた。

もちろんリリー・ヴェヒターは、自分の自由のために1万5000マルクを調達する状況になかった。だが、24時間も経たないうちに、ドイツの女性たちが集めたこの金額が裁判所に届けられた。

前述のSPD除名にもかかわらず、多くのSPD党員が、リリー・ヴェヒターの勾留中彼女への連帯を表明し、その釈放を要求した。

平和愛好世界はリリー・ヴェヒターの背後にいる

この頃全世界、特にドイツで、抗議の嵐が巻き起こった。西ドイツの平和活動家がリリー・ヴェヒターに個人的に送ったおびたしい手紙や集会で、また派遣団を通して、彼らはリリー・ヴェヒターと朝鮮人民の英雄的闘争との連帯を表明した。抗議の嵐は、DDR(東

独)でも起こった。

感動的な手紙で、西ドイツの多くの町で児童たちが、リリー・ヴェヒターが朝鮮に関する真実を述べ、母親たちに、子どもたちが新たな戦争の犠牲にならないよう団結することをよびかけたことに感謝した。子どもたちは、手紙を書いて彼女への敬愛を示したがったのだ。

年金が月わずか 69 マルクの西独ゲルゼンキルヒェン=エルルの老女は、擁護基金に 5 マルク寄付した。デュッセルドルフの別の平和愛好女性は、「平和活動は実践活動」と言って、リリー・ヴェヒターのために商人たちから 20 マルクを集めた。プレーメンの独ソ友好協会の友人たちは、勇敢な平和愛好女性に 78 通の手紙を送った。国際民主女性連盟が何度も国際世論に訴え、リリー・ヴェヒター有罪に反対する闘いを大きく支えたことは、全世界の国々で、ドイツの平和の闘士リリー・ヴェヒターへの連帯が生まれる結果となった。

アルバニア・中国・イギリス・フランス・イタリア・オーストリア・スウェーデン・デンマークから、チェコスロヴァキア・ハンガリー・ヴェトナム・北アフリカ・カナダ・合衆国から、それに朝鮮自体からも、連帯の手紙が擁護委員会に、抗議書が米軍当局に届いた。

トゥモヴァ・チェコスロヴァキア女性連盟事務局長は、ジョン・マクロイの宛先にリリー・ヴェヒター有罪反対の抗議書 72 通が、チェコスロヴァキア全国から寄せられたと伝えた。それは、アメリカ占領軍の処置に憤激した主婦や女性労働者の抗議だった。チェコスロヴァキアの市民がリリー・ヴェヒターに示した大きな共感は、どの抗議でも見られた。彼女は、すべての平和愛好者のシンボルとなった。

朝鮮労働組合中央委員会は、以下の文面の電報を送った。

「我々は、西独の米占領軍に以下のことを伝えるよう、諸君にお願いする。我々は、国際民主女性連盟の調査委員会メンバーであるリリー・ヴェヒターが、大衆集会で朝鮮における米軍の残虐行為の調査結果について報告しようとしたところ、米当局によって不法にも軍事法廷に立たされたことに満身の怒りを覚える。

このようなファッショ的措置は、人民の目・耳・口をふさぎ、米帝国主義・米当局のカニバリズムと残忍さを隠すことになる。」

世界中で進歩的新聞がリリー・ヴェヒターの勇敢なふるまいを論評し、同時に、米軍事法廷の不法な処置に抗議した。

国際朝鮮委員会のメンバーは、リリー・ヴェヒターに格別の支援を行った。全員が擁護委員会に加入したのである。

リリー・ヴェヒター擁護委員会は、パリから以下の電報を受け取った。

「私は衷心から、リリー・ヴェヒター擁護委員会への加入を表明する。フランス女性連盟は、米政府への抗議を行った。あらゆる平和愛好組織の行動が、リリー・ヴェヒターを解放するはずだ。

真の友好を表明して

ジレット・ジグレル
Ce Soir 誌

自身も迫害に晒されたことのあるイギリス人委員会メンバー、モニカ・フェルトン博士は、擁護委員会に助力を申し出た。彼女と、ロッド（カナダ）、エヴァ・プリースター（オーストリア）は、自分たちが朝鮮について話をするすべての集会で、リリー・ヴェヒターの裁判についても報告すると書きよこした。ベルギーのヘルマイネ・ハンファートは、「勇気を！ あなたは朝鮮に関する真実を繰り返し話されると確信しています。私たち平和の闘士は、私たちの理想に忠実なままです。平和勢力は戦争勢力に大勝利するでしょう。」

中国のゲン・ミンはリリー・ヴェヒターにこう書いている。



「私たちは憤りをもって、あなたが、国際民主女性連盟朝鮮派遣団の一員で、帰国後この戦争についての真実を述べたという理由で、アメリカ当局の命令で逮捕されたことを聞きました。国際民主女性連盟のユージェニー・コットン議長が、世界平和評議会の会議での演説で、リリー・ヴェヒター裁判について論評され、ドイツの平和の闘士に対する世界の全平和愛好婦人の連帯を表明しました。」

【写真：裁判文書に目を通すリリー・ヴェヒター】

シュトゥットガルトの裁判

米軍事法廷が開かれる満員の小さな部屋でジョンソン裁判官が審理を開始した 9 月 25 日の朝は、雨交じりのどんよりした天気であった。彼はまず米国の裁判形式に則って、起訴によって罪があると感じているかどうかリリー・ヴェヒターに尋ねた。

リリー・ヴェヒターはこの質問に、はっきりと「いいえ」と答えた。

それからティネレロ検事が、証人尋問を始めるよう求められた。最初の証人として、ハイデルベルク、ロートマン通り 12 番地のゲオルク・ルンツが、検事から証人台に呼ばれた。

営庭でのように訓練されて、あからさまな質問に、この証人はこう答えた。

「はい、リリー・ヴェヒターはハイデルベルクの集会で、アメリカ兵が民間人を虐待・拷問したと話しました。……はい、彼女は、もっぱらアメリカがこの残虐行為を犯したと述べました。……はい、彼女の演説は、アメリカ国民に対する敵意でいっぱいでした。」

検事と証人のゲームはよく練習してあって、裁判官が一度、証人は事実を述べるにとどめ、意見や感想は述べないようにと警告するほどであった。

この証人の尋問がおもしろくなったのは、弁護人が反対尋問で証人に質問してからだった。それで明らかになったのは、証人が 1945 年、ソ連占領軍に引き渡され、最近ハイデルベルクに戻ってきたことだ。

検事は慌てて、証人のばつの悪い印象を拭おうとした。「それはこの審理には関係ありません！」と、彼は叫んだ。

彼は、証人の個人的事情を明らかにすることが審理に非常に有意義だということを受け入れざるを得なかった。なぜなら、そこから信頼性を結論づけられたからだ。

弁護人は、証人に集会に参加したきっかけを聞いた。・・・彼は何らかの契約に基づいて行動したのだろうか？

この質問に答える時、証人は不安になり始めた。結局彼は、集会の14日後、裁判所にこれに関する報告書を提出したことを認めた。

この回答は裁判官にとって、ばつが悪い以上のものであった。彼は脅すように質問に割って入り、米国の裁判所では審理の前に一切の声明や報告が提出されることはないと言証人に注意した。

それで証人は修正しなければならなかった。・・・彼は、文書による報告書を求めてきたあるアメリカの事務所にそれを提出したと言った。

そこで弁護人は、証人がすでに頻繁にこの事務所から報告書を作成するよう求められているのか、彼はそれをほとんど職業のようにしているのか知ろうとした。

「証人が一般的に何をしているかは重要ではありません」と、検事が証人を助太刀しようとし、裁判官は、多少ためらいながらも、この質問への検事の異議申し立ては正当だと認めた。

本題についてこのまさに「古典的」証人は、弁護人の質問で窮地に陥って、アメリカ当局から金を貰ったスパイであることを認めざるを得なくなった。彼は、リリー・ヴェヒターが、平和を守る必然性について一人で1時間半喋ったハイデルベルクの集会で、朝鮮での見聞に関して報告するのには20~30分くらいしか使わなかったことを認めた。次の証人についても、同じイメージが浮かび上がった。彼らは皆、検察が聞きたがるような報告をしたのである。

演出は見事にうまく行った。ほとんど、質疑応答が前もって綿密に打ち合わせられていたかのような印象だった。

証人は「リリー・ヴェヒターは朝鮮での体験を報告する冒頭、朝鮮戦争が6月25日ではなく23日にもう始まっていたと言いました」と述べた。

すかさず検事が興味深そうに「どのような形で、それが6月23日に始まったのです？」と割り込んだ。

フィードラー証人はこの質問に、「6月23日、アメリカの戦車・飛行機の支援を受けた韓国軍が、北朝鮮に侵入しました。そして6月25日、韓国側の攻撃を防衛する北朝鮮が、韓国とアメリカの戦車を、国境を越えて撃退し、防衛の中で韓国に進撃したのです」と答えた。続けて「根拠としてヴェヒターさんは、李承晩韓国大統領の往復文書を挙げました。その中でアメリカ側は、蒋介石とアメリカが支援して北朝鮮を襲撃することを提案したのです。」それから証人は、リリー・ヴェヒターの演説全体が、在独米軍を中傷することだけを狙っていたと断言した。

「朝鮮の外の占領軍について、そもそも話があったのですか？」と弁護人が尋ねた。

証人はおずおずと「思い出せません」と言わざるを得なかった。検察が期待したように問答ゲームがうまく行かなくなると、検察は、メルツ証人の場合のように、アメリカの訴

訟法のあらゆる規定を無視した。検察官は宥めるようにこの証人に「メルツさん、ハイデルベルクの集会で何が話されたのか思い出せないのなら、あなたがこの審理でとったメモを、私が質問する際ご覧になってもいいですよ」と話しかけた。

だがここで裁判官が一嫌々だとしても一異議を唱えた。「証人は記憶していることからお話しください。証言の際、メモは使えません。」

記憶があいまいにもかかわらず、結局この証人は検察官が知りたいことをすっかり満足させることに成功した。もっとも彼は、弁護側の質問に、リリー・ヴェヒターが決して聴衆に、在独米軍に不利なことをするよう求めたりはしなかったと認めた。

「私は、ヴェヒターさんの説明は全部、もっぱら朝鮮に関するもので、少しもドイツの状況に結びついていなかった感じがします。」

検察側の証人がどんなものかは、ハイデルベルクのハンス・シュレーダー証人の尋問から非常に明白になった。

弁護人：「シュレーダーさん、あなたは政治的な利益団体のために、リリー・ヴェヒターが喋った集会に行ったのですか？」

証人：「いいえ。」

弁護人：「あなたは自分がヴェヒターさんの政敵だと思われますか？」

証人：「そう言えるでしょう。」

この答えに対して傍聴席を捕えた憤激を、裁判長は、同じことが繰り返されれば傍聴人を退廷させると脅して抑えつけた。

だが既に検察官は飛び上がって、不用意に答えられてしまった質問に、証人の政治的態度はこの審理と何の関係もないと異議を申し立てた。

自分の不用意さの埋め合わせをし、検察に気に入られるつもりで、証人は問わず語りに「この集会への参加を求めるポスターには、〈リリー・ヴェヒターさん、SPD〉と書いてありました。新聞には反対に、ヴェヒターさんが SPD 党員でないと書いてありました。この新聞報道に基づいて私は、ヴェヒターさんがかなりずっと左だと考え、反〈左翼〉の私は当然政敵であるわけです。」

弁護人：「あなたはすでにヴェヒターさんの政敵として、集会を訪れたのですか？」

ここで裁判官が割り込んだ。「本裁判がこれらの質問と何の関係があるかわからない。証人が集会に行った際抱いていた偏見は、とにかく、ここで議論している出来事の判断に無意味だ。」

弁護人は裁判官に、証人が事前に検察官から、ヴェヒターさんの演説にどんな印象を持ったか質問されていたことを教えてやらなければならなかった。この質問に彼は答え、その答えの評価にとって、どんな立場からこの判断をしたのかがとにかく決定的なのだということである。

そこで証人は、検察官と裁判官にとにかくにも気に入られたいとジリジリ思った。「私がこの集会に参加したのは、招待のポスターに、リリー・ヴェヒターさんが SPD 所属と書いてあり、SPD は民主主義政党だからです。だから、政敵としてそこに行ったわけではありません。」

弁護人：「でもあなたは、集会の前に、ヴェヒターさんが SPD 党員でないと新聞で読んだと言いましたね。」

証人：「それは新聞の短いメモにすぎません。私は新聞に書いていることを何でもかんでも信じているわけではありません。」

傍聴席で起こった笑いを、裁判官は気に留めなかった。シュレーダー氏が証言台を離れると、裁判官だけでなく検事もほっと一息ついた。

何時間も何時間も、リリー・ヴェヒターは初日、このやり取りを聞いていなければならなかった。しかも、アメリカの裁判方式に従って、自分が一言も喋ることは許されなかった。

次の審理の日、古いメロディーが続いた。

証人たちは繰り返し、弁護人の質問に対して、リリー・ヴェヒターが在独米軍について一言も語らなかつたと認めざるを得なかった。ルードヴィヒスブルクの集会でも、ハイデルベルクの集会でもそうだったのである。

検察側にとって、リリー・ヴェヒターが集会で実際に何を言ったのかを解明するのがあまり重要でないことは、ルードヴィヒスブルクの集会について陳述したイグナス証人の尋問で明らかになった。

弁護人：「ルードヴィヒスブルクの集会では、平和の維持について話が出ましたか？」

証人：（ためらいがちに）「もうわかりません。」

弁護人：「それが肝腎な点だったのではないですか？」

証人：「おそらく最も重要だったでしょう。でも、平和という言葉が口から出たかどうかは、もう覚えていません。」

弁護人：「開会の時に、平和が語られましたか？」

証人：「もう思い出せません。でも、平和という語を含んだ横断幕が取り付けられていました。」

弁護人：「ヴェヒターさんは、朝鮮での惨劇を語ることで、ドイツの平和を守ろうと警告したのではないですか？」

検事が興奮して立ち上がり、この質問に異議を唱えた。裁判官は、弁護人から出された質問が明瞭でないと認めた。

そこで弁護人は質問をこう変えた。「ヴェヒターさんは、朝鮮戦争の描写にかこつけて、はっきりと平和を警告したのではないですか？」

再び検事が、この質問の拒否を求めた。だが今度は裁判官は、そうしたいと思っても、検事の意に沿うことはできなかつた。検事の異議申し立ては却下され、証人は、かなりつつかえながら曖昧に説明した。

「ヴェヒターさんは、演説の最初と最後に、そのようなことが世界でもう起ってはならず、だからこそ平和を守らなければならないと言いました。」

弁護人に強く迫られて、証人は、リリー・ヴェヒターが演説の終わりに、ようやく平和が到来し、この恐ろしい戦争が終わるよう、諸国民が結集すべきだと訴えたことを認めざるを得なかつた。

次に尋問された証人、ヒュー・ヴァイルは、検事に気に入られたいと徹底的にやった。彼の報告はあらかじめ用意されていた。それだけに、証人が弁護人の質問に対して、自分がアメリカ当局の情報部に雇われていて、「仕事として」—とは彼の表現だが—集会に参加したと認めたのも不思議ではない。もちろん、検察に起訴に必要な資料を調達するための

行為である。

集会の間にとったというメモを示すように弁護人から求められると、彼は決まり悪そうに、もう持っていないと説明せざるを得なかった。

弁護人：「いったいどこにあるのですか？」

証人：「保安上の理由から、どこにあるか言いません。」

弁護人：「私の質問に答えてください！」

すると検事がかばうように証人の前に立った。だが結局証人は、それをアメリカ当局の情報部に渡したことを認めるしかなかった。そこで弁護人は、メモが、証人が裁判で証言したことと一致しているのかどうかを怪しんだ。

即座に検事が立ち上がった。「私はここで短い説明をしなければなりません。ヴェヒターさんが使った正確な言葉が問題であるとするなら、南西放送がリリー・ヴェヒターさんの演説を完全に録音したことを指摘できます。私は、録音テープをこの裁判で証拠として使えることを放送局と決めました。」

次の証人、フリードリヒ・トマンスキも、アメリカに雇われたスパイで、ぬらりくらりと言い抜けようとした。だが、弁護人の質問に、自分が「職業として他の人物と知り合いになることに取り組んでいる」と認めざるを得なかった。

審理3日目の9月27日、ついに弁護人が発言した。

アメリカの起訴代表者は、証人尋問後、自信満々という感じではなかった。なぜなら、突然フランクフルトからマッコリー検事総長が現れ、自分で訴追を指揮しようとしたからだ。弁護人が次のように述べたのも、それだけ正常なように見える。

弁護人であるグレー弁護士は、検察側証人の尋問を通して、起訴が不当になされたことが既に明らかだという立場に立ちます。リリー・ヴェヒターさんは、起訴状を通じて、連合軍占領当局の軍隊への敵対行為のみが非難されています。しかし、検事総長が述べたところでは、被告が何らかの形で在独連合軍を不利にしようとしたことはどこにも認められないのです。

リリー・ヴェヒターは演説で、もっぱら朝鮮での米軍の状況を扱いました。しかし、朝鮮の米軍は、在独米軍と一切関係がないのです。さらに、—おそらくこれが最も有意義だったろうが—検察は証人を通して、リリー・ヴェヒターが全く真実でないことを述べたと証明できませんでした。

したがって、起訴は破綻したのです（と弁護人は強調した）。

しかしもし裁判所が別の見地に立つのであれば、検事自身が証拠として提出したというテープを法廷で流すことにより、リリー・ヴェヒターの演説の正確な文言をまず確定する必要があります。

それにしても、もし弁護側が、ヴェヒターさんの言の正しさを証明する義務があれば、と思います。しかも、彼女と一緒に朝鮮に旅行した代議員だけでなく、氏名・住所を詳しく申し立てられる朝鮮のさまざまな民間人もここで証人として聴取することを通して、です。

検察側の決定的な矛盾の後、裁判官は、明らかに検事総長の出席に強く影響されて、リ

リー・ヴェヒターがハイデルベルクとルードヴィヒスブルクで行った演説の内容が、これまでの証人尋問で明らかであり、テープの再生は必要ないと述べた。真実の証拠に関しては、彼は、リリー・ヴェヒターの主張が正しいかがこの裁判で争われているわけではないとして、その指揮を拒否した。

次の両公判日で、今度はリリー・ヴェヒターの弁護側の証人が証言することになった。彼らはあらゆる身分の出身だった。技術者、医師、主婦、労働者—彼らは皆、朝鮮で見た残虐行為に関するリリー・ヴェヒターの報告の意味が、ドイツが朝鮮と同じ運命を辿らないよう、平和を守るためにあらゆる手を尽くさなければならないという警告以外の何物でもなかったと証言した。

反対尋問で検事総長が陰險な誘導尋問をしたにもかかわらず、彼らは皆、リリー・ヴェヒターにとって一番嫌なのは憎悪や敵意の種をまくことで、逆に平和の維持を訴えることだけが重要だったという立場を変えなかった。

ルードヴィヒスブルクからの証人、アンナ・クンデは、リリー・ヴェヒターの演説が呼んだ反響を、偽りない論評で次のようにまとめた。「私たちはその後議論をし、これまで起こったこと全てにきっぱりけりをつけ、第三次〔世界〕戦争の悲慘が人類に及ばないよう全力を尽くさねばならないという点で一致しました。」

証拠調べの最後に、弁護人は、ルードヴィヒスブルクで録音されたテープを、リリー・ヴェヒターの演説内容の証拠物件として裁判所が聴取する申請を繰り返した。

「私は既に最初に、この案件で真実であるかどうかは議論にならないと言いました。その種の調査に関わりたいのなら、証人が登場可能になるまで、私たちはここに何か月も何年も座っていなければならないでしょう。それから、検察当局が反対証人を呼んで、弁護側証人に反証しようとするわけです。言ったように、この裁判で、真実か真実でないかは議論にならないのです。」これが裁判官の答えだった。

奇妙なことに、検察側は、彼らが自ら証拠物件として提出したテープを裁判所がなお聞くのを全力で阻止した。明らかに彼らは、収穫物が納屋にあると思ったのだ。

裁判官は唯々諾々と検事総長の希望に従い、弁護側のこの申請も却下した。

弁護人・検事の弁論の後、法廷は10月4日まで延期となり、この日に判決が言い渡されることになった。

この短い期間を、リリー・ヴェヒターは、ラシュタットの夫のところで過ごした。判決言い渡しがあっても、彼女は全く不安になることがなかった。彼女は、自分が義務を果たしたと分かっていた。自分が歩んだ道が正しいと分かっていたのだ。

この落ち着いた確信のうちに、1951年10月4日、彼女は、アメリカ人裁判官の判決を受け、法廷に入った。もともと小さな法廷は、人で溢れていた。皆緊張していた。数週間以来提起されていた問題への回答が、ついになされるのだ。アメリカ人は、リリー・ヴェヒターを、検察が求めるようにあえて刑務所送りにするだろうか。

判決言い渡しに同様にシュトゥットガルトに来た検事総長は、そう確信しているように見えた。裁判官が入廷するまで、彼は助手と、大声で厚かましい冗談を言いあっていた。

廷丁がいつものように3回ハンマーでたたくと、法廷内は静かになった。決定を知らせるのを躊躇しているかのように、暫くの間裁判官は、無数の書類をめくっていた。

ついに彼は、何度も中断しながら、詳論を述べ始めた。彼は、ドイツの法秩序に沿って、

まず判決を述べるのではなく、長々とした詳論で、どの程度「被告」が有罪かを述べ始めたのである。

「被告は、起訴状で主張されているように、2つの集会で、米兵が朝鮮の女性や子どもに対して犯したとされる残虐行為について報告したことを通じて、連合軍の損害に積極的に加担しましたか？」

そしてリリー・ヴェヒターは、起訴状が非難するように、北朝鮮の女性や子どもに米兵が犯したとされる残虐行為に関する主張を通じて、在独連合軍に対する非礼で敵意に満ちた態度をとりましたか？」

これが、法廷が明らかにすべき唯一の問題だと、ヤンキーは声を張り上げて続けた。被告の主張が正しいかどうかは、やはり問題ではないのだ。

何が真実で、何が真実でないかを確定することは、アメリカ人の判決には意味を持たなかった。なぜなら、米国では、他の帝国主義諸国と同様、階級裁判が「正しさ」を語るからだ。それは、ソ連や人民民主主義諸国、DDR（東独）で行われているように、人民が思う真実や法のために判決が下されるのではない。帝国主義に資する米国司法の決定は、いかなる場合も人民に敵対的だ。

裁判官は、リリー・ヴェヒターが話をした集会在公的なものだったという事実について延々と話をした。誰も、その反対のことを述べていないのに！

そしてついに裁判官は、弁護側の姿勢に言及した。「被告の弁護は、ハイデルベルクとルードヴィヒスブルクの集会で、彼女が直接間接に、在独駐留連合軍に関連づけていないという主張に基づいている。」

裁判官は実際に、ドイツから何千マイルも離れた米兵の態度に対する批判が、ドイツに駐留する米軍部隊への非礼な態度だと主張したいのだろうか？ そう、彼はそうしたいのだ。彼は、帝国主義のために、ウォール街から全世界に配置されている米兵を一体のものと見ているのだ！

朝鮮のアメリカ人に向けたいかなる論評も、在独部隊に対するのと同じくらい敵対的なのだ。

そこで裁判官にとっては、リリー・ヴェヒターが話をした集会在「平和を守る闘争」というスローガンで行われ、彼女が演説で繰り返し、自分の全力を平和を守ることに向けていることを強調したという事実を素通りすることが容易ではなくなった。

結局彼は、幾つもの証言で裏付けられたこの事実を、手を振って却下した。彼は、証拠調べに関心があるわけがない…。彼は、人々が彼を「裁判官」にする信頼が正当化されるための証拠を示さねばならない。

確かにリリー・ヴェヒターは、どんな理由、どんな事情から朝鮮行きに参加したか繰り返し強調し、検察側のどの証人も、彼女のこの説明に少しも反駁できなかった。ところがアメリカ人裁判官にとって、それは知るところではなかった。彼には、リリー・ヴェヒターは、「戦争と対立を目指す外国勢力の道具」なのであった。

「平和愛好の装いに隠れて、あなたは、殺戮と流血行為を報告した。」実際になぜ彼女がそうしたのはかは、帝国主義階級司法の代理人の知ったことではなかった。

彼は、リリー・ヴェヒターが主にアメリカ兵の残虐行為について報告したことを厳しく批判した。

朝鮮における蛮行においてアメリカ人が抜きんでていたのだから、リリー・ヴェヒターが、国連の印でそこで戦った他の外国軍隊よりも米軍について多く語らねばならなかったのは、必然であった。

裁判官はさらなる論述で、被告に対する敵対的な態度をもはや隠さなかった。ずっと彼は証拠調べを忘れ、証人が述べたことを忘れていた。ところが今になって、「ハイ・ポリテイクス」という漠然とした話題に取り掛かろうというのだ。確かに裁判官は、法律の規定に則って、公判で証人が述べた事実だけに基づいて意見を形成した。だが、この裁判で何が法律上の規定なのだろうか？

確かに検事総長は公判で、朝鮮での戦争勃発の責任をだれが負うかというリリー・ヴェヒターの説明に反論するのを、慎重に避けた。だが、それが裁判長に関係したのだろうか？彼は、リリー・ヴェヒターが集会で、朝鮮での戦争が米軍に支援された韓国軍によって始められたという証拠を示したことを、特に忌まわしいと呼んだ。「この主張で、被告は真の顔を示している！」

最後に裁判官は、リリー・ヴェヒターが、起訴された4点すべてにおいて有罪だときっぱり述べた。

深い動揺が法廷を通り抜けた。できるだけ速く終わらせるかのように急いで裁判官は、彼の前のある書類を脇に押しつけた。彼はリリー・ヴェヒターに、判決を言い渡されるために立ち上がるよう求めた。

仮借のない声で彼は、「第一の起訴に基づいて禁錮4か月と罰金7500マルク、第二の起訴に基づいて禁錮4か月と罰金7500マルク、第三の起訴に基づいて禁錮4か月と罰金7500マルク、第四の起訴に基づいて禁錮4か月と罰金7500マルクの有罪を言い渡します」と続けた。

「第一と第二の起訴による自由剥奪刑は、同時に執行されます。第三と第四の起訴による自由剥奪刑も、同様です。罰金刑についても、第一・第二の起訴と、第三・第四の起訴の分が重なります。したがってあなたは、合計禁錮8か月と罰金1万5000マルクの有罪です。」



【写真：リリー・ヴェヒターと夫、およびプリット氏・カウル氏の両弁護士】

最後に裁判官は、リリー・ヴェヒターが判決の法的確定までラシュタットを離れず、2名以上の人物と一緒に話もしない義務があると指示した。これによりリリー・ヴェヒターに対してアメリカの戦争放火魔とドイツの手先が行った訴訟手続きの第一段階が終わった。

フランクフルト（マイン）での控訴審を前に

この判決は、全平和愛好世界に、筆舌に尽くしがたい憤激を引き起こした。

民主法律家連盟は、リリー・ヴェヒターの真実を求める闘いを支援することにした。イギリスの老練弁護士、プリット会長は個人的に、フランクフルト・アム・マインの米控訴裁判所でリリー・ヴェヒターを弁護すると申し出た。私は、副弁護人として彼の助手となった。

11月に私たちは西ドイツで落ち合った。プリット氏はロンドンから、私はベルリンからやって来て、書面による控訴理由を確定した。

我々が提起した控訴に関する口頭弁論の日程が、1952年1月10日と決まった。我々がリリー・ヴェヒター—彼女は制限を課されていることから、このフランクフルト行きに米当局の特別許可を必要とした—と一緒に米控訴裁判所の法廷に現れると、そこは、傍聴席を確保しようと、既に朝7時から並んでいたあらゆる身分の女性たちで溢れかえっていた。

10時直前、マッコーリー米検事総長が法廷に入った。一見して不安げに、彼は、イギリスの流儀に従って銀髪のかつらとガウンをまとったプリット氏に挨拶した。

10時きっかりに、西独最高の米裁判官、クラーク氏が開廷を宣言した。

最初は、アメリカの訴訟手続きを開く際欠くことのできない形式に関するものであった。そこで私には、落ち着いて法廷の雰囲気之感銘を受ける時間ができた。必須のアメリカ国旗を背に3人の裁判官がいて、裁判長の両脇にカール・W・フルジューム氏とI・ロビンソン氏が陪席判事として座っていた。

一段高い裁判官席のすぐ下に、アメリカの法廷では不可欠の速記タイピストがいて、速記タイプライターを自動装置のように操っていた。

傍聴席の仕切りの前に、横長の机があり、そこに内外の報道機関代表が陣取った。既に1月9日、これらメディア代表は、フランクフルト平和委員会が招集し、イギリスの老練弁護士、プリット氏のほか、控訴審のためロンドンから西ドイツに来ていた国際民主女性連盟のイギリス代表、モニカ・フェルトン博士も参加した集会に顔を出していた。

裁判で、プリット氏が発言した。一切の誇張なしに、彼は一文一文、一審判決の不当性を述べた。

彼はまず、一介のドイツ女性が、自分が朝鮮で見聞きしたことを報告しただけで裁判で申し開きしなければならないことを指摘した。すぐに裁判長が遮った。「プリットさん、あなたは、被告が報告した残虐行為を、本当に自分の目で見たとお思いですか？」

プリット氏は答えて、判決の最大の弱点を巧みに指摘した。「シュトゥットガルトでの米地方裁判所での審理で、被告が述べたことが真実でないことを示す証拠は、全く出ませんでした。彼女の報告の正しさを示す証拠を提出することも認められませんでした。しかし、この裁判の意味を考慮すると、弁護側はなおこの点に戻る必要があります。」

それからイギリスの老練弁護士は、長めの陳述でまさに古典的な方法で、起訴の根拠となった法律第14号がそもそも意味することとその犯罪構成要件が意味することを述べた。

彼は、リリー・ヴェヒターがルードヴィヒスブルクとハイデルベルクの集会にそもそも参加したというだけで、検察側はそれらの集会がどんな目的で呼びかけられたのか証人を通じて確認させる労をとることもせず、一審の裁判官が彼女を有罪とした内的非論理性を立証した。

「でも実際、シュトゥットガルトで弁護側が提出した証拠物件からは、これらの集会が本当に平和促進のためだけに呼びかけられたことは明らかです」と、プリットは非常にエネルギーに続けた。「提出された証拠は、ルードヴィヒスブルクとハイデルベルクの集会で、違法な目的が立てられたという結論を決して許さないのであります。」

またもや裁判長が遮った。「プリットさん、シュトゥットガルトの裁判官は、リリー・ヴェヒターさんが犯罪行為を犯したことを確定し、ヴェヒターさんの本当の行動から彼女の意図も推論できた、ということではないですか？」

プリット氏は鋭く反論した。「もしそうなら、シュトゥットガルトで一いささかありきたりの言葉遊びをお許しください—自分の靴紐を前に引く、つまりできもしないことをしたことになります。なぜなら、法律第 14 号によれば、違法な集会が開かれないうちは、違法行為は何もないからです。難しいとは思いますが、もし一審判事の考えに従いたいのなら、ヴェヒターさんの演説によって、もともと合法的な集会が違法になり集会が違法になったので、ヴェヒターさんは集会参加の廉で有罪だ、というようにならなければなりません。」

プリット氏は裁判長に向かって、「この種の結論が法律に背くだけでなく、内なる非論理によって誤りが証明されていることを示すのに、さらに一言述べる必要はないでしょう」と言った。

裁判長はこの確認に何も反駁しなかった。彼は黙って書類をめくった。

イギリス人の弁護人は、リリー・ヴェヒターが完全に合法的な集会で、連合軍隊について何も不利になることを述べなかったと力説した。「リリー・ヴェヒターさんは、朝鮮で起こったことについて話したのであって、ここドイツにいる軍隊についてではありません。私の考えではこれは、この裁判で考慮すべき最も重要な点です。シュトゥットガルトの審理でどの証人も、リリー・ヴェヒターさんが、ドイツに駐留するアメリカ占領軍には一言も言及せず、朝鮮での米兵の行為について語っただけであることを確認せざるを得ませんでした。朝鮮における米兵の態度に関する報告を通じて、ドイツにおける米軍部隊が不利をかこつとは、いかにも不可解です。

もし一審判事の見解に従うなら、必然的に次は、アメリカ自体で支配的な社会状況に関する悪評をあえて喋ったドイツ市民を、ドイツに駐留するアメリカ部隊に不都合になるので、この法律第 14 号で処罰しなければならなくなるでしょう。」

それからプリット氏は辛辣に、シュトゥットガルトの判事が、できるだけ高い罰金刑を科す必要から、法律が定めた最高刑を越えたことを立証した。

最後にイギリスの老練弁護士は、リリー・ヴェヒターが演説で、在独米軍を誹謗したり何らかの不利益をもたらしたりする意図が全くなかったことを、完膚なきまで論述した。「もしヴェヒターさんが、自分が再点検した残虐行為について報告したのなら、その種の残虐行為を防ぐのに戦争を避けなければならないということを示すためだけに報告が行われたのだから、その行動に罰せられるべきところは何もありません。」

陳述の最後にプリット弁護人は検察に向かって、「シュトゥットガルトの判事は、リリ

一・ヴェヒターさんが正しいと思ったことを喋ったと理由で彼女を有罪にしました。この有罪判決は、自由な言論の権利をズタズタにしてしまったのではないのでしょうか？ それを守るために、アメリカは参戦したはずです。この判決は、最も原初的な民主的権利の抑圧を示しています。ドイツにおける民主主義が生きられるよう、一審判決は破棄される必要があります。」

イギリスの老練弁護士、プリット氏は、午前中いっぱい話をした。難しい、したがって時に抽象的な法的問題—特に法律第 14 号の吟味に際して扱わざるを得なかったが、法律の素人には縁遠かった—にもかかわらず、傍聴席の緊張感は少しも緩まなかった。審理初日の公判は、私が第二弁護人として発言した。

まず、朝鮮と朝鮮に駐留するアメリカ兵による残虐行為に関するリリー・ヴェヒターの報告が真実かどうかという問題が調べられた。「興味深いことに審理後半に自から起訴を主張した検事総長は、米兵の蛮行に関するリリー・ヴェヒターさんの報告に反論しようとしませんでした。反対に彼は、被告が自分の申し立てたことの真実性を自分で証明できることにきわめて異様な—こう言わざるを得ないのですが—激烈さで反対しました。シュトゥットガルトの審理で弁護側は二度、リリー・ヴェヒターさんが二つの集会で行った報告が真実であることを証明する申請をしましたが、二回とも却下されました。一回は、その種の申請を許可するには、何週間も何か月も審理する必要があるという、気を動転させる理由によってです。裁判官が何週間も何か月も仕事するというのは、私の見方では、公正な判断を下すためであれば、決して過重ではありません。」

この瞬間に裁判長が、「ヴェヒターさんは、自分の報告が真実であると自ら主張しましたか？」と遮った。

「もしそうでなければ、敬愛するイギリスの友人、プリットさんも私も、あなたの前に立つわけがないのです！」裁判長は明らかに苛立っていた。この苛立ちを抑えるのに、彼は、高慢な叱責するような調子で喋る以外思い浮かばなかったのだ。

「カウル博士、傍聴席よりも法廷に向かって話をされるよう求めます。」

すると、シュトゥットガルトの審理で演じた役回りとは反対に、実に自制した印象を与えている検事総長は、リリー・ヴェヒターが求めた真実性の立証に対するきわめて異様な抵抗が綿密に再点検されるのを受け入れた。

「検事総長のような国民を代表する人物が、同じ国民同胞がおぞましい犯罪を行ったという主張の正しさを吟味するのを全力で阻止するというのは、いかにも奇妙ではありませんか？」

私はドイツ人で、ドイツであることが誇りだとはっきり申し上げます。しかし、この誇りから私なら、ドイツ人がドイツの名で残虐行為をしたという主張がきわめて綿密に再点検されることを迫るでしょう。もし抵抗すれば、この犯罪を隠蔽する、つまり私を彼らと同一化する疑念に晒されるでしょう。

裁判官の皆さん、皆さんの最も困難で最大の課題は、被告が残虐行為をしたと主張する人々と意識的・無意識的に同一化するのを避けることだと思います。この主張の正しさを吟味するのに抵抗すれば、その姿勢と被告への有罪を通して、米兵が実際に朝鮮で行った蛮行と自己同一化することになります。」

裁判長は、唇を噛みしめた。そして「被告が有罪かどうかという問題にとって、彼女が

報告の際、それが敬意に反するはずだと分かっていたかどうかだけが決定的なのではないですか？」と口を挟んだ。

「裁判長、真実がどのように敬意に反したり非礼でありうるのでしょうか？」

「カウル博士、真実は人を傷つけるとしばしば言われます。国家が、真実によって傷つけられるのを禁じたければ、相当の法律を公布する権利があるのではないですか？」

「そうなると国家は、いかなる風習・道徳上の基礎をも失うことになると思います。私は、真実を述べることを禁じる法律など知りません。真実をめぐる闘争は、人類そのものと同じくらい古い歴史があり、何らかの形でそれ自体中傷でない真実を述べた者が、どの程度違反行為を行ったとしようのかは、法律よりずっと高い次元、つまり道徳的次元から精査する必要があると思います。

私はこの質問にノーと答えますし、私の立場は一般に妥当する法律観と一致すると思います。そうでなければ、昼休みにフランクフルト新聞で、バイエルン州知事自身が、幾つもの例を引き合いに出しながら、ある意見書で、在独アメリカ兵の悪い振る舞い・素行について苦情を述べた記事を読むこともできなかつたのではないのでしょうか？」

結局、シュトゥットガルトでリリー・ヴェヒターを訴えたやり口全体が綿密に再点検されることになった。裁判官は被告に対して先入観を持っていたのだろうか？ それが問題だった。もし先入観があつたとすれば、シュトゥットガルトでリリー・ヴェヒターに言い渡された判決は、既にこの理由から棄却となる。

判決理由書をじっくり読むと、それが、証人尋問が何の手がかりも提供せず、まさにでっち上げられたことに基づいていることが確認できる。

シュトゥットガルトでは、問題となったリリー・ヴェヒターの演説の文言を、証言を通して「再現」しようとし、この文言への疑念を拭い去るのに唯一適切な証拠物件を、何度も提示されたのに使わなかつた。アメリカ検察当局が存在すると主張し、弁護側が何回も再生を求めたテープが問題となった。この申請は、検察の緊急要請で却下された。同じ検察が審理冒頭、そのテープが、被告が行った演説の文言について情報を与えられると指摘したにもかかわらず、である。そこで、審理の対象には、演説全体ではなく、何が演説の目的なのかわからない—と理性的な人間なら認めざるを得ない—、恣意的に抜き出した断片だけになった。

つまりシュトゥットガルトの判事は、被告の演説の正確な文言を知らず、またそれを知ろうともせずに、判決を下したのである。

判決理由で彼は、審理全般を通じて全く話題にならなかつたことを確認した。何の良心の呵責もなく「被告は、戦争・征服に資する勢力の道具として、その委託を受け行動した」と断定したのである。判事はいったいどこからそれを知ったのか？ ヴェヒターさんが何らかの委託を履行して、疑わしい演説を行ったということについて、証人が訊問されたりしたのか？ シュトゥットガルトの審理では、この点について何も語られていなかった。

いかにしてシュトゥットガルトの判事は、被告をひどく貶める判決に至つたのか？

この疑問に対して、答えは一つしかない。判事は、法律が求めるように、提出された証拠物件に基づき、冷静で偏見なく合理的な省察に則つてではなく、リリー・ヴェヒターに対する純粋に政治的な先入見から判決を下したのである。

しかし、裁判官が先入見を持っていたら、彼が指揮した裁判、彼が下した判決は、適法

でないのではないか。

「さて、シュトゥットガルトでの被告に対する裁判手続きが適法に行われなかったことの最後の論証になります。ここで、朝鮮における敵対関係の責任が誰にあるかという問題に関して判事が判決理由に書いた事実の確定が問われます。」

裁判長は、衝撃を受けたように縮み上がった。「それが本件と何の関係があるのですか、カウル博士。」

「裁判長、その質問は私ではなく、先の判事になさってください。彼はこの質問を投げかけ、判決理由書で綿密に扱いました。それゆえ、弁護人としての私の義務が、それに立ち入るよう私に命じています。判事がこの問題を判決でどう扱ったかということこそ、彼がリリー・ヴェヒターに対して偏見を抱いていた最大の証拠であり、判決は適法でないからです。」

裁判長は何が何でも、朝鮮における紛争勃発の責任問題をさらに論議するのを阻止したかった。「誰が朝鮮で戦争を始めたか、この問題は、被告が連合軍隊に非礼で敵対的な態度をとったかどうかとは関係ないです。」

「裁判長、もしシュトゥットガルトの判事が判決理由でまさにこの問題を扱わず、そこからリリー・ヴェヒターさんに対する主な結論を導いたのでなければ、おっしゃる通りかもしれません。しかし実際はそうではなかったのですから、私は弁護人として先の判事が確定したことに向き合う義務があります。ですから、あなたの吟味は、原判決が適法だったかどうかを確定するのに非常に重要な意味があります。もし、文書に何も見つからないのであれば、177頁を開いていただけますか。そこで判事ははっきりと

『さらに、米兵に対する悪意と憎悪を広げようという被告の目的と意図は、彼女が問題の集会で、戦争が米国に支援された韓国が始めたという北朝鮮政府の主張を指摘したことで明白になった。』

と述べています。」

裁判長は度を失いそうになり、「カウル博士、何がしたいのですか？ 誰が朝鮮で戦争を始めたのか、今証拠を示そうというのですか？」と言った。

「それは難しいことではありませんが、ここでは、判事が審理を通じて少しも拠り所が示されなかったことを確定して判決を理由づけたことを示そうとしているだけです。そしてそれは、被告に対しシュトゥットガルトで行われた裁判手続きが不法だったことを証明しています。」

「どういうことですか、カウル博士」と、裁判長は懸命に自分を抑えた。「シュトゥットガルトの判事は、誰が朝鮮で戦争を始めたのか被告が語ったと述べただけです。その発言が正しいか間違っているのかについては、何も言いませんでした。」

「残念ながら違います。判事は判決で、アメリカの支援を受けた韓国が朝鮮の戦争を始めたという主張は誤りで根拠がなく、真実でないことが明らかになったと明確に確認しています。」

裁判長、お尋ねしますが、どこにその証拠が提出されたのですか？ シュトゥットガルトの審理でですか？ もしそこで提出されていたのなら、先の判事が利用できたでしょうに。でも証拠は全く提出されませんでした。審理全体を通じて、そのことには一言も触れず、どの証人もこの話題で尋問されませんでした。証拠を提出するのはごく簡単だったで

しょうに。」

裁判長は、机をドンと叩いて言った。「カウル博士、私は何度も、ここではもう朝鮮での戦争の責任問題については何も聞きたくないと指摘しました。必要に迫られれば、裁判長として私にあるあらゆる措置を講じて、この意志を重んじてもらうようにしますよ！」

「それでは私は、そのことについてなお何か言う状況にないですね。でも、証言聴取で少しも言及されなかった主張から被告への有罪を導くのが可能なのかをお尋ねすることは許されるのではないのでしょうか。」

裁判長は唇を噛みしめた。彼はおずおずと「それなら法律上の規定に適っていないでしょうね」と述べた。

「ということは、判決は適法でない確認に基づいていたとお認めにならざるを得ませんね。」

「ともかく私が否定できないのは」と言ってから、彼は少し間を置き、「先の判事がこの関連で間違いを犯したということです」と続けた。

裁判長のこのまさに強いられた告白は、傍聴席に深い動揺を引き起こした。それはまた裁判長に、どちらの側からであれヤジは絶対に許さないと怒鳴ることで、ばつの悪い状況から逃れる可能性を与えた。

「それをお認めいただいたことで、私の弁護人としての任務は果たせたと思います」と言って、私は午後まるまる要した陳述を終えた。

翌日 10 時ちょうどに審理が続けられた。今度は、検察側の代表、マッコリー検事総長が発言した。



写真：弁護人のプリット氏とカウル博士

彼はまず、イギリスの老練弁護士の前で、—おそらく丁重さからだけではなかったろうが—お辞儀を始めた。

それから彼は、弁護側の堅固な立場を揺り動かそうと試みた。つまり、被告が残虐行為の話をした朝鮮駐留の米軍が、ドイツに駐留する米軍とは同一でないという点である。

過去、連合国占領軍の一部としてドイツに派遣された何万人ものアメリカ兵の使命は、朝鮮で戦っている戦友の使命と変わらない。それゆえ、朝鮮でのアメリカ兵への攻撃は、同時にドイツでのアメリカ兵への攻撃

になる。「戦線はドイツから朝鮮に延びています」と彼の声が法廷に響いた。「この戦線の兵士たちには、戦場での弾丸だけでなく、彼らが共に生き共に戦わなければならない市民に対する敵意と中傷も当たるかもしれないのです。」

「被告には自由な言論の権利がある、ですと？ 私有財産、個人の自由、契約の自由、

自由な言論の権利、そう生存の権利そのものですら、どんな状況でも無制限の保護に値する絶対的な財ではないのです。その価値と、それに値する保護は常に、支配的な国家的必要との一定の関係性の中にあります。」

私は同じ台詞を、既に19年前、褐色の政党がドイツに氾濫した1933年に聞いたではないかと思った。

主張の真実性の証拠を示すのは、被告の権利のほうではないか？

「お笑い草です！ 被告の報告が正しいか正しくないかは、この公判にとっては、街角の演説家の演説が正しいか正しくないかと同じくらい意味がありません。そのお喋りという事実だけで、通りや広場での演説を禁じた条例に違反したのです。」

シュトゥットガルトの審理でテープを再生しなければならなかったのだろうか？ 「再生できる人が誰もいなかったのですから、履行不可能な要求でした。」

検事総長は、絶対誓えるというような身振りで「被告リリー・ヴェヒターは、自分が何を言ったのか正確に分かっていました」と大声で言った。

プリット氏は、薄笑いを浮かべて頷いた。だがそれは、アメリカ人検事総長の気には障らなかった。

「彼女の言葉からは、共産党宣言でおなじみの精神が窺えます。特にアメリカ、アメリカ人にとって聖なるものと対峙する精神です。」

リリー・ヴェヒターは、起訴された意味で罪を犯しました。したがって、シュトゥットガルトの判決を維持されるよう求めます。」

午後遅く、イギリス人弁護人がもう一度立ち上がった。アメリカ人検事総長の論告に反論するには、僅かの言葉で十分だった。

「敬愛する敵方さんは、」とプリットは眉をひきつらせて、「自分の立場を強めるのに、共産党宣言の精神を引用するのを正しいと考えました。私は、この宣言が、私たちが持つ最も人間的な文書の一つだろうとはっきり申し上げます。」

イギリスの老練弁護士は、その陳述をまとめて、シュトゥットガルトの原判決を破棄し、リリー・ヴェヒターを無罪とするよう、再度求めた。

法廷に流れた動揺は、彼の最終弁論が傍聴人に感銘を与えたことを裏付けた。時間が遅くなったにもかかわらず裁判長は、なかなか審理を終わらせなかった。他の裁判官にちょっと耳打ちした後、彼は最後に、法廷を無期限に延期し、判決は関係者に文書で送ると告げた。

弁護側の勝利ゆえ、裁判長がほとんど別の行動をとることができなかったとはいえ、この通告はいささか驚きだった。アメリカ人の法廷がいつ召集されるのか見通せなかったので、弁護側は、リリー・ヴェヒターがシュトゥットガルトの判事の指示により1951年9月7日以降服している個人的自由の制限を取り消す申請を出した。

見ものだったことに、米国人検事総長はいくらでも親切にふるまった。もちろん、この制約が取り消されるのに同意したのだ。

言を左右にしながら裁判長は結局、リリー・ヴェヒターがもはやラシュタットだけにとどまる必要はなく、どんな集会にも好きなように参加できると宣言した。

その晩、リリー・ヴェヒターと弁護人を迎えて、平和を愛好するフランクフルト市民が集まった。

だがリリー・ヴェヒターには、長い休暇をとる時間がなかった。その後数週間、彼女はハンブルクからミュンヘンまで、西ドイツ中で無数の集会で話をした。

当局はリリー・ヴェヒターを中心とするこの動きに、絶望的に抗った。集会は禁止され、この禁止を貫くため警察が動員されたが、徒労に終わった。

ドルトムント・エッセン・ニュルンベルク・ヴュルツブルクでのドイツの女性・母親に向けたリリー・ヴェヒターの訴えは、何千倍もの反響を呼んだ。アメリカは、法廷の措置を通じてリリー・ヴェヒターの口を封じられると信じていた。事実は反対だった。アメリカが彼女に対して起こした訴訟は、平和の維持と統一の強制というドイツ人の要求をアメリカ人の法廷自体にまで持ち込む可能性を彼女に与えた。

アメリカ人の控訴審は、判決を仕上げるのに7週間を必要とした。1952年2月29日、まるで体をなしていない形で判決が届けられた。

法廷は、リリー・ヴェヒターを法律第14号の第2条により罰する以上、控訴に基づき、一審判決を破棄せざるを得なかった。この関連で法廷は、イギリスの老練弁護士が公判で行った陳述に従った。

控訴審は、一審の証拠調べが、「サボタージュ、蜂起、転覆、その他連合軍隊に不利益を与える目的で」ルードヴィヒスブルクとハイデルベルクの集会が持たれたということの根拠とならなかったと認めざるを得なかった。それにより、法律第14号第2条で罰するのに不可欠の前提が崩れた。

第4条による控訴審判決は、その分無制限になった。シュトゥットガルトの判決が、西独アメリカ占領地区における言論の自由の権利を破壊したという弁護側の確認について、法廷は、米国人検事総長が述べた見地を取り入れた。

「私有財産、契約の自由、自由な言論の自由、個人の自由、そして生存の権利自体も、いかなる状況でも保護しなければならない絶対的な財ではなく、その種の権利の保護はむしろ、国家のその都度の状況による。」

この確認は、数多くの一最近アメリカでは当たり前になった進歩的人間への迫害に由来する一アメリカ自体の判例で証明できるということを通して、はっきりしなかった。

裁判官が、証拠調べでも根拠づけられなかった、リリー・ヴェヒターに対する個人的主張を通じて、偏見なき判決を下すことは不可能だと述べたという弁護側の異議について、控訴審は、リリー・ヴェヒターが北朝鮮政府の招待を受け入れたこと自体が既に、リリー・ヴェヒターが「暗黒勢力の道具」だという一審判決に盛り込まれた主張の正しさを示しているという大胆な論評で無視した。

一審でリリー・ヴェヒターの報告の正しさを証明することができなかったことを、控訴審は、次のような古典的論評で、全く問題ないとした。

「その場合、米軍は、自らを守る可能性なしに、いわば被告の立場に貶められたであろう。」

興味深いことに、裁判官は全員一致で判決を下したわけではなかった。むしろ裁判長が、アメリカの訴訟法を利用して、本筋から外れた立場を表明した。この事実は、アメリカ人がリリー・ヴェヒターに対していかに不安を抱いていたのかを如実に表している。クラーク裁判長は、どのみち他の裁判官の意見で判決が保障されていたので、心配なくそうできたのだ。

「ドイツは第二の朝鮮になってはならない！」

リリー・ヴェヒターは、シュヴェービッシュ＝グミュント近くのゴッテスツェルにあるヴュルテンベルク女性刑務所で懲役刑に服した。アメリカ軍事裁判所に刑の開始を申し出る1時間前、ドイツ民主女性連盟の一行が彼女を訪れ、団結と連帯のしるしに花束を手渡した。

100人以上の女性が、アメリカ軍事裁判所までリリー・ヴェヒターに付き添った。リリー・ヴェヒターが彼女たちとお別れをしている間、集まった女性たちは、裁判所前で怒りのシュプレヒコールを行った。「リリー・ヴェヒター万歳！」「リリー・ヴェヒターに自由を！」そうした声が繰り返し広場に響いた。

心のこもったお別れに感激し、しかし覚悟を決め、平和を守るという偉大な任務に仕えたという誇りを胸に、リリー・ヴェヒターは刑務所に入った。

ボン政府の厳格な指示に基づき、刑事囚に対する便宜が彼女には与えられなかった。それでも、彼女の素朴で飾り気のない本性と内なる確信は、刑務所職員も悟るところとなった。彼女の服役後に私がゴッテスツェルを訪れた際、彼女は、さまざまな女性看守があらゆる機会をとらえて彼女と話をし、彼女の闘いが事実誠実な全ドイツ人の闘いだと結局認めざるを得なくなったと報告した。

変わらぬエネルギーと行動力で、彼女は刑期満了後—そのことで彼女には1時間の猶予も与えられなかったのだ—、刑務所を後にした。



写真：1952年メーデーのデモで、ベルリン＝マルクス・エンゲルス広場のリリー・ヴェヒター

彼女は、真実のための闘争、平和維持のための闘争をたゆまず続けた。「ドイツは第二の朝鮮になってはなりません！」と、彼女はいろいろな集会で住民に呼びかけた。とりわけ女性・母親に対して、リリー・ヴェヒターは、子どもたちの命を心にかけるなら、一般戦争条約に反対し、ドイツ統一のために闘わなければならないと述べた。

今やアメリカは朝鮮で、細菌爆弾を投下し、ペストのような恐ろしい疫病が、平和を愛する朝鮮民衆の上に降りかかっている。もし平和を守るために全力を尽くさなければ、ド

イツもそれから免れないのである。

1952年、リリー・ヴェヒターはドイツ民主共和国に滞在した。私たちの再建に確信を抱き、女性がそれにいかに有意義に関わっているかを見るためにやって来たのだ。我々の祖国の首都、ベルリンで、5月16～19日に開かれたドイツ民主女性連盟の第4回全国大会に、リリー・ヴェヒターは来賓として出席した。ドイツ中から4000人の女性が派遣されたこの重要な大会は、統一と平和のための女性たちの闘いの強化一色だった。この大会が我が国の国境を越えて占めた大きな意義は、21か国から招待客が参加したことが示している。ドイツの女性たちはその闘いで一人ではなく、世界の平和を愛する女性が味方をしてくれた。ドイツ民主女性連盟は、1億3500万人を数える国際民主女性連盟の会員である。平和のための闘いにおける女性・母親たちのこうした広範な力は、これまで歴史上見られなかった。我が祖国の平和にとって極めて重大な危険が差し迫った時期に開かれたドイツ



民主女性連盟第4回全国大会は、ドイツ民族の幸福、我が祖国のために全力を傾け、新たな戦争が我々の町や村を荒廃させ、死と破滅が我が民族に降りかからないようにしようとするすべてのドイツの女性・母親の勇気と決意を表すものであった。若き平和の闘志、フィリップ・ミュラーが〔ロベルト・〕レール〔内相〕の雑兵の弾丸の嵐に倒れ、他の多くの愛国者も重傷を負ったエッセンの血の日曜日は、前兆となった。

【写真：ドイツ民主女性連盟第4回全国大会に敬意を表して、スターリン大通りでベルリン再建に携わるリリー・ヴェヒター】

「すべての力を動員しよう！ 何百万ものドイツ女性が、全世界の平和愛好女性とともに、自分たちが持ち、命を与えた最も愛すべきものを守るために、戦争放火魔に勇敢に断固として対峙しなければならない」と、ドイツ民主女性連盟第4回全国大会の宣言は謳った。そして、ドイツの女性・母親が言葉だけでなく行動において子どもたちの楯となり、ドイツ民主共和国で勤労者が自らの手で成し遂げた成果が、帝国主義の侵入者によって破壊されるのを許さないことが、大会で再三再四決然と表明された。

1952年5月26日、裏切り者アデナウアーはボンで、ドイツ民族の意思に反して「一般条約」〔ドイツ条約〕に調印した。この屈辱条約の調印によりアデナウアーは、ドイツ分断を深め、戦争の危険を高め、西ドイツにおける軍事独裁への道を地ならしする国民的裏切りを確証した。

だが、アデナウアーの署名は、ドイツ民族の署名ではない。西側諸国に対するソ連政府の覚書にあるように、ドイツ民族は、平和条約の達成、ドイツの国民的統一への独自の道を歩むであろう。

この高き目標のための闘争における確固たる拠点は、ドイツ民主共和国である。

この拠点を、帝国主義の戦争挑発者やドイツの手先は掘り崩そうとしている。彼らは工作員やスパイを送り、サボタージュを通じて住民の不安を煽っている。彼らは占領地区間の境界で、人民警察官を射撃して挑発し、情勢をますます緊張させようとしている。彼らには、人の命は物の数ではないのだ。

それゆえ、そしてとりわけ、西ドイツでの一般戦争条約の発効により、既にレールの予備警察として中核ができていた攻撃的傭兵部隊が結成されることになるので、我々はドイツ民主共和国で、故郷の武装保護を組織し、武力防衛を創出しなければならない。それは、アメリカ帝国主義者の委託を受け、それに奉仕するボン政府の傭兵部隊がやっているような再軍事化や軍国主義では決してない。

軍事的にあの勢力は、軍需産業の大富豪、銀行の頭取連中、大農に奉仕して、自民族の抑圧と他民族への攻撃的目標の実行のために組織されている。西ドイツにおける軍国主義は、西独勤労民衆を米英占領者の革鞭の下で押し潰すだろう。西独軍国主義は、ドイツ民族の国民的利益の不倶戴天の敵である。なぜならそれは、米国の権力者に奉仕し、西ドイツを戦争結集地に変え、西ドイツの傭兵を弾丸の餌食にしようとしているからである。

ドイツ民主共和国の国民的軍隊は軍国主義的でない。軍隊の性格にとって決定的なのは、国家が人民の手中にあるか少数の独占資本家の手中にあるかという、国家権力の本質である。

我々の国家権力、ドイツ民主共和国の国家権力は、人民の掌中にある。我々はヒトラーの軍需富豪や防衛経済指導者を処罰し追放した。だが西独では、ヒトラーの将軍たちが、再び攻撃的な傭兵部隊のトップに就いている。ドイツ民主共和国の武装防衛は、我々の故郷の保護、我々の大々的な成果、偉大な再建事業の防衛に役立ち、平和の維持に役立ち、幸福と平和のうちに生きたいという我が民族全体に役立つものである。

全ドイツの女性や母親は、勇敢に決然と夫や息子たちの側に立って、平和の維持と祖国統一のために闘うであろう。

輝かしい模範として彼女たちの先頭に立っているのが、恐れを知らない平和の闘士、リリー・ヴェヒターなのである。

(編集部注：本文中の朝鮮の人名・地名は、藤目ゆき編・解説「国連軍の犯罪 民衆・女性から見た朝鮮戦争」収録の「国際婦人調査団報告」を参考にした。一部、英文表記と漢字表記が適合しない場合には事例の内容が一致していれば同報告の表記を採用した。)

モンゴルの女性史家 E.チメッドツェレンの履歴と著作リスト

今岡良子

はじめに

ウランバートルの中心に「持続可能な発展のためのジェンダーセンター」¹という名前の NGO がありました。当時、その職員をしていたエネビシが、モンゴルの女性史家チメッドツェレンさんに関する論文を本棚に見つけました。チメッドツェレンは、モンゴル人民革命党からモンゴルの女性解放史を本にまとめる任務を受けた研究者で、エネビシはモンゴル国立大学の院生の時に、チメッドツェレンの著書『モンゴル人民共和国における女性解放の歴史』を日本語に訳した人でした。エネビシが見つけたのは、「歴史家 E.チメッドツェレンの履歴 (1924 年～98 年)」という題名の論文でした。ただ、表紙もなく、ファイルをプリントアウトした中身だけがホッチキスで止められた状態で、誰がそこに置いたのか、誰のものかわかりませんでした。大阪大学外国語学部のモンゴル人教員を通じて、モンゴル国立大学に問い合わせたら、2000 年にオユンツェツェグという外部の人が修士論文として書き、歴史学専攻に提出したということがわかりました。論文を読んでも、なぜ、オユンツェツェグという人が、チメッドツェレンに興味をもち、修士論文を書こうと思ったのか、書かれていません。モンゴルでは書いたものを保存する習慣がなく、保存したのも容易に見せてくれないので、文献研究が容易ではありません。むしろ、時間をかけて人間関係を作って、人を訪ね歩いた方がスムーズにいくでしょう。オユンツェツェグという人がなぜチメッドツェレンについて書いたのか、大学関係者が時間的な余裕のある時に訪ねてみたいと思います。

私自身は、チメッドツェレンの書いた女性解放史をまとめる上で²、オユンツェツェグの論文から新しく発見したことがありました。チメッドツェレンは自分の著書の中で自分のことをまったく書いていませんでした。オユンツェツェグは、論文の中で、たとえば、

「チメッドツェレンは我が国の中等教育からモンゴル国立大学まで 40 年以上の教鞭をとり、数千人の学生や生徒に科学の深い知識を教えた歴史家である」、「モンゴルの女性の歴史をテーマに学術的に広い視野の研究を行い、著作を残した唯一の研究者である」、「女性史だけでも著書が 4 冊、論文が 20 本、啓蒙宣伝文書を 12 本書き、学術・理論・実践に関する会議に 8 度出席し、女性に関する国際的な会議などに代表として出席した」と書いています。

¹ 持続可能な発展のためのジェンダーセンターについては、こちらを参照してください。T. エネビシ、今岡良子「モンゴルにおけるジェンダーセンターの現在—持続可能な発展のためのジェンダーセンター代表 T. アムガランさんに聞く」、『アジア女性現代史』第 4 号、2008

² チメッドツェレンの『モンゴル人民共和国における女性解放の歴史』についてはこちらを参照してください。今岡著「モンゴル人民共和国の女性解放の歴史—非資本主義的発展論の限界点」、大阪外国語大学女性研究者ネットワーク、『女性の性と生』、嵯峨野書院、1996

このように、これまで知ることができなかったチメッドツェレンの履歴と著作リストをここに翻訳しておきたいと思います。

1. チメッドツェレンの略歴

チメッドツェレンは 1924 年にドルノド県ダシバルバル郡フフブルでエルチンボーの長女として生まれた。10 才まで両親の下で育てられ、1934 年に隣のバヤンドン郡の小学校に入学し、1936 年にドルノド県の中心地の中学に入学し、1940 年に卒業した。1940 年から 41 年にかけて首都ウランバートルの師範学校で学び、中等学校の読み書き教員となった。1949 年にはモンゴル国立大学に入学、在学中、最優秀の成績をおさめたので Kh. チョイバルサン元帥から特別給与が与えられた。1953 年に歴史の専門教科をすべて履修したので、国家試験委員会の 1953 年 7 月 1 日の決定により中学校の歴史の教師の資格を与えられ、卒業した。1953 年 7 月 1 日から 54 年 1 月 18 日までモンゴル人民革命党中央委員会で幹部として働いていた。1954 年から 44 年間大学で教鞭をとった。1957 年から 1962 年にかけて中国の北京大学の修士課程で学び、モンゴルの歴史文書『隣国を伝えた記述』という本からタタールに関する本をモンゴル語に訳した。

1974 年から 78 年 1 月まで大学付属社会科学指導部の書記長となった。入党後、ほぼ連続して党幹部として選ばれ、1972 年から 74 年にはモンゴル国立大学社会科学学部内の党書記長として選ばれた。また、1955 年にインドで平和委員会、1965 年にフィンランドで世界平和大会、1969 年にはベトナムで女性代表として、1974 年にはブルガリア共和国で国際学生指導に関する委員会で代表として参加した。1972 年にはイギリスの大学でモンゴルの歴史と言語を教えた。

E. チメッドツェレンは、1936 年に革命青年同盟、1941 年に労働組合、1947 年に革命党に入党した。

教鞭をとっている間、政府から勤続 40 年記念、50 年記念の表彰、勤労者の表彰を受け、1973 年には準教授となった。1981 年には人民啓蒙第一人者、1982 年には北極星賞、1997 年にはモンゴル国立大学名誉教授となった。

< 訳者解説 >

チメッドツェレンは、1924 年に生まれたと書かれています。1921 年の人民革命で清朝から独立し、24 年にモンゴル人民革命党は共和国宣言をします。男女平等で近代国家を建設することを宣言した憲法が定められたこの年に、チメッドツェレンは生まれました。その後、義務教育、高等教育を受け、知識人として生きる条件が社会的に整えられていく中で、自分の役割を果たしていくこととなります。チメッドツェレンは 1998 年に亡くなったと書かれています。モンゴルは、1990 年に民主化、1991 年に市場経済へ移行し、1996 年から新自由主義路線に入ります。体制転換の混乱の最中に人生を終えたこととなります。彼女の人生そのものにおもしろさを覚えます。以下、オユンツェツェグの書いた履歴から興味を感じた点を書いていくことにします。

チメッドツェレンの生まれたドルノド県はモンゴルの最も東、中国国境と境を接する県

です。ダシバルバル郡、バヤンドン郡は、モンゴル民族のマジョリティーであるハルハ族より少数民族のボリアド(ロシア語表記ではブリアート)族が多数住む地域です。つまり、チメッドツェレンもボリアド族であることがわかりました。ボリアド族は、ハルハ族により、1930年代に肅正という暗黒の時代を背負わされた時期があります。しかし、彼女は党の政策に誠実に従って、ハルハ族の女性史をまとめたのでした。

また、チメッドツェレンが親から離れて寮に入った中学生の頃、1939年に日本・満州軍とモンゴル・ロシア軍がドルノド県と満州国との境で衝突しました。30万人の関東軍が攻めて来る。当時のモンゴルの男性人口が、こどもや元僧侶も入れて、わずか30万人。スターリンは当時の最新兵器をモンゴルに投入したと言われますから、地上や上空をソ連の軍隊が通過する音も聞いたでしょう。さぞ、恐かっただろうと思います。今でも、ドルノド県東部には日本軍が落とした爆弾の跡に沢山の記念碑が立てられています。チメッドツェレンは著書の中で、このハルハ河戦争(ノモンハン事件)について書いていますが、歴史学研究者としての客観的な文章で、党の指導の下で書かれた内容です。ハルハ河戦争の時、中学生だったという経験をどこかに言葉にはしていないか、家族に語ってはいないか、と興味を持ちました。

チメッドツェレンは、1957年から北京大学に留学します。それはモンゴルが中国と仲が良かった短期間の蜜月時代のことです。モンゴル人民革命党の要人も、中国出身者と結婚することは普通にありました。北京での留学生活の中で、中国人の友人もたくさんできたと思います。中国語とロシア語、両方とも自由に使いこなせる研究者はモンゴルでは少なく、彼女の留学が中ソ対立前だったから身につけることができたのだらうと思います。著書では満州語文献も翻訳しているので、語学の才能豊かな研究者が育つ時代でもあったのだらうと思います。その後、中ソ対立が激しくなると、チメッドツェレンの故郷のドルノド県には中国との戦争に備えて、ソ連空軍、陸軍の基地が建設されていきます。ドルノド県は、モンゴル最東に位置し、少数民族がマジョリティーで、中国と隣接し、モンゴル人民革命党政府とソ連の統治が直接入ってくる、日本の沖縄のような存在でした。ゴルバチョフのウラジオストック宣言をきっかけにソ連軍は撤退しますが、今も、建物などのコンクリートと鉄の残骸が草原にこつ然と現れます。ウランバートルで党幹部の職務についていても、2か月の夏休みはたいてい帰郷します。変わっていく故郷の大地をどう見ていたのだらうか?その先の中国国境の向こうには中モ蜜月時代の友人が生きている。軍事化される国境の故郷から分断された中国人の友人たちとの連帯意識はどうなっていったのでしょうか?

そして、今は、ドルノドには世界最大のポテンシャルと誇られる国家戦略ウラン鉱山が3つ集中し、国際的な核廃棄物処分場建設の候補地として名前があげられます。もし、チメッドツェレンが生きていたら、民主化された今、どうしているだらうか、と興味をもちました。

チメッドツェレンは、1969年にベトナムでの会議に参加したようです。その後、テレビやラジオに数回出演し、アメリカの帝国主義の犠牲となる子どもたち、敢然と闘う女性たちについて話したと書かれています。

ベトナムとモンゴルは、地理的に遠いイメージがあるかもしれませんが。モンゴルは2番目の社会主義国で、ソ連にとっては、資本主義の段階を経なくても、先進社会主義国が資

本や技術面で支援すれば、社会主義国に移行することのできるモデルとして弟分の国でした。アジア・アフリカの社会主義をめざす国にとって、モンゴルは先輩にあたり、ベトナムからモンゴルでモンゴル語とロシア語を学ぶ留学生も少なくありませんでした。

ベトナム戦争の時、モンゴル映画公社のドキュメンタリー映画製作者たちは、しばしばベトナムに入り、アメリカの帝国主義と闘うベトナム民衆を支援するための作品を作り、TVで放映しました。遊牧民は羊、牛、馬など、軍事用に供出し、労働者は1日の賃金を支援にまわし、ベトナム人民を支援したと語るのは50代以上で、記憶は鮮明です。ホーチミンもモンゴルを訪問し、モンゴル人民の支援に感謝を述べました。チメッドツェレンは、自分の目で見たベトナム戦争を、どのような言葉で語り、モンゴルの人びとに伝えようとしたのだろうか。どのようにベトナムの女性たちを励まそうとしたのだろうか。TV番組は、フィルムやカセットの貴重な時代なので、録画を残さず、もう見ることはできませんが、党の新聞ウネン紙の60年代のものが状態よく保存されていたら、記事を読めるかもしれません。チメッドツェレンは、当時45歳なので、母の話を子どもが覚えていないだろうか。家族に会って話を聞きたいと思いました。

チメッドツェレンの略歴を見る限り、党によって就職先と身分が保障され、努力すれば党に評価された人生が見えます。私がチメッドツェレンの書いた著書を紹介したことを本人に伝えてくれた人の話では、自分の著作について「当時は、そう書くしかなかったのよ」と笑っていたと言います。本人に会うことができたならば、もう少し、素顔がわかる略歴を記して残すことができたのではないかと残念に思います。

2. 著作リスト

チメッドツェレンの著作リストを以下に訳しました。

(1) 著書

- ①『隣国を伝えた記述』の『タタール』2.5巻を中国語からモンゴル語に翻訳し、前書きと解説を書く。1962年（修士論文）
- ②『モンゴル女性たち、新しい生活の道に』1966年、ウランバートル
- ③『モンゴル人民共和国における女性解放の歴史』1973年、ウランバートル
- ④「モンゴル女性の意識に現れた変化」について、『モンゴル人民共和国における女性の諸問題を解決する歴史的経験』1975年、ウランバートル、17-25ページ
- ⑤「毛沢東の思想と毛沢東主義者」『歴史のある証拠文書』1974年、ウランバートル、113-115ページ
- ⑥『モンゴルの女性たちの考え方に関する伝統と革新の諸問題』1983年、ウランバートル
- ⑦『モンゴル人民共和国の歴史の特殊な用語・専門用語』編集、1987年、人民教育省

(2) 学術論文

- ①「封建領主の財産を没収した歴史より」モンゴル国立大学学術叢書 XI 巻、1967年、No.1

- ②「モンゴルの女性たちが新しい生活に目覚め」モンゴル国立大学学術叢書 XI 卷 No.1
- ③「モンゴル人民共和国の女性の権利を満たす諸問題」『十月革命とモンゴルの国』1969年、ウランバートル
- ④「人民政府が女性たちの平等な権利を満たすために行った政策」「人民の国」紙 1969年
- ⑤「V.I.レーニンはモンゴル人民の友人であり、師である」「科学的な生活」紙、1970年、No.2
- ⑥「モンゴルの女性を解放することは、モンゴル人民共和国を非資本主義的發展の道に進めるための1つの方策である」『歴史学研究所紀要』、1970年、ウランバートル
- ⑦V.I.レーニン「モンゴル革命家に与えた助言、その歴史的意義」モンゴル国立大学紀要、1970年
- ⑧「V.I.レーニンの勤労女性を解放する思想をモンゴル人民革命党が実践」モンゴル国立大学、1971年
- ⑨「モンゴル人民共和国の社会主義建設とモンゴルの女性」モンゴル国立大学叢書、1972年、No.1
- ⑩「モンゴルの人民革命とモンゴル人女性」「科学的な生活」紙、1972年、No.1
- ⑪「社会經濟的發展の中でモンゴルの女性に現れた変化」、「Роль кочевых народов в цивилизации Центральной Азии」1974年、ウランバートル、P.P.333-337
- ⑫「モンゴルの封建領主の民族に対する裏切りについての新しい証拠」、「モンゴル人民革命党歴史研究」1974年、No.10、P.P.140-144

(3) 学術会議で行った報告

- ①「封建領主の財産を没収し、階級を一掃したこと」社会科学学部教員による学術会議、1966年
- ②「ウランバートルにおける国際学術会議で『モンゴル人民共和国における女性の権利を満たし、解放する問題を決定したこと』、1971年
- ③「モンゴルの女性の意識における変革についての諸問題」大学間学術会議、1977年10月11、12日
- ④「モンゴル・ソ連の女性の姉妹友好の發展」社会科学研究所、モンゴル女性委員会が組織した学術会議、1979年2月7日。
- ⑤「ハルハ河で日本の軍国主義者に勝利したことはモンゴルの全人民の勝利である」モンゴル国立大学教員による学術会議、1979年
- ⑥「モンゴル人民共和国宣言、その歴史的意義」モンゴル国立大学教員による学術会議
- ⑦「モンゴルの女性の經濟的文化的ないくつかの問題」大学教員による学術会議、1987年3月
- ⑧「ソ連の女性団体からモンゴルの女性運動の發生と發展のために行った支援」社会科学学部教員による学術会議、1987年
- ⑨「歴史学学科の歴史」社会科学学教員による学術会議、1987年
- ⑩「モンゴルの1人の女性の2つの社会での生活」第5回国際モンゴル学学者大会、1987年9月

(4) 学術活動

専門外の研究者の執筆活動をサポートする仕事など、ここでは省略する。

(5) 啓蒙活動

- ① 「革命初期のモンゴル女性たち」、「女性」紙、1970年、No.3
- ② 「人民革命に参加したモンゴルの女性たち」、「ウネン」紙、1968年7月10号
- ③ 「社会主義社会の平等の権利を保障する政党」、「ウネン」、1988年、No.17
- ④ 「誇るべきモンゴルの国」、「ウランバートル情報」紙、1963年
- ⑤ 「ソ連人民の物質的文化的発展」、1976年
- ⑥ 「ベトナムの子どもたちがアメリカの侵略者に抵抗する闘いに」というテーマでテレビとラジオに出演、1969年
- ⑦ 「ベトナム人民共和国の子どもたちの暮らし」についてラジオに出演、1969年
- ⑧ 「ベトナムの勇敢な人民の果敢な闘い」ラジオに出演、1969年
- ⑨ 「ベトナムの女性たち、アメリカの帝国主義に抵抗する重要な力となっている」、モンゴル人民革命党中央委員会女性部で講義
- ⑩ 「モンゴル人民共和国の歴史概要」について外国語で講義し、ラジオで放送
- ⑪ 「モンゴル人民共和国の勤労者女性を解放する V.I.レーニンの思想を實踐」、「ウネン」紙、1970年3月7日
- ⑫ 「13世紀から14世紀のモンゴルの歴史の問題点」について、人民軍省の将校の前で講義を行った。1970年10月。
- ⑬ 「V.I.レーニン、国際婦人デー50周年記念」、「ウネン」紙、1971年3月4日
- ⑭ 「モンゴルの封建制の崩壊について」軍隊013部隊の歴史教員の前で講義。
- ⑮ 「モンゴルの女性が人民革命で果たした役割」、女性委員会で講義。1971年7月
- ⑯ 「革命によって解放された」、「Новости Монголии」紙、1972年3月7日
- ⑰ 「モンゴルの女性たちの築いた50年」、「女性たち」誌
- ⑱ ベトナム人民紙「Tu-Nyat」に「モンゴルの人民はベトナム人民とともに」を寄稿。1969年、No.838

おわりに

チメッドツェレンのおつれあいは亡くなりましたが、子どもが1人健在であると聞きました。ボリアド族女性の歴史、日本とソ連、中国とのかかわりで軍事化されたドルノド県の人々の歴史、中国、ベトナムや世界の女性たちとの連帯について、一度、お会いして、お母さんがつぶやいたことを聞いてみたいと思います。

特集2

抗美援朝時代の中国女性史

抗美援朝の中国を訪れて—瀋陽・丹東への旅—

藤目ゆき

抗美援朝戦争の故地を訪ねる旅 2013年11月4日から7日にかけて、西田千津さん、神田修さん、梁東淑さんと共に中国東北地区の瀋陽と丹東を訪れた。朝鮮戦争(1950～1953)時代の中国女性運動、とくに国際民主女性連盟(Women's International Democratic Federation: WIDF)が1951年5月に朝鮮北部に派遣した国際女性調査団に対する中国女性団体の関与がどのようなものであったのか。それを調査する活動の一環として、瀋陽と丹東の故地を訪ねる旅行であった。

「朝鮮戦争」は、中国では「抗美援朝」戦争と呼ばれる。「朝鮮戦争」という呼び方では、「朝鮮で起きた戦争」という以上の意味も内容も伝わらない。が、「抗美援朝」という表現なら、中国側のこの戦争に対する関与の意味が明白である。国連軍を率いた米国(中国語では「美国」)による侵略戦争に抗して祖国を守るとともに、「兄弟国」たる朝鮮民主主義人民共和国を支援する。それが、中国側がこの戦争に参戦した理由に他ならない。

抗美援朝戦争は、正規軍ではなくボランティアの義勇軍が援朝に赴いたという形ではあれ、実質的には中華人民共和国が国を挙げてたたかった戦争である。中国の女性たちは、志願軍に入って朝鮮へ行った人もいれば、中国国内で戦争勝利のための世論喚起や中国人民志願軍と朝鮮人民軍に対する寄付金募集、軍人とその家族に対する慰労活動、朝鮮からの難民救助といった様々な後方活動を担った人も多い。WIDFに加入する中華全国民主婦女連盟(ALL-China Women's Democratic Federation: ACWF)はそのような中国女性たちの抗美援朝運動を組織した中心団体であり、1951年のWIDFが派遣した国際女性調査団の受け入れ・調査活動の実施のために重要な役割を果たしている。瀋陽は、国際女性調査団が最初に全員集合した場所である。丹東は中国・朝鮮国境にあり、国際女性調査団はここから鴨緑江を渡った。このような理由から、私たちはアジア現代女性史研究会(CAWA)最初の中国調査旅行として、先ず瀋陽と丹東を訪ねたいと考えたのである。

このように調査テーマは大きく、三日間だけの滞在とはいえ瀋陽・丹東の多くの場所に行っているいろいろな物を見、さまざまな感慨を抱いた。その全部を書き尽くすことは無理なので、今は研究テーマに直接つながりのあることに限って振り返っておきたい。

瀋陽市図書館にて 11月4日には、瀋陽で梁さんの到着を待つ間、神田さん・西田さんといっしょに瀋陽市内を散策し、図書館や本屋へ行ってみた。

1951年のWIDF調査団や翌52年のモニカ・フェルトンによる中国・朝鮮再訪は、中国の抗美援朝史に残る重要事項である。たとえば、瀋陽市図書館で閲覧した柴成文・趙勇田『抗美援朝紀実』(中共党史料出版社、1987年、84～85頁)には、WIDF調査団が訪朝して、米軍の戦争犯罪を弾劾する報告書を出したことにも言及がある。

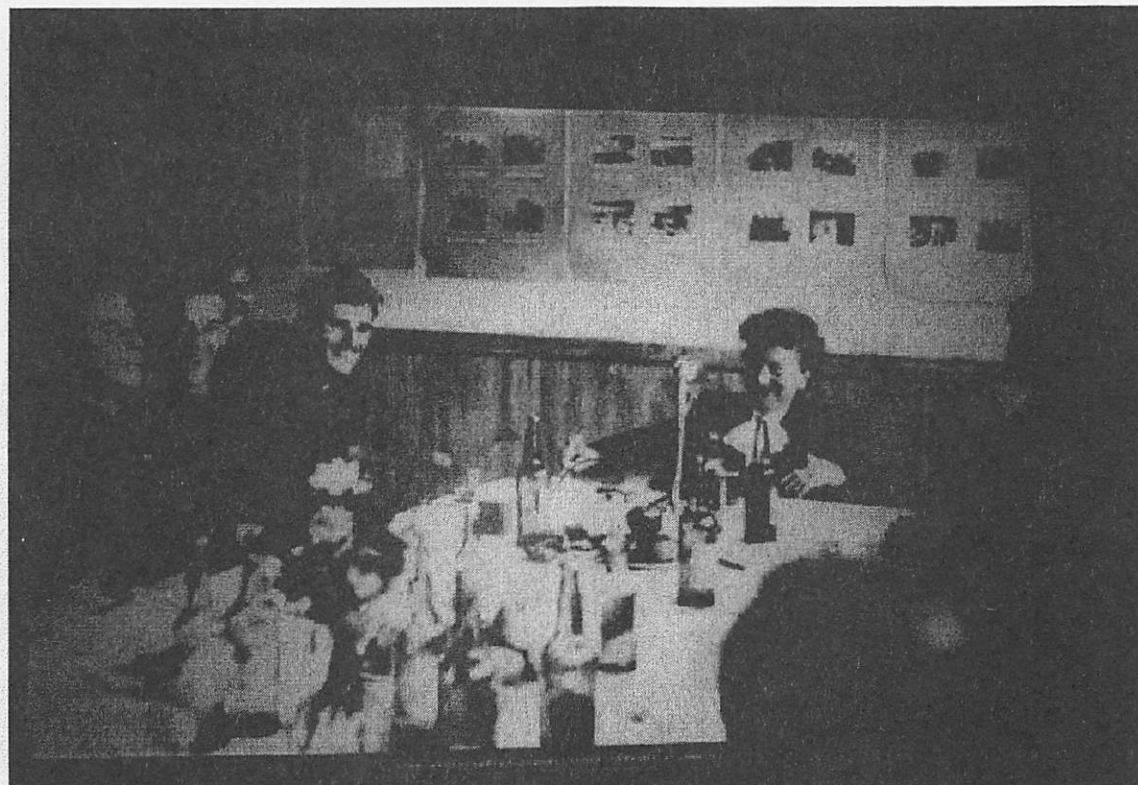
ところが、『沈阳市志』を閲覧すると、その108頁にある52年9月17日の項目に、「スターリン賞受賞者—英国の平和戦士モニカ・フェルトン夫人が瀋陽に到着、22日に瀋陽の

高坎にある衣料生産合作社を参観」といった記録がみえる一方、51年5月の項目を見ても、WIDFの国際女性調査団が瀋陽に集ったことは書かれていない。モニカ・フェルトンの『だから私は朝鮮へ行った』によると、51年5月、外国から来た調査団員たちは瀋陽滞在中、丸二日間ホテルに缶詰状態であった。そのとき中国側を代表してオリエンテーションを行った白朗は、各国代表の女性たちに対して、「どこにスパイがいないとも限らないから、ホテルから出るべきではない。身体を動かしたかったら、ホテルの裏庭がありますよ」と伝えたという。各国代表のレセプション会場には報道関係者も来ていたようだが、この時点ではWIDF調査団一行の受け入れは、AWCFにとってはビッグイベントであったものの、中国政府・瀋陽市にとってそれほど能動的なものではなく、全体としては盛大に広報することについてむしろ慎重であったのかもしれない。対照的に、翌52年秋にフェルトン夫人が中国に来たときは、スターリン平和賞の受賞者であり中国国家の特別来賓という破格の厚遇であった。『沈阳市志』の年表にはその違いが表出しているのかもしれない。

抗美援朝記念館の見学 4日夜、青島経由で瀋陽に到着した梁東淑さんも合流し、夕食のあと約3時間半バスに乗り、国境の街・丹東に到着した。5日には朝から抗美援朝記念館を訪ね、午後遅く、鴨緑江の「遊覧船」で対岸（共和国）を見学。そのあと抗美援朝烈士の墓所を訪問、最後にコリアタウンを散策して朝鮮料理を食べ、夜遅くなって鴨緑江にかかる断橋と中朝友誼橋の近くにあるホテルに帰った。

抗美援朝記念館は広大な建物で、内容も充実していた。この記念館だけでも中国にやってきた甲斐があるというものだ。

モニカ・フェルトンが52年秋に訪中・訪朝をしたときの写真も展示されていた。



これは、本号に載せた白朗のルポルタージュ「平壤七日」にも報告された、フェルトンと英米の捕虜たちの会談の写真である。フェルトンら当時の平和運動家が伝えた、英米捕虜たちが収容所で人道的な処遇を受けており、一日も早い停戦と帰国を望んでいるとの情報は、平和擁護の国際運動を高揚させた。なおこの写真の撮影直前の8月31日、国際科学委員会が米軍の細菌戦に関する調査報告を公表している。左下の写真は、科学委員会を構成した科学者たち。左から3人目は、スウェーデンのストックホルム市立病院管理局中央臨床研究所のアンドレア・アンドリーン博士。彼女は WIDF 副会長としても活躍した。



細菌戦について告白するイノック中尉

朝鮮戦争下、米軍による細菌戦を供述した捕虜は、国防総省の報告 (*The Report of the Secretary of Defense's Advisory Committee on Prisoners of War*, 1955年8月) によれば、38人にのぼる。最初に告白したのが米空軍 B26 爆撃機の航空士 K・L・イノック (Kenneth L. Enoch) 中尉と操縦士ジョン・クイン (John Quinn) 中尉であった。彼らはすこぶる長い供述をして、52年5月にはそれが北京から世界に発表されている。

記念館には、朝鮮戦争当時、国連軍参加諸国で展開した自国軍の朝鮮派兵に反対する平和運動に関する展示もあった。



(1951年6月に米国で行われた平和パレード)



(英国で行われた朝鮮派兵反対デモ)

中国女性たちの抗美援朝活動は多岐にわたる。多数の展示写真の中から、ACWF に関連する写真のみ紹介しておこう。



漢口の女性たちの抗美援朝デモ

写真左上の女性は子どもを抱いて、「母親たちは祖国・平和・子どもたちを守る」という趣旨の幟を手をしている。右上は、ACWF 副会長であった鄧穎超が、帰国した志願軍の女性たちを歓迎する集いでスピーチをしている写真である。



中华全国民主妇联主席邓颖超在欢迎志愿军归国代表团妇女代表时的讲话
Deng Yingchao, Vice-chairman of the All-China Democratic Women's Federation, delivered a speech when welcoming the women representatives of Volunteers' Delegation.

ACWF は 1949 年春に誕生した中国女性の統一戦線組織であり、創立時は何香凝が名誉会長、蔡暢が会長、鄧穎超・李徳全・許広平が副会長に就任し、1953 年春にその 5 人に加え、宋慶齡が名誉会長、史良と章蕴が副会長に選出された。次の写真は、宋慶齡が天津の各界を代表する女性たちと共に寄付金募集活動のために集まったワンシーンである。女性たちの力で飛行機「天津婦女号」を寄付するという取り組みであった。



九一八歴史博物館 6日は朝に丹東を出発し、瀋陽に移動。九一八歴史博物館を見学した。これは、1931年の「九一八事変」（「満州事変」）に始まる日本の侵略戦争と中国の抗日戦争に関する博物館である。入館して最初に見た展示ケースの中に、日本軍国主義に関する井上清先生の著作を見つけた。嬉しくなって、「これはぜひ写真を」とシャッターを切ろうとしたところ、案内ボランティアの学生がやってきて笑顔で「撮影は不可」とのこと。

井上清先生のことや、澤地久枝さんの『もう一つの満州』のことなどを思い起こしながら館内の展示を見学した。調査テーマである抗美援朝戦争との関連で特に印象深かったのは、細菌戦・七三一部隊と日本人捕虜収容所（撫順戦犯管理所）の展示であった。

日本軍による細菌戦が中国の人々にとってどれほど苦しく惨い体験であったか。館内の展示からその重大さがひたひたと感じられ、中国の人々の経験に即して朝鮮戦争を見つめる重要性を強く意識する機会になった。中国の人々の体験に視点を置けば、抗日戦争から抗米戦争への展開は一連なりの受難と抵抗の歴史といえる。細菌戦もしかりである。日本軍は細菌戦の効果を試すために七三一部隊が人体実験を行い、細菌兵器は実戦でも使われたが、東京裁判はそれらを不問に付した。その背景に七三一部隊の情報を利用しようとする米軍の意図があったことはよく指摘されている。それからまもない朝鮮戦争中、中国側は米軍が細菌戦を実行しているとして多数の証拠を提出して世界に訴え、捕虜になった米軍人たちも38人が細菌戦への加担を告白し、1952年に現地調査を行った国際科学者委員会も、細菌戦が行われていると認定した。だが米国政府はこれを否定し、クインらは米国に戻ると自分の発言を撤回した。米国側では捕虜たちの告白はおしなべて「拷問」や「洗脳」によるものと説明され、今日まで米国政府は一貫して細菌戦を否認している。このようにして、細菌兵器は1940年代前半の日本軍から50年代後半の米軍へと引き継がれ、日米両国政府が互いに庇い合い、共に今日まで責任を逃れてきたともいえる。

撫順戦犯管理所は、1950年ソ連より中国へ引き渡された900人以上の日本人や「満州国」の戦犯を収容した施設である。溥儀もここに収容されていた。この施設に関する展示も、米軍の細菌戦という同じ問題を全く別の角度から考える大きなヒントになった。なぜなら、朝鮮戦争の最中、米軍の細菌兵器使用疑惑は国際社会に衝撃を与えたが、中国政府の主張や科学者たちの報告と同様に、あるいはそれら以上に、世界中の人々を瞠目させたのは、自らの罪を告白したジョン・クインら米軍捕虜たちであったからである。

抗美援朝記念館に展示されていた、モニカ・フェルトンと捕虜たちの写真をもう一度見てみよう。楽しそうな、明るい表情の捕虜たちの姿がそこにある。この写真のなかにクインは写っていないようだが、このときに同じ捕虜収容施設でフェルトンはクインに会っており、彼はそのときフェルトンにも自分の罪を語り、その告白は何ら強制されたものではないと話した。52年10月の北京で開かれたアジア太平洋平和会議や同年12月のウィーン平和会議の場で、彼らと語りあった内容をフェルトンは伝えている。その時点でフェルトンが捕虜たちの証言の真実性を信じていたことに疑いの余地はない。だが、朝鮮戦争が停戦を迎え、捕虜たちが米国へ帰還すると、米国側では彼らが拷問や洗脳によって虚偽を供述するよう強制されたにすぎず、彼らが抑留中に語った米軍の残虐行為や細菌戦といった戦争犯罪は事実無根だと扱われるようになってしまった。中国で「帰郷したら、米国民に真実を知らせる」と主張していた捕虜たちが、実際に米本国へ帰国したとき、どのよう

な圧力を受けたかは想像に難くない。が、いずれにしろ、彼らはその告白や証言を撤回してしまったのである。一体、彼らは本当に、中国側からの拷問や洗脳によって事実でないことを言うよう強いられたのだろうか？

私は捕虜たちの告白とその撤回について多面的に考察したいと考えてきたが、撫順戦犯管理所に関する展示をまじまじと眺めている内に、当時の中国が捕虜をどう扱ったかという角度から考える重要性に気づいたのである。図書室、スポーツ、運動会、学習会。一連の写真が、撫順戦犯管理所においては収容者に対する人道的配慮や脱軍国主義教育が重視されていたことを示す。言うまでもなく、抗日戦争に完全勝利を果たした後の日本人戦犯を収容する施設と依然として交戦中である米軍の捕虜たちの収容施設を同列に論じることができない。が、撫順戦犯管理所と朝鮮戦争捕虜収容所は、建国まもない中国が捕虜に対する人道主義的処遇を重視し、その高い倫理性を世界にアピールしようとしていた同じ50年代前半に運営されていたことも事実である。撫順戦犯管理所にいた日本人の認罪の経験を考えることは、朝鮮戦争捕虜たちの認罪を考察する上にも意味があるだろう。パネルの中にあつた島村三郎さんの写真をヒントに、瀋陽から日本に戻るとさっそく島村三郎さんの『中国から帰った戦犯』（日中出版、1975年）などを取り寄せて読んだ。いつか稿を改めてその感想も書きたいと思う。

九一八歴史博物館の後、瀋陽市内にある抗美援朝烈士の墓所を訪ね、張学良も行ったという奉天時代からあるレストランで夕食をとり、夜はホテルで研究報告と感想会。翌7日には早くも帰国である。同行者たちのおかげで、日・中・韓とマルチカルチュラルな観点で東アジアの過去と現在を眺めることができ、楽しい旅になった。心に深く残ったこともふくめ、この報告文に書くことができなかつたことも多い。これからも調査を続け、次の報告書にこの報告の続きを書きたいと思う。西田さん、神田さん、梁さん、たいへんお世話になりました。これからもよろしくお願いします！

丹東で白朗を想う

西田千津

在日朝鮮人である友人は、子どもの頃、日本で差別されたため「ちょうせん」という呼称が好きではなかったが、民族学校で、「朝鮮とは朝が鮮やかな国という意味です」と教えられ嬉しかったと話していた。白朗も朝鮮の自然を愛した。彼女が訪れたのは戦時中の平壤であったが、「平壤七日」には、自然に対する感動があちこちに散りばめられている。アメリカ軍・国連軍は、圧倒的な戦力で空爆による民間人殺傷と家屋破壊を行い、朝鮮の美しい国土を台無しにした。ところが荒れ果てた血まみれの朝鮮戦争の中から白朗が拾い上げた物は、美しい花であり、豊かな収穫であり、歌であり、戦場の中で助け合う人の温かさであった。



イチョウ並木を抜けて

「抗美援朝戦争記念館」へ

空爆で我が家が破壊されても挫けることのない英雄的な民衆、けなげに生きる孤児との触れ合い、中国軍の厚遇により改心した捕虜との触れ合い…とりわけ、負傷しても、夫を殺されても、子どもが負傷しても、個人的なことだからと振り返らず、国家のため、革命を成し遂げるために邁進する超人的な女性たちの姿は印象的である。こうした女性の生き方は、白朗自身の人生と重なる。中華人民共和国成立以前の旧社会の中で、女性は人権が認められていなかった。生き生きと困難に挑戦する朝鮮女性の姿に、男性に負けない女性の地位の向上と自信が感じられる。

訳者の力不足から、白朗の熱情に溢れた力強い文体を日本語で十分に表現しきれなかったが、原文は、どの一文も力に満ち、リズム感にあふれ、詩的な比喩が楽しめる。朝鮮戦争の驚くべき実態に加えて、登場



する人たちの純粋さや爽やかさが心地よく、一気に読み終えてしまう。

さて、私は2013年11月初め、WIDF 朝鮮戦争真相調査団に関する藤目先生の研究グループに加えていただき、晩秋の瀋陽・丹東を訪れた。瀋陽・丹東には、朝鮮戦

争に関わる戦争遺跡があちこちに残されている。丹東の抗美援朝戦争纪念馆は、銀杏並木が美しい小高い丘の上にある壮大な建物だった。

館内の展示は充実しており、私は、「平壤七日」の登場人物に再会できたような気がした。たとえば、白朗は、真っ暗な洞窟の中で労働する人々を感動的に描いているが、まさに、暗い洞窟の様子が、実物大の蝸人形を使ってリアルに再現されていた。その他、戦闘の様子がジオラマで展示されていたりと、様々な工夫がなされていた。「平壤七日」では人々の空爆被害や細菌戦を行った兵士が捕虜として登場するが、地図で空爆被害を受けた地域、戦闘地域、細菌戦に使われた武器などの展示もあった。また館内には多数の貴重な写真が展示され、戦時下の人々の息づかいが伝わってくるようだった。

なかでも私たちにとって一番の成果は、モニカ・フェルトンが捕虜と歓談する写真に出会えたことである。捕虜との交流は、「平壤七日」にもかなり具体的に記されている。細菌戦にかかわったクインを含め、彼らは、学習会・討論会などを通して自ら変わっていく。イギリスの平和運動に関心を寄せる捕虜たちは、中国人民志願軍のために乾杯する。夢のような場面であるが、写真のフェルトンの満面の笑顔、捕虜たちの楽しそうな顔を見ると、この記述は本当だったのだと、私は、なんだか胸が熱くなった。

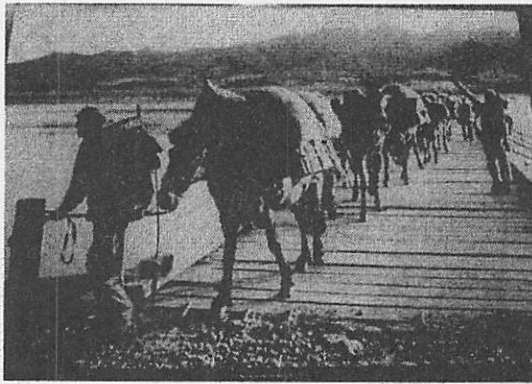
フェルトンの写真以外で印象に残った展示写真がある。群衆を前にし、「母親たち！行動をはじめよう。祖国を守り、平和を守り、子どもたちを守ろう」と書かれたプラカードを持った女性が大きく写っている。その誇り高い表情もすばらしいが、女性に高く抱かれた



子どもが、全く物怖じせず堂々としている姿には感心した。それは「平壤七日」に描かれている朝鮮女性たちや子ども達の気高さだ。2人は中国人親子だと思われるが、私は「平壤七日」の孤児院訪問の件を読んでいたので、実の親子かどうかはわからないと思った。大勢の孤児を出した戦時下で、母親は我が子だけを守ればいいというわけではない。子どもを産んでいるかどうかも関係なかったのだと思う。この写真からは、社会の力で子どもたちを戦火から守ろうという気魄が伺える。白朗が描いた朝鮮の女性たちと同じ精神だ。平和の実現と女性の地位向上は表裏一体だという気がした。

国連軍は国境を越えて、丹東にも爆撃をした。中国の人にすれば、朝鮮戦争を戦うということは、とりもなおさず、国土を守り、長く続く戦争を終わらせ平和を実現するための

戦いだという意識だったのだろう。展示されている写真には、戦時下とは思えないような希望にあふれる笑顔が目立った。



写真は、当時の鴨緑江を渡る人々である。物資を運んでいるようだ。戦争中、橋は何度も爆破され、爆破された「断橋」は戦争遺跡として今でも残されている。その横に立派な橋が架かり、今の中国と朝鮮民主主義人民共和国とを繋いでいる。

丹東は平壤と同じく「英雄の町」と呼ばれる。「平壤七日」と抗美援朝戦争記念館に流れる英雄スピリットとは、敵が圧倒的な武器を持っていても仲間を信じて果敢に抵抗し、平和を求めて、革命という理想の下に生活を続ける精神なのだと感じた。

記念館を出た後、私たちは中国の国旗を付けたボートで鴨緑江を遊覧した。タクシー運転手は、「普通のツアーでは出会えないような、痩せてガリガリの朝鮮の子ども達を見ることができるといふ触れ込みで、船着き場まで私たちを連れて行った。ボートにはタバコのカートンが用意されており、それを100円で買って対岸に投げてもらおうと、崖を駆け下りてタバコを取りに来る子ども達の姿がボートから見えた。拾ったタバコは売ってお金に換えるのだという。タバコを投げる運転手の様子を見て、言葉は悪いが、動物園で動物に餌をやっているような気がして、気持ちが塞いだ。私たちは共和国の貧しさや食料不足などのニュースを耳にしていたり、朝鮮半島の分断に複雑な思いを抱いていたいたりして、対岸を一目見ようと必死になった。このような人の気持ちを逆手にとって金儲けするとは…やりきれない気持ちにもさせられた。しかし彼は気さくな人物で、この「遊覧」で儲けて家を建てたと、悪びれた様子もなく、むしろ得意そうに話していた。このような現在の中国人の姿は、白朗が描いた世界とは、かけ離れている。中国では、このように実にこまめに金儲けをする人が多い。丹東は小都市であるが、夜になるとビルは煌びやかにライトアップしていた。朝鮮戦争時から考えると中国はすっかり変わってしまったようだ。

それでもやはり、丹東は魅力あふれる街であった。「断橋」には「平和ぼんざい」の文



字と平和の鳩が象られたレリーフがあった。朝鮮の人々が、圧倒的な軍事力をもつ連合軍の軍事力に負けなかったという朝鮮戦争の記憶が、今後、東アジアの平和を実現していく力になればと思う。

ところで、最後に付け加えておきたいことがある。「平壤七日」でフェルトンが捕虜たちに語っていたが、朝鮮戦争当時、イギリス国内で、米兵が、女性に対する誘拐や性暴力を行っていたという事実だ。そして現在も、アメリカの軍事基地被害は続いているという事実である。

今日（2014年1月20日）、沖縄の辺野古基地移転に反対する候補が、名護市長に再選したというニュースが入った。それは、軍事基地という巨大な暴力を許さず、なによりも自分たちの生活を守ることを選んだ小さな沖縄の決意である。今も続いているのは基地被害だけではない。平和を希求する心も、しっかり生き続けていることがわかる。

藤目ゆき先生に「平壤七日」の翻訳を勧めていただきご教示いただいたこと、瀋陽・丹東の旅に参加して神田修さん、梁東淑さんに出会えたことは、たいへん幸運だった。また翻訳にあたり、中国語の微妙なニュアンスについて、立命館大学大学院生の陸敬東さんに有益なアドバイスをいただいた。心から感謝の意を表したい。

中国の旅

神田 修

2013年11月4日～7日、モニカ・フェルトン夫人及び彼女が参加した国際民主女性連盟朝鮮戦争真相調査団の軌跡を調査するために、通訳として、中国東北地方の瀋陽、丹東の両都市を訪ねることができました。通訳、案内をしながら、幼い時から聞いたことを思い出し、新しい感触もたくさん感じさせていただきました。

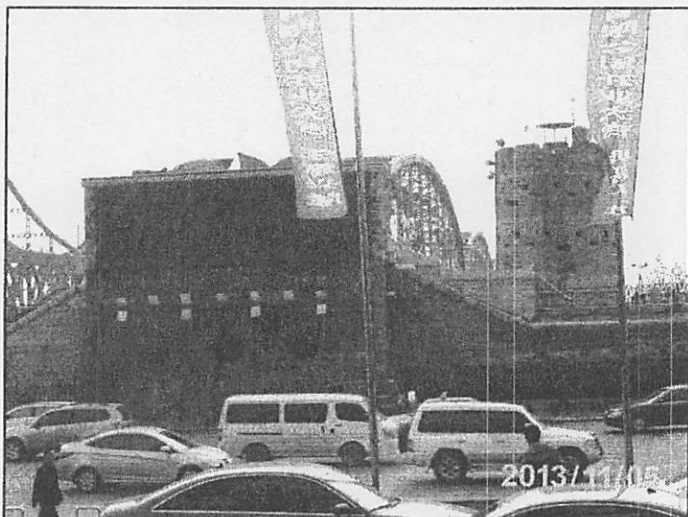
実は、私は中国出身と言っても、この両都市に入るのは初めてです。

・丹東の印象

瀋陽に着いた当夜、メンバー4人が揃った後、高速バスで丹東へ出発しました。瀋陽から丹東の間、電気列車も走っているが、各駅列車しかないので、高速道路を走るバスの方が速いし、値段も手頃だから、バスで移動することを選びました。バスの車内はきれいです。昔の長距離バスのように、車内にタバコの臭いが満ち、大きい荷物が一杯のイメージとはまったく違います。乗車後、女性乗務員は愛想よくあいさつ、車酔いのお客さんに菓子を配っているのを見ると、変化したと感じました。もう一つの変化はカバンをバスに忘れて、降りた後に気が付いて、すぐ戻って取ろうと思ったら、乗務員に止められ、乗務事務所に連れて行かれました。カバンの中身を細かく聞かれて、特にお金の貨幣の種類、金額を何回も確認されました。バスを降りてすぐ戻って取りに行ったから、簡単なことなのに、何でこんな面倒なことをしなければならないかと聞いたら、お客さんの安全のためであるし、いくら金額が入っているか、乗務員の賞金にも繋がっていると説明してくれました。丹東に対して、最初は全く田舎とのイメージがありました。実際に入ると町が大きいけれど、町施設は古い物と新しい物が並んで、うまく併用していて、きれいに整備されている、閑静な、落ち着ける町との印象でした。

・鴨緑江

翌朝起きると、ホテルの窓から鴨緑江と断橋が見えました。昨日ホテルに入った時、周りは暗かったですので、気が付きませんでした。こんな近くに見えるとは思いませんでした。朝食を済ませて、早速川岸に向かいました。





(写真： 橋、彫刻)

橋は二本あります。古い一本は「断橋」と呼ばれていて、北朝鮮側の半分はすでに無くなっています。戦争時に米軍の空爆により、破壊されました。その横に後で造った橋は現在も使用しています。橋にトラックが往来しているのが見えます。

きれいな水が流れている鴨緑江の向うが北朝鮮の領土で、あそこの建物、観覧車もはっきり見えます。橋の中国側が、丹東市のシンボルで、観光スポットになっています。北朝鮮沿岸観光専用の観光船が並んでいます。その横に、朝鮮の民族衣装を用意し、観光客に記念写真を撮ってあげる商売をやっている人がいます。市民たちはそこで散歩しながら、体を伸ばしたりしています。国境の町だな、と実感し始めながら、周りに緊張感がない、平和な光景が見えます。

でも、60年前に、ここは朝鮮戦争（中国では抗美援朝と言う）の戦場に一番近いところでした。中国志願軍は制空権ゼロに近い状況で、アメリカの激しい空爆の中で、平和のため、成立したばかりの祖国のため、鴨緑江を渡って、あの戦力がかけ離れた戦争に参加しに行きました。

“雄赳赳，气昂昂，跨过鸭绿江，保和平，卫祖国，就是保家乡。。。
抗美援朝，打败美国野心狼”（中国人民志願軍行進曲より）



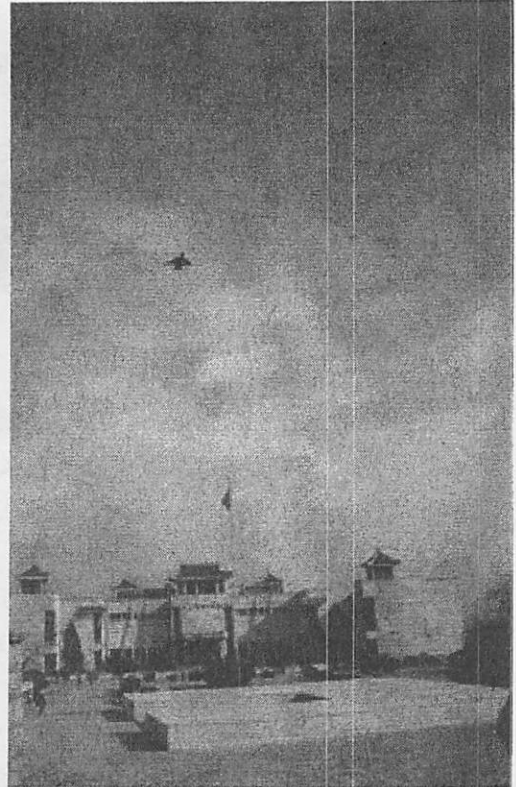
60年間を経た今、状況は変わり、あの断橋と橋端にある渡江彫刻が依然として静かに当時のことを語っているようです。

・丹東抗美援朝記念館

きれいな並木通りを沿って中に入ると、記念館は山の少し奥の広い敷地に立っています。



写真右：90歳近いお爺さんが、戦闘機型の凧を上げています。



色々な形の、豊富な資料、実物で、あの戦争を紹介しています。小さい時、写真しか見たことのない展示品も沢山あります。そこで、意外にもモニカ・フェルトン夫人と英米捕虜とが話している写真と出会いました。その写真を見た瞬間に、メンバー全員から歓声が上がりました。写真の中のモニカ・フェルトン夫人はすごくいい笑顔でした。一緒にいる捕虜達もその表情に影響されたでしょう。皆はリラックスし、明るい表情でした。この一枚の写真からは女性運動家だけではなく、人間としての魅力を感じさせました。

記念館には各国の朝鮮派兵反対運動の写真も展示されています。

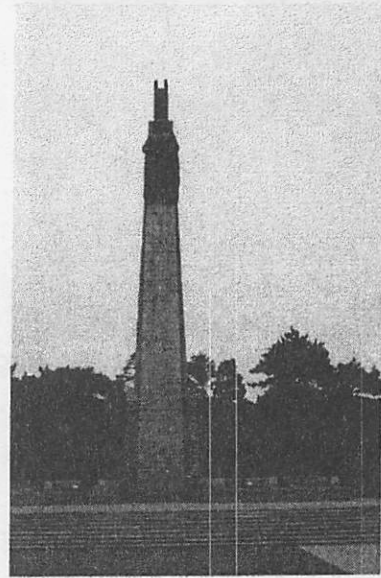
あの戦争を停戦させたのは中朝両国の戦場での戦いだけではなく、世界各国の平和を愛する人たちが共に戦うことによりできたことだと感じました。モニカ・フェルトン夫人はこの活動で更に身の危険にもさらされました。

年月がもうずいぶん経ったけれど、この人たちのことをもっと知って、もっと大勢の人に知らせる意義も更に理解できるようになりました。



・瀋陽抗美援朝烈士陵园

瀋陽市の中心部からちょっと離れたところに、陵园が立てられています。瀋陽、丹東にある多数の陵园の中で、最大規模の所です。周りはたくさん松の木が植えられています。中国で松の木は長寿、強いというイメージの木です。



陵园に入って、右に行くと、ソ連軍人の烈士陵园になっています。

左側に資料館がありますが、残念ながら、行った時にはもう遅い時間で、閉まっています。

陵园の中で、一人で回っている中年女性と偶然に出会いました。邱少雲のお墓はどこにあるかと尋ねられました。ここに身内が眠っておられますかと聞いたら、「いません。学生時代はよく来ました。今は四川へ行ったけど、久しぶりに帰って、もう一度見に来たのです」と返事してくれました。

その離れた女性の背中を見ると、丹東抗美援朝記念館で出会った、見学に来ていた学生達、息子や孫と一緒に来ていた元志願軍運送兵の老人を思い出しました。年月が経っても、あの戦争を、戦争の勝利のために戦った人達は決して忘れられないだろうと思いました。

写真の左側、ガラスに映っている二人は、元志願軍運送兵の息子と孫。おじいさんに戦争の詳しいことを聞きたいと声をかけると、『私はたいしたことはしていない。』と言いながら、去って行った。



ここで、抗美援朝戦争の中での有名な烈士を紹介したいと思います。



●楊 根思：

江蘇省泰興県王官司郷楊伙村出身。1944年新四軍に入隊。1945年中国共産党に加入。抗日戦争、解放戦争の著名な戦闘英雄で、1950年全国戦闘英雄の功章を受賞。

1950年10月中国人民志願軍の連長（中隊長）として、朝鮮戦争に参戦。

11月25日抗美援朝第二次戦役が開始。米軍の一部を包囲殲滅戦闘中に、彼は敵の逃げ道を切断する任務を受け、

一小隊を率いて、長津郡の小高嶺を死守した。最後、部隊には自分しか残っていない、弾薬も残っていない時、爆薬を抱いて、進攻して来た敵の群れに入り、共倒れた。享年28歳。

戦闘後、中国人民志願軍総部は楊根思に特等功を追記、「特級英雄」の称号を追授した。それと同時に、彼生前所在連を「楊根思連」に命名された。又、朝鮮人民共和国最高人民会議から「朝鮮民主主義人民共和国英雄」の称号と金星獎章、一級国旗勲章を追授された。



（楊根思の墓）



（邱少雲の墓）

●邱 少雲：

1931年生まれ、四川省銅梁県出身。1949年12月中国人民解放軍に入隊。1951年3月中国人民志願軍に参加、朝鮮戦争に参戦。

1952年10月、所在部隊は金化西にある米軍の前哨の陣地——391高地に攻撃せよとの任務を受けた。攻撃の突然性を要求されるため、攻撃距離を短縮しなければならない。攻撃の前夜、部隊の一部は敵陣地の至近距離で潜伏した。翌日、米軍は燃燒弾を無目的に発射し始めた。その一発は邱少雲のいた付近に落ちて、草むらはすぐ燃

やされ、火が体まで燃え広がった。潜伏部隊がいることを暴露させないため、彼は自己救

助を放棄し、犠牲となるまで、ずっと伏せる位置で動かなかった。

戦闘後、所在部隊の委員会は邱少雲の生前の申請による、彼を共産党員に追認すると共に「模範青年団員」称号を追授した。

中国人民志願軍総部は彼に特等功を追記、「一級英雄」の称号を追授した。又、朝鮮人民共和国最高人民会議から「朝鮮民主主義人民共和国英雄」の称号と金星奨章、一級国旗勲章を追授された。



●黄 継光 (1930-1952)

四川省中江県出身。1951年中国人民志願軍に参加、通信員(伝令兵)。1952年中国新民主主義青年団に加入。

1952年10月20日朝鮮の江原道金化郡で行われた著名な上甘嶺の戦役中、黄継光が所属する营(大隊)は某高地を奪い取る命令を受け、戦闘に入った。突撃

連(中隊)の一員として、敵の数か所の陣地を攻め下った後、一つの集団火力点に阻止された。その時、突撃連はもう十数人しか残っていなかった。黄継光は勇敢に立ち向かって、自ら爆破の任務を要求した。彼の爆破チームは敵のいくつもの拠点爆破した後、また一つの頑丈な拠点が残って、部隊の前進を阻止していた。黄継光はチームメンバーの犠牲、重傷のなか、手りゅう弾を投げ尽した後、負傷した足で、最後の拠点に向かって、接近しに行った。彼は自分の胸を敵の射撃口にかぶせた。壮烈な犠牲。

戦闘後、所在部隊の党委員会は、黄継光の生前の申請により、彼を共産党員として追認。中国人民志願軍総部は彼に特等功を追記、「特級英雄」称号を追記した。また、朝鮮民主主義人民共和国最高会議から「朝鮮民主主義人民共和国英雄」の称号と金星奨章、一級国旗勲章を追授された。



(黄継光の墓)

2013年中国フィールドワークの成果と課題：

WIDFの朝鮮戦争真相調査と中国の「抗米援朝戦争」

梁東淑

2013年11月4日朝8時。中国国際民航の旅客機は降り注ぐ日差しを突き抜け仁川空港を出発した。目的地は瀋陽。今回の中国への旅はまことに紆余曲折の果てに実現した旅だった。中国旅行をする時にビザが必要だということを後から知った私は目の前が真っ暗になった。今回の旅行は諦めようかと思った。しかし旅行を放棄することは仲間たちにもっと迷惑をかけることになりそうで、行くと決めてその方法を探した。幸いにも青島に立ち寄って当日ビザを発給してもらうという妙策があった。

飛行機が離陸してから約30分後、果てしなく続く青い山と平原、幾筋もの白い川の流れが視野に入ってきた。中国側の天候が好天であることを期待させるものだった。広々と開けた平野を横切って青島に到着した。ビザを受け取って瀋陽に行くために3時間待った。そして飛行機の離陸が遅れたためにさらに3時間待つことになった。瀋陽に先に到着して私を待っているはずの一行を思い浮かべれば、文句も言えないことだった。青島で足を踏み鳴らして苛立つ時間を耐えた後、ついに瀋陽に到着した。瀋陽空港は小さな田舎の駅前のような雰囲気だった。空が薄暗くなってきた。急いで一行と連絡を取って瀋陽北駅のバスターミナルへと向かった。

小さな満族食堂で満族風の夕食を簡単に済ませて、夜8時ごろ瀋陽北駅のバスターミナルから丹東に向かうバスへと乗り込んだ。丹東へと向かう夜道は寂しい田舎の風景だったが、二日後に丹東から瀋陽へと戻る時に見た丹東周辺の昼間の道の風景は、広い平野が果てしなく広がる場所だった。低い山裾と丘に畑を開墾しながら住んでいる農民たちの生活の場が続いていたその道を走れば、ここが故郷に帰るどこかの道端ではないかと錯覚するほどだった。ぽつぽつと現れる集落も私の田舎の村のような感じだった。広々とした原野の田んぼを見下ろして、さほど遠くない昔、馬に乗ってこの道を駆けながら祖国を救おうと東奔西走したであろう我が抗日運動家の姿を思い浮かべると胸がいっぱいになった。果ての見えない田んぼと田んぼの真ん中に美柳木（訳注：ヤナギ科の落葉高木）に取り囲まれた集落を眺めながら、あの田んぼは日帝支配下で虐殺と搾取を避けて満州に追われてきた我が農民たちが切り開き、耕した土地の一部だと思うと感慨無量だった。夜道を3時間ほどバスに乗り、午後10時を過ぎてようやく丹東に到着した。こぢんまりと整った丹東市内に入った。市内の古びた建物を通り過ぎながら、このなかの古びた家のどれかは確かに



丹東の町

小説に出てきたあの懐かしい我が町のクッパ屋だったかもしれないと想像して、丹東の最初の夜を過ごした。

私たちの旅は二日目に丹東の鴨緑江の鉄橋の向こうに丸くて赤い太陽が昇ると同時に始まった。今回の調査旅行はモニカ・フェルトンと国際民主女性連盟（WIDF）朝鮮戦争真相調査団が 1951 年に朝鮮を訪問する軌跡を追跡する旅程であった。モニカ・フェルトンをはじめとした国際真相調査団の団員たちが危険を顧みず朝鮮戦争の最中だった朝鮮をなぜ訪問しようとしたのか。そして朝鮮で何を考え、世界に向かって何を伝えようとしたのか、女性史の視点から朝鮮戦争を考察しようとする趣旨が私たちの旅の主要な目的だった。残念なことに私たちは朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国）を訪問することができず、WIDF 朝鮮戦争真相調査団がプラハ、モスクワ、シベリアを経て中国の瀋陽と丹東の地に到着した当時の中国ルートを歩くことで満足しなげらなかつた。

調査団は中国を経て共和国の新義州と平壤などを訪問して朝鮮戦争の実相を調査した。新義州と平壤など破壊された都市を視察し、戦争孤児の施設を訪問し、住民の証言に耳を傾けた。そのようにして最終的に作成された報告書が「朝鮮：私たちは弾劾する—1951年5月16日～27日の朝鮮における WIDF 委員会報告」であった。調査団の結論は明白だった。占領地で数十万人の子供、老人、市民が拷問を受け、殴打され、焼かれて生き埋めにされた。数千、数万人が狭い監獄の中で飢えと寒さで死んでいった。罪もなく監獄で苦しむ大衆に対する拷問と虐殺は、ヒトラーが一時占領したヨーロッパで犯したナチの虐殺よりもさらに残虐であったという結論であった。

モニカ・フェルトンは朝鮮戦争が想像よりもずっと悲惨だということを知った。彼女は朝鮮で起こっている残酷な虐殺と蛮行に対して英国市民にも責任があると考えた。米軍のみならず英国軍もまた朝鮮人虐殺と蛮行に加担したのであり、さらに加担したのは朝鮮に派兵された派兵兵士だけではなく、このような行為が市民の名において行われるよう許容してきた英国の一般市民でもあると考えた。戦場の記憶が彼女を苦しめた。彼女はあのような戦場の実相と祖国復興、生活再建のために苦闘している朝鮮人との出会いを世界に伝えようと決心する。英国で朝鮮戦争の真実を知らせるために証言し、朝鮮平和のために国連の公式調査を訴えた。そして市民には、〈私が朝鮮で見たもの〉を通して、どんなに小さな行為を通じてでも、われわれ全員が朝鮮の平和、ひいては世界平和に寄与できると訴えた。



丹東の抗米援朝記念館

モニカ・フェルトンは共和国をもう一度訪問する。1952年9月のことだった。二度目の訪問後、モニカ・フェルトンは共和国の物質的破壊が51年よりもいっそうひどい状態であり、これに対する住民の怒りがいっそう高まっている状況だと伝えた。しかし生活再建と相互扶助の精神が住民たちのあいだで高まっており、住民は非常に落ち着いて過ごしていると証言した。そして朝中の国境地帯に位置する捕虜収容所をも訪問した。モニカ・フェルトンをはじめとしたWIDF朝鮮戦争真相調査団の活躍は、朝鮮戦争を理解するのに非常に重要なきっかけを提供する。それなのに今まで韓国でこれについて注目した研究がただの一つもないという事実が信じがたいほどだ。1914年、咸鏡北道の鏡城で生まれ、日本の上智大学に留学し、解放後に越北した詩人の李庸岳(イ・ヨンアク)ただ一人が1951年の彼女を記憶しているのみだった。

親しみ深く、同時に写実主義的な態度で、満州・シベリアの流移民(訳注:他の地域から流れ込んできた人々)の悲劇的運命に関心を注ぎ、北方的な土着情緒を歌った1930年代後半期の朝鮮の代表的詩人、李庸岳。解放後には帰還同胞の貧しい現実と絶望感を告発し、朝鮮共産党系の文学団体に活動したこともあった。解放はされたが農地はおろか家と故郷まで二度も失った失郷民の姿を描きつつ見せてくれた歴史についての壮絶な絶叫は、流浪、貧困、家族の解体など、おそらくは壮絶な個人的体験から発するものようだ。1948年政府樹立以降、李庸岳は自ら行動の道を歩む。南労党への入党と不穏文書作成・配布の嫌疑で逮捕され、1950年に10年の刑を宣告されたが、服役中に朝鮮戦争が勃発し越北する。彼が解放後、自分の詩集を編みながら語った「急いで旅立つべき道」の意味は、今日改めて歴史の方向性についての峻厳さとして迫ってくる。激変する歴史の一時期に一人の知識人が選択した「道」の意味は、彼の作品を通じてわれわれの前にくっきりと残っている。

モニカ・フェルトン夫人に

—国際民主女性連盟調査団 英国代表モニカ・フェルトン夫人に対するアトリー政府の迫害を聞いて—



李庸岳(イ・ヨンアク、1914～1971)

真理は世界の良心を目覚めさせ
平和へ平和へと叫んでいるではありませんか
アトリーにとって最も恐ろしいのはまさにこれです。

モニカ・フェルトン夫人

かつてあなたが憤激に包まれて歩いたこの平壤(ピョンヤン)に
すでにれんが造りの煙突だけが残って立っている病院に、学校に
すでに悲しみを拒否した穴蔵の家に
今日も狂った爆弾が降り注いでいるのに

白髪混じりの母と愛する妹を失った
私はあなたに心から言います。
—あなたは正当です。

あなたが痛みなしには別れることのできなかつた
おかつば頭の子供—
父は十字架に縛り付けられ川の水に、
母は乳房をえぐられた果てに息を引き取った
11歳のキム・ソンエに代わって

『誰が母さんを、姉さんを殺したのか』と
あなたが聞いたとき
長いまつ毛の両眼をかつと見開いて
『アメリカの奴ら』と憤って答えた
9歳のパク・サンオクに代わって

非常に不幸なあまりにも多くの人たちに代わって
私はあなたに心から言います。
—あなたは正当です。

モニカ・フェルトン夫人

黄土の窪みに生きたままで葬られた
十や二十で教えきれない多くの子供たちと
百や二百で教えきれない女性たちの
『大きな墓』を暴いた5月のある半日
黄海道の名もなき山の峯には
流れる雲も避けて通り
ホオジロもどうしても歌うことができなかつたろう

顔さえ見分けがつかなくなった
私たちのスドルとボクナムとオクヒたちの中で
あなたはあなたの街で朝夕に慣れ親しんだ
あなたのジョンとメアリーたちを
抱き起こさないでいられるはずはなかったでしょう

モニカ・フェルトン夫人

アトリーの徒党たちはあなたを
『反逆』の罪で裁こうとしています。
しかし、世界人民の峻烈な審判が
あいつらの襟首に下されずにはおかないということは
アトリーの足元を流れるテムズの
真っ暗な河波でさえも知っています。

平和の戦列を明るく照らして立ち上がった
真理の松明を消すことができないから
日ごとにいつそう高まっていく真理の喊声を
沈黙させることはできないから

モニカ・フェルトン夫人

兄弟姉妹の鮮血が染みついた
兄弟姉妹の恨みと復讐に燃えるこの地で
米帝侵略軍の最後の一人を叩き伏せるまで
声をはりあげて泣くこともない朝鮮人たちは
あなたに心から言います。

—私たちの戦いが必ず勝利するように
あなたの闘争も勝利します。

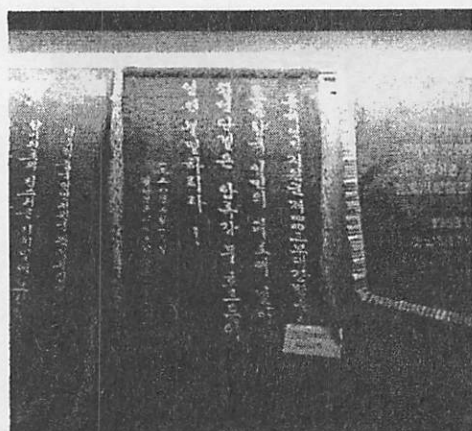
(1951年)



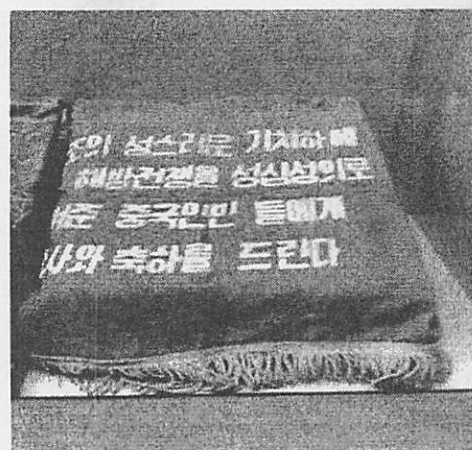
朝早く急いで宿を出て、私たちはイチョウが黄色く色づいた丹東の代表的な歴史遺跡である抗米援朝記念館へと向かった。果てしなく広がる公園に高くそびえる抗米援朝記念塔、巨大なモニュメント、迷路のような螺旋形の記念館は、丹東市が一目で見下ろせる場所に集まっていた。抗米援朝とは、資本主義を守旧する米帝の侵略に抗して、社会主義兄弟国家である朝鮮を助けるという意味であり、中国が朝鮮戦争に参戦した国際主義的名分をはっきりと示す表現だ。このように中国において朝鮮戦争はふつう「抗米援朝戦争」と呼ばれる。

中国は朝鮮戦争に述べ 240 万人以上の軍事作戦要員を派遣した。そして朝鮮戦争で 11 万 4 千人の中国人民志願軍が死亡し、25 万 2 千人が負傷し、捕虜を含む 2 万 5 千人が行方不明となった。多くの犠牲が発生したにも関わらず、米国に対する敵対視、賤視、無視の三視教育まで活用して展開した中国の抗米援朝戦争は、公式的に「勝利」した戦争と評価されている。そのような評価には異見も存在するが、少なくとも中国人民の次元での抗米援朝運動が成功したことは明らかにみえた。数えきれないほど多くの記念館の資料がそれを雄弁に物語っていた。

資料によれば、抗米援朝運動は平和署名運動、日本再武装反対運動、節約増産運動、愛国公約運動、軍人家族を助ける運動、武器献納運動のような多様な形態で行われた。平和署名運動には北京市の女性の 90% が参加し、愛国公約運動には全国農村人口の 70% が参加した。飛行機と武器献納のための運動では 1951 年 6 月から 1952 年 5 月まで、たった 1 年の間に戦闘機 3710 台分に当たる莫大な募金が集まったという。



丹東の抗米援朝記念館



中国の抗米援朝戦争の名分論理とは、もっとも通俗的な愛国主義だと主張する人もある。すなわち「保家衛国」運動であり、愛国主義運動へと転化され、国際主義運動である抗米援朝運動は中国内愛国主義の鼓吹を通じて成功裏に進められたという主張だ。女性も例外ではなく、抗米援朝のために女性も軍隊志願、軍事幹部学校への入学、医療隊志願、慰問の手紙および慰問品送り、愛国生産競争運動、平和署名、朝鮮難民を助ける募金活動、5大国平和公約締結要求、米帝侵略反対、日本再武装反対、米軍の細菌戦反対、節約増産運動、武器献納運動、愛国公約運動のような政治活動に大規模に参加したが、積極的に参加しただけ「国民になること」に成功したとしても、その核心はまさに愛国主義だったという主張だ。

抗米援朝期の中国女性解放運動の根幹が愛国主義だという事実は何を意味し、女性史の視点で朝鮮戦争を考察しようとする私たちはそれをどのように理解し、分析すべきだろうか。韓国と中国、日本の女性主義者の中には、これと関連して、中国あるいは共和国の社会主義女性解放が社会主義革命と国家によって与えられた、あるいは主導された。よって女性運動は自律的に歴史を持ちえなかったと批判する人々がよく見られる。あるいは近代国家および国民自体が男性を中心に想像され構築された以上、女性の国民化が真の女性解放ではありえないと主張する。一部の女性主義者は彼らとは違い、近代女性の主体性の根幹は国民国家に対する同一視による愛国心、または愛国主義だった。そのような現象は普遍性を帯びていたのであるから、そのような事実を無視してはならないと強調することを通じて、まるでそれ以外の他の女性主体性の形成の可能性は不在であるように前提し、上

記の主張に対して反論する。

すべて重要な省察と洞察だ。しかしすべての主張は結果的に、なぜ、どうして女性が自ら進んで「国民」として呼ばれているのか、その過程でいかなる矛盾が発生し、女性自身が矛盾をどのように克服したり縫合してきたのかを見ることができなかつたり、あるいは見ようとしていない。そのうえ女性が「国民」ではない「人民」として、あるいは「民衆」と呼ばれ、その発信に彼女たちがどのように答えたのかの違いを区分しない。すなわち国家と女性の間の特異側面を過度に極端化、あるいは抽象化する。あるいは国家の性格をたやすく近代国民国家一般へと抽象化して多様な国家建設をめぐる歴史的に遂行された女性たち間の多様な主体的行為と努力の差異を無視する。したがって女性たちの主体的行為が結果的に非可視化されやすく、その結果、女性は再び歴史の外へと追いやられるか、あるいは女性たちの中にある差異が無視され、同一化される可能性が大きい。

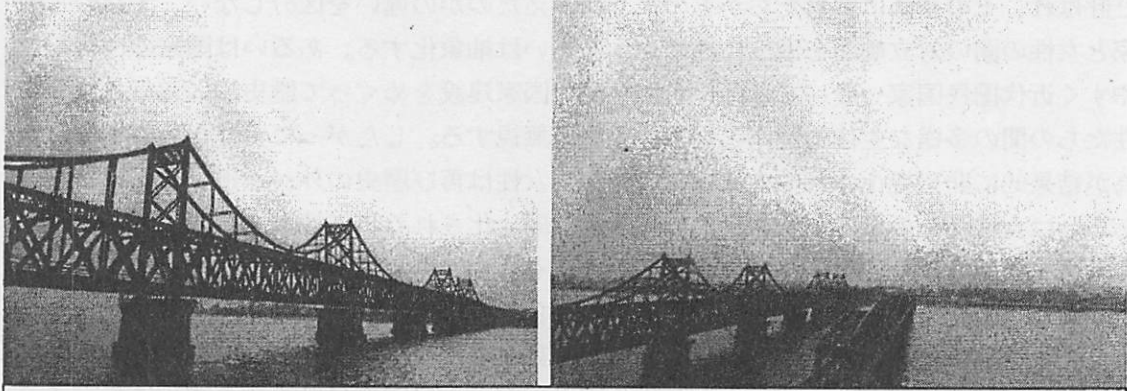
女性史の視点から近代国民国家を批判的に見るためにも過去の女性たちが自身のためにどのような国家像を持ち、どのような国家と自らを同一視して、それと向き合ったのか、またその国家資源をどのように活用したのか、具体的に検討することが先行されねばならないだろう。これは女性史の視点から近代国民国家、人民国家建設のその時代にあつての意味に光を当てなおすための迂回路であり、同時に中国や韓国、さらには東アジアに特殊でありながら普遍的な現代性の軌跡を描き出す道でもあるだろう。中国の抗米援朝運動は、女性と近代人民国家建設、社会主義女性としての主体性の登場、東アジアの脱植民と冷戦局面が、実に複雑に錯綜した事件として十分に注目に値する価値がある。今までそれについての研究が韓国においてはほとんど皆無の状況であるが、韓国現代史研究者にとって今回のフィールドワークは実に多くの課題を投げかけた。



丹東の抗米援朝記念館-モニカ・フェルトン

抗米援朝記念館で、私たちはモニカ・フェルトンと偶然に出会うことができた。捕虜収容所で英国捕虜たちと歓談する大きな写真が記念館の傍らに掲げられていた。片手に煙草を持ち、明るい顔でにっこりと笑っていた。私たち一行は思いがけずモニカ・フェルトンの写真を発見して歓呼した。全員で煙草を吸うポーズを真似しながらその前で記念写真を撮ったりした。今回のフィールドワークの目的は何だったか、まさにモニカ・フェルトンとWIDF朝鮮戦争真相調査団の旅を追跡することではないか。一枚の写真が私たちのすべての渇きを解消してくれた。写真は私たちに明確なメッセージを伝えてくれているよう

だった。中国の社会主義女性解放運動は、たしかに現在時点から見る時、多くの限界とジレンマを抱えている。だがしかし中国の女性解放運動は国家と社会運動に圧倒されたというよりは、それと不断に討論し批判し、協議しながら、能動的にそれを自己発見の契機として活用しようとした。抗米援朝運動は女性にとって、政治意識を高め、自信と主体性を吹き込み、国際連帯運動の経験の蓄積、女性組織の建設と拡大という贈り物をくれたのだ。



鴨緑江-中朝友義橋と鴨緑江断橋

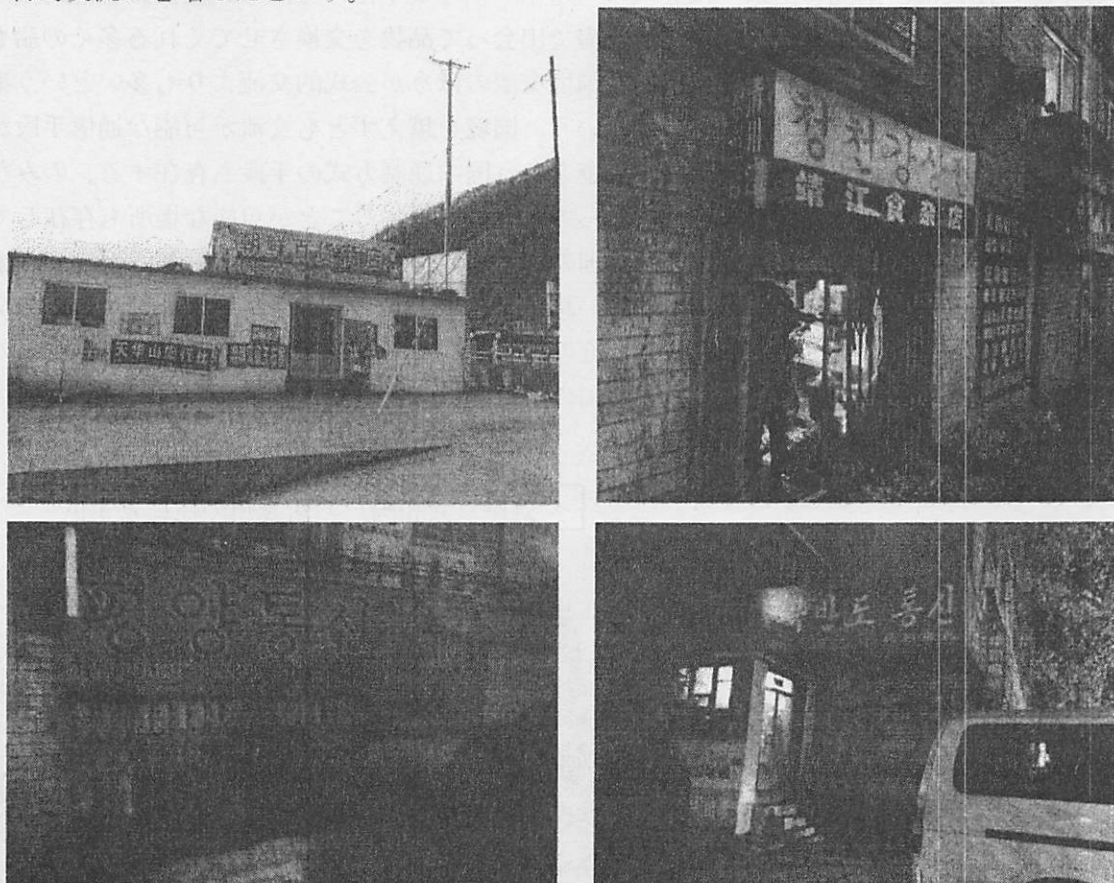
抗米援朝記念館を出て、次に向かったところは鴨緑江だった。一行4人はタクシー運転手をガイドにして鴨緑江周辺をフィールドワークしたりもした。運転手は25年以上丹東市内でタクシー運転手をしながら観光客のためのガイド役をしてきた。タクシーの中から見た丹東市内は、行く先々で平壤冷麺屋をはじめとした、共和国の都市名を付けた食堂が立ち並んでいた。丹東の「朝鮮・韓国民俗街」を歩いている頃には、韓国の田舎の市場を通り過ぎていくような見慣れた風景になった。丹東は中国遼寧省の東南側に位置しているが、国境として象徴される鴨緑江をはさんで共和国の新義州（平安北道）と向かい合う国境の辺境の町だ。だから鴨緑江の河辺の両側に住む国境地域の住人は、濃霧や太陽や月を同時に見、そして感じる。一日の日課は、一時間だという標準時差をはさんで繰り広げられる。さらに2000年になって中国政府が新たに造成した鴨緑江公園は朝夕に人で混み合っていた。

他方、新義州は表面的にはのどかな姿だった。丹東・鴨緑江周辺の観光遊覧船とボート、停泊している新義州の貨物船、または両国の国旗がはっきりと見える土砂採取船が鴨緑江の風景のすべてのように見える。しかし両国境地域の住人は鴨緑江を中心に共存しながら多様な人生の痕跡を埋め合わせていきつつあるように見えた。丹東の人々はよく『鴨緑江は海より深い』という表現を好んで使うという。おそらくは辺境都市、国境都市の丹東で、共和国出身者、中国人、朝鮮族、共和国系華僑、韓国人など多様な人と集団が、各々、あるいは一緒に生きることを意味を秘めて暮らしていることから出てきた表現だろう。

しばらく朝鮮半島の近現代史において丹東が持つ歴史の意味を吟味してみよう。日帝時代に丹東はアンボン（安東）と呼ばれた。中華人民共和国の樹立以降、1965年、中国政府は安東市を「紅色東方之省」という意味で丹東市と改名した。1908年12月、日本は清朝を圧迫して鴨緑江鉄橋の架設に関する協定を締結し、アンボン（安東）と朝鮮の鉄路を連結する事業を推進した。以降1911年10月、鴨緑江鉄橋を開通させた。丹東は現在まで共和国最大の対外的出口の役割を果たしているが、日帝時代にも1906年の京義線鉄道の開

通とともに中国との往来において門戸の役割を受け持っていた場所である。もちろん、豆満江があるが、咸鏡道を除いたその他の地域の中国との往来は、大部分、新義州と丹東を通過して行われた。鴨緑江鉄橋を通過して多くの破産農民たちが満州に移住し、また多くの抗日運動家たちがここを經由して抗日運動に身を投じたり、はじめからここを拠点として抗日運動を展開したりした。

他方で中華人民共和国の樹立以降は、共産党の土地改革によって丹東に住んでいる朝鮮族は自分の土地を獲得することができた。工業・商業に従事する人々は、朝鮮へと移住したり、丹東に残って国有企業の労働者として働いたりした。冷戦期の丹東は中ソ対立によって毛沢東が国境開発を制限したのにもなつて新義州に依存したこともあったが、改革開放後に共和国と中国間の小規模辺境貿易が活性化すると同時に、朝鮮族、共和国系華僑などが丹東、新義州を中心に集まった。たとえばある報告によれば、2000年代から約10年を超える歳月の間に、中国の丹東には共和国出身者と共和国系華僑が約2000人、朝鮮族は8000人（丹東市の朝鮮族は15000人以上）、韓国人は約2000人前後、住んでいるという。1990年代中盤まででも、中国では遼寧省の丹東よりは吉林省の延辺国境地域のほうが朝中国境貿易の中心地とみなされていた。しかし1990年代を起点として中国では、国家の公式交流を中心にしたものから、辺境である国境を中心とした商業的個人交流へとその比重が高まった。このような変化は丹東の位置と役割に影響を及ぼした。韓国と中国の国交樹立以降、特に南北和解の時期には南北交流が活性化したので丹東を經由した人的・物的交流が急増したという。



鴨緑江周辺の共和国出身者が営む商店

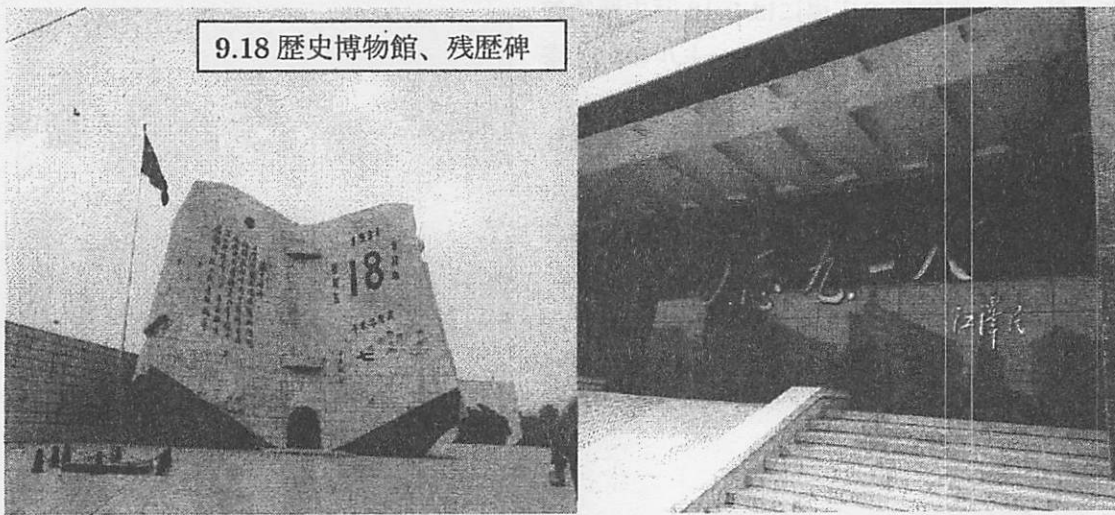
丹東は边境・国境都市であり、このように中国人と共和国の人々、そして最近では韓国人まで増加しており、多くの集団が集まって暮らしている独特な風景の都市を形成していきつつあった。韓国では、共和国出身者といえば脱北者だけを思い浮かべるのが普通である。脱北者とは異なる中国に居住する共和国出身者や、海外移住した共和国出身者の存在をおろそかにしたり、無視したりする。鴨緑江に象徴される共和国と中国の国境とは人が行き来することができない地域だという偏見を強く持っている。さらに共和国の人々が合法的・日常的に国境を出入りしているということは考えられもしていない。せいぜいのところ鴨緑江鉄橋に象徴される国境は、諜報戦を連想させる共和国の首領を乗せた汽車だけが行き来していると描写される。あるいは丹東から共和国へと向かうトラックだけが通過できると報道されている。反対に、共和国から丹東へと戻ってくるトラックは積み荷を積んでいない空のトラックとして報道されるのがお決まりだ。中国と共和国の国境を通過する民間交流はほとんどないというような記事は韓国の新聞のお馴染みのメニューである。しかし外部世界と徹底的に遮断された閉鎖国家というイメージの中でも丹東の共和国出身者の生活は、そのような私たちの偏見が出てきようのない生活のリアリティーをよく示していた。

丹東から新義州へは物資だけが届くのではない。物品とともに橋を渡って人々が行き来している。共和国と中国を行き来しながら国境貿易をしている人もいる。親戚への訪問を兼ねて経済活動をするために汽車やトラック、またはバスに乗り込むこともある。共和国と中国の住民は、国境の出入りに必須のパスポートとビザだけではなく渡江証を活用して国境を出入りしたりする。そのうえ河と海で出会って品物を交換させてくれる多くの船もある。これらが担当している非公式的な国境交流のほうが公式的交流よりも多いという事実は丹東の人にとっては公然の秘密だという。国境を越えずとも交流が可能な通信手段があり、国際電話料金を払わずに中国の料金を払う国内通話方式の手段も存在する。のみならず丹東の人と新義州の人が国境をはさんで肉声で対話することが可能な場所も存在している。鴨緑江の地理的特性と中国と共和国の国境条約の特殊性によって、都心から外郭地域へと出かければ、鴨緑江の本流ではない細い支流が流れている地域を人々は出会いと交流に活用している。私たち一行もまさにそのような場所に行き、ボートに乗って新義州の大地の1メートル手前まで行って、共和国の子供たちと住民に直接出会い、互いに挨拶まで交わすことができた。

対岸（共和国）の新義州の住民と子供



苦難の行軍以降、共和国は中国に生存を頼っている。共和国の民衆が依存している地下市場の商品の場合、90%以上が中国から搬入されているという。共和国政権の生存に必須な食糧、原油、兵器なども丹東を経由している。特に新政府樹立と2009年第2次核実験以降、共和国の中国依存は強化されている。朝中関係が金正恩政権の生存にとって必須の要素になるなかで丹東と新義州は両国の玄関口の役割を強化している。しかし南北関係が悪化するとともに丹東を経由した南北交流、朝中交流はかなり委縮しているように見えた。そのような状況にあって、鴨緑江周辺で中国ガイドの商売の方法として流行っている共和国の子供を活用した商業的観光コースの開発も、困難な経済事情によって苦しい生活環境に置かれている共和国の子供の現実とかれらに対するイメージを搾取する象徴的姿として感じられた。一日も早く平和的な南北関係の模索とともに、朝中の境界地域である丹東地区において朝中交流、南北交流が活発に実現されることを期待したい。



フィールドワーク3日目、初日の夜遅く到着したのでフィールドワークできなかった都市、瀋陽へと再び移動するために朝から慌ただしかった。鴨緑江を後ろにしたまま歩みを進めようとする、心残りでも物足りない気持ちになった。いつの日か鴨緑江を再び訪れる機会が来るなら、その時は新義州から丹東を眺めることができますように。もう一度、共和国の地である新義州に向かって最後の別れの挨拶をしてからバスに乗り込んだ。

瀋陽は日本が中国を侵略した日清戦争と日露戦争の主要な戦場であり、大陸侵略の戦略的関門都市であった。日中戦争が始まる前から日本が占領していた満州地域では、抗日戦争によって多くの犠牲が相次いだ。中国政府は1931年9月18日に発生した満州事変を記念するために、東北地域の中心地であり事変の発生地である遼寧省の瀋陽に9.18歴史博物館を設立した。私たちが瀋陽で最初に訪問した場所は、まさにそこだった。

中国政府が瀋陽に大規模な9.18歴史博物館を建設した理由は、おそらく東北地域の抗日戦争の犠牲と貢献を記憶するのみならず、自負心を奮い立たせる教育的意味もあるだろう。中国の大部分の抗戦記念館には、1972年9月25日に日本との国交回復を迎えて周恩来首相が言及した「以前のことを忘れず記憶することは後世の教訓になる（前事不忘、後事之師）」という言葉が掲げられているという。中国の記念館の共通のテーマである訳だ。抗戦記念館は一つの国家の歴史と伝統を保全するのみならず、大衆の参観を通じて自国の歴史と文化についての記憶を増強する空間であるということである。

瀋陽 9.18 歴史博物館は 1991 年に建設され、「国恥を忘れるな」というスローガンのもと 1999 年に拡張された。その後、日本による南京虐殺の否定と、首相の靖国神社参拝が続くと、日本の軍国主義を警戒するためにより強化された内容の展示によって 2001 年に 2 度目の開館をした。展示面積が 9180 平方メートルで、9.18 の意味を込めたそうだ。博物館は野外記念モニュメントと内部展示館に分かれていた。野外モニュメントは 9.18 残歴碑、警示鐘亭、勝利記念碑で構成されていた。9.18 残歴碑は花崗岩で作られた大きな卓上カレンダーの形をしている。カレンダーの始まりは 1931 年 9 月 18 日からになっていた。碑の左側には 9.18 事変の歴史的内容が刻まれている。碑の右側にある「警示鐘」の正面には「勿忘国恥」の 4 文字が、裏側には 9.18 事変の経過が記録されていた。喊声を上げる人体のレリーフ彫刻もあったが、抗争と奮闘の含意を込めていた。残歴碑が見ている人に 9.18 事変の時代を感じさせるならば、警示鐘は国恥日および侮辱と苦痛を忘れるなと警告しているようだった。博物館の広場には 9.18 歴史博物館と刻まれた江沢民の書、91.8 メートルの記念塔と爆弾の彫刻、奉天忠霊祠石碑などが展示されていた。奉天忠霊祠石碑は元々日本の靖国神社の分社であって、日露戦争から 9.18 の時期までは戦士した日本軍の遺骨を祀っていた場所であり、瀋陽の中華路付近にあったものが現在は 9.18 歴史博物館へと移されてきていた。東北地域に対する日本軍国主義の侵略の証拠物としてここで展示されていた。

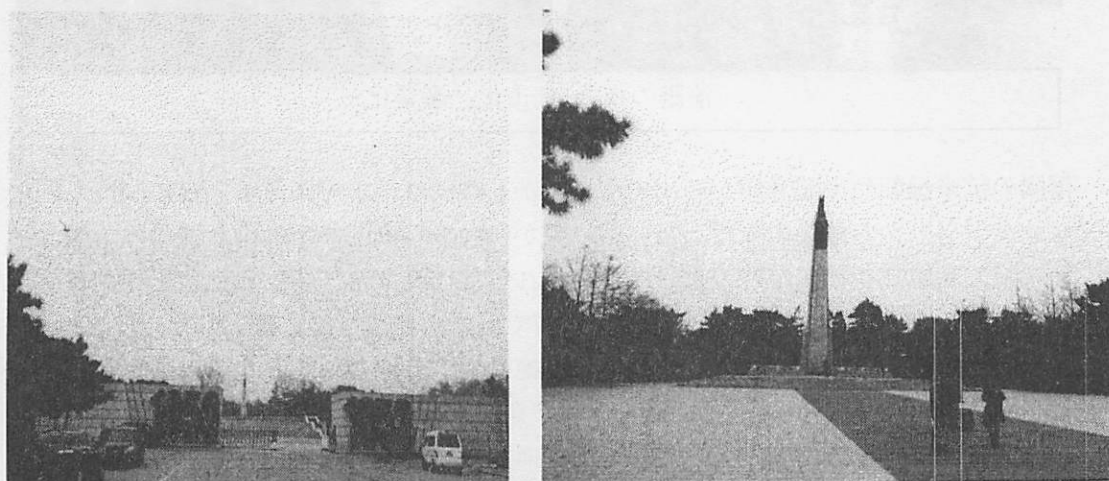


9.18 歴史博物館，レリーフ像

展示館の建物の長さは、すべての中国の記念館の中で最も長い 354 メートルであり、高さは抗戦 14 年を象徴する 14 メートルだという。展示館正面には青銅で鑄造された「国難」をテーマとしたレリーフ彫刻がある。このレリーフ像は 9.18 事変後の東北地域の支離滅裂さと流浪する人民の悲惨な状況を示しているようだった。展示館内部は東北人民抗争と勝利獲得の歴史的場面をあらゆる歴史的遺物、写真、文献資料などを陳列して、この時期を再現していた。時期は 1894 年日清戦争からだが、1931 年 9.18 から 1945 年 8.15 までの 14 年間の東北地域抗争の歴史が中心であった。大部分の展示品、模型図、彫刻などを開放してあるので生々しい感じを受ける。

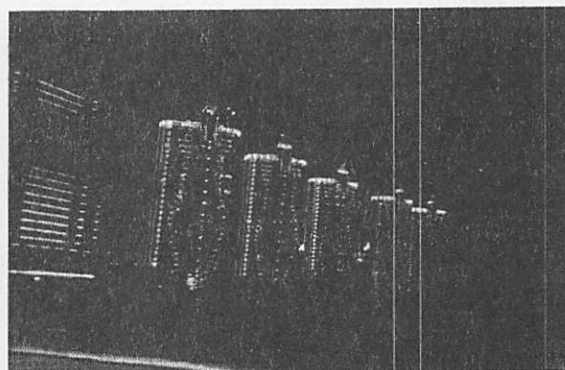
他方で日本は満州事変のとき、日露戦争の「栄光の記憶」をよみがえらせようとする記念事業を推進した。これは靖国神社の戦争博物館の日露戦争 100 周年記念展示でそのまま露呈されたことがある。満州事変に対する中国と日本の間のこのような観点の違いはその国の歴史認識の違いからきており、国家間の互いに異なるやり方の戦争記念へと帰結している。中日戦争の遺跡は、近代の韓・中・日関係を正確に認識させてくれる証拠だ。したがって中国と日本の間の歴史争点と戦争記念問題は中国・日本と戦争経験を共有する我が韓国とも密接な関連があるのであり、戦争記念館だけがあって平和記念館がない私たち韓国人にとっても示唆するところが非常に大きい。

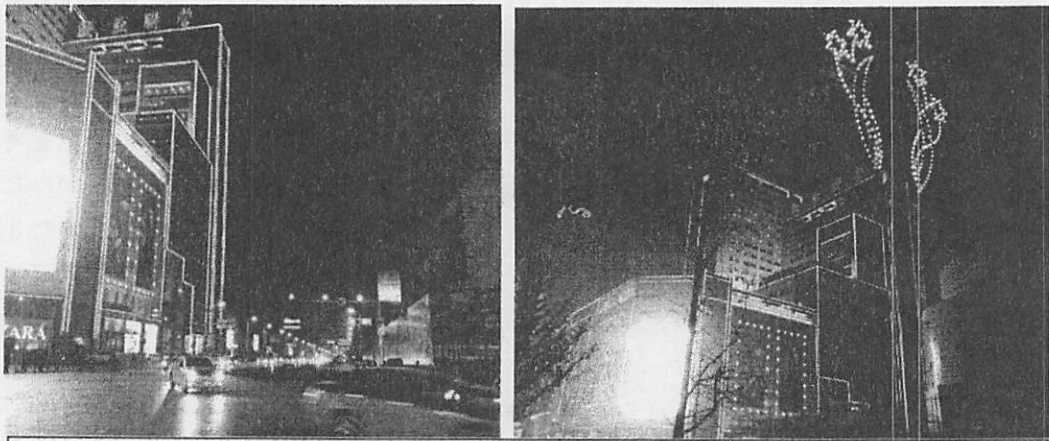
戦争の真実を認識して、戦争の本質が何なのかを理解し、平和な未来を構築する叡智を培うのに役立つ戦争遺跡の保護と展示は、被害者である国家と民族のみならず戦争を引き起こした国家と民衆、および全人類にとって幅広い覚醒と教育の意味を持たねばならないだろう。過去の戦争の要衝地が同時に平和時の交流と協力の現場だったという点を考える時、これからは戦争遺跡と記念館は未来の平和を志向する場所へと昇華させていけたらと願う。戦争遺跡の保護と戦争博物館の建設、そして平和教育の領域で韓・中・日の3国が互いに協力を模索して、三国が共同で戦争の事実を調査・研究して戦争遺跡を東アジアの新しい未来を拓く平和と平和教育の場へと転換させる努力を傾注していくことを祈りたい。



瀋陽の1950-1953 抗美援朝烈士記念館

いつの間にか瀋陽の都心は夕陽に染まっていた。「1950-1953年 抗美援朝烈士記念館」に向かって私たちは歩き、また歩いた。門が閉まっていた資料館を見て歩くことができなくてがっかりだった。抗美援朝を戦った烈士たちの墓にお参りし、塔の前で黙とうすることで満足せねばならなかった。中国フィールドワークはたいへんなハードスケジュールだった。広大な大陸、どこに行っても大規模に作られた記念館や博物館をフィールドワークするのは簡単なことではなかった。帰国後1か月のあいだ、顔に出来物ができて化膿するほど疲労した旅行だった。移動時間も長く、歩く区間も長かった。しかしWIDF朝鮮戦争調査団がその昔、瀋陽に到達したときは、今の私たちよりももっと大変な旅行だったろうと考えて、それを慰めとした。





瀋陽の夜景-都市化、産業化

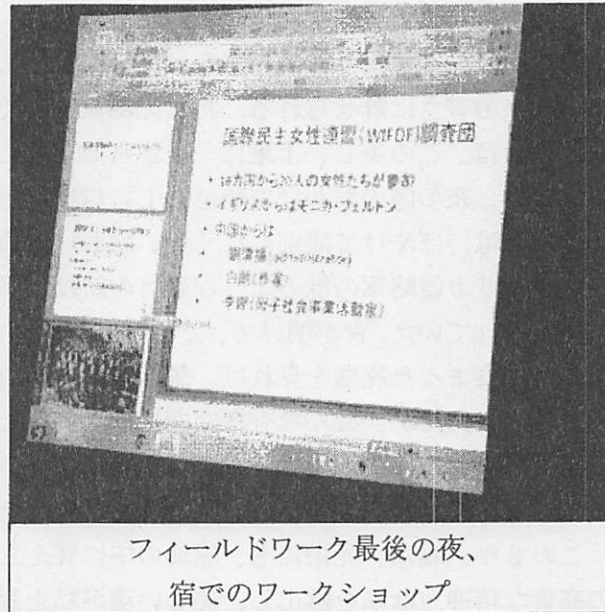
瀋陽の抗米援朝烈士記念館から出て宿に向かう時には、すでに薄暗い夜になっていた。フィールドワークの最後の夜だった。宿に向かいながら車内から眺めた瀋陽の華麗なネオンサインと高層ビルの明かりの夜景は今も忘れられないほどに多くの想念を呼び起こした。20年前に瀋陽に来た時とは雲泥の差で変わってしまった都市化、産業化だった。

中国は今に至るまで依然として農村人口が絶対的の比重を占めている農民国家だ。中国で過去100年の間に起った3回の内戦は農民革命が主体の「土地革命戦争」といわれる。解放後の新民主主義は農民の要求を満たす土地革命から始まった。社会主義的改造もまた農民を組織する合作化から始められた。近來20年間の改革も農民の自発的改革から出発した。中国はいかなる理論を動員しても結局のところ問題は「農村、農民、農業」という、いわゆる「三農」問題をきちんと説明するののかの問題に帰着するので、それを通じて検証されるほかないという。したがって中国問題は基本的に「人口は膨張し、資源は不足している農民国家が工業化の発展をどのように追求するののかの問題」だと要約されたりもする。瀋陽の都市化はこのような現在の中国問題を集約的に示しているようだった。

都市化、産業化の実質は資本集積と人口集中だという点は常識だ。人為的に都市化を早めて資本が都市へ集中される速度が速まれば、都市に危険が集中される速度もそれにつれて速まる。危険が過度に早く集中されて都市危機の爆発が招来するとすれば、その時その危機を遅延させる媒体が果たして何なのか、中国の人は知っているだろうか。単純に都市化、工業化と同時に機械化と化学化の農業現代化を推進するからといって、グローバル資本主義競争において勝利することはできないだろう。中国の工業が規模の面でもっとも大きなことは事実だが、構造は弱体で生産は過剰である。資本主義の普遍的な内的矛盾によって病的によりいっそう大きな過剰生産を続ける体制が誇れるものは何があるのか、再度、批判検討すべき問題ではないか。

中国の各地方政府がすべて工業化、都市化、農業現代化という「三化統一」を同時加速的に追求している状況において、中国はすでに多くの開発途上国が経験した失敗事例を決して忘れないでほしいと思う。すでに中国内部からそのような知性の声が聞こえるようだ。発展至上主義の時代に中国農民をはじめとした人民たちの居場所はどこにあるのかと問う中国内の良心的意見が尊重されるような状況であってほしい。この間の中華人民共和国の歴史を見れば、艱難辛苦の果てに国家の基盤を固め、今のような世界的存在感を確立する

過程で農民と人民が多く犠牲を耐え忍んできたことが分かる。このような歴史をきちんと究明し、それに合った諸政策が農民と人民たちのために工夫されることを望みたい。その過程で中国は本当に西欧式資本主義の現代化の道を進むべきなのか、中国式現代化の道はいったいどこにあるのか。このような問題に対して執拗に問い続けてほしいと思う。西欧式資本主義の現代化の華麗な外皮は植民地国家の民衆が被る莫大な犠牲を前提にしたものであるほかなかった。植民地だった多くの国々が第2次世界大戦後に解放されたが、不平等は続き、後発国家として西欧式現代化をそのまま模倣したが、これは自身を西欧の植民地主義の列車に縛り付け続けることであり、グローバル資本主義の鎖に繋がれたまま西欧の先進国のために利益を提供し、危険と負担を抱える犠牲者の役割をするだけである。この道が中国の道であってはならないだろう。



あれやこれやの考えとともに、いつかフィールドワーク最後の夜を迎えることになった。私たちの旅のフィナーレは宿で開いた小さなワークショップだった。ワークショップのためにこの遠い中国の地までノートパソコンとプロジェクターを旅の荷物として持ってこられた藤目先生の情熱に全員が驚かされ、韓国現代史研究者であり女性史研究者というだけでついうっかりと中国旅行に付いて来た自分自身が少し恥ずかしかった。しかし今回の旅は私にとって多くのことを学ぶきっかけになった。資本の危機を転嫁する植民地戦争によって被害をこうむった東アジア国家の民衆であると同時に女性として、韓国と中国は非常に多くの共通の言語を持っていると思う。長い間冷戦イデオロギーによって隠ぺいされ、間違った認識へと誘導されたため、容易く解決することの難しい問題として残っていた互いの歴史、そして私たちの女性史とどのように客観的に向き合うべきなのかを省察する非常に有益な時間だった。

白朗著

平壤七日

翻訳 西田千津

1 不屈の町

空が明るくなった。夜を徹し 10 時間走り続けて、運転手はもちろんのこと、乗客も疲労困憊していた。それでも空爆を避けるため、運転手は、赤くなった目を凝らし、馬力充分なガス車で全力で飛ばした。草原を駆け抜け、山並みを駆け抜け、青々とした林を駆け抜ける…目の前に次々と続く景色は、人を魅了してやまない。初めて朝鮮に来た青年たちは、山水の青さに魅せられる。たとえ漆黒の夜であっても、疲れた目を休ませようとならない。彼らは、この美しい土地に一目惚れしたのだ。

しかも、夜の闇のおかげで醜悪なものは覆い隠されている。無限に広がる星空の下、一切の風景は、ぼやけて識別しにくい。険しい山道、鋭く聳え立つ岩壁、巨木、きらめく溪流…アメリカ侵略軍の獣のような蛮行の跡は、風景の無限の美しさに隠され、夜の闇に閉じ込められていた。夜が明けて、ようやく白日の下にさらされる。瓦もなく緑もない垣根、あの血に染まった廃墟を見れば、驚きと悔しさのあまり、眠気も吹き飛んでしまう。

「美しい山河が、こんな有様だとは、この目で見るとまでは、想像できなかった」

誰もが心を痛み、憤慨した。車が平壤市に入ったときは、人々の疲れはすっかり吹き飛んでいて、忘れ難い恨みだけが記憶に留められた。

この2年、私は、光栄にも、廃墟の中に聳え立つこの英雄の町を何度か訪問した。平壤の貴重な精神力は私を感化し、美しい魂が私を惹きつけ、いいようのない敬愛の情を生み出した。訪れるたびごとに、ますます深く強くなる敬愛の情。私は深く確信した。平壤は、至る所で蹂躪され続けているけれど、平壤の精神力は、いかなる暴力をもってしても破壊されることはないし、ましてや平壤の魂は、いかなる暴力をもってしても、消滅させられることはありえない。

春の平壤は、戦時中であっても活気みなぎる首都であった。大地が蘇る、まさにその時期に、私はやって来た。私はまた、この上ない敬意と熱愛の情を抱いてやって来た。あのとき私がぬくもりを感じたのは、春の太陽ではない。平壤市民が、新しく生み出される偉大な気魄に向かっていく、この町の繁栄した気風にぬくもりを感じたのである。

破壊された市場は、装いを新たに再開していた。にぎやかな人通りが、色とりどりの貨物を、縫うように流れている。街角の店舗は、普段通り営業している。人々は、傷痕も生々しい石畳の中に、臨時の小屋を建て、担架の上に、とびきり新しい日用品を並べ、市民の必需品に供給している。映画館はいつも満席の看板が出ている。市民の精神的な飢えを満たしているのだ。そのほか対応しにくいことにも人々は最大の努力を払い、精神的な荒廃に陥らないようにしている。十字路では、警察官が威風堂々と交通整理をし、ひっきりなしに往来する車両を、一心不乱にさばっている。たくさんのラジオの大ラッパからは、人心を鼓舞する歌曲が放送されている。あちこちで改修工事がなされている。あちこちで緊

張しながら人々は働いている。…一切がみな、そんな風に秩序がある。上空はいつも敵機の唸り声がし、この繁栄した都市を威嚇しているが、人々は普段通り、自分の計画通りに自分の生活と仕事をこなしている。道を行く人は、普段通り歩いている。落ち着いて自分の道を歩いている。工場の煙は、普段通り、天を衝く。役所や学校は、休みになることはない。狂った敵の飛行機。おまえは狂ったのか。おまえは野蛮だな。お前のことなどどうでもよい。我らのすぐれた勇敢な神鷹が、おまえを粉々にするぞ。

果敢、剛毅、頑強不屈の戦闘精神が、朝鮮の老若男女すべての生命を支えている。天を頂き大地に立ち、ますます強固になる精神。私が次に平壤に来たときには、もっと深く実感することになるだろう。

現在は、一見して、春の平壤ほどの繁栄はない。敵の狂気の爆撃が、人民の鮮血を流したのだ。

我々の車が平壤に入った時、夜が明け始めたばかりだった。満身創痍ではあったが、街には温かさがあった。人々は、壁と屋根しかない家から、じめじめした洞穴から、路傍の草むらから姿を現した。爽やかな秋風の中、粗末な単衣の服を着て、一日の生活と仕事を始めた。女たちは、壊れて半分になった壺を頭に載せて水を汲みにいき、老人たちは、柄が焼け焦げた箒で、街角を掃いている。…彼らが生活する中で、どんなに辛く苦しいか、そんなこと描く必要はないではないか。そんなことは容易に想像できる。ところが彼らの顔には憂いはなく、目には希望の光が輝いている。それは永遠に上を向いて輝き続ける光だ。彼らはまるで災難にあったことがないかのようだ。道ばたに寝ている子どもの熟睡している小さな顔から、母親たちが楽しそうに労働している姿から、悲観や恐怖の表情は全く見て取れない。

市内入りしてから我々は7日間平壤に滞在した。いよいよ別れという時、同行のフェルトン夫人も、感慨深げに、興奮気味に言った。

「平壤は変わってしまいましたね」

「いいえ、平壤は変わっていません。ずっとあんな風に、堅く強く不屈の精神でしっかりと立っています。あなたは、どこが変わったと言うのですか？」私は、彼女がどういうつもりで言ったのか、すぐには理解できなかった。彼女は昨年、国際婦女調査団で訪れて以来だから、平壤は15か月ぶりなのだというのを、私は忘れていた。私自身は4か月前に来ていたのだから。

「早とちりしないで、あなた。私たちの見方は、基本的には違いはないのですよ」彼女は微笑んで、正確に言い直した。「私が言いたいのは、質の変化ではなく量の変化なのです。あなた、まだ覚えてるでしょう？去年、私たちが朝鮮に来たときは、調査団のメンバーは、敵の暴行のあとを見て、自分の目を疑いました。（もちろんあなたは例外。あなたは、とても多くのことを見ていましたからね）私たちが、報告書を発表したとき、世界中の善良な人たちは信じようとしませんでした。そんな狂った破壊。実際、人類史始まって以来の記録的な破壊です。空前絶後の破壊だと皆が思いました。こんなに恐ろしい状態よりもっとひどくなるなんて、誰が想像できたでしょうか？ですが、今の平壤を見てごらんください。アメリカの侵略者は、まるで、朝鮮民族を全滅させようとたくらんでいるようです！私が言おうとしていた変化とは、ひとつはこのことなんです」

「でも、人民は、決して屈服しません。毎日の暮らしは続いているし、それどころか、

秩序があるし、活気にあふれています。彼らは勇敢で苦しみに負けない非凡な精神をもち、勝利を明確に信じています。そのことがますます鮮明になってきました」と私は言った。

同行者は、うんうんとうなずいた。

「そうです。ですが、今では、勇敢さだけではなく、以前にはなかった落ち着きがみられます。敵の飛行機が絶え間なく爆撃を繰り返しても、人民の生活は変わらず、しかも以前より前進しています。これが、つまり私が言わなければならない2つめの変化です。アメリカの侵略者は完璧に失敗したし細菌戦は逆効果だったと私は自信をもって説明できます」彼女が言った逆効果とは、中朝人民軍隊と人民が、細菌戦に抵抗するため、凄まじい勢いで、大衆的に組織された伝染病防護の運動を進め、病原菌どころか、昔からある流感も根絶したということを示している。

私は彼女の見解に全く同感だ。もし敵が、自分たちの蛮行がどんな成果をあげたか知りたいたいと思っても、それなら、その敵に、別にたいしたことではないのだと私が言ってやる。

2 労働が希望をもたらした

夜、敵の飛行機がまた、どこかで狼藉を働いているのだろうか。爆発で窓が震えた。誰かが、猛烈な勢いで叩いているようだった。我々の家は、爆発に抵抗しきれなかったことはまちがいない。しかし、私たちは、ぐっすり眠っていた。たまに振動があっても、寝返りをうって熟睡した。朝鮮のこの地では、いつ、災難が頭の上から降ってくるかわからないが、私たちは朝鮮人民と生活していたから、どんなときでも、とても安全だと感じた。これは、我々の周囲で武装した朝鮮の仲間が敵機を監視していたからではない。家の近くに堅固な防空壕があるからでもない。百発百中の高射砲と空軍が守ってくれたからでもない。私たちは、朝鮮人民の比類なき果敢さと落ち着きに深く感化されて、少なからぬ自信と勇気が湧いてきたからだ。

敵が朝鮮人民に負った血の債務は、実際、あまりに多い。多すぎる。これは私がとやかくいうことではない。その清算は朝鮮人民に任せようではないか。私がアメリカ侵略者に言うべきこと。それは、これこそが、おまえたちが朝鮮人民の魂に蒔いた恨みの種だということだ。これこそ、おまえたちが、全世界の人民の面前で絶対に孤立するという根拠なのだ。これこそがおまえたちが焼身自殺するための導火線である。朝鮮人民は英雄であり、永遠に屈服しない。

それでは事実を見てみようではないか。

ある朝、私たちは、平壤市戦時避難民収容所を訪問した。それは、地面に掘られた堅固な石洞だった。帰るべき家がない避難民がこの中に住んでいる。中は、じめじめして暗い。ただ、晴れた日は、十分な陽光の恩恵に浴することができる。高齢の女性が太陽の下で綿の布団と、襟が焼け落ちてしまったシャツを干していた。子どもたちは、日光浴をしたり、輪投げをしたり、目隠しをしてかくれんぼをしたりしていた。働くことができる者は、男性も女性も、壊れた家で、鋏、のみ、斧、鋸をふるい、修理にいそしんでいた。彼らは、瓦の破片と残った木材で家を建て直していた。金平山という老人は私たちに言った。

「私たちの小さな家庭は、きれいさっぱり壊れてしまいました。けれど、私たちには、みんなの大きな家族があります。政府や志願兵の皆さんが私たちに良くしてくださって、

今では、私たちは衣食が足りています。私たちは、この大きな家庭の建設をさらに進めなければならぬんです」

この老人は、すでに58歳であったが、青年のような勇壮な志を抱いていた。

この避難民収容所の近くで、白髪交じりのおじさんが、自分のつくった洞窟の天井に泥を塗りつけ仕上げをしていた。私たちが彼を訪ねたところ、彼は、ユーモラスにこう言った。

「私たちの家は、収穫物もろとも破壊されてしまいましたよ！だが、見なされ、私は、敵が爆弾で穴をあけたところに、ちゃんと家をつくりました。3日でちゃんと洞窟ができたんですよ」そもそも彼の壕は、爆弾であけられたものだった。彼は続けてこう言った。

「敵の爆弾がどんな材料でつくられていたのか知らないが、どうやら、最高の肥料のようですよ」

彼は、窪地を指差した。「あれは、1か月前に被害にあった土地ですが、見なさい。草の成長がこんなに速い！この壕が完成したら、次は、秋野菜を植えるつもりなんです。保証します。土糞をやる必要は全くないですね」おじさんの話には、未来に対する無限の信頼と、敵に対する風刺が生き生きと表されている。

朝鮮文化宣伝省の高層ビルは、綺麗な牡丹峰を斜めに望む。私は4月に平壤を訪れたとき、何度かこの破壊されたビルに入ったことがある。私たち創作グループの仲間は、かつてこのビルの中で、朝鮮文芸界の仲間たちと交歓し、語り合い、創作経験について交流した。こうした熱い友好関係は、永遠に忘れがたい思い出だ。今では、文化宣伝省は、別の場所に移転してしまっていた。敵は、この高いビルに大量の爆弾を投げ込み、ビルは半壊してしまったのだ。

焦土の中、あたりを歩き回り、記憶をたどっていた私の目の前に、ふいに、爆弾で傷つけられた一本の木が現れた。その根は、すでに半分があらわになり、木の幹も、くたっと曲がっている。だが、不思議なことに、それは死んではいなかった。いや、一度死んだのかもしれないが、今や、密集した枝の間から、焼け焦げて枯れた葉の間から、青々とした若芽が芽吹いていた。私は黙って考えた。朝鮮人民だけではない。朝鮮の木でさえ、生命力はこんなにも強いのだ。次に来たときには、この非凡なる木は、昔のように葉を生い茂らせているだろう。

朝鮮労働新聞社に行く途中、農家のおばあさんが、小さな花壇に水をやっているのがみえた。この小さな花壇は、今にも倒れそうな藁葺きの小屋の窓の下にあった。私はそれを見て、朴正愛さんからいただいた花束を思い出した。あの花も鮮やかで美しかった。この花は自分で栽培しているのだとかつて彼女は話していたことがあった。その後、パーティーで家に招待されたとき、15回も爆撃を受けて破壊された家の門前に、大輪の花が鮮やかに咲き誇り、日の光を受けて微笑んでいた。あのとき、朴正愛さんは笑いながら

「これは、私が育てたんですよ」

と言った。

このおばあさんは、朴正愛さんと同じ精神をもっていると思う。

朝鮮労働新聞社は、少し辺鄙な山奥の洞穴に建てられていた。私たちが到着したときは、夕暮れが近かったのだが、これは、全く関係なかった。どのみち、真っ暗な洞穴では、自然光の恩恵は受けない。洞窟の中で働いている人は、自分の手で明るい希望をつかむのだ。

洞窟の中は、天井が低く、湿っていた。だが、十分な光はあった。ただ、まだ洞窟に慣れないため、何となく手探りで歩いたり、場合によっては腰も曲げたりしてしまった。しかし、夢中で働いている仲間の姿を見ると、すぐ、こんな無駄な心配は忘れた。

恐らく、半数以上の人、家を敵に破壊されていただろう。だが、生産効率は、戦争前より高くなっていて質もよくなっていた。植字工が、手際よく真剣に鉛の活字を選び取り、並べていく。印刷工は、全神経を手に集中させて、機械を動かしている…全員が、機械がゴゴ音を立てる中、忙しく働いている。雨のように滴り落ちる汗を振り払い、顔に印刷インクをつけ、身に着けている仕事服は油光りしている。壁には「生産競争」「前線を支援せよ」と大書した標語が掲げられている。洞穴の中はたいへん狭いから、空気はよどんでいる。彼らは、昼も夜もこの小さな世界の中で労働し、人民のために幸福を創りだしているのだ。

主筆の李文日さんは、工場の中を全部案内してくれた。このような楽しい職場の雰囲気、私たちは気分が高揚した。この中に、もし自分のことだけしか考えない人がいたら、それは、とても恥ずべきことだった。

李文日さんの執務室は、上海のあずまやぐらいの大きさしかなかった。私たち 5~6 人が一度に入ったら、部屋の中がいっぱいになる。この小部屋から、李さんは社会全体の労働者を導き、すべての朝鮮労働者に精神的な糧を送っている。10 万部（戦前は 20 万部に達していた）これは、戦争中の朝鮮からいけば、すばらしい数字ではなからうか？敬愛すべき朝鮮労働者階級は、創造的な労働で、人民の意志を鼓舞し、朝鮮の北部全てを希望と自信で満たしている。仕事仲間とお茶会では、こうした希望や自信が存分に語られた。各人が元気滲刺として、決意を表明した。正義と真理のため、祖国の勝利のため、中国人民の志願軍はじめ親愛なる同盟国の無私の援助に答えるため、全精力を注ぎこんで、何物も怖れない労働の力で、世界平和を必ず勝ち取ると誓ったのだ。労働者仲間の代表は語った。

「帰国されたら、中英両国の人民、とりわけ中国の労働者階級の大切な仲間たちに、私たちの決心を伝えてください。私たちは、彼らを見習って、新中国と同じような新朝鮮を創造します」

我々は、この言葉をしっかり心に刻み、心はずむ「新朝鮮の歌」の歌声を聞きながら、敬愛する友人たちに別れを告げた。私はこの厳粛なメッセージを、祖国の労働者階級に伝えよう。

ひとこと付け加えておきたい。労働新聞社は、農民書報も出版している。これは、重ね刷りの定期刊行の画報の一種である。色彩は鮮明で、割り付けも、なかなかすっきりしている。「農家の副業広範にひろがる」「戦時衣類問題解決のために奮闘」のような標題の下、農民の生産への情熱と農村の明るい状況をよく伝え、朝鮮農村が将来豊かになることが予見される。こうした事全てに心ひかれながら、二日目、我々は新興里に到着し、農村を訪ねた。

村に入ると畑の中にいた 40 才過ぎの農民が走って迎えにきた。この人は金徳龍だ。私たちに向かって走りよると、人懐っこく両手を差し出した。しかし、自分の手が泥だらけだということに気づいて、きまり悪そうにひっこめてしまった。私たちが心を込めて手を差し出すと、かれは素朴な笑顔を見せ、手のひらをズボンで擦ってきれいにしてから、我々

と握手をした。このような、愛すべき農民。その表情には心が動かされる。彼は誰からも好かれているにちがいない。

この村には三百戸あまりの家がある。一昨年敵がやってきて、村中の牛や羊、豚や犬を全て殺してしまった。食べ切れない家禽は車に積み込んで、運び去ってしまった。さらに酷い事には、人を殴ったり、拉致したり、殺したりしている。一軒残らず被害に遭った。去年は畑の中に、爆弾が何発も落とされ、被害は甚大だった。秋になると、洪水がおき、踏んだり蹴ったりで、農産物は全滅だった。この天災人災全てのせいで、去年は新興里での増収の努力が水の泡となった。

「兄弟国の援助で、ようやく助かりました」

年老いた農民、金戴炫は目に涙をためて言った。「今年ソ連の人々は小麦粉を送ってくれ、中国の人々は雑穀を送ってくれました。それでどうにか種蒔きができたんです。今年は十中八九、豊作になるでしょうよ」

そうだ。もし秋の収穫の前に災害が起こらなければ、新興里は、豊作になるにちがいない。私たちの目の前には、見渡す限り肥沃な緑滴る田畑ではないか。

爆撃された土地を除くと、新興里には、荒れ地が全く見当たらない。みなが朝早くから夜遅くまで労働し、男女が合理的に分業し、この肥沃な大地ができあがった。堆肥をつくるため、どの家もみな、豚を飼っている。

「農村の中で、女性は、主要な労働力です」新興里民主女性同盟委員長は、愛しげに女性たちを見渡し、誇らしげに言った。「戦争の需要を満たすため、女性たちは皆、精いっぱい頑張っています。子どもを育てながら、土地を耕し、さらに、前線を支援する臨時の仕事をこなしています。それなのに耕地面積は、戦前に比べて、広がっているのです」

これは、少しも自慢ではない。彼女自身、女性を組織する重大な責任を負いながら、4人の子どもの育て、さらに6千坪の土地を耕している。彼女こそが、労働女性の模範である。その他にも同じような例は枚挙にいとまがないほどだ。

新興里の農民は皆、素晴らしい豊作を信じて待っている。今ではもう、彼らの願いは、きつと実現したよね？

3 個人的な憂いにこだわらない女性たち

なんと誇らしいことだろう。今日、女性の座談会に出席していた人たちは、皆、素晴らしい人物ばかりだ。工業労働の英雄、農業生産の模範、それから女性労働者の代表…彼女らは何度も困難に直面しながらも、祖国の自由解放のために、全力を捧げている。旧社会では、虐げられ行き場のない弱者だったが、解放後、彼女たちは社会の中堅になった。とりわけ、民族にとって多難な今日、彼女たちは人民軍に負けない働きをしている。その生命力は、枯れることのない泉のようだ。国家が必要なことは全て差し出し、国家が必要なことは何でもする。針の山も火の海も、怖れて退却したりしない。勇敢無私に前進し、昼夜兼行を厭わず、疲れたともいわない。自分たちの行動が、国家や人民の役に立っていることを知っているからだ。彼女らは、何でもする。何でも甘んじて犠牲になる。(具体的な事例は、拙著『彼女らを褒め称えよう』で既に十分に紹介したので、ここでは論じない) 今日私たちが会ったのは、このような女性の典型的な人物であった。

たとえば、国際紡績会議に出席していた朝鮮紡績英雄の唐雲実。健康そうな女の子で、顔にあどけなさが残る。そんな彼女だが、1945年に生産に従事して以来、32回も表彰されている。戦争が始まってからは、彼女の生産記録は、450パーセントにまで上がった。去年2か月間で1年間の仕事の149パーセントを成し遂げている。このような驚異の生産能力に対して、彼女は、ただ、朝鮮民主主義人民共和国英雄の称号を得ただけであった。それではどう考えても不十分だと私は思う。しかし、この称号以上に崇高な榮譽を表す称号はあるだろうか？

しかも彼女は、自分だけが生産力を上げていただけにとどまらない。国家のために、数十名の高い技術をもった紡績女工を育てていたのである。ところが、彼女は、少しも傲り高ぶらず、たいそう謙遜してこういった。

「私は、これっぽっちの成果では満足できないんです。これからもっと努力してこそ、人民が私に与えてくれた榮譽に報いることができます」

彼女の飾らない言葉と笑顔に、人は深い感動を覚えずにはいられない。この笑顔は、4か月前から私の脳裏に焼き付いている。春、私は彼女の紡績工場に行って、彼女の話の聞いたり、仕事場を見学したりしたことがあった。工場では、窓の外に破壊された痕跡が残っていた。敵の飛行機が不意に近づいても、この広大な工場を全部地下に移すことは不可能であった。彼女らは、1日中、死と隣り合わせであった。青春まっさかりの生命と引き換えに、生産の勝利、祖国防衛戦争の一日も早い凱旋を獲得するのだ。彼女らが随時物資を供給しなければ、目の前の勝利も一歩遅れてしまう。

長鎮里の女性同盟委員長、高錦順。聡明で能力のある美しい若い女性。気高くほっそりした顔立ちであった。遠路はるばる外国からやってきた姉妹（女性の仲間）を見ると、彼女は、痛ましい過去を思い出し、感情がコントロールできなくなった。彼女は立ち上がって言った。

「私は3人の子どもの母親です。夫は奪い去られました。ですが、私は少しも悲観していません。堅く信じているからです。勝利をもって、敵に答えるのだと！」

そして闘争のいきさつを語った。人を涙させる話だった。

彼女の夫は東平壤機械製造工場の工場長で、一昨年冬、工場が撤退するときに、途中で敵に捕まった。高錦順はこの知らせをきいて、あちこち聞きまわり、ついに夫の居場所をつきとめ、牢獄で夫と面会した。

「食べ物をもってこようか？」

彼女は夫に尋ねた。

「そうだね。早くもってきて」

彼はまた念を押した。

「早く。早ければ早いほどいいよ」

彼女は、なぜ夫が念を押したか、深く考えずに、大事な話もせず、「さよなら」さえ言わずに、家に食べ物を取りに帰った。彼はきっとお腹がすいているんだ。

しかし、意外なことが起こった。彼女がご飯を持って戻ったとき、牢の中には、もはや夫の姿はなかった。探し疲れたころ、突然、銃声が鳴り響いた。まさかそうだったのか。夫は死を予感していたのだ。この銃声は別れの合図ではないよね？持っていた弁当箱が地面に滑り落ちた。彼女は一目散に銃声が聞こえた方へと走って行った。そこには血だまり

の中の死体があった。彼女は、夫に走り寄って「永遠の別れ」をしたかったのに、凶暴な国防軍が、彼女を逮捕してしまったのだ。

彼女はもがき叫んだ。どうしてもこの暴力に屈服したくなかった。彼女は憤慨のあまり責め立てた。

「私の夫は祖国の解放のため闘っただけだ。人様に何かしたわけではない。これがまさか罪だというのか？おまえたちは、なぜ、夫を殺してしまったのか？」

ひとりの国防軍兵士が、狂ったようにどなった。

「それはあいつが労働党に参加していたからだよ！あいつが労働党の活動家だったことははっきりしている。お前をあいつといっしょに地獄で会わせてやろう。さあ、こいつも死刑だ」

このとき、高錦順は、家に残してきた、3人の、頼る者のない子ども達のことを思った。あの子たちは、飢えて死んでしまうのではないだろうか。お母さんと言って泣きはしないか。鬼がきて、いじめたりしないか？だが、目の前には憎んでも憎み足りない仇が並んでいる。敵に頭を下げることができるのか？見張っている残忍な野獣から逃れることができるのか？彼女は嗚咽し涙を流し、やけになって叫んだ。

「殺すなら殺せ！人民はお前たちに報復するぞ。お前たちも同じ目にあうのだ」

思いがけず別の国防軍兵士が通りがかり、面倒くさそうに言った。

「こいつは女だ。労働党かどうかなんて、ほおっておけ。生かしておいたら役に立つだろう」この一言は善意ではなかったとしても、とにかく彼女は助かった。

家に帰ると、子どもたちが父親を求めた。どう答えたらよいのだろうか。一目でも、夫をもう一度見たいと、どれほど思ったことか！2日目、子どもたちを連れて、刑場へ飛んで行った。死体はもう見当たらなかった。アメリカ軍本部に行って、夫の遺骸を要求したけれど、全く相手にされなかった。こうなったら、もう一度探すだけだ。どれだけ探しただろうか。彼女はやっと新しい土まんじゅうを見つけた。7人の人民軍兵士の死体を掘り出した。おそらく落伍した人たちだろう。

人民軍のことまで話すと、高錦順は突然泣き出した。すすり泣き続け、話しができない。この高貴な階級感情に、居合わせた人はみな、目頭を熱くした。

「8人掘り出してやっと夫に会えました」彼女は涙をこらえて続けた。

「子どもたちは、父親の青白い顔と血で染まった胸を見て、一斉に泣き出しました。…私は苦勞して人民軍の死体を埋め直すと、最後に夫の死体を埋めました。それから私はアメリカ軍に捕まって、10日間拘留されました」

このような不幸を経験しても、高錦順はしっかりしていた。涙を腹の中にとどめ、恨みを心の中にとどめ、女性を組織して、積極的に、増産し前線を支援する活動を開始した。

今年、彼女は、村中の女性を率いて、つるはしで土地を耕した。敵は、こうした努力を見て躍起になり、畑に大量の爆弾を落とした。高錦順はすぐに女性たちを集めて爆撃のあとの穴を埋めた。張永彬は穴を埋めていて、敵機に襲撃され死んでしまった。高錦順は唇をかみしめた。

「張永彬は酷い殺され方をしました。ですが私たちは、悲観失望したりはしません。死者に報いるためにも、私たちは怯むことなく穴を埋める任務をやり遂げなければならないんです。今の所、豊かな収穫が見込まれていますからね。」

少し前、高錦順は群衆から労働模範に選ばれた。6月28日、金科奉委員長は、国旗勲章3級を彼女に授与した。

この話をきいて、私たちは激しい衝撃を受けた。フェルトン夫人は言った

「この人をどうやって慰めたらいいのか、私にはわからない。でも無駄死にはありません。あなたの夫の死は、平和を実現するためのものです。イギリス人民がこの事を知ったら、アメリカ帝国主義を今まで以上に憎むことでしょう！彼女が言った一言一句を、私は全て、しっかり持ち帰ります」

思うに、彼女はあれこれ慰める必要はなかった。感情をどう処理したらいいのかわかったのだ。

話し合いの時間が長くかかり、すぐ夜になってしまったので、全員が発言することは適わなかった。それでも、私たちには、自ずとわかっていた。その場にいるひとりひとりが皆、唐雲実であり、高錦順なのだ。北朝鮮の広大な国土に、唐雲実、高錦順と同じような幾千幾万の女性たちがいる。彼女らは、祖国のために勝利を、女性のために栄誉を獲得する。彼女らの心には、ただ祖国と勝利だけがある。女性が個人的な憂いで、頭を垂れ、意気阻喪している様子を見たことがない。目の前にいる崔宝奎がそのよい例だ。

彼女は西城一里の労働党支部の書記である。外国の姉妹たちと集うことを喜び、自分の闘争の過程を語ったところだった。座談会の最後に、彼女は興奮して立ち上がりこう言った。

「私に『平和の兵士の歌』を歌わせてください。友人への歓迎の意をこめて」

拍手の中、彼女は歌い始めた。彼女はもう40才近くなるけれど、闘いの精神も若いが声も若々しい。彼女は20人家族で、18人は無残にも殺され、15歳の子どもと2人きりになった。涙ひとつ流さず彼女は語った。その歌声は、生き生きと楽しかった。人々は彼女と一緒に歌った。その中に、右手を爆撃で失った女性がいた。

部屋じゅうにすばらしい歌声が満ちあふれた。この歌声にあわせて、多くの人が立ち上がり、朝鮮の民族の舞を踊った。ある人は花瓶から生花をとって、舞を舞い、歌を歌った。舞いながら、私やフェルトン夫人の襟に、花をさした。楽しい雰囲気は、祝賀パーティーのようだった。彼女ひとりひとりが、不幸な境遇にあるとは、想像できないだろう。

フェルトン夫人が、賛美して言った。

「朝鮮の女性は、素晴らしい。彼女らを前にすると、自分たちはいかに小さいかと思う。私が受けた迫害と苦しみは、彼女らと比べると、とるに足りませんね！」

4 血みどろの恨み

暗く冷たい夜、我々の興奮は最高潮に達していた。平壤の文化宮劇場で、朝鮮国家芸術歌舞団が私たちのために演じてくれた民族舞踊を鑑賞したのだ。朝鮮労働人民に敬意を表したい。彼らは、力強い労働と驚異的な知恵をもって、この壮麗な地下劇場を建築した。戦時朝鮮の労働力、物資、状況を考えると、この偉大な劇場は、ソ連の地下鉄道に匹敵するほどのものだ。

この劇場は、高いビルの地下にあった。このビルはすでに爆撃で修復困難なほど破壊されていた。しかし、新しい建築物が、残骸の下に誕生したのだ。地面の下に埋められた一

粒の種は、まず土の中に根をはやし、しばらくして地面から新芽が出た。平たい石段を一段ずつ降りていきながら、思わず階段の数を数えた。一步一步、安全な石段を降りていく。124段ある。この狂気のように蹂躪された土地で、このような幸福を感じられるなんて。まず、偉大な朝鮮人民に感謝すべきだ。この劇場の中に座るたびに、いつも誇りに思わずにはいられない。アメリカ野郎の飛行機が、上空から恐怖を振りまいているとき、神聖な土地に難攻不落の鋼鉄のトーチカがあるとは、思いもよらないだろう。このような、難攻不落の堅固なトーチカは、北朝鮮では、あちこちにあって、まさに、朝鮮民族の侮れない意志の現れとなっている。殺人が好きな侵略者、お前は狂っちまって、好き放題だな。千万もの飛行機と、億万トンの鋼鉄とは！それでもなおこの民族意志の象徴は、高らかな歌声と鮮やかな舞の中、すっと立ち続けている。この前、大同江岸で善良な住民を虐殺したとき、ここから発せられた抗議の歌声を聞いたことがあるか？

私たちが地下劇場から出てくると、大雨が降ったあとで、地上は雨水であふれ、空は一面雨雲。運転手は憤慨して言った。

「雨までアメリカ強盗の味方か！」彼が我々に話したところによると、一時間前、南平壤郊区も破壊された。敵機が去ったら大雨が降ってきたという。運転手は不安げに言った。

「大雨が降ったら、火事になった家の火は消えるけど、何になるのか。家は、どっちみち爆破されている。この大雨では、被災者に対し、火に油を注ぐようなものではないのか？こんな寒い天気では、きっとひどく凍えているぞ。とくにけがをした人はな」

運転手の話を聞いて、私たちの心もまた彼と同じ憤怒と不安に襲われた。ただ、憐れんだり同情したりするだけでは、何にもならない。我々は、具体的な行動で、敵の悪事を暴き、全世界に知らせなければならない。だから、次の日の早朝、我々は被害に遭った場所を訪れたのだ。

爆撃に遭った場所は、私たちが泊まっている場所から3里あまりしか離れていなかった。これは、南平壤近郊の人口の密集した村であった。大同江の支流に面し、風景はとても美しい。しかし、一続きの藁葺きの小屋を除くと、勢いよく育った農作物と青々とした畑。10里四方には、近代的な家は全く見当たらなかった。

フェルトン夫人が、一所懸命爆弾の落ちた穴の数を数えていた。

「1、2、3、4、5…まあ13こ！」

わずか0.5平方キロメートルに満たない土地に、敵は13もの最強の殺傷力をもつ爆弾を落としたのだ。地元住民によれば、昨夜落とされた爆弾は、2千あまりにもなるという。

ここ、大同江では、高くてまっすぐな土手がある。それは、人の通り道であり、大同江と村をわける長く狭い土手である。それはたぶん洪水を防ぐため作られたのだと思う。この土手を往来するのは、非戦闘員である一般住民だ。土手のあたりで男女が生活し働いている。今日、この土手の多くの箇所が破壊された。仕事していた男女が突然襲撃されたのだ。村は破壊され、死亡した住民、負傷した住民があった。彼らが苦勞して建てた家屋や農作物は、みな、焦土と化した。倒れた家屋からは煙が出ていた。人々は、中の死体を掘り出している。畑の中の死者は、まだ埋められていない。救護隊は、まず負傷者の救助にかかっているからだ。

土手の上を忙しく行き来する人々。彼らは、死体をきちんと積み込んで埋葬場所まで運

んでいき、負傷者は、病院に送って行った。軽傷者は、政府の負担が増えるのをきらって、自力で何とか診療所へ行った。高台に立つと、ひとりの女性の後ろ姿が見えた。彼女は、幼子を抱いている。服は血だらけだ。爆撃された家に向かって、静かに座っている。身動きひとつせず、静かに黙っている。穏やかな面持ちで、ひなたぼっこをしているようにみえる。彼女はなぜ動かないのか？破壊された家が恋しいのか？畑と別れがたいのか？そうではない。人々が教えてくれた。彼女は下半身に大怪我をしているのだが、他の人を優先するため、自分は最後と思って耐えているのだという。朝鮮には、このような善良な人が多い。

前を、疲れたような表情の少女が行く。彼女は疲れた顔をしているけれど、端正な顔立ちで、典型的な東洋美人だ。左手は布で胸の前に吊り下げられており、白い衣服は、血や泥で汚れている。雨の夜が明け、血の海から這い出してきたようだった。金さんが、どこを怪我しているのか尋ねた。彼女は落ち着いて答えた。

「両腕を少し怪我しただけです」

しかし、見たところ、軽傷とは思えなかった。袖は血で染まっていたからだ。早く医者に行き、手当をしてもらわないのかと尋ねたところ、彼女は落ち着いて答えた。

「医者に行くほどだと思われませんか？近所の人たちが大勢、爆撃で怪我しているので、救助しなければならぬんです」

なるほど、彼女が体中泥や血で汚れていたわけだ。私は彼女を仔細に観察した。彼女はその話をするとき、すばらしく美しかった。答えるとき、容姿以上に美しい魂が透けて見えた。

50歳になろうかというおばあさんが、高い土手に座っていた。腰をまっすぐにし、両手でひざをかかえて座っていた。目は、遠く爆撃を受けた場所を見つめていた。喧嘩でもしているような怒気がやまなかった。私は通訳の人に頼んで、家の中の状況について聞いてもらった。彼女は依然として、爆撃を受けた場所をじっと見つめていた。全身びくりとも動かさず怒りに声を震わせながら言った。

「家か？昨晚寝るときはちゃんとあった…」

「今は？」

おばあさんは、地上に積み重なっている藁の家の残骸をあごで指し示し、苦笑しながら言った。

「だからみんなと同じじゃないか！」

「怪我人は？」

「家が倒れて、怪我しない訳がないじゃないか」その口ぶりは、恨み言をいいながら、余計なことを言うなどでも言いたげだった。その後話してくれたのだが、16歳の息子が、両足を爆撃で切断されたのだという。近所の人に救助されて、やっと命はとりとめたのだそうだ。だが、おばあさんは、見たくないようだった。

今、彼は、隣の破壊された家屋の中で、そっと寝かされているようだ。

私は、おばあさんは、なぜ自分の息子を世話せず、息子から離れてここにいるのかと不思議に思った。彼女は少し薄くなった眉をひそめて言った。

「そんなことして何になる？どのみち障害者になったんだ。どうせ本部の人が病院に連れて行く。私は、もっと大事なことをしなければならぬんだよ」彼女は頭が震えるほど

の歯ぎしりをした。しかし涙は見せなかった。悲しげな表情さえ見せなかった。彼女の悲しみは、もはや深い恨みに変わっていた。闘争の決心と力に変わっていた。

案内をしてくれた人が説明してくれた。

「女性たちはいつもこういう風なんです。彼女らの家は破壊され、身内に死傷者までも出ました。しかし、彼女らはすぐさま爆撃された道を直し、前線を助ける行動を起こし、仇を討とうとしているのです」

私はあまり何もきかずにその場を去った。おばあさんは、もう、大同江辺りまで行ってしまった。彼女は、このような女性の代表的な人物だと思う。

少し行くと、枯れてしまった畑があり、少し行くと、穀物の苗が倒れていた。少し行くと、また流血だ。壊れた鍋、お椀、ひしゃく、お盆、子どもの玩具…

これは、空から降ってきた災難。北朝鮮の地では、日常茶飯事になってしまっている。多くを描写しなくても、すぐ想像できることだ。ただ、実際の被害は想像をはるかに超えていた。我々は被害を受けた場所を訪れた後、フェルトン夫人は、眉を顰め、首を振りながら言った

「ここは、軍事的な要所からかなり離れています。敵が、もし、ここを軍事目標としたのなら、それこそ、とんでもない出鱈目です」

敵機は、また、被害を受けた場所の上空を一周した。今日はこれで二度目だ。彼らは、自分たちの暴行の結果を偵察しにきたのだろうか？

フェルトン夫人は空を仰いで言った。

「それにしても、アメリカ侵略者の恥知らずな宣伝は、もはや、真理の前に破綻しています。威信ある西洋人が実地調査したら、西洋各国の人民は、もう、悪魔の欺瞞に我慢できなくなって、このような暴行をやめさせるため行動を始めます」

そのとおり。血まみれの恨み、鬼畜にも劣る虐殺は、朝鮮人民は忘れることはできない。それだけではなく、全世界の人民も、これを見たら、無関心ではいられない。制止できなければ、全人類の災難となる。イギリスとアメリカの人民も同じだ。運よく災難を逃れることはありえない。絶対に。

しかし、敵は最期のあがきだ。まさに、行き場がなくなったことの表れだ。平民を虐殺することで勝利を妄想している。そんなことは、絶対にありえない。

朝鮮は征服できない。民族の気骨を見よ。

5 再び母親の懐へ

「オンマ、オンマ…」

「オンマ、オンマ…」

「…」

孤児院の畑の横に車を止めると、かわいらしい子どもの声が、遠くから聞こえてきた。程なくして、緑の絨毯のような草むらの中から、朝鮮の子ども達のグループが走ってきた。その人数や顔はよくわからなかったが、同じような背丈で、同じ色の服を着て、みんな角刈り。どの子もみんな、花を手にしていて、こぼれんばかりの笑顔で、小さな手を私たち

の方に差し出した。まるで、えさをもって帰ってきたお母さんを見た子雀の一群のようだ。

「オンマ、オンマ…」

「オンマ、オンマ…」

小さな心の奥から飛び出してきたせつない呼びかけが、我々の魂を揺さぶる。激情のあまり目の前がぼやけた。我々が車を降りるのを待たずに、子どもたちはよじ登ってきた。あどけない様子で、私たちの懐を花で一杯にした。私たちにしがみついて、ぎゅっと手をにぎってくる。私たちは皆、立ち上がろうとしても立ち上がれない。いっぱいになって車からはみ出した子どもは、小さな足をばたつかせ、押し合いへし合い、ジャンプして、車を取り囲み、「オンマ」と叫びながら、花束を投げ入れる。私たちはすっかり囲まれてしまった。私たちの目の前には、人類で最も美しい若い苗で満ちている。私たちの身体には、芳しい花の香りで満ちている。私たちの手の中には、柔らかく可愛らしい小さな手、私たちの耳元には、魂を揺さぶる呼びかけで溢れた。それは魂を激しく揺さぶった。

不意に、ひとりの子どもがすばやく花束を私の懐にいれた。「オンマ」と一言叫んで、私のひざの上に小さな顔をつけて、泣き出した。

「可愛い子。どうして泣くの？」私は驚いて懐にいっぱいになった花を落として、子どもを懐に抱いた。頭をなで、頬を流れる涙にキスした…こんなことをしても、この子の心の深い傷をなぐさめることはできなかった。泣き声はさらに大きくなった。一言も言わなかったけれど、わかった。この子は、たいへんな不幸を私に聞いてほしかったのだ。どれだけの恨みが心に残ったのかを。

私はまたも、つらすぎて我慢できず、雨のように涙が流れ、子どもの涙とまざった。私は涙を拭い、周りを見た。周りの人も皆、ハンカチで目を拭っていた。このような情景を見たら、どんなに冷酷な人であっても心を動かされるにちがいない。

私は沈痛な思いでいっぱいになった。なぜこの子は全くしゃべらないのか？私はずっとずっと抱きしめて接吻し撫でた。彼は、懐の中に体をくっつけて、何も言わずにただ私に体を預けていた。この子がどんな目にあっただのかを知りたくてたまらなかったが、彼の傷痕に触れるのもこわかった。実際のところ、本来、そんなこと聞く必要はないのだ。彼が遭遇した不幸は、きっと、どの孤児もみな遭遇している。恐らく父母が無残に殺された情景は、この小さな魂にとって過重な刺激であっただろうし、そんな刺激は、たった7歳の子どもが引き受けられるようなものでもないのだ。

彼は、とてもきれいな男の子で、奉石花という名だ。長い睫、聡明そうな大きな目、目には憂鬱な光、ただその中には、一種の剛毅な気質が隠れている。この子は、頭が良く、事態がわかっている子どもだ。彼は、ずっと静かに黙って考えていた。私は彼をあやして笑わそうとして、わき腹をくすぐったら、口を歪めて目から涙がまた流れ落ちた。私の涙もあふれ出た。今日は普段とちがって、制御不能だ。まあいいさ。涙は思い切り流させてやれば。これは、決して弱々しいとか感傷ではなく、慈母の涙だ。これは、慈しみの涙だ。これは憤怒の涙だ。これは心から滲み出た鮮血だ。世の中の親となる人なら、このような可愛い孤児を見ると、みんな同じように泣いてしまうだろう。

私はベトナムの孤児を思い出した。マレーシアの孤児を思い出した。彼らと同じ境遇の孤児は、数えきれないぐらい多い。

私はソ連の子どもを想った。各人民民主国家の子どもを想った。彼らは、楽しい世界で

自由に成長して、楽しく学習し、最高の教育を受け、最も美しい平和の果実を享受している。

このような幸福な子ども達、とりわけ我々の祖国の子ども達は、祖国英雄の人民志願軍にきっと深く深く感動する。そして朝鮮の勇敢な人民軍。彼らの流血の犠牲のおかげで、私たちの子ども達の幸福が得られ、世界の平和が守られるのだ。今日、彼らはかけがえない命を差し出して、子ども達が歩く輝かしい道をつけている。この孤児院の孤児もまた、彼らの庇護の下、新しく生まれ変わることができるのだ。

3か月前、この136人の6歳から7歳までの子どもたちは、前線から収容された。両親は皆敵の銃撃で死んでしまった。彼らは山間を流浪していた所を、この幸福な楽園に保護され、また温かい家族をもった。ただ、この子たちが来た当初は、今とは全く違っていた。精神が委縮し、異常に痩せて弱っており、さまざまな病気を患っていた。この3か月で、100人の子どもが、完全に健康をとりもどした。今では、彼らは年齢にあった教育を受け、育てられ、生き生きと元気になってきた。

この孤児院は、山間部にあり、たいへん美しい風景に囲まれている。子どもたちの教育にはもってこいだ。院長のガイドで院内をぐるっと参観してまわり、最後に子どもたちの病室に着いた。

病室の環境は、とりわけ美しく、静かだった。病室の前には松や側柏が並んで植えられており、静かに流れる小川もあった。常緑の高山も見えた。山上には、野生の果物や棘のある栗。子どもたちは栗をとってきて、石を使い、棘のついた緑のイガをむいて、親切に、私たちに食べさせてくれた。食べないとだめだよ。こんなたくさんは食べきれないので、持って帰って食べるようにと言いたかったのだろう。

病棟は日の光で満ちていた。朝鮮式のオンドルの上に真新しいござが敷いてあった。彩色した絵が真っ白な壁に掛けてあって、見栄えよくなっていた。子どもたちは、歌を歌ったり、蓄音機を聞いたりしていた。この蓄音機とレコードは、近所から寄付されたものだという。近所の善意の人が子どもたちをとてかわいがり、食べ物や玩具をくれるのだという。

重病の子どもが、保母の胸の中にもたれかかっていた。かすかな声で「オンマ」と言っていた。保母はその女の子にとんとんしたり揺すったりして、子守唄を歌ってやっていた。やがて子どもは眠りについた。院長は我々に言った

「保母たちはみな、慈母の心をもっています。昼も夜も、自分の息子や娘と同様に、子どもの世話をしています。後方で子どもの世話をすることは、前方で戦うことと同じぐらい重要だとわかっているのです」

このように、孤児たちは、また温かな懐で、もっと多くの両親の愛を受けることとなったのである。健康になり、面倒をみてもらえるようになったばかりか、精神的な傷も、すぐ治った。子ども達は、なんと楽しそうに遊んでいるではないか。木馬に乗ったり、輪回しをしたり、かくれんぼしたり、ブランコしたり、生き生きと遊んでいる様子を見ると、本当に戦争を忘れられるし、戦争のため子どもたちが不幸になったということを忘れてしまう。

別れるとき、子どもたちは我々のために、十以上の演目を見せてくれた。すばらしい発表は、とても感動的で可愛いらしかった。ひとりの太った男の子が小さな手で合唱団をう

まく指揮した。真剣な表情で、とても正確にリズムをとっていた。小さな帽子を斜めにかぶり、テノールで独唱した小さな歌手。小さな手を後ろに組み、胸を張って、鈴をふるような声で歌を歌った。その表情は荘厳で落ち着いていた。絹のズボンと色を揃えた花頭巾をかぶった小さなダンサーたち。旋回して舞い踊るさま、軽やかに歌い、艶やかに舞う姿は、美しい蝶のようではないか？それからそれから…

聡明で才能ある芸術家でもある天真爛漫な子ども達。彼らはまさに、人類で最も美しい花ではないだろうか？彼らはまさに、未来の理想社会の建設者であり主人でもあるのではないか？彼らは未来の科学者、芸術家、エンジニア、政治家…

だが、我々はもう一度繰り返す必要がある。もし偉大な世界平和を築くソ連の積極的な支持が得られなかったら。もし各人民民主国家の無私の援助がなければ。もし朝鮮人民軍と中国人民志願軍英雄の防衛がなかったら。援助なく孤立していたら今日のような幸福はあつたらうか？そのことを認めなければならない。世の中の子ども達が勇敢な人民軍の保護と育成の下で、いつまでも生き生きと平安無事に成長しますように。

私が孤児院を去ってから 50 日が経った。あの可愛い大切な子ども達は、あの時よりもっと活発になり元気になっているだろう。そしてあの、悲しそうな奉石花（ずっとずっと私はこの子を決して忘れられない）も、もしかしたら、あの子たちのママの愛情を受けて、楽しい気持ちになっているかもしれないね。

6 捕虜たち

緊張の一週間がすぎた。我々は平壤の訪問を終える。この英雄の都市は離れがたい。

ただ、我々は、朝鮮の美しい国土を離れるのではない。まるまる一昼夜、我々はきれいな風景を満喫し、心が洗われるようであった。峻厳な山々を越えて、次の日太陽が沈む前に、我々は捕虜収容所に着いた。

タグボートで車ごと大同江を渡ると、川のほとりに、捕虜収容所を管理している志願軍のリーダーが、迎えに来てくれていた。私に同行していたフェルトン夫人は、冗談半分にこう言った。

「あなた、またお身内に会いましたね」

「ほんとに、平壤にいと、まるで家にいるような気分ですよ」心からそう思う。私は彼女に聞き返した。「あなたは？どんな風を感じていますか？」

「もちろん、前にお話したように、私はもう中国人のひとりになりました。彼らイギリス人は、おそらく私たちを失望させないはずですよ。」

どんな結果になるか早く知りたくて、私たちは一昼夜ぶっ通しで旅をつづけたのに、休憩もそこそこに、その夜私たちはイギリス人捕虜と小規模な座談会を開いた。2 日目の早朝から、イギリス人アメリカ人の捕虜と、それぞれ 6~7 時間ずつ話した。会議に参加した捕虜は、40 人あまりにのぼった。

座談会は、広い会議室で行われた。我々が中に入ると、長身のイギリス人がやって来て握手をした。彼らを見ると、私はたちまちムカムカしてきた。朝鮮人民が被った災難が心に浮かんだからだ。そのとき、フェルトン夫人が急に素っ頓狂な声を挙げたので、その不愉快な空気は吹き飛んだ。

「まあ、キャムベルじゃないの！あなたの目はお母さんにそっくりね。あなたに会えて、とても嬉しいわ」

キャムベルは、やせて背が高い20歳のイギリス青年だった。クールな目で、寡黙な口。あどけなさを残しながらも強情そうな表情。非常に聡明そうな顔立ちである。フェルトン夫人は、青年とは初対面であったが、今回、目をみて、彼だとわかったのだ。そういえば彼女から何度か話を聞いていたっけ。

ロンドンで、平和のための闘いに積極的に参加していた老婦人がいた。一年前、彼女は、専業主婦であった。生活の中の細々としたことすべてが、人生で一番大事な事であると思っていた。ベッドには少しの皺もなかった。床の上の少しの埃も許せなかった。しかし、彼女は、フェルトン夫人が朝鮮から持ち帰った手紙を受け取って、突然目が覚めた。その時以来、生活上の瑣事は、どうでもよくなった。「平和運動が、私の使命です」すぐさま、彼女は平和運動を積極的に組織した。彼女はいつも生き生きと講演し、広く群衆に歓迎された。反動派は、デマを流した。「キャムベル夫人は共産党になった。買収されたのだ！」

しかし彼女はそれを辱めととらず、誇りをもって言った。

「もし共産党が平和のために闘うのなら、買収する必要があるかしら？それなら私にとっては、共産黨員になるのは光栄なことですね」

この女性こそが、キャムベルの母親なのだ。彼女はキャムベルから手紙を受け取って、勇気をもらい、アドバイスを受け、平和運動に参加したのだ。

この2度の座談会で、キャムベルは、発言しなかった。楽しげで誇らしげな眼差しで、静かに座っていた。親しみのこもった眼差しで中国の仲間を眺めている彼の目から、言葉にならない感激が伝わってきた。私は心の中で思った。ここで、あなたは何も話す必要はない。その話は、あなたの母親のような人のためにとっておいたらいよいよ。

イギリス人捕虜たちの最大の関心事は、イギリスでの平和運動であった。フェルトン夫人は、真っ先にそれを伝えた。

「イギリス人にとって、朝鮮戦争は、単なる朝鮮問題ではなく、イギリス人の生活に直接かかわる問題だと話しています。今、イギリスの状況はますます苦しくなっています。一週間で、ひとりあたり、125グラムの油しか配給されません。物価は毎日うなぎのぼり。鉄が不足していて、建築もままならない。家を借りるのに1週間に4ポンド払わなければならないんです…」

「なんと！そんなに高いんですか？」捕虜たちは驚いて目を見開き、異口同音に言った。

「それで、女性が目覚め始めたんです」フェルトン夫人は続けた。

「イギリスの人々は、戦争の辛さを味わいました。だから、イギリスの軍事拡張計画に反対しています。…イギリスに駐留している米軍はイギリス国内に自身の法廷を持っています。どんなに小さな事でもその法廷で裁かれます。イギリスはかつて中国に治外法権を持っていたけれど、今ではアメリカがイギリスの中に治外法権を持っているのですね！と上海の友人が言っていました」

ここまで聞くと、捕虜たちは皆、うなだれて溜息をついた。フェルトン夫人は苦笑しながら続けた。

「1949年私は中東に招かれました。イギリスでのアメリカ軍の状況について、聞かれたので、『女の子を連れ去ってしまうのです！』と私は答えました。現在、イギリスでまもな

く飛行場が改修されます。アメリカ軍は…」

話が終わらないうちに、ある若い捕虜が、まるで天井が崩れてきたかのように、両手を頭に抱えて、懇願した。

「すみません、フェルトン夫人。もう言わないでください。恐ろしいことだ」

皆は、いぶかしげに彼をみた。

「もう 10 か月も妻から手紙が来ないんです。アメリカ空軍がさらっていったのではないのでしょうか。心配だ」

この捕虜の感じた恐怖は、多くの人に伝わって、頭を振る人、溜息をつく人があった。フェルトン夫人は、深刻な表情で言った。

「ご心配、お察しします。今一番深刻な問題は、イギリスをどうやって独立国家にするかということです。これは、人民闘争によって獲得しなければなりません。今、イギリスの平和運動は、大衆運動になりました。住民組織があり、私が講演すれば立ち見が出るほど人が来ます。女性たちは積極的に、朝鮮戦争を止める要求をしています」

「私の妻はどうか？ 平和運動に参加していますか？」長く家族からの手紙を受け取っていない捕虜が、切羽詰まった様子できいてきた。

「たいへん申し訳ないのですが、私は、彼女たちの活動を全部把握できません。でも、捕虜の家族はみな、戦争をやめるよう要求しているということは申し上げられます。彼女たちにとって、切実な問題ですからね」

スマッドは、厳しい顔つきの中年の男性だ。彼は、自慢げに、妻のことを話した。最近妻から届いた手紙によると、妻は、15人の主婦を組織し、家で会議を開き、平和のための活動をしているという。3人の子の母でもある。スマッドはフェルトン夫人に言った。

「恐らくあなたはご存じないでしょう。彼女は元々政治に全く興味がなかったんです。ですが、今は覚醒しました。嬉しいことです！」スマッドは、誇らしげだった。両手で胸をなで、夢を見ているかのように楽しそうに言った「私は将来帰国したら二人で一緒に平和運動をします。きっと幸せでしょうね」彼は、このように、平和に憧れ、妻の進歩を誇りに感じているのだ。

「帰国したら、妻と連絡をとってください。お願いします」マチスとアンドリューは、いっしょに、フェルトン夫人のノートにメッセージを書いた。

「イギリス社会は腐敗しています。我々の妻は啓発されているのでしょうか？ 平和活動に参加してほしいなあ」

「我々は、ここでよい友達になりました。彼女らが平和運動を通じてよい友達となつてほしいと思います」

「どうかラスティン夫人に言ってください。私は捕虜になって彼女から一通だけ手紙をもらいました。彼女が世界の平和を愛する人々と一緒に立ち上がることをどれほど希望しているかと。彼女はしばらくは未亡人ですが、将来は私の妻になります」ゴアは、すまなさそうに口を開き、フェルトン夫人のノートにメッセージを書きたいと言った。そんな風にして、赤い皮表紙のノートには、熱烈な希望、切なる伝言が書かれ、人名と連絡の住所がびっしり書きこまれた。フェルトン夫人は悲憤慷慨して言った。

「あなた方のために、絶対に全力でやります。光栄です。」

「あなたが今回帰国して、迫害されないでしょうか？」

「私の事は心配しないで。迫害しても、彼らにとって良いことはないのです」

つづいて、フェルトン夫人は捕虜たちに求められるままに、昨年迫害された事情について話した。

「去年私たち国際女性調査団が朝鮮にきたときは朝鮮戦争を支持するために来たわけではなく、真実を探りに来たのです。実地調査を終えて、真実が明らかになりました。私はイギリスに帰り、すぐに記者会見を開きました。イギリスやアメリカの新聞社はこぞって記者を派遣し、私は、この暴行を逐一報告しました。困った顔をした人もいれば、怒る人もいました。彼らは私に訳のわからない質問をたくさんしたので、混乱しました。ですが、真実は、戦争に負けるはずがないということです。彼らはなすすべもなく、言いました。

『この人、どうしたらいいの？』

2日目、報道各社は攻撃を開始しました。ただ、私の話は全部報道しました。こうして、人々は真相を知ったのです。…政府はすぐ私の職を解任しました。私は十分な証拠もないのに、反逆罪という罪に問われかけたのです。これが『自由の伝統』をもつ国の状況です。死刑！女性に対してこれまでこのような刑罰はありませんでした。

迫害を受けるのは、嬉しいことではありませんが、迫害を受ければ受けるほど、真実がよく伝わるといえるのは、嬉しいですね。その後彼らは自分たちが間違っていたことがわかり、新聞は、私のニュースを発表しなくなりました。沈黙も、成功しませんでした。私は各地で講演を続けたからです。反動的な新聞は、ついに、『もしこの恐い女性を講演会で焼き殺したとしても、誰にも恨まれることはない。愛国的な行動なのだから』とまで言いました。ですが、会場に放火したりする人はいません。ついには警察が蔭で私を保護してくれるようになりました。『心配しないで。たとえ何が起ころうとも、私たちは必ずあなたを守ります』とまで言ってくれた警察官もいます。私は、やりがいを感じ、前より快活になりました。反動的な政府はかえって失敗したのです」

フェルトン夫人の話は、途中、ひっきりなしに起こる笑いで中断された。それはイギリスの反動的な政府への嘲笑であった。

捕虜たちは何事にも関心を示し、何でも知りたがった。ときには、未解決の問題がとりあげられた。たとえば、アジア太平洋地域の平和会議の意義だとか、第三次世界大戦だとか、中英貿易協定がどんな状況かとか、アメリカの選挙の見通し等々。彼らは中国を理解し、ソ連を理解したいと思っている。彼らは、そうした事情を知らないわけではない。自分の国の人の見解を知りたがった。フェルトン夫人が新中国の建設とソ連人民の幸福な生活を語ったとき、捕虜たちは、喜びに沸いた。

「イギリスでは、『ソ連が侵略の準備を進めている』という宣伝ばかり聞きますが、ソ連軍は戦後、農村に380万あまりの住宅を建てました。また、バターがいるだとか、銃砲がいるだとか、ありえるでしょうか？本当に恥ずかしいことです」

フェルトン夫人は、自分の事情を話して聞かせた。雰囲気はさらに活気を帯びた。捕虜たちは自嘲的な口ぶりで、自分が捕虜になったときのぼつの悪さを語った。笑えるような話もあった。ひとりの捕虜は、滑稽な表情で、両手を頭の上に挙げて、膝をついた姿勢でユーモアたっぷりに言った。

「ほら、私が捕虜になったとき、こんな風でしたよ」彼は、志願軍兵士に向かって、鬼のような顔をしてみせた。みな大笑い。また別の捕虜は語った

「そのときは、捕虜になったらすぐ殺されると思っていました。それ以外考えられなかった。この世界に暇乞いをするひまもなく、不法に殺されるんじゃないかってね。でも、中国人民志願軍の士官がやって来て、私たちひとりひとりと握手をしたんです。戸惑いましたね。というより呆然としました。これはどんな陰謀なんだろうと思ったんです。」

「それから、私たち個人個人の罪を罰することはできないと志願兵が言いました。どういふことか理解できず、動けなくなった人もいたし、『撃つならここで撃て』と叫びだした人もいました。志願兵は笑って『安心して。君たちには指一本ふれません。怪我人は、あなた方に任せますのでしっかり治してください』と言ったんです。」

先ほど滑稽な表情でおどけた人がたたみかけた。

「そんな話、誰が信じますか。逃げるなら一緒だと、こっそり決めていました。逃げる途中できつと殺されたり連行されたりする者もいるだろうけど。でも、逃げ出すチャンスがなかった。」そう言ってから、「幸いにもチャンスがなかった。もしあのときの考えを実行していたら、罪はもっと重くなっていた！」と付け足した。

彼らは次々と発言した。志願軍兵士の人道的で友好的な待遇にどれだけ深く感動し驚いたかを話した。厳肅な顔つきの中年捕虜が、怒りで目をぎらつかせながら言った。

「アメリカ軍は、巨済島で殺人事件を起こしただけではなく、捕虜を爆殺してしまった。それで目が覚めました。」

人生観が変わったときのことを、彼らは次々に語った。「志願軍の仲間には本当に感激し、敬服しました。志願軍は、恐れを知らない勇士であり、超人的な知恵がある」。本当に、五体投地¹でもしかねないほどだ。

「志願軍は何も強制していません。信じるなら信じたらいいいし、信じないなら信じないでもいい。以前は、我々は、会議を開くと言われてもよくわかりませんでした。今では、その会議で話し合うことで、アメリカがなぜ侵略戦争をするのかわかりました」

アメリカ人捕虜の中のひとりが、興味深いエピソードを話した。

あるとき、護送される途中、ギースが不注意にも民家を焼いてしまった。すると志願軍の班長がギースを連れて行った。残された人は為すすべもなく、ギースは連れ去られ銃殺されてしまったかもしれないし自分にも危険が及ぶかもしれないと、はらはらしていた。だが、暫くするとギースは戻ってきた。中に入るなり、班長は彼を座らせ、

「ギース、皆の前で反省しなさい！」と言った。

「この事件が私の学習の始まりでした」

その捕虜は、笑いながら話し終えた。

黒人の捕虜アダムは、包み隠さず、捕虜になったときのことを語った。その当時起こったことは、今まで生きてきて一番予測不可能なことだったという。捕虜になったのに、殺されないなんて？彼はしみじみとして笑いながら言った。

「もしあのとき死んでいたら、こんな、ためになる教育は受けられませんでしたね」

クインは、朝鮮で細菌爆弾を投下したアメリカ空軍の捕虜だが、彼の人生観も変わった。彼が呼ばれて話をしたとき、彼は『人民に反逆する陰謀』という本を手にして、フェルトン夫人にこう言った。

1 両手、両ひざ、額（五体）を地面につけて仏を礼拝すること。

「あなたは去年イギリスに帰国され、政府があなたを反逆罪にするとしても、この本の定義では、人民に違反してこそ、反逆罪になるのです。この罰を受けなければならないのは、まさに私たちの国の統治階級なのです。あなたは、人民にとって良いことをしていますよ」

細菌戦のことに話が及ぶと、クインは目を伏せた。細菌戦に参加した友人たちは皆、恥ずべきことだと思っている。赦されない罪を犯してしまったと感じている！それなのに彼らは意外にも手厚いもてなしを受けたのだ。彼は感激して言った。

「私たちは重い罪を犯しましたが、志願軍のおかげで多くのことを学ばせていただきました。以前、私のことを反動だと言われました。私は意味がわかりませんでした。今はもう、全部わかりました。私は中国を愛しています。ソ連はもっと愛しています…あなた、もし機会があれば、西側の人に話してください。中国人民がどれだけ偉大な仕事をしているのかをね」

送迎会で、彼女は杯をかかげ、捕虜収容所を管理している志願軍同志に向かって敬意を表して語った。

「尊敬する中国の将軍たち、あなたがたに心から感謝します。勇敢に世界の平和を守り、困難にも負けず、非常に多くの人たち、騙された人たちに教育をしました。平和の実現のため、はかりしれない貢献をしています。それでは、偉大で無敵の中国人民志願軍全員に、乾杯！」

WIDF 国際女性調査団に参加した3人の中国人女性

— 劉清揚・白朗・李鏗

藤目ゆき

(はじめに)

国際民主女性連盟 (Women's International Democratic Federation, 以下、WIDF と略称) は朝鮮の WIDF 加盟団体である朝鮮民主女性同盟の呼びかけに応え、1951年5月、朝鮮戦争の実態調査のための国際女性調査団を朝鮮北部へと派遣した。調査団を構成したのは、カナダ、英国、デンマーク、フランス、イタリア、チェコスロバキア、オランダ、ソ連、中国、オーストリア、東ドイツ、西ドイツ、ベルギー、ヴェトナム、キューバ、アルゼンチン、チェンジア、アルジェリアの18か国の女性20人である。世界各地から集まった女性たちは先ず中国の瀋陽で全員集合し、丹東から鴨緑江を渡って朝鮮に入った⁽¹⁾。

18か国もの女性たちが調査団を構成し、危険の去らない戦場である鴨緑江から北部朝鮮の諸地域を限られた時間内に視察し、報告書をまとめあげてゆくのは並大抵のことではない。そのような大事業を実行するためには、調査団に加わった一人一人の努力はもとより、各国言語の通訳体制・安全な旅程の計画・宿舍や食事の世話・移動手段の確保・訪問地の人々との折衝といった、多岐に渡る準備と念入りな手配が必要だった。

それらの面で中国の女性たちの果たした役割は大きかった。WIDF 加入団体である中華全国民主婦女連合会 (All-China Women's Democratic Federation, 以下、ACWF と略称)⁽²⁾ が調査団の受け入れ体制を整え、必要とされる実務を担っている。また、劉清揚 (リウ・チンヤン、Liu Chin-yang)、白朗 (バイ・ラン、Bai Lang)、李鏗 (リ・ケン、Li Keng) という3人の中国人女性が調査団に参加した。中国は朝鮮戦争勃発以後、志願軍を朝鮮戦争に送り出し、国をあげて「抗米援朝」のキャンペーンを展開しており、ACWF はその重要な一翼を担っていた。WIDF 調査団への関与もまた、ACWF が取り組んだ抗米援朝キャンペーンの一部と位置づけることができる。

が、このような朝鮮戦争下の WIDF 調査団の取り組みは、これまで中国女性史の研究対象になっていない。

⁽¹⁾ WIDF が朝鮮に派遣した国際女性調査団の報告書は、日本語版については藤目ゆき編集復刻『国連軍の犯罪』(不二出版、2000年、203~267頁)、英語版については "We Accuse: Report of the Committee of the Women's International Democratic Federation in Korea, May 16-27, 1951" (in Korea International War Crime Tribunal, ed., *REPORT on U.S. Crimes in Korea 1945-2001*, June, 2001, New York) を参照。この調査団に関する研究論文として、藤目ゆき「女性国際調査団のみた朝鮮戦争」(『女性・戦争・人権』第3号、2000年5月、126~148頁) および『アジア現代女性史』第7号に特集された、松田祐子「朝鮮戦争国際女性調査団のフランス人団員」、藤目ゆき「モニカ・フェルトンと WIDF の朝鮮戦争真相調査団」などがある。

⁽²⁾ 「中華全国民主婦女連合会」は、その名称を1957年に「中華人民共和國婦女連合会」に、1978年に現在の「中華全国婦女連合会」に改めている。英語の略称は一貫して ACWF である。

そこで、本稿は、先ず WIDF 調査団に参加した劉清揚、白朗、李鏗という3人の中国女性に注目し、彼女たちが WIDF 調査団に参加した経緯や調査団の中で果たした役割、帰国後の活動などを追跡した。3人の人物像を通して、冷戦がピークに達した朝鮮戦争の最中に WIDF が行った国際連帯活動に中国の女性たちがどのように関与したのかについて、その一端を明らかにしたいと思う。

第1章 劉清揚

第1節 劉清揚と中華全国婦女連合会

劉清揚（1894年2月15日－1977年7月19日）は、国際女性調査団においてデンマークのイーダ・バックマンとともに副団長をつとめた。当時57才の劉清揚は3人の中国人団員の中の最年長者であり、中国女性たちの中で責任者としての役割を果たしていた。先ず、WIDF 調査団の取り組みが始まるまでの劉清揚の半生⁽³⁾を概観しておこう。

劉清揚は、辛亥革命から五四運動とその後の民族解放運動、抗日解放戦争、国共内戦から新民主主義革命へという20世紀前半の革命的激動を生き抜いてきた。12、3歳の時にはもう、軍艦建設のために金の指輪を寄付した評判の愛国少女であり、辛亥革命に際しては反清革命の軍事蜂起に備えて宣伝や財政活動に従事した。五四運動が起こったとき直隸第一女子師範学校の学生であり、学友の鄧穎超⁽⁴⁾らと天津女界愛国同志会を結成し、その会長に選ばれている。まもなく鄧穎超や周恩来ら20人の同志とともに学生運動指導組織「觉悟社」を創立。周恩来らが逮捕されると、劉清揚は奔走して釈放を訴え、全国各界人士の広い支援を得て、周恩来ら学生全員の釈放を勝ち取った。彼女は組織者として卓越しており、情熱的な力あふれる演説で人々を鼓舞したという。

劉清揚は中国共産党成立時の56名党員の一人であり、中国共産党の正式発足に先立って、1921年にパリで周恩来・張甲府らとともに在欧中国人最初の共産主義グループを組織した。劉清揚と張甲府は在欧中に結婚する。ドイツ・ソ連を経て23年に帰国した劉清揚は、鄧穎超らが指導する天津の進歩的女性団体「女星社」に参加し、『婦女日報』を創刊して、その総経理になった。第一次国共合作時代には何香凝⁽⁵⁾が指導する国民党中央婦女部や宋慶齡⁽⁶⁾が主宰する国民党中央婦女高級幹部訓練班などの要職に就いた。

⁽³⁾ 劉清揚については、特に別註が無い限り孟昭庚「周恩來の入黨介紹人之一劉清揚」（『中国共産党新聞』 <http://cpc.people.com.cn/BIG5/68742/70427/70428/7334799.html>）による。

⁽⁴⁾ 鄧穎超（1904年2月4日～1992年7月11日）は直隸第一女子師範学校卒業後、1924年に中国社会主義青年団に加盟、25年3月に中国共産党へ入党。同年8月に周恩来と結婚。49年、第1回女性代表者大会でACWF副主席に選出。83～88年に全国政治協商会議主席。

⁽⁵⁾ 何香凝（1879年～1972年）は日本留学中に孫文と知り合い、夫の廖仲愷とともに中国同盟会・国民党で活動。国民党中央婦女部の部長をつとめた。党内では共産党との協力を支持する左派として知られる。第1回女性代表者大会でAWCFの名誉主席となる。息子の廖承志・娘の廖夢醒はそれぞれ中国共産党員。

⁽⁶⁾ 宋慶齡（1893年～1981年）は孫文の夫人。孫文死後、中国国民党中央執行委員。中華人民共和国成立後は中央人民政府副主席。1953年の第二回全国女性代表大会でACWF名誉主席に選出。

ベルリンにて。写真左は 1921 年撮影。左から張甲府、劉清揚、周恩来、張光家⁽⁷⁾



1923 年于柏林

第一次国共合作破綻後の一時期、妊娠したことや張甲府の共産党からの離脱などもあって政治活動を休止し、離党している。が、31年の柳条湖事件（九一八事変）以降、日本による侵略への憤りから再び政治の舞台に復帰して抗日闘争に身を投じ、中国共産党と連携して救国組織の結成や革命工作に従事した。37年の盧溝橋事件（七七事変）後は幼児を老母に託して抗日戦争に参加し、天津から南京へ、そして南京から撤収する最後の列車に乗って武漢へと向かう。抗日救国のために団結して奮闘することを呼びかける劉清揚の演説には気迫がみなぎり、演説を聴いた若者たちの熱情を沸き立たせたという。

抗日戦争の初期、彼女は武漢で周恩来に党籍回復の希望を提出した。が、周恩来は「しばらくは党外にいるのが統一戦線工作のために好都合だ」と助言したという。彼女は武漢で李徳全⁽⁸⁾らとともに戦時児童保育会を組織している。さらに国民党・共産党の女性代表や各界の女性運動リーダーたちによる廬山婦女談話会⁽⁹⁾に出席し、女性統一戦線の構築に尽力した。この談話会から女性運動指導委員会が組織され、劉清揚はその訓練組の責任者となり、2年間で1000名近い「抗日婦女幹部」を育成することになる。そこから多くの女性が革命への道を進んだ。

抗日活動のために劉清揚は家族から遠く離れて東奔西走し、50歳の誕生日は重慶で迎えた。誕生日に周恩来が料理の腕をふるい、郭沫若が詩を詠んだという。

劉清揚は抗戦下、国民党一党独裁に反対する民主主義的統一戦線組織である中国民主同

⁽⁷⁾ 劉方清「我的母親劉清揚」『回族研究』No.58、2005年第2期、163頁

⁽⁸⁾ 李徳全（1896～1972年）馮玉祥の夫人。抗日戦中は重慶で婦女慰勞總會を指導。49年中華人民共和國成立後、國務院衛生部長（衛生相）に就任、中国紅十字會會長を兼任。第一回女性代表者大會でACWF副主席に選出。54年・57年の2回来日している。

⁽⁹⁾ 宋美齡の呼びかけで1938年5月に廬山で開かれた女性會議。国民党の沈慧蓮・唐國楨、共産党の鄧穎超・孟慶樹、救国会の史良、沈茲九、YWCAの張藹貞、有名な女性運動家である劉清揚、李徳全、吳貽芳、雷潔瓊、勞君展、俞慶棠ら48人が出席。會議は「動員婦女參加抗戰建国工作大綱」を制定し、抗戦期の全国女性統一戦線を建設した。「鄧穎超与廬山婦女談話会」（中国共産党新聞 <http://cpc.people.com.cn/GB/85037/8377905.html>）参照。

盟に加入しており、抗日戦争勝利後の45年10月にはその中央執行委員・中央婦女委員会の主任に選出された。また、革命工作のために北京と天津を常に往来して学生運動のリーダーと秘密裏に連携し、「反飢餓・反内戦・反蔣・反米」の運動へと進歩的な青年知識人を組織し、解放区へと送り出した。彼女の活動は常に国民党に監視されていた。国共内戦の最終段階にあった1948年秋、劉清揚暗殺計画が発覚する。劉清揚はそこで河北省平山県にあった共産党中央統一戦線工作部の所在地である李庄へ、さらに年末には共産党中央と人民解放軍の総本部がある西柏坡へと移動。離婚したのはこの頃であった。張甲府は国民党に対する譲歩を公然と呼びかけるようになり、「反徒」として中国民主同盟からも追放されていた⁽¹⁰⁾。劉清揚は離婚を表明し、共産党とともに進むことを選んだのである。

49年1月、とうとう北平が解放される。劉清揚は北平へ戻り、49年2月2日に行われた正陽門城楼で人民解放軍入城盛典にも参加した。劉清揚の党籍回復は1961年のことである



第1回女性代表者大会 1949年3月24日
於 北京中海懷仁堂⁽¹¹⁾

が、心から共産党を信頼し、党外者である立場を積極的に生かして統一戦線運動に献身し、新民主主義国家の建設に邁進したのである。このような劉清揚がACWFの創設に関与し、指導的な役割を果たしていくのは当然のことだった。

49年3月24日から4月3日にかけて第1回全国女性代表者大会が開催され、革命勝利のための「中国各層各界民主婦女連合の統一戦線組織」としてACWFが創立された⁽¹²⁾。共産党支配地区の女性団体のよびかけを受け、国民党支配地区からも革命を支持する民主団体やキリスト教団体の女性

たちが自主的に参加し、女性解放をめざす全国的な女性団体の連合を実現したのである。

⁽¹⁰⁾ 「張甲府」(『東華流韻』、北京東城区図書館ホームページ、

http://www.bjdclib.com/subdb/laneculture../famousperson/201004/t20100409_32122.html)

⁽¹¹⁾ 「中華全国婦女連合会(全国婦連)」『新華資料』http://news.xinhuanet.com/ziliao/2004-11/15/content_2220569_2.htm

⁽¹²⁾ ACWFの創設については中華全国婦女連合会編『中国女性運動史 1919-49』(中国女性史研究会編訳・論創社、1995年)の他、末次礼子『二〇世紀中国女性史』青木書店、2009年、128頁、「1949年3月24日 第一次全國婦女代表大會召開」『中国共産党新聞』(<http://cpc.people.com.cn/BIG5/64162/64165/77585/78769/5462318.html>)などを参照。

「1949年4月3日 中華全國民主婦女聯合會成立」『中国共産党新聞』(<http://cpc.people.com.cn/BIG5/64162/64165/78561/79696/5521367.html>)、「中華全国婦女連合会」(http://big5.xinhuanet.com/gate/big5/news.xinhuanet.com/ziliao/2004-11/15/content_2220569_1.html)などを参照。特に人事については、新華ネットの「中華全国婦女連合会」(http://news.xinhuanet.com/ziliao/2004-11/15/content_2220569_1.htm)と百度百科の「中華全国婦女連合会」(<http://baike.baidu.com/view/74787.htm?subLemmaId=74787&fromenter>)を参照。

ACWF の名誉主席に何香凝、主席長に蔡暢⁽¹³⁾、副主席に鄧穎超・李德全・許広平⁽¹⁴⁾、秘書長に区夢覚⁽¹⁵⁾、章蘊⁽¹⁶⁾ が選ばれ、劉清揚は執行委員候補となった⁽¹⁷⁾。

同年 9 月に中華人民共和国建国に備えて開かれた中国人民政治協商会議全国委員会第一次全体会議には、出席した全代表が 662 人、そのうち女性が 69 人である。劉清揚は、蔡暢や鄧穎超とともに ACWF の選出する 15 人の正式代表の一人として出席した⁽¹⁸⁾。



政治協商會議で発言する劉清揚⁽¹⁹⁾

第 2 節 抗美援朝運動と劉清揚

1950 年 6 月に内戦として始まった朝鮮戦争は、米国の介入によって国際戦争に転嫁し、同年 10 月には国連軍が平壤を占領、中国との国境に迫った。中華人民共和国は国家保衛と朝鮮支援のために人民志願軍の派遣を決め、10 月 25 日に朝鮮北部で中国人民志願軍による米韓軍に対する最初の攻撃が行われる。中国人民志願軍は朝鮮人民軍とともに 12 月に平壤を奪回し、38 度線を越えて南進するが、1951 年春頃には米韓軍に押し戻され、戦局は 38 度線の付近で膠着することになる。

その間、国内では 50 年 10 月 26 日に郭沫若を会長として中国人民保衛世界和平反対美国

⁽¹³⁾ 蔡暢 (1900 年 5 月 14 日 - 1990 年 9 月 11 日) はフランス留学中の 1923 年に入党、李富春と結婚。25 年モスクワ留学を経て帰国。34 年からの長征では、鄧穎超や康克清らとともに紅第一方面軍に参加。41 年党中央婦女委書記。45 年に党中央委員。56 年、党中央婦女工作委員会第一書記。文革では批判を受ける。75 年 1 月全人代常務副委員長に就任。

⁽¹⁴⁾ 許広平 (1898 ~ 1968 年) は魯迅の夫人。ACWF 副主席として女性代表団を率いて諸外国を歴訪。1956 年に原水禁世界大会に参加するため来日。

⁽¹⁵⁾ 区夢覚 (1906 ~ 1992 年) は 1939 年、中共広東省委婦女部長に就任。40 年に延安へ赴き、中共中央婦女委員会委員になる。

⁽¹⁶⁾ 章蘊 (1905 ~ 1995 年) は 1925 年に中国共産党入党。抗日戦争期に中共東南分局婦委の責任者。建国後、中共中央華東局婦委書記、中共上海市委婦委書記、華東地区と上海市の婦連主任。1953 年に ACWF 党組副書記になり、ACWF 副主席になる。

⁽¹⁷⁾ ACWF のホームページにある「中華全国民主婦女連合会第一屆執行委員会委員名單」によれば、ACWF 第 1 期執行委員会において選出された執行委員は 51 名、執行委員候補は 21 名である。http://news.xinhuanet.com/ziliao/2004-11/15/content_2220569_1.htm

⁽¹⁸⁾ 中華全国婦女連合会編『中国女性運動史 1919-49』(中国女性史研究会編訳・論創社、1995 年)、501 頁

⁽¹⁹⁾ 前掲「我的母親劉清揚」172 頁

侵略委員会（抗美援朝総会）が結成される⁽²⁰⁾。国をあげて抗美援朝キャンペーンが始まり、ACWFもその重要な一翼を担い、劉清揚もさまざまな取り組みに活躍した。たとえば51年1月28日に北京の故宮太和殿で開かれた抗美援朝・日本再軍備に反対する女性大会では、劉清揚が大会主席として開会の言葉を述べ、デモ行進を先導した。主催者予想をはるかに超える45,000人が参加し、主婦や労働者、農民、学生、医療従事者や修道女や尼僧といった各界各層の女性たち、しかも祖母から母、娘、孫の世代までが結集して、「侵略反対、世界の平和を守ろう！」「アメリカ帝国主義と日本再軍備反対！」「子女に教育を！」と声をあげた。政治集会に生まれて初めて参加した人も多かった。あるおばあさんは涙ぐんで、「女たちにも国政を動かすことができる」と感激を語った⁽²¹⁾。

劉清揚は、抗美援朝総会が3月末から5月中旬にかけて北部朝鮮に派遣した大規模な慰問団にも参加して、指導的な役割を果たしている。この慰問団は3月9日、「中国人民赴朝慰問団中央総団」の名称で3月9日に成立大会を開き、ACWFから劉清揚・雷潔瓊ら26人が参加した⁽²²⁾。廖承誌が団長となり、総勢575人が中国人民志願軍・朝鮮人民軍・朝鮮人民を慰問した。団は中国全域の様々な民族・団体・革命烈士家族と軍人家族の代表、著名な労働模範・志願軍の戦闘英雄・各界知名人・文芸工作者らによって構成され、575人は直属分団と七つの分団に編成された。このとき、劉清揚はACWFを代表して直属分団の団長をつとめた。なお、後述のとおり第七分団に白朗が参加している⁽²³⁾。



中国訪朝慰問団の女性代表・劉清揚と朝鮮民主女性同盟の女性たち⁽²⁴⁾

朝鮮民主女性同盟が全世界の女性に送った平和メッセージを受けて WIDF は朝鮮に国際

⁽²⁰⁾ 「中国人民保衛世界和平反对美国侵略委会成立」『大公报 百年回眸』

http://202.55.1.83/history/history_news.asp?news_id=165947

⁽²¹⁾ 「【新華社北京廿八日電】北京市各界婦女四万余人於二十八日舉行盛大的抗美援朝、反对美帝重新武裝日本的愛國大会及示威遊行」 (http://202.55.1.83/history/history_news_content.asp?news_id=142929)

⁽²²⁾ 石希責任編集「1951」（中国婦女網）

<http://www.women.org.cn/quanguofulian/dashiji/1951.htm>

⁽²³⁾ 「中國人民赴朝慰問團名單」 http://lygj.blog.hexun.com.tw/59769621_d.html

⁽²⁴⁾ <http://www.jiixiangwang.com/prc/h-prc-1951-korea-weiwentuan.htm>

調査団を派遣することを決め、中国からは劉清揚・白朗・李鏗が中国女性代表として参加することになった。世界中からきた女性たちが5月13日に瀋陽で全員集合し、16日には鴨緑江を渡って朝鮮に入る。

朝鮮ではWIDF調査団一行を迎えて、5月19日夜、平壤の各界代表600余名が集まり、熱烈な歓迎大会を開いている。朝鮮民主女性同盟の朴正愛が朝鮮女性を代表して、歓迎と感謝の言葉を述べた。彼女は米軍の残虐行為を悲憤慷慨して訴え、朝鮮の息子たちと娘たちが中国志願軍とともに前戦で闘い、朝鮮の女性たちは大半が工場や鉱山、農村で働いて前戦を支えていると述べ、「全世界の女性から力強い支援と励ましを受ける朝鮮人女性は決して屈服しません」と強調した。これに応じてWIDF調査団団長ノラ・ロッドが、「最大限の努力をして、皆さんの闘いの状況や欧米兵士が種々の暴行を働いている状況を本国の人々に伝えます。全力で平和を勝ち取りましょう。もし私が若かったら朝鮮に留まって朝鮮の再建を助けたいほどです」と熱情溢れるスピーチをする⁽²⁵⁾。

続いて調査団副団長であり中国人女性代表である劉清揚が、こう挨拶した。「朝鮮人民が世界平和を守る最前線で英雄的な正義の戦いを進めていることに私たち全中国の人民と女性たちは非常に感動しています。中国・朝鮮の人民の利益は一致しているのだから共同してアメリカ帝国主義の侵略者を排除するために努力しましょう。私たちはこの調査任務を忠実に完成させ、報告書を作成して全世界に向けて公にします」⁽²⁶⁾。

調査団一行は21日まで平壤とその近郊に滞在し、22日以後は黄海道・平安南道・江原道・慈江道の4地域に分散して調査に赴いた。劉清揚は、ベルギー、イタリア、チェコの代表とともに平安南道の陽徳を通過して江原道文川郡の万先村（平壤から150キロ）と元山港（万先村から48キロ）などを訪問している⁽²⁷⁾。彼女たちが朝鮮で見た、空襲で廃墟と化した村々、焼かれた山林や畑、空襲を避けるため夜にしか農作業ができなくなった農民たち、国連軍による虐殺や蛮行の生々しい痕跡、そして彼女たちが会った人々からの証言などが詳細に記録された。そして、劉清揚が平壤での歓迎会で約束した通り、調査団は報告書をまとめあげ、世界に国連軍の犯罪を告発することになるのである。

第2章 白朗

第1節 抗日戦争・解放戦争から抗美援朝戦争へ

白朗（1912～1994）は著名な作家である。瀋陽で医師の家に生まれ、父の死後は著名な漢方医であった祖父のもとに母と共に身を寄せた。やがて祖父は白朗らを連れてチチハルに移り、黒龍江省督軍呉俊昇の軍医所所長を務めたが、張作霖と呉俊昇が殺された後は職を失い、生活は困窮した。白朗の姉弟は貧しさのために十分な病氣治療を受けられず早逝し、白朗の母親は不幸続きの中で精神を病んだという。白朗は、黒龍江省立女子師範学校

⁽²⁵⁾ 「国際婦連代表団抵平壤調査美軍破壊残殺暴行」大公報、http://202.55.1.84/history/history_news.asp?news_id=143043

⁽²⁶⁾ 同前

⁽²⁷⁾ 前掲『編集復刻版 国連軍の犯罪』240～251頁

卒業後の1929年、従兄で、当時既に中国共産党員であった羅烽と結婚する⁽²⁸⁾。

1931年の柳条湖事件勃発後、白朗は抗日地下活動に参加した。共産党の指示を受けてハルビンの国際協報社に入り、記者・編集者として活躍する。抗日活動に対する弾圧が強まる中で35年末に羅烽と共に上海に逃れ、以後、抗日作品を次々に発表した。37年の盧溝



延安文芸座談会に参加した白朗(右)と「労働模範」の張桂蘭(左) 1948年⁽²⁹⁾

橋事件後、日本の全面的な中国侵略に対して、中国の多くの作家が抗日戦争に身を投じた。8月13日に日本軍が上海に進撃すると、白朗は上海文芸界戦地服務団に参加して抗日活動に奔走した。戦時下の過酷な生活の中で乳児を失ったが、抗日解放の大義を確信し、39年には老母と子どもを家に残し、羅烽とともに中華全国文芸界抗敵協会が組織した作家戦地訪問団(王礼錫団長)に加わった。45年、延安で入党している。

抗日戦争勝利後の46年、白朗はハルビン暫定評議会議員、東北文芸家協会副部長、東北作家協会輪執主席などを歴任。また農村に深く入り解放区の文芸工作に活躍し、土地改革に参加して農民たちとふれあった。短編集『牛四的故事』(香港新中国書店、1949年)には解放前の暗い時代を生きる民衆の苦難や土地への熱望が描写されている。

49年10月に中華人民共和国が成立する前後、白朗は中華全国文学芸術界工作者代表大会に出席し、東北文連と東北文芸工作者協会の創立にも参画した。小説『幸福な明日のために』⁽³⁰⁾は50年に書きあげられた。後に14版を重ね、20余万冊を出した代表作であり、朝鮮語・日本語にも翻訳されている。主人公は子供の頃から貧しく苦しい生活をし、虐待を受けて育ったが、善良な性格で、共産党の指導する新中国の建設に明るい希望を見いだす。工場に入り、労働者階級の一員として成長し、身を犠牲にすることもいとわず、まっすぐに共産党と新中国の未来を信じて前進してゆく。この作品は、建国初期の新しい社会と文化、人と人との新しい関係、中ソの友誼、組織と人民の主人公に対する思いやりと愛情を活写し、女性労働者の純粋な心の美しさを描いた感動的な名著と

⁽²⁸⁾ 白朗の生涯については、閻純徳「二十世纪中国著名女作家——白朗」

(<http://www.tianyabook.com/renwu2005/js/y/yanchunde/essj/020.htm>) および白石淑子「白朗試論」(『お茶の水女子大学中国文学会報』6, 1987年4月、156-168頁)、同「白朗の初期作品について——出て行く若者たち——」(立命館文学 615, 2010年3月、793-779頁)、同「作家戦地訪問団について」(『鴨台史学』(11), 2011年3月、77-98頁)参照。

⁽²⁹⁾ 写真の出典は、「為人民大眾：大連文藝發展新時代的旗幟」(大連新聞網 http://www.dlxww.com/culture/content/2012-05/23/content_327845.htm)

⁽³⁰⁾ 原題は『為了幸福的明天』。人民文学出版社から1951年7月に刊行。この作品は鮑秀蘭(伊藤克の中国名)が日本語訳し、『幸福な明日のために』という題で1952年8月に三一書房、続いて1953年1月に民主新聞社から刊行されている。伊藤克は日中戦争勃発前に中国人の男性と結婚して中国へ分かれ、抗日解放後は、遼寧省にある鞍山製鉄所の図書館で資料係の仕事について中国語を日本語に翻訳する仕事に従事していた。伊藤の自伝に『悲しみの海を越えて』(講談社、1982年)がある。

して高い評価を受けた。主人公は「労働模範」であった趙桂蘭(写真左)を連想させる。病気がかりながら工場の仕事を休まず、危険薬品の爆発から工場を守るために咄嗟に自分の身を犠牲にし、その爆発で障害者になってしまう。そんな自己犠牲的行動や同志愛に守られて前進してゆく主人公の歩みは、趙桂蘭の歩みと重なってみえる。

作家として抗日戦争から国共内線下の解放戦争を闘い続けてきた白朗は、朝鮮戦争が勃発すると抗美援朝の文芸運動に挺ずる。抗美援朝総会は1951年春に大規模な慰問団を朝鮮に派遣すると、白朗は第七分団に属して参加した。この分団は、抗美援朝総会東北分会や中国新民主主義青年団東北委員会、解放軍東北軍区部隊、北文連、東北農民協会、そして白朗の所属する東北作家協会がそれぞれ代表を派遣していた⁽³¹⁾。5月にWIDF調査団一行が瀋陽に集合したとき、白朗は抗美援朝総会の朝鮮慰問団から帰国したばかりであった。



1951年、第一次中国人民赴朝慰問団の構成員たち。白朗は、前列左から二人目⁽³²⁾



1951年5月4日。黄谷柳が、WIDF調査団に参加するために帰国する白朗を送っていった。⁽³³⁾

⁽³¹⁾ 註(23)に同じ。

⁽³²⁾ 黄茵編／黄谷柳・黄茵撮影『1951-1953、中国的文人与中国的军人—巴金与他的战友们在朝鲜前线』岭南美术出版社、2007年

⁽³³⁾ (33)同前

第2節 WIDF 調査団参加前後の白朗

5月13日、調査団初日の会議はのっけから一混乱があった。結論が調査前から決まっているような調査団にしたくないというデンマークのケート・フレロンや英国のモニカ・フェルトンに対して、ソ連のマリア・オビシヤニコワが疑問を投げ、白朗は強く非難したのである。フェルトンはこう回想している。「白朗は三人の中国代表の一人で、中国訪朝団で最近訪朝したばかりだった。彼女は自分が朝鮮で見てきたことを語り、私の方を向いて、既に人間が耐えられる限界に達している朝鮮人民の苦悩をさらに重くしようとしている、と非難した。そして白朗が米国資本家の邪悪さを弁じたてるので、私は生まれて初めて自分がロックフェラーかバーバラ・ハットンであるかのような気にさせられた」⁽³⁴⁾。

このように、最初是对立の火花が散る一幕があった。抗美援朝の明快な立場に立つ白朗らにとって、西側の女性たちの議論は無責任な中立主義に映ったかもしれない。またフェルトンたちにとっては、最初から結論が用意されているものを調査団と呼ぶことはできず、また邪悪な資本家階級と戦っているという道徳的優越性を振りかざされては心外でもあった。が、それでもやがて女性たちは歩み寄り、真相究明こそが共通の目的だという一致点を確認しあうことができた⁽³⁵⁾。調査団が旅程の打ち合わせに入ったとき、中国女性を代表して旅程を説明したのは白朗であった。フェルトンは、「色白でふっくらした、陽気な目をした作家」の白朗だが、旅の説明が進むにつれて目の色が厳粛になっていった、と述べている。白朗は調査団員たちにこう言った。「皆さんに警告しなければなりません。皆さんは、朝鮮に入る前に戦争のような状況になっているのに気づくでしょう。瀋陽から丹東へ行く途中の半分をすぎれば、米空軍がたえまなく爆撃をしている地域に入ります。私たち自身の安全のために、中国内でも朝鮮でも、移動は夜にしないとけません。それに、どこにスパイがいるかわからないので、丹東に出発するまでホテルを離れない方がいいでしょう。ちょっとした運動がしたい方は、ホテルの裏にプライベート・ガーデンがありますよ」と⁽³⁶⁾。白朗は、WIDF 調査団が行こうとしている場所が危険な戦場であることを女性たちに思い出させるものであった。

WIDF 調査団は朝鮮で4グループに分散し、白朗は東ドイツ、西ドイツ、オランダの代表たちと4人で平壤から价川、熙川、江界、満浦を訪ねている。白朗はまた、オビシヤニコワとフェルトン、ジレッタ・ジグラー(仏)、エヴァ・プリースター(奥)とともに報告書作成委員5人の一人となった。彼女たちの共同作業によって最初の報告書は中国語・英語・フランス語・朝鮮語・ロシア語の五か国語で同時に作成されたのである⁽³⁷⁾。

劉清揚が五四運動の時代から女性解放運動家として名を馳せた「老大姐」であり、ACWF 幹部としてWIDF 調査団の中国側責任者を引き受けるに到ったのと対照的に、白朗はWIDF 調査団がきっかけになってACWF・WIDFの女性運動に参加するようになった。

1951年6月、国際女性調査団のノラ・ロッド団長は、ブルガリアのソフィアで開催されたWIDF 執行委員会に正式に調査団報告書を提出した。ACWFは、副主席李徳全を団長に、

⁽³⁴⁾ Monica Felton, "That's Why I Went", Lawrence & Wishart, 1953, pp.68-69.

⁽³⁵⁾ Ibid., pp.69-71.

⁽³⁶⁾ Ibid., p. 71.

⁽³⁷⁾ Ibid, p.71 なお白朗たちのグループが調査に赴いた价川、それから熙川、江界、満浦地域の報告は、前掲『国連軍の犯罪』252～262頁。

白朗をふくめて代表団一行5人をソフィアの執行委員会に派遣した⁽³⁸⁾。

白朗がその次にフェルトンに会うのは翌52年9月である。この年の春、白朗は作家、音楽家、美術家など、総勢18人の訪問団(団長は巴金)の一員として訪朝した。本号に掲載した西田千津訳の白朗のルポルタージュ「平壤七日」では、52年4月の平壤にもふれ、人々の暮らしや街の様子を伝えている。「春の平壤は、戦時中も活気みなぎる首都だった。私は敬意と熱愛の情を抱いてやって来た。あのとき私は平壤市民が、新しく生み出される偉大な気魄に向かっていく、この町の繁栄した気風にぬくもりを感じた」という⁽³⁹⁾。白朗が作家仲間と平壤にいた頃、フェルトンはスターリン平和賞授賞式のためモスクワにいた。彼女はまもなく中国に国家的賓客として招待され、白朗は9月、周恩来の指示を受け、彼女の訪朝に随行した。白朗は「平壤七日」に、フェルトンと共に訪ねた平壤や孤児収容施設や捕虜収容所の姿を生き生きと写し出している。

白朗とフェルトンの出会いの始まりは国際女性調査団初日の対立だったが、以後は国連軍による朝鮮戦争犯罪を訴え、国連軍撤収と朝鮮停戦を訴えるWIDFの平和運動を通して信頼し合う親しい友人となった。フェルトンは10月に北京でアジア太平洋地域平和会議に出席した後、12月にウィーンの世界平和会議⁽⁴⁰⁾に参加する。白朗も中国代表団の一員としてウィーンの会議に出席し、西ドイツのリリー・ベヒターやベルギーのヘルマイネ・ハンファートたちとも一年半ぶりの再会を喜び合った⁽⁴¹⁾。フェルトンは翌53年、ロンドンで開くNAW(全英女性会議)主催の3月の国際女性デーの集いに中国女性代表を招待したが、これは英国政府によるビザ発給拒否に遭い、実現しなかった⁽⁴²⁾。

1953年6月にはコペンハーゲンでWIDFの世界女性大会が開催され、中国からは李徳全を団長、章蘊を副団長として、白朗ら代表団一行30人が参加した⁽⁴³⁾。この大会には51年の調査団員のうち8人が出席しており、ケート・フレロン家で再会を祝う楽しいひとときを過ごした。51年の調査の際には「客観的」な観点を堅持したいとオブザーバーの立場を貫徹したフレロンだったが、白朗たちを親愛な友人として歓迎し、「今日は、世界中で一番好きな友人たちが我が家に集まりました。闘いに結ばれた私たちの友情を忘れません」と祝杯をあげた。目に涙を浮かべ、「中国のことは忘れられません。中国の方たちの支援がなかったら私たちはなすべき仕事を果たすことはできなかった。親愛な白朗、偉大

⁽³⁸⁾ 前掲「1951」(中国婦女網)及び *The Corpus Christi Caller-Times*, 25 Jun 1951, p. 14. <http://www.newspapers.com/newspage/24015270/>

⁽³⁹⁾ 白朗「平壤七日」の原文は『白朗文集』3・4に収録されており、全文をインターネットで読むことができる。日本語訳は、本誌114～133頁参照。

⁽⁴⁰⁾ 白朗が書いたウィーン会議に関する報告文に「対戦争的莊嚴宣判」(戦争に対する嚴肅な判決)がある(『白朗文集』3・4、147～155頁)。

⁽⁴¹⁾ ベルギー代表ヘルマイネ・ハンファートは、WIDF調査団の中で最年長の65歳であった。白朗は、朝鮮滞在中のハンファートについて、「ほっそりして背が高く、ピンと背筋を伸ばし、厳しい目をした老婦人」で、朝鮮滞在中は近寄りたがたい雰囲気があったという。が、ウィーン会議で再開したときには打ち解けて、そのまなざしも優しく感じられたと回想している。「我懷念着遠方的朋友」(『白朗文集』3・4、199～214頁)204頁参照。

⁽⁴²⁾ 「我懷念着遠方的朋友」(同前)の中に、モニカ・フェルトンが英国政府の措置に憤慨しつつ、友情をこめて白朗に送った手紙が紹介されている(208～209頁)。

⁽⁴³⁾ 「1953年」『中国婦女網』 <http://www.women.org.cn/quanguofulian/dashiji/1953.htm>

な中国のために乾杯させてね！」と中国女性たちへの特別の思いを語ったという⁽⁴⁴⁾。

コペンハーゲン大会は忘れがたいものになった。後に彼女は「心逢着心」（心と心が通う）や「我懷遠方的朋友」（遠方の友を懐かしむ）と題してその報告を書き、そこでも51年の調査団の仲間たちを懐かしみ、またフェルトンやベヒター、ロドリゲス、ジューグラーらが朝鮮から帰国後迫害に抗して不屈に真実を訴え続けたことをも共感と尊敬をこめて紹介している。これらの報告文は『白朗文集3・4』に収録されている⁽⁴⁵⁾。フェルトンの『だから私は朝鮮へ行った』と共通して、WIDFの公式報告書には出てこない個人的印象や人物描写、様々なエピソードがちりばめられた、女性史の貴重な史料である。

白朗は、コペンハーゲン女性大会の後、ヘルシンキで女性の集いに出席⁽⁴⁶⁾し、7月に帰国するとすぐに開城訪問団（団長は羅峰）の一員として訪朝、板門店で挙行された朝鮮停戦調印式に参加した。8月には全国第二次文代会、全国文連委員・中国作家協会理事に選出される。54年には第一期全国人民代表大会代表、ACWF委員になり、56年にはインドで開かれたアジア作家会議に出席する。白朗はこのように50年代の国際的な文化交流や平和運動に大きく貢献した。50年から55年は白朗の人生において最も活動的で、最も多作の5か年だったという。この時期の作品には、前述の『幸福な明日のために』や数々の報告文に加え、抗美援朝のために中国と朝鮮を列車で往来した献身的な医療従事者たちの活動を描いた『在軌道上前進』がある。

第3章 李鏗

第1節 学者一家に育った李鏗

李鏗（1914年11月～1968年9月13日）⁽⁴⁷⁾は、福州の名望家である李家の次女として生まれた。祖父の李世暢は清朝時代、閩浙總督署に勤める官吏であった。父・李景堃は清朝末の科挙試験に合格して官吏になり、中華民国時代には外交部で働いた一方、画や学問に優れ、詩集『愉園詩集』を出した著名な詩人でもあった。05年に一家が北京に移住したため、李鏗は北京で生まれ育った。ちなみに李景堃の末弟は李喬蘋（1895～1981）で、化学教育家・化学史家として名高い。英国のジョセフ・ニーダムとの親交が知られているが、李鏗の甥にあたる王夏宇によれば、李喬蘋とニーダムを引き合わせたのは李鏗だったという⁽⁴⁸⁾。

⁽⁴⁴⁾ 前掲「我懷念着遠方的朋友」204～205頁

⁽⁴⁵⁾ リリー・ベヒターについては前掲『白朗文集』150、206、208、211～212頁。ジューグラーについては同前212～213頁、カンデラリア・ロドリゲスについては同前150、202頁参照。

⁽⁴⁶⁾ 「黒土地上的女作家——白朗」（政協遼寧省委員会ホームページ http://lnzx.gov.cn/Newspapers/wstd/2010-3-19/Article_10504.shtml）には、ヘルシンキで「女性文化日」の慶祝活動に参加したとあるが、詳細は不明。

⁽⁴⁷⁾ 北京大学党史校史研究室編集発行『戦闘的歷程 1925—1949・2 燕京大学地下党概況』北京大学出版社、1993年、207頁。

⁽⁴⁸⁾ 本節は、特に別注がない限り、李鏗の甥（妹の息子）にあたる王夏宇が発表した「懷念姨

李鏗の父・李景堃は儒教的教養の人であり、すこぶる保守的で、女子教育に反対していた。しかし、母の陶碧は違った。陶碧は幼い頃に兄弟たちを説得して読み書きを教えさせたというくらい向学心が高く、当時の慣習通り親の指示に従って結婚したものの、姑を味方につけて福州女子師範学校に進んだ。3年後に優秀な成績で卒業して母校の助教になり、出産までの数年間、教師として働き続けた⁽⁴⁹⁾。李景堃と陶碧には4男4女が生まれた。女子教育に否定的な李景堃に対して、陶碧と李景堃の母は男子も女子も全員教育を受けるべきだと言い張り、李鏗たちを進学させた。陶碧の信念が実を結んだというべきか、一家の学术界での活躍はまばゆいばかりだ。一つ上の兄、耀滋(1914年生)、七つ下の弟、詩穎(1922年生)は共に工学を学び、マサチューセッツ大学で博士号を取得し、その教授となった。一つ下の妹の懿穎(1916年生)は耀滋の学友で、銭学森の従兄弟にあたる銭学榘と結婚する。1952年に米国で誕生した銭学榘と懿穎の息子(李鏗の甥)は、2008年にノーベル賞を受賞することになる銭永健(ロジャー・Y.チエン)である⁽⁵⁰⁾。

李鏗は、1935年に北平大学女子文理学院英文系を卒業した後、山東省で教師になった。38年に7月に延安へ赴き、抗日軍政大学で学び、同年8月に中国共産党に参加。以降、四川省の潼南や温江などへ派遣され、YWCAの農村活動に従事した⁽⁵¹⁾。

女性たちに読み書きや子育ての知識を教えようとすると、当初は反発に遭うのも珍しくなかった。農村の男たちは「女に物を教えても何の得にもならない」と思っていたし、女たちには他所者のほうが赤ん坊の世話の仕方を知っていると思うと面白くなかったからだ。それでもすぐに雰囲気は変わり、人々は興味を持って学び始める。文字や子育て知識の教育は、政治意識を喚起する壁新聞作りや政治集会などを通した政治宣伝と組み合わせられていて、数か月もすると農民の意識はすっかり解放されている。こうして一つの村で組織の基礎を固めると、また別の農村に向かう⁽⁵²⁾。李鏗はそのようにして抗日根拠地の建設に尽くしたのである。



(左) 陶碧 (右) 李景堃

母李鏗」(淮陰区政府網 <http://www.zghy.gov.cn/news/news.asp?id=75971>)による。なお、趙慧芝「著名化学史家李乔萃及其成就」(『中国科技史料』第122卷(1991)第1期、13頁・23頁)には李喬蕓が1946年に初めてニーダムと出会ったと書かれているが、李鏗のことは特に何も書かれていない。なお、ニーダムは1952年に朝鮮戦争下の米軍による細菌戦に関する調査を行った国際科学者委員会の一員として重要な役割を果たした。

⁽⁴⁹⁾ 李鏗はモニカ・フェルトンに陶碧のことや、嫁の進学や孫娘の教育を支援した李景堃の母のことを詳しく語っている。Monica Felton, "That's Why I went", Lawrence & Wishart, 1953, P.73. また陶碧の学歴は王夏宇「我的三舅李诗穎」(清華校友網 <http://www.tsinghua.org.cn/alumni/infoSingleArticle.do?articleId=10086041>)を参照。

⁽⁵⁰⁾ 前掲「懷念姨母李鏗」の他に、「李氏兄弟关于钱学榘的记述」鳳凰網 <http://bbs.ifeng.com/viewthread.php?tid=5899101> 及び 李懿穎に関する Geni's Genealogy Database の情報 <http://www.geni.com/people/Yi-Ying-Eva-Tsien-%E6%9D%8E%E6%87%BF%E9%A2%96/6000000008279609249> を参照。

⁽⁵¹⁾ 註(47)に同じ。

⁽⁵²⁾ Monica Felton, op.cit., pp.73-73.

YWCA のリリー・K・ハアスがエリザベス・B・コットン宛に 39 年 12 月 16 日付けで出した手紙には、YWCA 農村部の李鏗が中国の中部と西部で農村活動に従事してきたことを紹介した後、こう書かれている。

「李鏗さんを知る人々は、彼女の活動方法の稀にみる民主性や、つながりのできた人たちを最高に成長させることのできる彼女の能力を非常に高く評価しています。彼女にはとても良い哲学があると全員が認めています、正式な教会メンバーではありません。彼女はラディカルな運動において祖国に献身する人々の自己犠牲に深く感動しており、惜しみなく自身と自身の持つ全てを与えるという傾向があります」⁽⁵³⁾

ハアスらは李鏗の力量と豊富な活動経験を高く評価し、次代の YWCA 農村活動の幹部になることを囑望し、米国留学の可能性を探すためアジア基督教主義高等教育支援財団のマクミランに相談した。40 年 5 月には李鏗のもとにオレゴン州の州立大学から奨学金が得られるとの知らせが届いている⁽⁵⁴⁾。40 年 10 月、李鏗は党の同意を得てオレゴン州立大学家政学部に入學し、修士号を取得して 41 年 12 月帰国。以後、42 年から 46 年にかけて山東省福山、北平、昆明などで YWCA 工作を行い、1946 年 7 月から 48 年 7 月まで燕京大学家政学部で講師をつとめた。48 年の夏には清華大学内に暑気託児所と家庭婦女会を設立している⁽⁵⁵⁾。

その間に李鏗は、政治活動の中で出会った 2 歳年下の董寿華と結婚している。董寿華はすでに黨員であった李鏗の影響を受けて共産党に加入したという⁽⁵⁶⁾。彼は 41 年秋に雲南省昆明の西南連大学航空系⁽⁵⁷⁾を卒業したエンジニアである。大学卒業後すぐ、貴州の大定航空発動機製造廠の建設準備活動に入った。当時中華民国政府は航空機開発に国運をかけ、39 年に製造廠準備処を設けて米国留学中だった李耀滋と錢学渠ら 7 人の航空工学研究者を呼び戻し、製造廠各部門の責任を負わせていた⁽⁵⁸⁾。つまり、董寿華は李鏗の兄と妹婿らが指導する航空機開発の職場に就職したわけである。彼は 44 年夏に米国ペンシルバニ

⁽⁵³⁾ Extract from letter of Lily. K. Haass to Mrs. Cotton, December 16, 1939, in *the Archives of the United Board for Christian Higher Education in Asia*, RG 11, Box 23, Folder 572, Yale Divinity School Library.

⁽⁵⁴⁾ Letter from Mrs. Elizabeth Boyes Cotton to Mrs. T. D. Macmillan, May 10, 1940., *ibid.* なお、李鏗の米国留学は家庭環境からも自然な選択であった。すでに兄の李耀滋は 37 年から米国に留学しており、彼の親友である錢学渠は耀滋と鏗の妹である懿穎の長距離恋愛も始まっている。42 年になると弟の詩穎もまた留学する。

⁽⁵⁵⁾ 註(47)に同じ。

⁽⁵⁶⁾ 呉大観『我的愛国心』(<http://0707nwpu.blog.163.com/blog/static/795889082009102054031313/>)。呉大観は中国の「航空エンジンの父」と呼ばれる航空工学のエキスパートである。『我的愛国心』は呉大観の口述をまとめたもので、北京大学工学院工学部講師であった時期(1947~1948 年)の回想の中で、董寿華が呉大観の北京大学への就職を仲介したこと、李鏗の影響で董寿華が入党したことなどに言及がある。なお、『我的愛国心』は 2009 年に航空工業出版社から刊行されている。

⁽⁵⁷⁾ 西南連大学は、日本軍の空爆・侵攻を背景に北京大学・清華大学・南開大学が連合して雲南省昆明に設立した、戦時連合大学である。

⁽⁵⁸⁾ 楊蘇之「大定發動機製造廠滄桑」中華科技史学会學刊第 16 期(2011 年 12 月) 105 頁、劉宗平「大定廠探密--訪王文煥先生談烏鴉洞的奇蹟」同前、110~111 頁。

ア州の発動機工場へ派遣され、47年の帰国までそこで発動機製造技術を学んだ⁽⁵⁹⁾。李鏗と董寿莘の間には、44年頃に長男、47年頃に長女が生まれている⁽⁶⁰⁾。

李鏗は1943年に保育者養成訓練を受け、それから託児所運動に積極的に取り組んでいった。「預けたりしたら子どもを盗まれるのでは」と疑う人たちもいて、最初の規模はごく小さかった。が、託児所の子どもたちが健康にすくすく育っている様子を見て、多くの母親たちが集まるようになった。李鏗は長男も長女もそれぞれ生後1か月になると保育所に預け、自分自身は保育者養成所の運営に献身したという⁽⁶¹⁾。

李鏗の託児所運動は、抗日戦争期から国共内戦期に女性運動の中で重視された託児所建設・保育者養成事業の一部であった。劉清揚の戦時児童保育会に関しては第1章に述べたが、解放区の女性たちは戦争で親を失った孤児たちや女性戦士の乳幼児を育てる託児所建設活動に早くから取り組み、46年には蔡暢・康克清らが児童保育委員会を発足させている⁽⁶²⁾。また、宋慶齡は38年に保衛中国同盟(42年に「中国福利基金会」と改称)を設立して全世界に抗日勢力の擁護を呼びかけて医薬品などの救援物資を募集し、これらを抗日根拠地へ送って解放区の児童保育事業を支援している。この組織は中華人民共和国樹立後の50年に中国福利会と改称するが、李鏗はその委員の一人でもあった⁽⁶³⁾。こうした流れの中でACWFは全国婦女幹部学校(婦幹校)⁽⁶⁴⁾を設立すると保育事業の幹部育成を推進し、50年には1850人の女性が訓練を受けた。同年の保育施設は解放前の147所から643所へと発展し、5倍以上に増加している⁽⁶⁵⁾。李鏗は抗日戦争勝利の直後はYWCAの一員として農村部の他に学生工作部の仕事にも取り組んでいたが、やがて活動の場をACWFに移し⁽⁶⁶⁾、婦幹校保育科の科長をつとめるようになる。婦幹校保育科の主要任務は託児所、幼稚園、保育院のための保育者を養成することであり、対象は託幼施設の保育者とACWFに加入する省・地・県レベルの女性組織の中で児童福利活動に従事する幹部であった。当

⁽⁵⁹⁾ 楊宝茹責任編集『清華革命先駆 上冊 中共清華大學地下組織活動及組織史要』清華大学出版社、2004年、449頁

⁽⁶⁰⁾ 1951年5月に李鏗はモニカ・フェルトンたちに対して男の子が7歳、女の子が5歳だと話している。Felton, op.cit., P.67.

⁽⁶¹⁾ Felton, ibid., P 67, P74.

⁽⁶²⁾ 前掲『中国女性運動史 1919-49』443頁、「蔡暢児童教育思想述評」(中国社会科学院網 http://edu.cssn.cn/jyx/jyx_xqjy/201310/t20131023_451935.shtml)

⁽⁶³⁾ 前掲「懐念姨母李鏗」による。ただし、李鏗が中国福利会でどのような活動を担ったかについて詳細は不明。1950年7月25日に上海で開催された「中国福利会執行委員会の第一期第一次会議」に出席した執行委員名簿には、章蘊の名がみえる。

⁽⁶⁴⁾ 1949年に宋慶齡、何香凝、蔡暢らが設立したACWF幹部学校。95年に「中華女子学院」と改称、96年に大学となり、今日にいたる。

⁽⁶⁵⁾ 前掲「蔡暢児童教育思想述評」

⁽⁶⁶⁾ 袁永晟の孫にあたる人が抗日戦争終結前後のYMCAについて書いている文章 (http://blog.sina.com.cn/s/blog_70aa8f2b0100oxpb.html)によれば、抗日戦争期、YWCAとYMCAは西南連大学が置かれた雲南省昆明に学生公社を置いて学生援護活動に取り組んでいたが、昆明学生公社の幹事がYMCAの李儲文とYWCAの李鏗であった。抗日戦争勝利後の46年5月に西南連大学が解散し、学生たちが北京に戻ってくると、YMCA・YMCAは新たに北平基督教学生公社を設立した。李鏗は北平基督教学生公社(北京大学付近の景山後街太平街13号)の準備を開始したが、まもなく学生公社を去り、後にACWFに移った。李鏗が去った後、北平基督教学生公社の執行幹事には、YWCAの張秀が就任した。

時保育科の教員は7人、輔導員は3人で、科長の李鏗は米国で修士号を取っていたが、他の教員や輔導員は皆、大学卒業者であったという⁽⁶⁷⁾。

第2節 李鏗の WIDF 調査団への参加とその後

モニカ・フェルトンの『だから私は朝鮮へ行った』の中で、李鏗は、その人物像が目に浮かぶように描かれている魅力あふれる女性たちの一人であり、彼女が登場する頁はユー



家族写真の中の李鏗

モラスな楽しい筆致で書かれている。李鏗は、フェルトンたちが瀋陽に到着してから最初に親しく話をした中国人であった。彼女は5月12日の夜、到着したばかりのフェルトンやフレロン、イーダ・バックマンたちが宿泊したホテルの部屋を訪ねてきて、「私もいっしょに朝鮮へ行きます」と、米国流のアクセントで挨拶した。ほっそりしていて目が大きく、肌は日焼けし、艶やかな髪はショートカット。人生は教えられていたよりもはるかに愉快だと思っているような雰囲気彼女の、フェルトンは一目で好きになった。

李鏗が「劉清揚は責任者で、白朗は作家」だと話すと、バックマンが「貴方は？」と聞いた。李鏗は自分が保育者訓練学校の運営をしていること、中国再建のための仕事は多く、大勢の既婚女性が家庭の外で働くことを望んでいるので託児所を運営するスタッフの養成が必要だと説明した。李鏗が5歳と7歳の子どもをもつ母親で、彼女自身は37歳になると聞いて西欧の女性たちは驚いて目を瞠り、しばらく言葉も出なかった。西欧女性の目にはたぶん20歳前後の若者のように映っていたのだろう。「瀋陽を発つまでに私たちは中国人女性の年を推し量るのはもう諦めてしまった。一番近い年を推量したときでも5歳はずれていた」と、後にフェルトンは回想している。子どもたちを生後1か月で保育園に預けたという経験に興味をもって、フレロンが「そんなに小さいうちに預けるのは心配じゃなかったの？」と聞くと、李鏗は「いいえ、そんなことないわ」と否定し、「もちろん自分で赤ちゃんの世話をしたいです。でも、今の中国にはなすべきことがたくさんある。だから今はこれから生まれてくる世代のために辛抱しないと。それに、小さい子たちは保育園でしっかり面倒をみてもらっているの」。また、「子どもたちが大きくなって、親に反発しないかしら？」との質問に、「そうは思わないわ。どうしてそれが必要だったか、きっと理解するでしょう」と話している⁽⁶⁸⁾。李鏗は西欧の女性たちに、中国の女性たちがどんなふうに新しい国を建設しようとしているかを知らせたがった。西欧の女性たちもまた、李鏗を通して中国への興味がかきたてられた。渡米経験もあり英会話も流暢にできる李鏗は、このようにして中国の女性たちと英語圏の女性たちの交流と相互理解に李鏗ならではの貢献をしていった。

⁽⁶⁷⁾ 姚明『姚明 我的生平』電子図書 <http://www.1921.org.cn/tushu.php?ac=inlist4&bid=360>。姚明は、1951年11月に李鏗が農村工作へ出かけている留守中に、婦幹校保育科の副科長に就任した。李鏗が北京に戻った後も保育科に留まり、共に働いた。

⁽⁶⁸⁾ Felton, op.cit., pp.67-68.

調査団一行が瀋陽から丹東へ向かう列車の中でも、李鏗とフェルトンは互いの人生や活動について色々と語り合った。その内容をもフェルトンは『だから私は朝鮮へ行った』に詳しく書いている⁽⁶⁹⁾。李鏗が話した祖母や母、父や兄弟のこと、彼女の活動経験や結婚や子どもに関する物語は、一人の中国人女性が語る生きた中国現代史であった。フェルトンは李鏗の語りから、儒教や封建制、外国からの侵略の下で生きてきた中国女性たちがどのように闘って新時代を拓き、新しい社会を築こうとしているかを感じ取り、明るい未来を信じて祖国建設に邁進する姿に強く印象づけられたのだろう。

フェルトンの本の中に快活で鋭刺とした姿が活写されている李鏗であるだけに、彼女がWIDF 調査団の訪朝をどう感じ、どう考えたのか、興味深く思う。が、残念ながらそのような情報は未だ見つからない。51年後半から57年までの彼女の活動として分かっているのは、中国福利会の委員や婦幹校保育科長、中南海機関幼兒園主任などをつとめ、寝食を忘れて社会活動に従事していたこと、51年秋に土地改良に赴くために一時的に北京を離れたこと⁽⁷⁰⁾だけである。第三子・第四子が生まれたのはこの時期と思われる⁽⁷¹⁾。

他方、50年代以降は李鏗よりも夫・董寿華のほうがはるかに公に注目されており、資料も多い。董寿華は47年に清華大学に職を得て、地下党活動に従事し、抗美援朝キャンペーンの中では清華大学で真っ先に志願軍参加を表明した一人になった⁽⁷²⁾。51年秋には「中央土地改革団第三団」の秘書長、党支部書記に任命され、四川省内江の土地改良に赴いた⁽⁷³⁾。李鏗はここに随行したと考えて良いだろう。董寿華は52年に朝鮮戦争停戦交渉代表団に加わり、翻訳などにも従事し、朝鮮人民共和国三級軍功章と中国人民志願軍抗美援朝記念章を授与されている⁽⁷⁴⁾。53年に第一次五年計画が始まり、軍事的に重視される航空開発の基礎として、八大学航空学部の協力で北京航空学院（北航）が設立される。董寿華は北航の建設と教学に参加し、北航の発動機系主任、ロケット系主任などを歴任する⁽⁷⁵⁾。こうして見れば、抗日戦争勝利後の10年間は、董寿華にとって黨員として大学地下党組織

⁽⁶⁹⁾ Ibid.

⁽⁷⁰⁾ 註(67)に同じ。

⁽⁷¹⁾ 前掲「懐念姨母李鏗」によれば、「三年自然災害」と呼ばれる1959年から61年の時期、李鏗は4人の子どもの子育てしていた。当時、李鏗自身も経済的に余裕のない中で、甥の子どもを思いやり、栄養価の高い食品を贈るなど心遣いを忘れなかったという。

⁽⁷²⁾ 1947年に米国から帰国した董寿華は、ひとまず元の航空廠に復帰し、まもなく北京に移動して清華大学の教員として就職。48年春、清華大学教員の黨員たちは「清華講師教員助教連合会」を組織し、やがて董寿華がその主席になる。50年に中国人民志願軍が朝鮮戦争に参戦すると、北京の各大学で志願軍に参加を表明する教員・学生が続々と名乗りをあげ、清華大学では11月5日までに董寿華ら40人の教員と学生が参軍を決心したと報じられている（「大清華燕京等校學生紛紛報名志願赴朝抗美援朝各民主黨派宣言受到廣大師生擁護」『人民日報』1950年11月6日、中国文革研究網 http://www.wengewang.org/simple/index.php?t15614_1.html）。続いて清華大学工会は米国の「ヴォイス・オブ・アメリカ」を中国人民の精神に害毒を流すものと弾劾し、聴取禁止と厳格な取り締まりを求める宣言を発した。董寿華もその宣言に名を連ねている（「清華大学工会會員掀起反对收聽“美国之音”運動簽名發表宣言，號召自覺不聽“美国之音”，要求政府嚴格取締收聽党。清華工会文教委員會（1950.11.21）、中国文革研究網 <http://www.wengewang.org/read.php?tid=11614>）。

⁽⁷³⁾ 註(59)に同じ。

⁽⁷⁴⁾ 「清華学子系列：核武器研製方面（3）：其他傑出貢獻者水木社區手機版」
<http://m.newsmth.net/article/Alumni/single/1646>

⁽⁷⁵⁾ 註(59)に同じ。

の中で地位を高め、さらに著名な航空工学専門家として党が重視する国家的航空開発を主導する重責を果たすことで地位を固めてゆく10年間であった。だがその一方、李鏗は解放後の数年間こそソ連や東欧の社会主義諸国に出かけたり、毎年のように天安門で行われる国慶節行事に招待されていたというが、51年秋以後は、党員であったとはいえ、表舞台で活躍する機会は少なくなっていたようだ。

董寿莘は60年代には中国の核開発の先端で働き、技術者として第一次から第三次の核爆発実験を担う⁽⁷⁶⁾。その一方、李鏗は57年に「右派」のレッテルを貼られてしまう。下放され、農村で強制労働に従事した後、60年に「右派」の帽子は取れたものの、以後は北航で英語を教えるだけになった⁽⁷⁷⁾。文革の嵐が吹き荒れていた68年夏、李鏗は監禁されていた北航の四階から飛び降りて死亡したと伝えられている⁽⁷⁸⁾。

学者一家に育ち、英語圏の人々とも広い交友があった李鏗は、WIDF調査団の西欧女性たちとすぐにうちとけ、新中国の建設に邁進する中国人女性の姿を鮮やかに印象づけた。だが、その同じ李鏗が、反右派闘争から文革へと向かう中国では「出身成分」の悪い「臭老九」・「階級敵」と扱われ、無惨な死を遂げるに到ったということである⁽⁷⁹⁾。

⁽⁷⁶⁾ 同前。董寿莘は1962年10月中国人民解放軍国防科工委21試験基地研究所副所長となり、地下核実験に従事。1984年基地司令部副参謀長になり、地下核実験に従事。同年2月国防科工で情報資料研究所顧問。

⁽⁷⁷⁾ 前掲『姚明 我的半生』によれば、1957年反右派闘争が始まった時、姚明は湖北省武漢市で調査活動をしていた。戻ってくると、学校に多くの大字報（壁新聞）が貼ってあり、李鏗もまた非難されていた。些細な発言から李鏗は「右派」に分類されてしまい、姚明はとても悲しんだ。二人は共に活動し、互相尊重、互相支持の良い関係であった。李鏗には思ったことをすぐ口にするところがあって、これが災禍を招いたという。

⁽⁷⁸⁾ 文化大革命の時期、北航の造反派は「猖獗をきわめ」（『姚明 我的半生』）、李鏗と前後して多数の教員が監禁されて審査を受け、自殺に追い込まれた。

⁽⁷⁹⁾ 李鏗の末弟である李森滋もまた、文革期、「成分不好」であり、海外関係があり、「臭老九」（「知識人」の意味。地主・富農・反革命分子・悪質分子・右派分子・裏切り者・スパイ・資本主義の道を歩む者など八つのカテゴリーよりさらに下位にある者として軽蔑する言葉）であるとして迫害を受けた。李森滋の隣人によれば、夫妻は両方ともつるしあげられ、陰陽頭に髪を剃られて引き回され、屈辱を受け尽くしたという。（李竹「我們代印的故事（之一）」<http://blog.51.ca/u-63067/?p=158>）。李鏗の死後、家族が遺品を整理していたところ、「私は階級敵なのか」と何度も自問を繰り返す李鏗の日記が見つかったという。李鏗の死は、「燕京大学の悲劇」の一部として言及されることもある（倪良山「燕京大学的悲劇」<http://www.edubridge.com/situleideng/nigenshan.htm>）。

なお、反右派闘争と文革の奔流は、劉清揚と白朗をものみこんだ。白朗は、1958年に反右派闘争のなかで丁玲たちの「反党グループ」に属する右派として非難され、阜新炭鉱へと強制労働に送られた。61年末までに「右翼」の帽子は除かれ、創作活動を再開するが、文革期には激しい迫害を受けて心身を病み、一時は瀕死の状態にたちいたっていたという。文革が始まったときすでに70歳代であった劉清揚も、受難を免れなかった。彼女は7年半拘留され、罪をきせられたまま77年に世を去った。中国共産党は1978年12月の11期三中全会で文革の清算と改革開放の路線を定めた。劉清揚・白朗・李鏗の名誉回復が行われたのは、その後のことである。

(おわりに)

1952年6月、WIDFは朝鮮に派遣した国際女性調査団からの報告書を受け取り、その内容を全世界に向けて発表した。最初五か国語で作成された報告書は、WIDFの国際ネットワークによってヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカ、アジア各地の言語に翻訳され、朝鮮戦争の即時停戦を求める国際世論を喚起することになった。

ケート・フレロンがコペンハーゲン女性大会で再会した調査団員たちの集いにおいて「中国のことは忘れられません。中国の方たちの支援がなかったら私たちはなすべき仕事を果たすことはできなかった」と発言したことについて第2章で言及したが、その感謝の念は他の調査団員たちにも共通していたことだろう。実際、調査団に加わるまでは中国に疑念を抱いていた女性が中国・朝鮮滞在中にすっかり中国観が代わり、集会に出かける折々にACWFから記念に贈られた中国服を着て行って自慢したというようなエピソードもある。1951年のWIDFによる国際女性調査団の成果は、中国の女性たちの貢献なくしては得ることのできないものであった。

3人の中国人女性は調査団に大いに貢献したといえる。劉清揚は、五四運動期に遡る長い女性解放闘争のキャリアとヨーロッパでの生活経験があり、厳しい抗日戦争と国共内戦の時代を統一戦線の旗手として戦い抜いてきた年長者である。ACWFが調査団の中国代表団責任者として劉清揚を信任したのも肯けることであり、劉清揚はしっかりとその信任に応えた。白朗は、劉清揚よりほぼ20年若い、働き盛りの年代の作家であった。抗日戦争期から従軍作家として活躍してきた白朗には国際女性調査団の訪朝に関して「書くこと」が何より求められていただろう。白朗は実際、調査団の執筆委員として報告書の作成に寄与したのみならず、「平壤七日」や「心逢着心」、「我懐遠方的朋友」などのルポルタージュを通して、平壤の姿や国際女性運動のなかで結ばれた友情を書き伝えている。李鏗は、調査団参加にあたってACWF内で彼女がどのように任務づけられていたのかは未だ明らかでない。だが、農村活動や託児所運動に豊かな経験があり、不自由なく英語を話す李鏗が、新中国の建設に邁進する中国女性たちの考えや方向性を外国の代表たちに伝えるのに最良のスポークスパーソンとして貢献したのは間違いないだろう。以上のように、劉清揚・白朗・李鏗はそれぞれにWIDF調査団にとって不可欠な役割を担い、この大規模な国際連帯事業に寄与したのである。

執筆者・翻訳者 紹介(50音順)

◇今岡良子(いまおか・りょうこ)
大阪大学教員

◇神田修(かんだ・おさむ)
翻訳・通訳業(中国語)

◇木戸衛一(きど・えいいち)
大阪大学教員

◇西田千津(にしだ・ちづ)
中国近代史研究者

◇藤目ゆき(ふじめ・ゆき)
大阪大学教員

◇梁東淑(やん・どんすく)
大阪大学 海外招へい研究員



カバー写真 解説

右上の3枚の小さい写真

- (左) ●WIDF 朝鮮戦争真相調査団に参加した中国人の作家・白朗
- (右) ●WIDF 朝鮮戦争真相調査団の中国代表団責任者・劉清揚
- (下) ●WIDF 朝鮮戦争真相調査団に参加した中国人女性・李鏗

3枚の大きい写真

(左上) ●ドイツ民主女性連盟第4回全国大会に敬意を表して、スターリン大通りでベルリン再建に携わるリリー・ヴェヒター

(左下) ●朝鮮戦争の国連軍捕虜たちと語り合うモニカ・フェルトン (1952年9月)

(右下) ●抗美援朝キャンペーンのデモ行進をする中国人女性たち。プラカードは「母親たち！行動をはじめよう。祖国を守り、平和を守り、子どもたちを守ろう」

第九号 ★

2014年4月7日発行

ISSN 1880-1102

編集者—「アジア現代女性史」編集委員会

発行者—アジア現代女性史研究会（代表：藤目ゆき）

カバーデザイン—岩見利子

〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東8-1-1

大阪大学箕面キャンパス 藤目研究室気付

072-730-5397(tel/fax) fujime@hus.osaka-u.ac.jp